

大宰府条坊跡24

— 第124・135・146・148・171・191・202・205次調査 —

平成16年

太宰府市教育委員会

序

大宰府条坊は、大宰府政庁を中心に整備された奈良時代から平安時代にかけての計画都市であります。大宰府条坊跡については、現在まで数多くの調査が行われ、次第にその全容もわかりつつあります。

今回の報告書は鼓石第2公園建設に伴って行われた発掘調査およびその周辺の調査成果をまとめたものです。調査地付近を走る「どんかん道」は、毎年秋に行われる太宰府天満宮神幸祭の通り道であり、調査では「どんかん道」周辺の様子がわかるような成果を得ております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成16年3月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は太宰府市朱雀5丁目で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は各担当者が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は空中写真企画（代表壇陸夫）が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は下川可容子、安芸朋江、鈴木弘江が行った。
6. 遺物の実測および浄書は担当者のほか森田レイ子、島純子、阿部浩子、酒井三保子、松本理栄子、松隈里恵子、森部順子が行った。
7. 遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行った。
8. 本書に用いた分類は以下のとおり。
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV』（太宰府市の文化財 第49集）2000
土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財 第7集）1983
・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡篇-』（太宰府市の文化財 第10集）1992
瓦・・・『大宰府史跡出土土瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000
9. 本書の執筆者は目次に記載。
10. 編集は、宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	3
II、調査体制	3
III、調査および整理方法	5
IV、調査報告	
1、第124次調査	6（中島恒次郎）
（1）調査に至る経過	6
（2）基本層位	6
（3）検出遺構	6
（4）出土遺物	7
（5）小結	10
2、第135次調査	11（山村信榮）
（1）調査に至る経過	11
（2）基本層位	11
（3）検出遺構	11
（4）出土遺物	16

3、第146次調査	（井上信正）	44
（1）調査に至る経過		44
（2）基本層位		44
（3）検出遺構		44
（4）出土遺物		46
（5）小結		48
4、第148次調査	（中島恒次郎）	49
（1）調査に至る経過		49
（2）基本層位		49
（3）検出遺構		50
（4）出土遺物		50
（5）小結		54
5、第171次調査	（山村信榮）	55
（1）調査に至る経過		55
（2）基本層位		55
（3）検出遺構		55
（4）出土遺物		58
（5）小結		66
6、第191次調査	（宮崎亮一）	67
（1）調査に至る経過		67
（2）基本層位		68
（3）検出遺構		68
（4）出土遺物		69
（5）小結		74
7、第202次調査	（宮崎亮一）	76
（1）調査に至る経過		76
（2）基本層位		76
（3）検出遺構		77
（4）出土遺物		79
（5）小結		82
8、第205次調査	（城戸康利）	83
（1）調査に至る経過		83
（2）基本層位		83
（3）検出遺構		84
（4）出土遺物		84
（5）小結		85
V、調査まとめ	（宮崎亮一）	86

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

↑出現, ■増加, ▨減少

2000.2補訂

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上限)		標識磁器	準標識磁器
				灰釉	緑釉		
⑥	800	V	(A古)	猿投O-10 井ヶ谷IG-78	長門?・畿内	白磁I類 越州窯系青磁I,II類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎
	825	VI		黒笹K-14	長門・洛北・(洛西)・(黒笹K-14)		
	850	VII	(A新)	篠岡S-4 黒笹K-90	洛西 黒笹K-90		
①	900	VIII				青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器	
	925	IX	B	虎溪山I (折戸O-53)	近江		
	950	X		折戸O-53			
②	1000	XI	C	東山H-72 (丸石2)		越州窯系青磁III類 白磁XI類	
	1050	XII		丸石2 百代寺 東山H-105 篠岡S-1			
	1100	XIII	D				
③	1150	XIV				龍泉窯系青磁碗I-1~4,6, 皿I類 同安窯系青磁碗I~IV,皿I類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁0類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁I,II,III類 青白磁
	1200	XV	E				
	1230	XVI					
④	1250	XVII	F			龍泉窯系青磁碗II-a,b類	白磁鉢III類、碗XIV類
	1250	XVIII					
	1300	XIX	G				
⑤	1330	XX				龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	白磁鉢VIII,V-4,皿III類増加 白磁碗VII,皿VIII-1類 白磁皿VIII-2類
	1350						
	1450						
⑦	1450					龍泉窯系青磁IV類	龍泉窯系青磁碗II-c類 白磁X類 黒釉陶器
⑧	1500						
						龍泉窯系青磁IV類	白磁B,C類 安南鉄絵

紀年銘資料

- ①AD.927 延長5年,大宰府74次SD205A 溝
- ②AD.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8 井戸
- ③AD.1224 貞応3年,大宰府33次SD605 溝
- ④AD.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
- ⑤AD.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
- ⑥AD.784 延暦3年,長岡京102次SD10201溝
- ⑦AD.1459・1465,長祿3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
- ⑧AD.1501 文龜元年,大宰府70次SD1805溝
- ⑨AD.1265 文永2年,博多62次713土城

文献

- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
- ②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
- ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
- ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
- ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
- ⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
- ⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
- ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
- ⑨福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

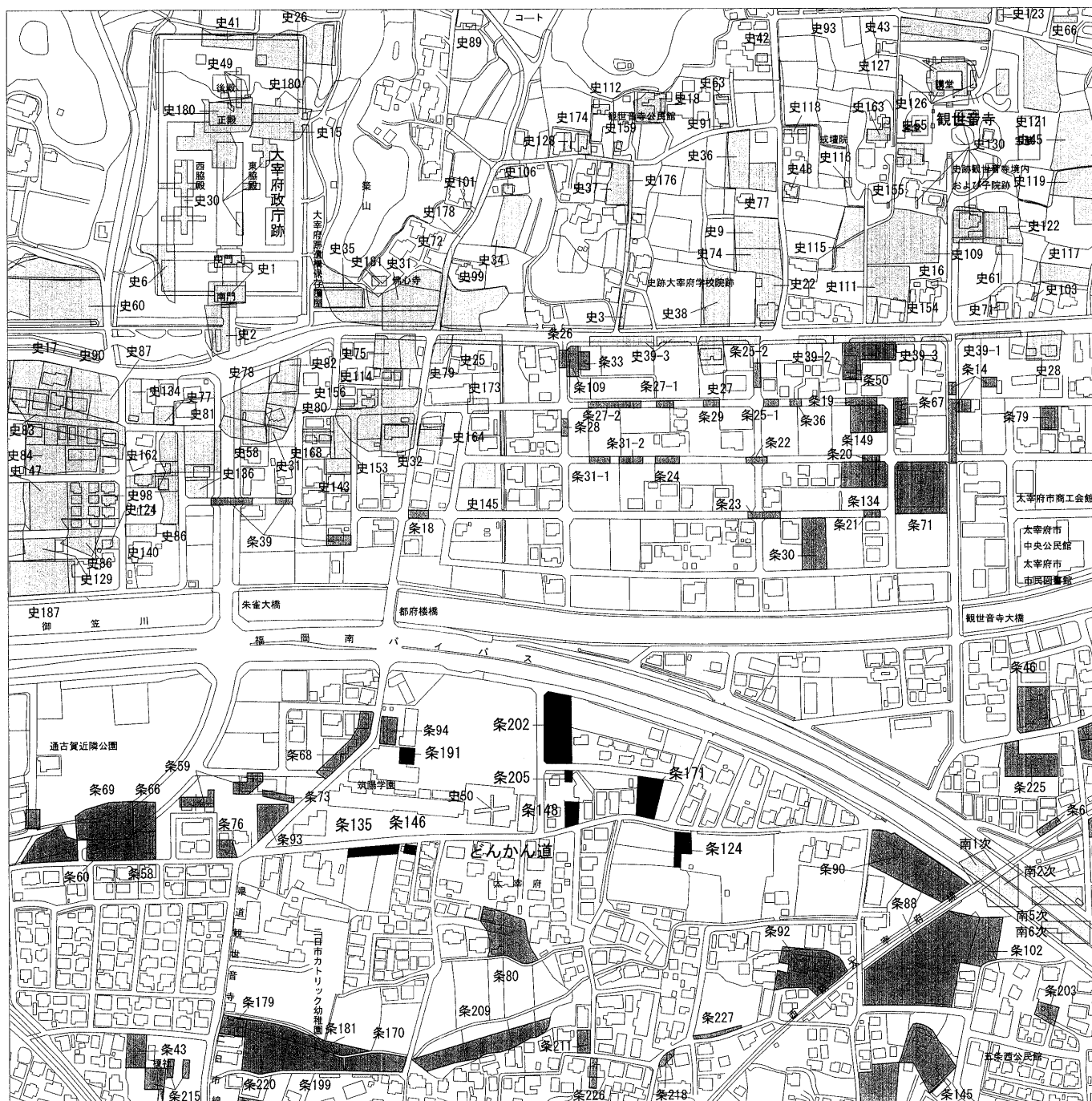


Fig.1 調査地位置図 (1/5000)

I、遺跡の位置と歴史

今回報告する一帯は大宰府条坊鏡山猛案の左郭8条3坊付近で大宰府政庁全面付近に広がる官衙群と御笠川を挟んだ所に位置し、推定朱雀大路にも比較的近い場所である。しかし、調査地付近の御笠川は、田畑の形状から南側に氾濫原が広がっており、どんかん道付近より南側はその氾濫を逃れ、遺構の存在が確認することができる。

調査地付近を通る「どんかん道」は9月22・23日に太宰府天満宮と榎社を往復する太宰府天満宮の神幸式の行列が通る道のことで、神幸式は康和3（1101）年に大江匡房がはじめたといわれている。その神幸中に鳴らされる鐘や太鼓の音から、神幸が通るこの道のことを「どんかん道」と呼ぶようになったといわれ、条坊が存在していた平安時代から毎年使われていたと思われるどんかん道は、条坊を考える上で貴重である。

今回の調査地の小字は鼓石、御垣野、隈野であり、鼓石の地名は、1806年に描かれた『太宰府旧蹟全図』にも記載されている（他の2ヶ所は地図が破損し不明）。その由来は明治初期に書かれた『福岡縣地理全誌』の通古賀村の項に「今御笠川ノ中、本村地内に、鼓石ト唱ル石アリテ、其所ノ字ヲ鼓石ト云。」と記されているが、現在鼓石は現存していない。隈野の地名も近くに隈麿墓があることに由来するものと考えられる。

この付近は昭和30年代まで田園風景が広がり、住宅が全くなく、人気のない田圃の中をどんかん道が続いていた。その道の途中にポツンとあったクスノキと「弁の君」の供養塔は、近所の子供たちに怖がられるほど静かな場所にあったが、昭和50年代後半に3号線バイパスが建設されるとともに、福岡市のベッタウン化が進み、現在では殆ど田圃がない住宅街に変わってしまった。

II、調査体制

（平成4／1992年度）・・・第124次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治、川谷 豊
調査	主任技師	山本信夫、狭川真一、城戸康利、緒方俊輔 山村信榮（4年7月1日～）
	技 師	山村信榮（～4年6月30日）、中島恒次郎（調査担当）、塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子

（平成6／1994年度）・・・第148次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男

	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治、川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一、城戸康利、山村信榮 中島恒次郎（調査担当）、重松麻里子
	技 師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）、下川可容子

（平成7／1995年度）・・・第171次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二（～7年5月31日） 和田敏信（7年6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治、川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一、城戸康利、山村信榮（調査担当）、中島恒次郎 重松麻里子（～7年6月30日）
	技 師	井上信正、高橋 学
	技師（嘱託）	下川可容子

（平成9/1997年度）・・・第191次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（9年10月1日～）（調査担当）
	主任技師	狭川真一（～9年9月30日）（調査担当） 城戸康利、山村信榮、中島恒次郎、井上信正
	技 師	高橋 学、宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子、森田レイ子

(平成10/1998年度)・・・第202・205次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	主任技師	狭川真一 (第202次調査担当)
		城戸康利 (第205次調査担当)
		山村信榮、中島恒次郎、井上信正
	技師	高橋 学
		宮崎亮一 (第202次調査担当)
	技師 (嘱託)	下川可容子 森田レイ子

(平成15/2003年度)・・・・・・報告書発行

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信 (～6月30日)
		久保山元信 (7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信 (10月1日～)
	文化財調査係長	神原 稔 (～9月30日)
	調査係長	永尾彰朗 (10月1日～)
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮、中島恒次郎
	主任技師	井上信正、高橋 学、宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子、森田レイ子、柳 智子、渡邊 仁

III、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群I』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

今回の調査では、遺構面までバックホーにより表土を除去し、調査地に国土座標を与え、発掘調査を進め、国土座標を基準に遺構図等を作成した。

遺構全体図および土層実測図は1/20で作図し、個別遺構図は1/10で作図した。

IV、調査報告

1、第124次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀4丁目26241（旧大字太宰府字隈野）で、1991（平成3）年4月に対象地において、盛り土造成計画が地権者よりあったことから、埋蔵文化財取り扱いの必要があると判断し、確認調査を同年4月23日に実施した。その結果当時の地表面から約0.7mの深さで遺跡が確認され、盛り土造成に先立つ記録保存が必要となったため、発掘調査を1992（平成4）年4月21・22日に行った。開発対象面積は300m²、調査面積は200m²を測る。調査は中島恒次郎が行った。

(2) 基本層位

調査区は、対象地の形状から南北に長く、その両端において河川堆積層が観察できた。上位より耕作土および砂層および茶褐色土が0.5m堆積しており、その下位に黒灰色土の遺物包含層が観察できた。その下位に遺構が検出され砂礫層を基盤層として形成されていた。

(3) 検出遺構（Pla.1）

南北に長い調査区のほぼ南半部から中央部分に小穴が多数検出でき、調査区北半および南端部分については、河川堆積層が検出できた。なお多数検出した小穴は、調査区が狭小であったことから性格特定には至っていない。

土坑

124SK017・018・019

124SK018を除く他の二者は、調査区内で納まらず、全形を明らかにし難い。124SK017・018は、0.5mほどの深さを有しており、土坑として認定できるものの、124SK019については、南側に展開する河川河床の凹みの可能性もある。いずれの遺構からも散在的に遺物が出土しており、廃棄のために意図的に掘削されたものとは考えられない。

河川

124SD001（Fig.2）

調査区北半部にて検出したもので、砂の堆積層を確認した。中粒から細粒の砂が互層で堆積してお

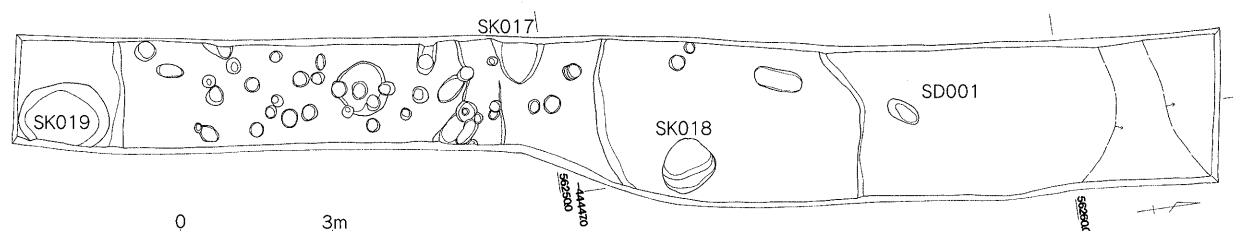


Fig.2 第124次調査遺構全体図（1/150）

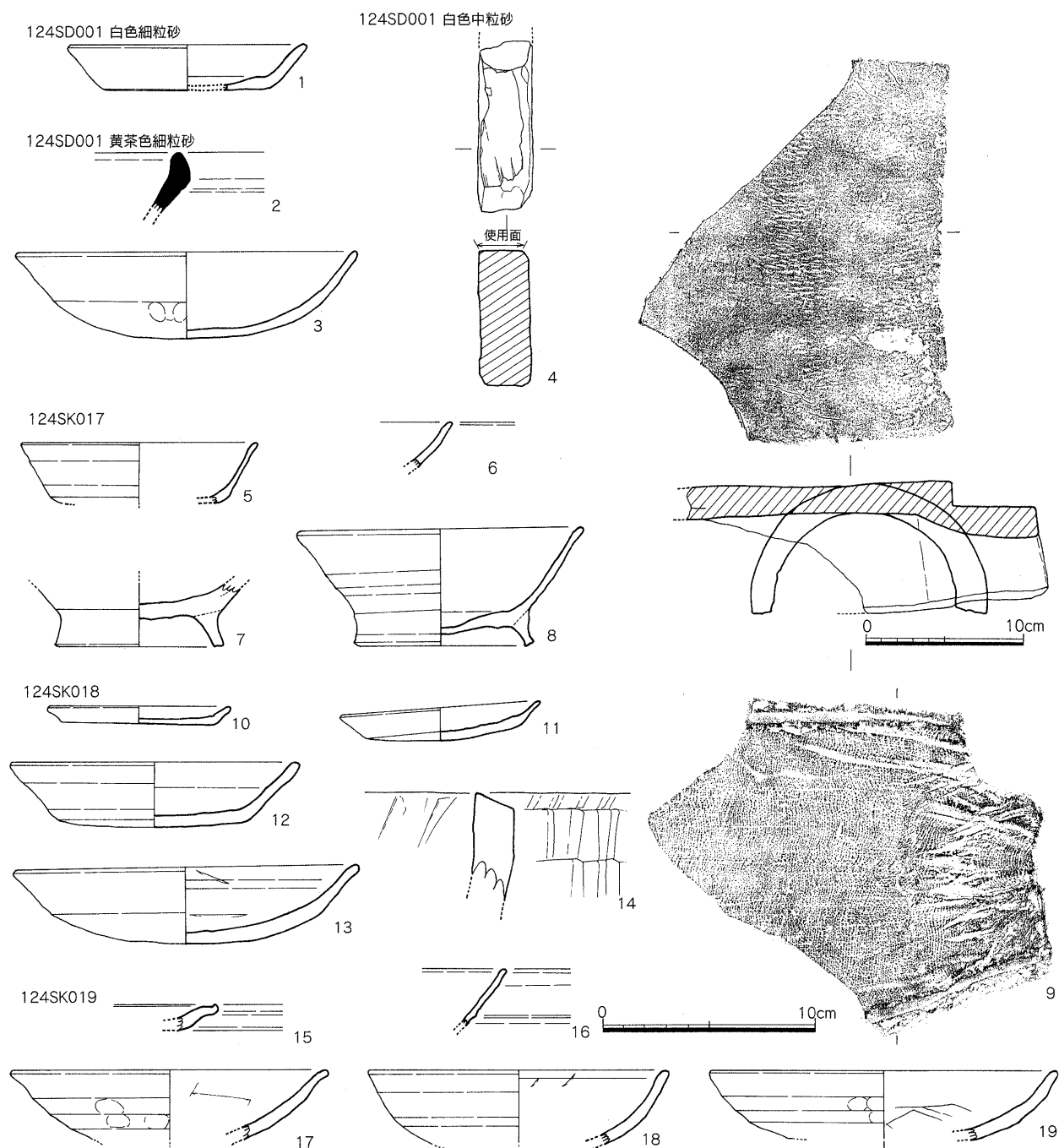


Fig.3 第124次調査溝・土坑出土遺物実測図 (1/2・1/3)

り、河川古流速の変化が生じているものと考えられる。調査所見では上方細粒化を観察できることから、次第に流速の低下を物語っている。堆積層は、上位から白色細粒砂←黄茶色細粒砂←白色中粒砂であった。

(4) 出土遺物

河川

124SD001白色細粒砂出土遺物 (Fig.3)

白色細粒砂からは、図化したものの他に白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ-4b類、皿Ⅸ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅰ-4・Ⅱ-b類、皿Ⅰ類、初期高麗青磁碗Ⅲ類、中国製陶器盤Ⅱ類が出土しており、最も古いものとして弥生土器の器台も出土している。

土師器

坏a (1) 口径11.2cmを測り、器高の低下が見られ皿化傾向が進みつつあるものにあたる。内外面ともに河川堆積時の磨耗によって調整痕跡等が欠失している。

124SD001黄茶色細粒砂出土遺物 (Fig.3)

黄茶色細粒砂からは、図化したものの他に白磁碗IV類・皿VI・IX類、龍泉窯系青磁碗I・II-b・IV・IV_エ類、皿I類、同安窯系青磁碗I-b類、中国製陶器小盤II類が出土し、国内生産品としては東播磨系須恵器こね鉢が出土している。

須恵器

こね鉢 (2) 口縁部の破片で、全形については明らかにし難い。口縁端部の上方への拡張傾向が見られるものの、外面において下方への拡張は観察できない。口縁部外面のみが暗灰色に変色している。東播磨産須恵器と考えられる。

土師器

丸底坏a (3) 内面が磨耗しているが、全形が明らかな製品である。底部外面は回転ヘラ切りによって処理されており、底部と体部境界における指頭圧痕が観察できる。なお、底部と体部の境界部分における肥厚が少ないことから、丁寧な丸底化がなされた製品と位置付けることができる。

124SD001白色中粒砂出土遺物 (Fig.3)

白色中粒砂からは、図化したものの他に白磁碗IV-c類、龍泉窯系青磁碗I・II-b類、皿I類、同安窯系青磁碗I-b類、砥石が出土している。

石製品

砥石 (4) 細粒砂岩製のもので、1面のみ使用痕跡が観察できた。

土坑

124SK017出土遺物 (Fig.3、Pla.12)

土師器

坏 (5、6) 両者とも底部を欠損することから、後述する碗c1の可能性も残している。5は口径11.2cmを測り、直線的に口縁部へ至る体部形状を有している。6は口縁部のみの破片で全形が判然としないものの、体部中位でやや内湾しており、丸底坏になる可能性も残している。

碗c1 (7、8) 全形の分かる8に対して、7は高台から体部下位の破片資料であるが、体部下位の形状から直線的に口縁部へ移行するものと判断されたことから碗c1と考えた。両者とも高台形状は太く、色調および口径のわかる8 (口径：13.6cm) から判断して、VIb期に分布中心を有する型式と考えられる。

瓦

丸瓦 (9) 玉縁部分の破片資料で、外面には細かい縄叩き痕跡が観察できる。

124SK018出土遺物 (Fig.3)

当該遺構からは、図化できた遺物の他に、白磁碗II・IV類が出土している。

土師器

小皿a1 (10、11) 口径8.7cm、9.5cmをそれぞれ測るもので、10が回転糸切り、11が回転ヘラ切りによる底部切り離し処理がなされている。11は内面押し出しがなされ、やや丸底化している。

坏a (12) 底部回転糸切りによって処理されている坏aで、口径13.6cmを測る。体部中位から外方へ屈曲する坏a2に該当し、大宰府XXI期に分布中心を有する型式と考えられる (太宰府市教委2002)。

丸底坏a (13) 口径16.4cmを測り、内面に「コテあて」とされるミガキbが観察でき、底部外面は

回転ヘラ切りによって切り離し処理が為されている。なお底部から体部への境界は、肥厚しており、先述した124SD001黄茶色細粒砂出土の丸底坏に比較して粗い製品といえることができる。

石製品

石鍋A群（14） 口縁部のみの破片で、A群の特徴とされる把手の無い部位である。

内外面ともに削り痕跡が明瞭に残り、外面には煤状炭化物が付着している。

124SK019出土遺物（Fig.3）

当該遺構からは、図示した遺物の他に白磁碗V1類、土師器鍋等が出土している。

土師器

小皿a2（15） 口縁部を溝状に折り返すもので、同時期の京都系土師器皿の模倣形態と位置付けられる在地製品である。底部外面は磨耗のため不明。

坏（16） 直線的に外方へ開く体部形態を有しており、器厚が薄い。全形が判然としないことから坏に位置付けた。

丸底坏（17～19） いずれも底部が欠損していることから高台の有無については明らかにし難い。内面には「コテあて」とされるミガキbが観察でき、底部と体部の境界部分が肥厚している。口径は、14.2cm～16.4cmを測る。

その他の遺構

124SX006出土遺物（Fig.4）

土師器

坏a（1） 口径12.6cmを測り、直線的な体部形状を呈する。底部外面は回転ヘラ切りによる処理と考えられ、大宰府VII期に分布中心を有する型式と考えられる。

124SX008出土遺物（Fig.4）

土師器

小皿a1（2～4） いずれも底部外面を回転ヘラ切りするもので、口径は9.6cm～10.0cmを測る。3は見込み部分をやや押し出しているが、他の二者はそれが見られない。

124SX013出土遺物（Fig.4）

土師器

坏×碗（5） 口縁部のみの破片であることから、高台の有無が明らかでなく坏と碗c1の区別がつかなかった。口径は14.6cmを測る。

甕（6） 口縁部を緩やかに外方へ曲げるもので内外面ともに横ナデによって仕上げている。

124SX014出土遺物（Fig.4）

土師器

坏a（7） 底部外面の処理は残存部分が少なく明らかにし難い。口径は15.4cmを測る。形状および法量から推して、大宰府XV期に分布中心を有する型式と考えられる。

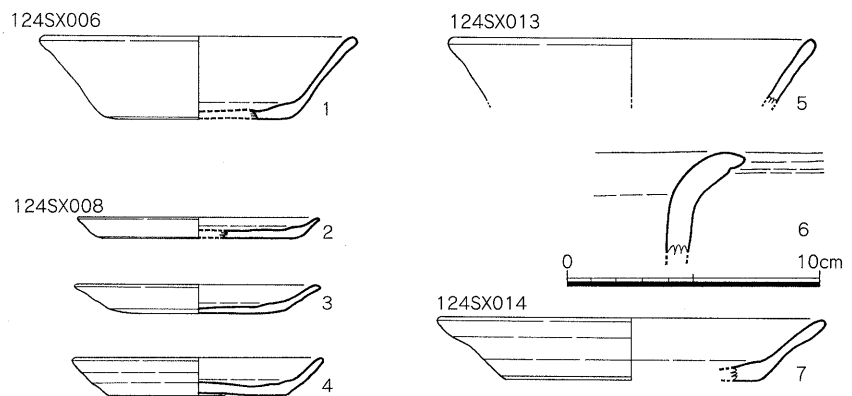


Fig.4 第124次調査その他の遺構出土遺物実測図（1/3）

各層出土遺物

黄茶色土出土遺物 (Fig.5、Pla.12)

遺構検出時の遺物で、図化したものの他に白磁碗II・IV・V1・V4類、小壺、越州窯系青磁碗I・I-5b・II類、龍泉窯系青磁碗I・IIb・III類、中国陶器破片、製塩土器（煎熬土器）、土師器甕（角閃石）、鉾滓が出土している。

土師器

小皿a1 (1~6) 図化したものは全て底部回転ヘラ切りによって処理されたものである。1・4~6は見込み部を押し出しし、底部の丸底化を図っている。

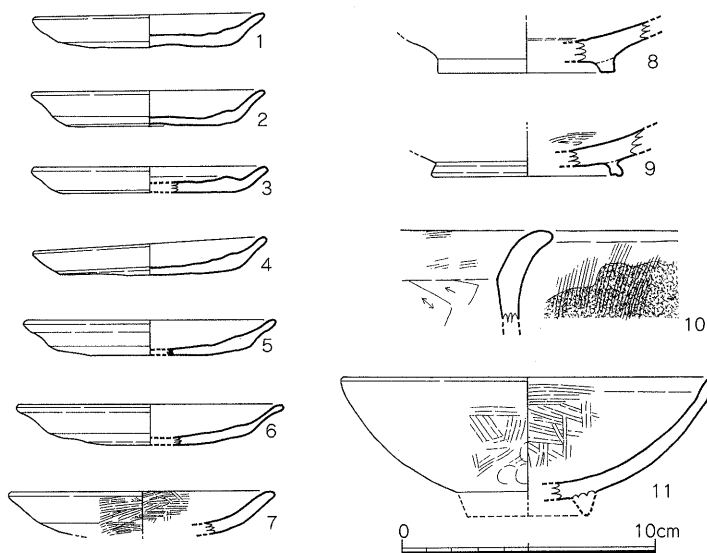


Fig.5 第124次調査黄茶色土出土遺物実測図 (1/3)

甕 (10) 外方へ緩やかに開く口縁部形態を有するもので、口縁部内外面はハケ調整、体部内面はヘラ削りによって仕上げられている。頸部下位に煤状炭化物が付着している。

瓦器

小皿1 (7) 底部中心部分が欠損しているため、高台の有無が定かではない。内外面ともに丁寧な手持ちヘラミガキ（ミガキc）によって仕上げられている。

碗c (11) 高台が欠損したもので、体部外面下位に押し出しによる指頭圧痕が観察でき、内外面ともにやや丁寧な手持ちヘラミガキ（ミガキc）によって仕上げられている。

緑釉陶器

碗 (8、9) 高台のみの破片で、体部下位の形状から碗と判断した。8は台形の高台形状を有し、9は高台接地部を凹ませている。両者とも貼り付け高台で、内外面手持ちミガキによって仕上げられている。

(5) 小結

調査区が狭小でトレンチ調査に近いものであったことから、各遺構の全形について明らかにし難い。調査区南側における河川と位置付けた124SD001は、周辺における確認調査結果と併せると、東西方向に広がるものと考えられ、西は現榎社付近へと流れていたものと考えられる。調査区の北には狭川真一によって提示された政庁III期施工条坊と考えられる通称「どんかん道」が接しており、その確認と検証を目的の一つとした。調査区の設定も可能な限り、意図的に「どんかん道」へ近づけるように設定したが、調査区内において狭川が説く政庁III期施工条坊痕跡を確認することはできなかった。後に報告する条坊跡第148次調査地において条路北側側溝を確認していることから、調査区北側にて確認される可能性は残されている。他の小穴、土坑に関しては、遺構性格を特定するには至っていない。なお当該調査区において検出した遺構の時期は、平安時代後期から室町期に中心があったものと考えられる。

【引用文献】

太宰府市教育委員会 (2002) 『太宰府条坊跡ⅩⅠ分析編一』

2、第135次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀4丁目2604番の1（旧大字太宰府字御垣野）で、1992（平成4）年11月に対象地においてグラウンド造成に伴う擁壁工事が計画されたことから、確認調査を1993（平成5）年1月19日に実施した。その結果当時の地表面から約0.3mの深さから遺構が確認され、工事に先立つ記録保存が必要となったため、発掘調査を実施した。調査対象地はフェンスと擁護壁設置のため掘削が遺構面に及ぶ箇所に限って設定された。調査期間は1993（平成5）年3月3日から3月10日。調査対象面積は300m²、調査面積は170m²を測る。調査は山村信榮が行った。

(2) 基本層位（Fig.63）

調査区は、「どんかんみち」と称される太宰府天満宮の神幸ルート of 道路法下に面し、この道に沿って東西に長く調査区が設定された。この場所は東西に伸びる御笠川の自然堤防上にあたると考えられ、基盤層は沖積作用によって形成された花崗岩を由来とする砂・粘土の土壌からなる。申請以前のこの土地は水田として利用されており、水田土壌である暗灰色土、淡灰色土を除去した段階で黄色粘土を地盤とする遺構面が検出された。遺構検出面と現道路面の高低差は約1.5mである。

(3) 検出遺構（Fig.7・8、Pla.2・3）

井戸

135SE030（Fig.7、CD-15）

井戸枠検出までの土壌を茶灰色砂、枠内を灰色粘土で遺物を取り上げている。井戸枠は縦板が連なる桶状を呈す。南半が調査区外にあり、底まで下げることが出来なかった。井戸掘り方の径は2m、枠の径は0.8mを測る。

135SE038（Fig.7、CD-16）

茶灰色土で埋没する。底は砂層に達し湧水する。後述する溝群よりも切り合い上新しい。長径は1.5m、深さ1.3mを測る。

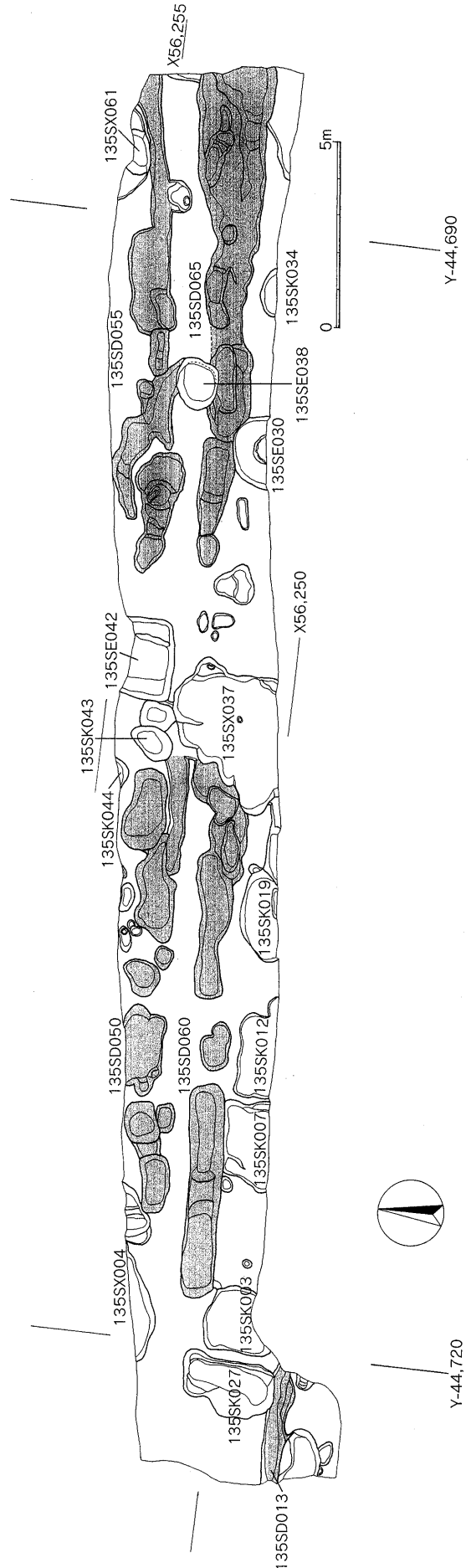


Fig.6 第135次調査遺構全体図（1/170）

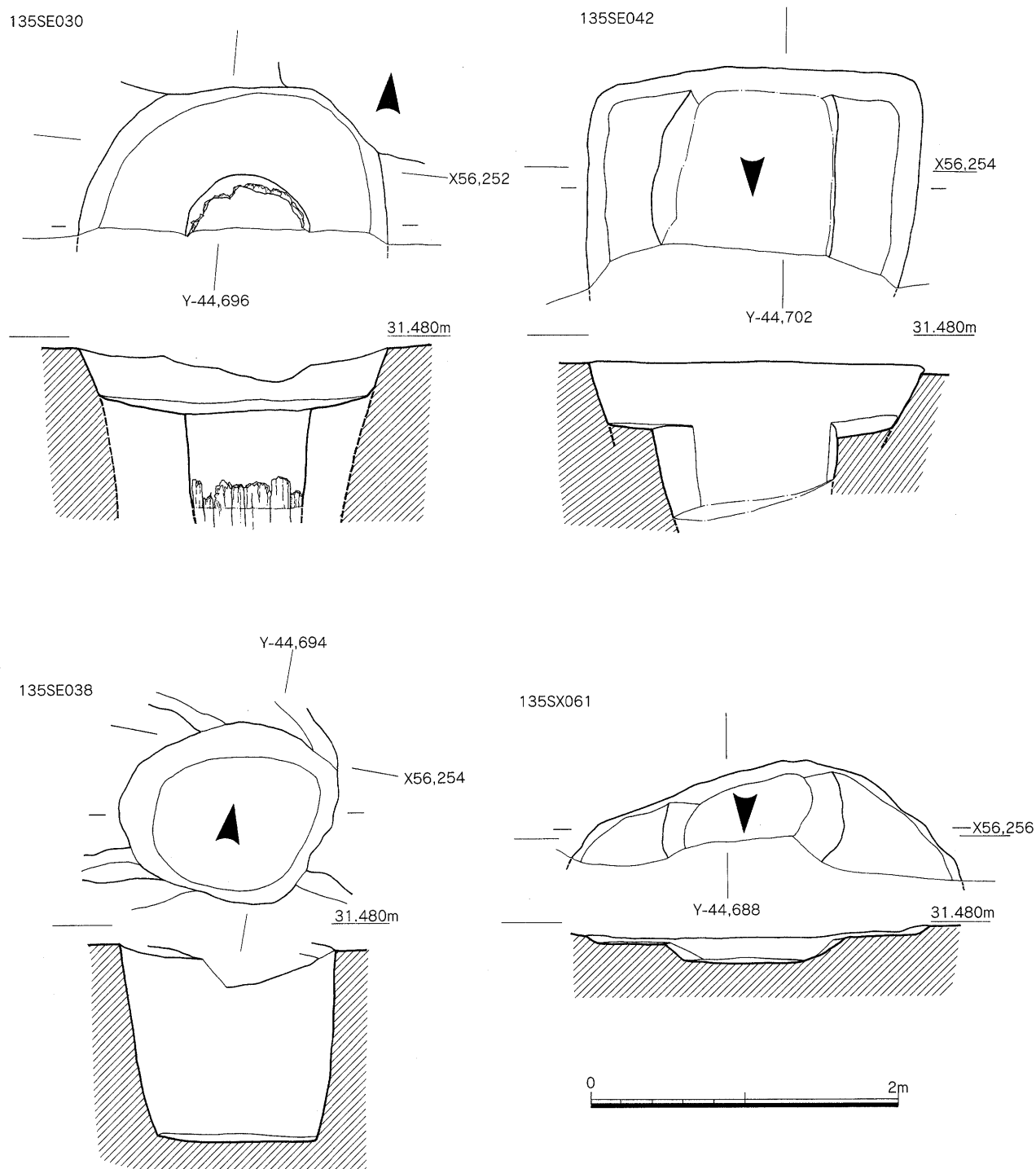


Fig.7 第135次調査井戸・その他の遺構実測図 (1/40)

135SE042 (Fig.7、CD-17)

灰色土を掘り下げた時点で杵の痕跡と考えられる暗灰色粘質土を検出したが、側近に電柱が埋設されていたため途中で掘削を中止したため、井戸底の様相はわかっていない。掘り方の一辺は2.2mを測る。

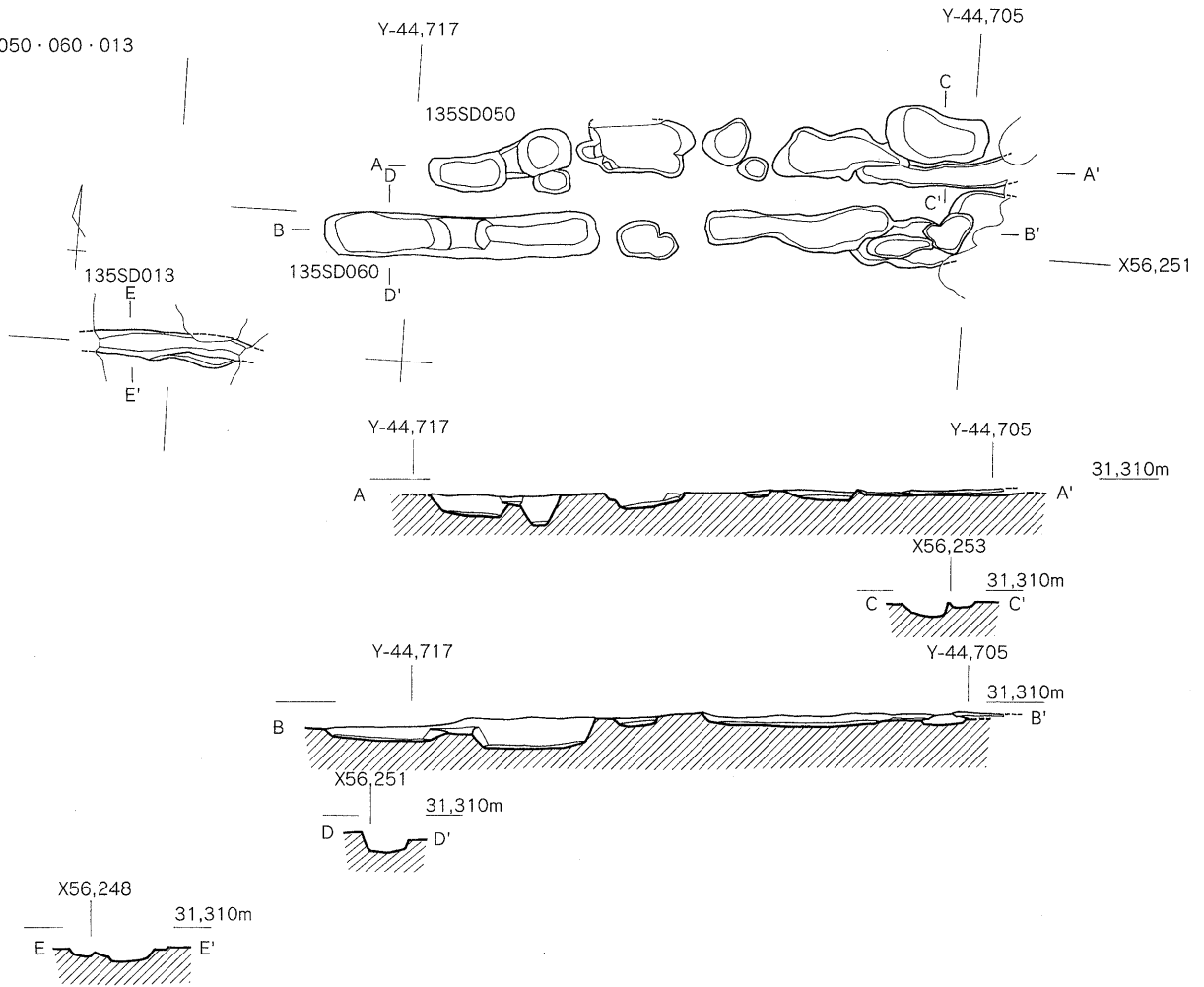
土坑

135SK003 (CD-11)

埋没土は黒灰色土、黄灰色土、灰色土の順で堆積する。掘り方の一辺は1.6m、深さ0.45mを測る。

135SK006・007

135SD050・060・013



135SD055・065

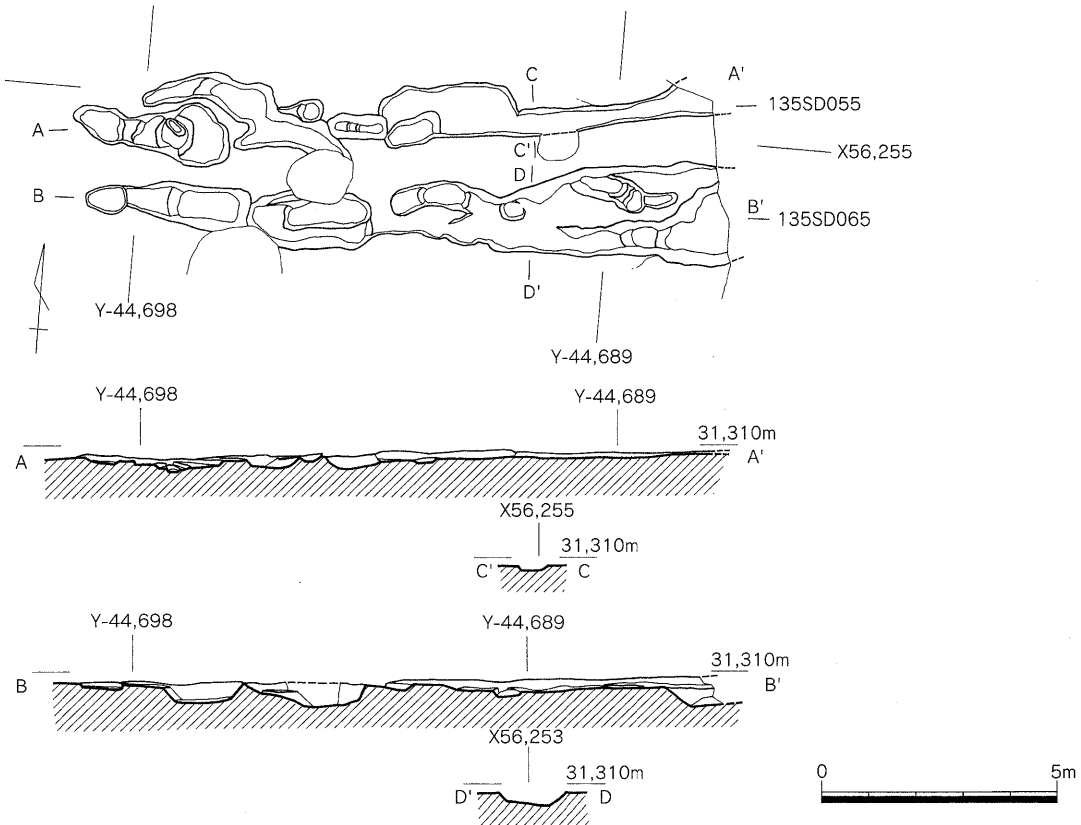


Fig.8 第135次調査溝跡実測図 (1/160)

黄色粘土ブロック土を最終埋没とするSK007に灰色土のSK006が切り込む形となる。掘り方の短辺は1.4m、深さ0.55mを測る。

135SK012

灰褐色土で埋没する。掘り方の一辺は2.3m、深さ0.1mを測る。

135SK019

黒灰色土で埋没する。掘り方の一辺は2.2m、深さ0.45mを測る。

135SK027 (CD-11)

埋没土は灰色土に黄色土が混在する。掘り方は2.4×1.4m、深さ0.5mを測る。

135SK034 (CD-14)

土壌は全般に水平堆積を呈するが、最終埋没土の灰色土は切り込んだような構造を呈していた。掘り方の一辺は1.2m、深さ0.6mを測る。

135SK043 (CD-13)

調査区中央北寄りのSD050の延長上にある小規模な土坑状遺構で、暗灰色土が堆積していた。長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。

135SK044

調査区中央北寄りの調査区際にある小規模な土坑状遺構で、暗灰色土が堆積していた。長さ0.9m以上、幅0.2m以上、深さ0.2mを測る。

溝

135SD013 (Fig.8、CD-11)

調査区の西端で検出された東西方向の溝で、茶褐色土で埋没する。幅0.5m、深さ0.1mを測る。

135SD050・055 (Fig.8)

調査区の東西を横断する遺構で、連続した土坑や溝状の窪みが複合して、ひとつの線状をなしている。掘り下げ時点では窪みごとに異なるS番号を付与していた。中央付近のSE042辺りで4mほど途切れているように見え、この西側をSD050（旧S-28,36,9,17,18,23,26,31）、東側をSD055（旧S-48,52,53,49,25,20）とした。平均的な溝としての幅は約1mであり、深さはそれぞれで異なり、深い部分で0.4mほどである。遺構の最終埋没は鎌倉時代以降と考えられる。

135SD060・065 (Fig.8、CD-11・12)

SD050・055と同じ方向、規模の連続した窪み群で、やはり中央付近の同じ部位が途切れている。深さはそれぞれで異なり、深い部分で0.6mを測る。平安時代前期の遺物が少量だが、後期の遺物がかなり出土しており、最終埋没は平安時代後期と考えられる。

その他の遺構

135SX004

調査区北西寄りの調査区際にある小規模な土坑状遺構で、暗灰色土が堆積していた。長さ3.5m以上、幅0.6m以上、深さ0.2mを測る。

135SX037 (CD-18)

溝群SD060,065が途切れた部分に広がる遺構で、灰色土が溜まったような形状を成している。遺構の最終埋没はSD050・055と同じ平安時代後期以降と考えられる。

135SX061 (Fig.7)

溝群SD055を切る遺構で灰色粘土で覆われる。土坑のような形状を呈すが、遺構が調査区外に延びており全体の形状や性格などは判らない。溝群が埋没した後も遺構が形成されていたことを示す。

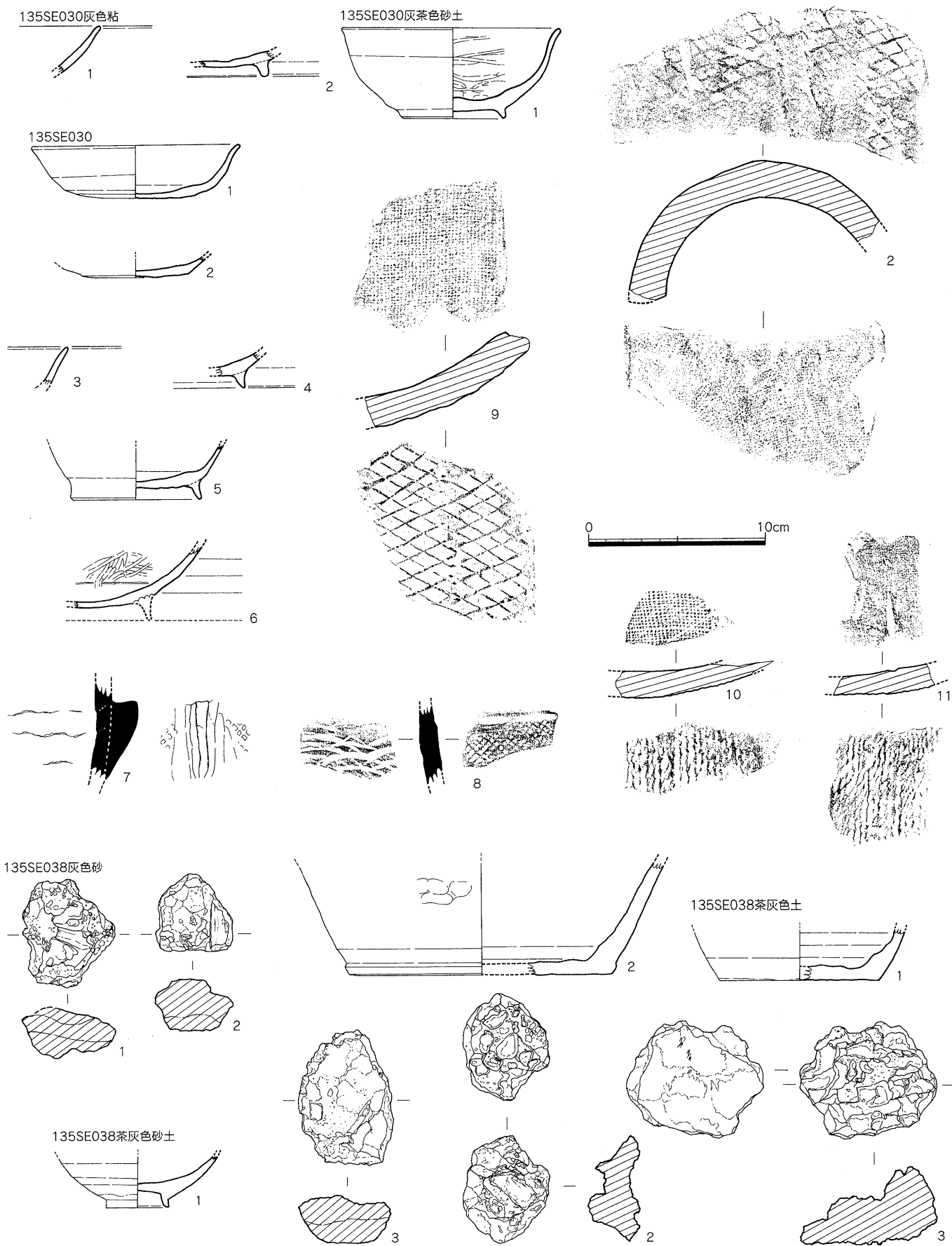


Fig.9 135SE030 · 038 出土遺物実測図 (1/3)

(4) 出土遺物

井戸

135SE030灰色粘出土遺物 (Fig.9)

土師器

坏 (1) 口縁端部が若干屈曲する形状を持つ。aタイプのものか。橙色を呈す。

黒色土器

碗c (2) 若干外に開き気味で方形の高台を持つ。調整は磨耗しているため不明。A類。

135SE030灰茶色砂土出土遺物 (Fig.9、Pla.12)

黒色土器

碗c (1) A類で、体部に張りがあり口縁端部が緩やかに屈曲する。高台は立ち上がりが短く、内側は底部から緩いカーブを成すが、角はシャープな仕上がりとなる。調整は内底面に指押さへの痕跡を残し、手持ちのミガキcは内底部は粗く各方向に、体部から口縁部にかけては横方向に施される。ほぼ完形を保ち、口径12.4cm、器高5.1cm、高台径6.0cmを測る。胎土は赤みが強く大宰府の在地の系譜にはのらないものと考えられる。近隣に類例はなく、形状は薩摩国分寺のある川内平野の黒色土器に似たものが見られる（『薩摩国府跡・国分寺跡』1975年鹿児島県教育委員会、『鍛冶屋馬場遺跡』2002年鹿児島県立埋蔵文化財センター他）。時期的な問題も含め詳細な検討が必要である。

瓦

丸瓦 (2) 焼きは瓦質を呈し、端部には内側に分割の際の切り込みが残される。

135SE030出土遺物 (Fig.9、Pla.12)

土師器

坏a (1~3) やや中央が突出する形状の底部を持ち、緩やかに屈曲する口縁部を持つ。2は底部と体部との境が明瞭に屈曲する。

碗c (4、5) 外に開き気味の高台を持つ。口径11.7cm、器高3cm、底径8cmに復元される。5は丸味のある底部形状を成し、外底部に板状の圧痕を残す。径は7.4cmに復元される。

黒色土器

碗c (6) 丸底の底部に高台が付くものと思われる。内面にはミガキcが施される。A類。

須恵器

壺 (7) 筒状の胴部上位の外側に粘土を貼って耳を付けた部位に当たる。格子目の叩きが施され、内面には粘土紐の接合痕跡の上に布目が残される。

甕 (8) 内面に同心円の当て具痕があることから甕としたが、外面の格子目の叩き痕跡は通常のものに比べ非常に目が細かい。下地はヨコナデを施す。

瓦

平瓦 (9~11) 9は格子目で他は縄目の叩きが施される。9は叩き目の中央が不整合で単位の境となっている。端部の小口には分割の際の切込みが内側から施された痕跡がそのまま残されている。このSE030から出土した格子目の叩きの瓦は、この種のものとしては大宰府では古い時期に属す。焼きは9が軟質な須恵質のほかは硬質の須恵質。

135SE038灰色砂出土遺物 (Fig.9)

金属製品

鋳滓 (1、2) 金属質の部分と鋳物質の部分が漸移しながら塊となっている。2は土器質の部位が背中合わせに層状を成している。

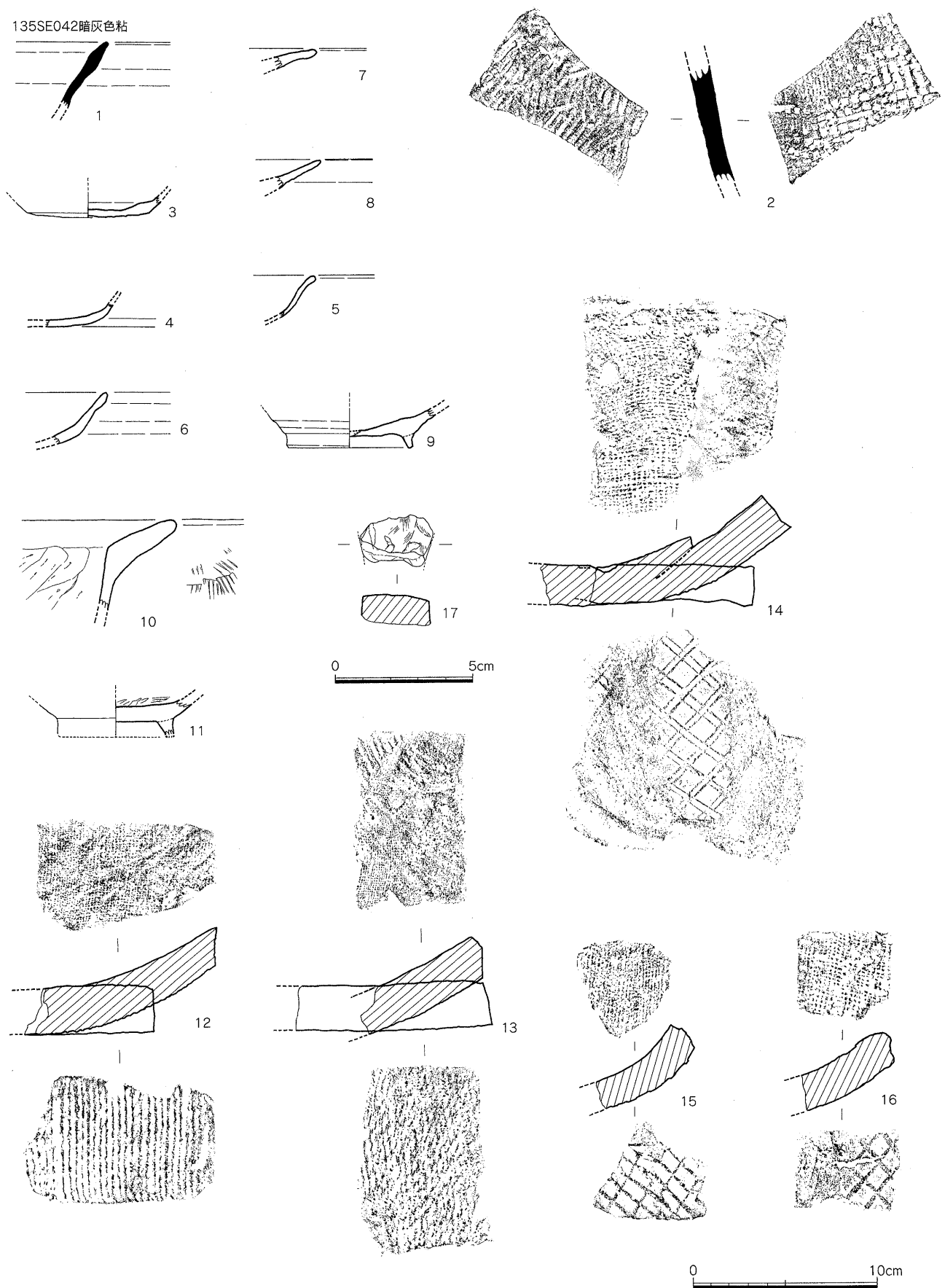


Fig.10 135SE042 暗灰色粘出土遺物実測図 (1/2、1/3)

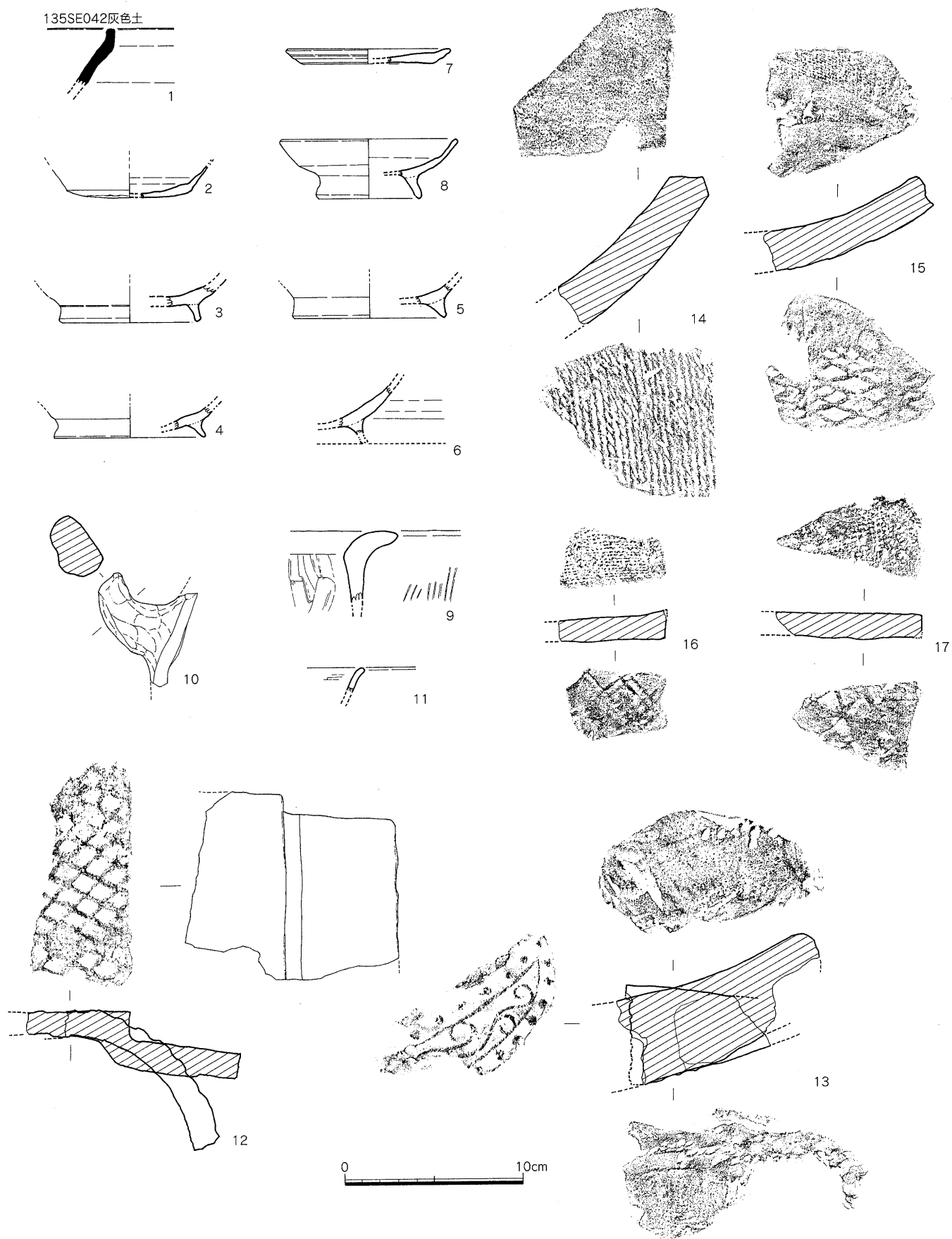


Fig.11 135SE042 灰色土出土遺物実測図 (1/3)

135SE038茶灰色砂土出土遺物 (Fig.9、Pla.12)

国産陶器

碗 (1) ケズリによって成形された体部に黄灰色の釉を施す。近世以降の所産か。

朝鮮系無釉陶器

壺 (2) 平坦な底部からストレートな外開きの体部が延びる。内面にはロクロ目が顕著に残り、外面は上位に指押さえの痕跡が、外底部角付近には回転ヘラケズリが施される。中央付近は未調整。胎土はきめが細かく、焼成は内外表面が赤褐色、芯は灰色を呈す。

金属製品

鋳滓 (3) 片面は土器質、反対の面はメタル分の少ない溶岩状を呈す。

135SE038茶灰色土出土遺物 (Fig.9、Pla.12)

国産陶器

壺 (1) 内面は凹凸の著しいヨコナデの痕跡が残され、体部外面はケズリによって仕上げられる。ザラザラした茶褐色の釉が掛かる。小型の甕の可能性もある。

金属製品

鋳滓 (2、3) 多孔質で気泡の痕跡が見られ、2には鉄錆状のものが、3にはガラス質のものが付着する。

135SE042暗灰色粘出土遺物 (Fig.10、Pla.12)

須恵器

坏 (1) 口縁端部下に若干のふくらみを持つ。

甕 (2) 外面に格子目の叩き痕跡が、内面に並行する条線による当て具痕跡が残る。

土師器

坏a (3~6) 底部と体部の境が不明瞭になりつつあるタイプのもので、口縁部下で若干屈曲する。

皿 (7、8) 口縁部が直線的に外側に広がる形状をもつ。高台が付く可能性がある。

碗 (9) 内底面には平坦な部位が殆どなく、高台は短くつまみ出したような形状を成す。

甕 (10) 口縁部は浅い「く」字形を成して屈曲し、内面にはシャープなケズリが、外面にはハケの痕跡が残る。屈曲部に厚みがあり8世紀的な形状を呈す。

緑釉陶器

碗 (11) 白っぽい土師質の胎土で、内面に手持ちの磨きを施す。貼り付け高台は先端が欠損する。釉は厚めでくすんだ緑色を呈し、透明度は低いが光沢を持ち全面に施される。目跡は見られない。

瓦

平瓦 (12~16) 12・13は縄目、14は二重の正格子、15・16は斜格子の叩き目を残す。横の小口は13がケズリにより成形されるほかは内側から入れられた分割境線の切込みがそのまま残されている。14は二重格子としては早い時期のもので、粘土を接合した際の段差とそれを押さえつけた痕跡が残されている。12のみ瓦質で他は須恵質。

石製品

用途不明製品 (17) 欠損して全体形がわからないが、平坦な2面に削ったような痕跡が見られる。滑石製で石鍋の二次利用品か。

135SE042灰色土出土遺物 (Fig.11、Pla.12)

須恵器

鉢×壺 (1) 口縁部付近の小片で、端部が緩く「く」字に屈曲する。ロクロ目は均質で力強い。焼

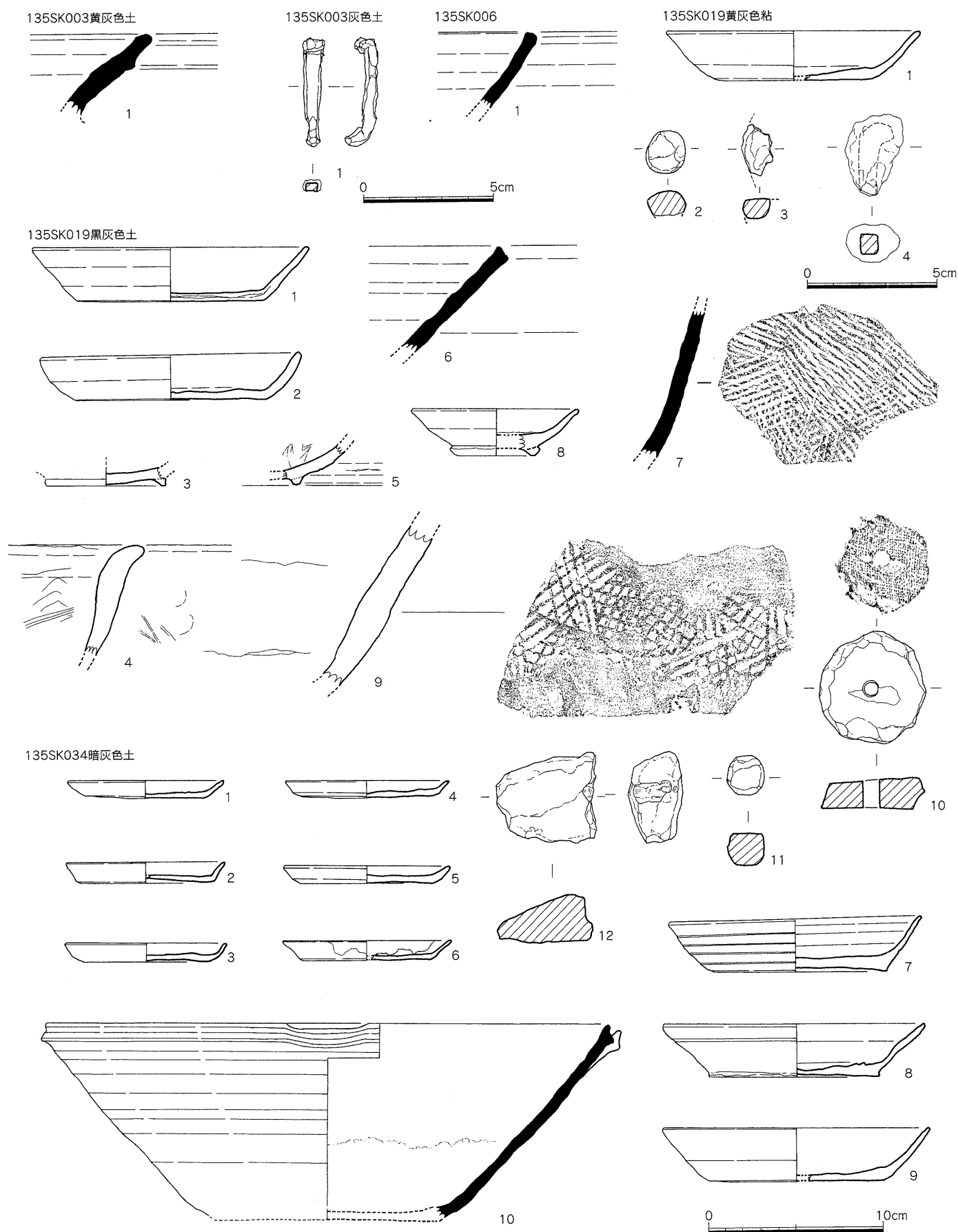


Fig.12 135SK003 · 006 · 019 · 034 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

きは土師質を呈すが、器形や調整から須恵器と考えられる。

土師器

坏a (2) 体部と底部の境に屈曲部を持つもの。

碗c (3～6) いずれも外に開く形状の高台を持つ。5の高台は短く断面形状は三角形を呈す。色調は白色傾向。

小皿a (7) 平坦な底部形状で口縁部の立ち上がりは極く短い。磨耗のため底部の切り離し技法は不明。口径9.3cm、器高0.9cmに復元される。

小皿c (8) やや丸みを持つ底部にやや丈高の高台が付けられる。口径は10.5cmに復元される。

甕 (9、10) 9は短くカーブする厚めの口縁部を持つ。10はフック状の形状を成す把手部分の破片である。

黒色土器

碗 (11) 薄い体部を持ち、口縁端部が短く外に屈曲する。内面はミガキがかろうじて見える。B類。瓦

丸瓦 (12) 須恵質の胎土で斜格子の叩き目を残す。横の小口は内側から入れられた分割の切込みが残されたままである。

軒平瓦 (13) 瓦当文様は右方向になびく唐草の内区に連続珠文の外区が取り巻く。額の段はなく瓦当面向かってバチ形に広がる。額下の割れ目を先の尖った棒状の工具で刺突して補修した痕跡が見られる。焼きは酸化気味の須恵質。

平瓦 (14～17) 14は縄目、他は斜格子の叩き目の痕跡が残る。16は二重格子で焼成は酸化気味。他は須恵質。

土坑

135SK003黄灰色土出土遺物 (Fig.12)

須恵器

大甕b (1) 胎土は芯の一部のみ灰色で、他は茶褐色を呈す。硬質。口縁は二重で屈曲部外面に浅い沈線が見られる。

135SK003灰色土出土遺物 (Fig.12)

金属製品

鉄釘 (1) 先端が屈曲するもので、頭部がL字に折れ曲がっている。長さ4.3cm。

135SK006出土遺物 (Fig.12)

須恵質土器

鉢 (1) 斜め上方に立ち上がる厚さが一定の体部を持つ。口縁端部は若干の平坦な面を持つ。外側の縁が帯状に黒色化する。東播系の製品と考えられる。

135SK019黄灰色粘出土遺物 (Fig.12)

土師器

坏a (1) 底部は糸切りを残し、体部はストレートに広がる。口径14.6cm、器高2.8cm、底径9.9cmに復元され、大宰府XVI期頃の所産か。

土製品

瓦玉 (2) 土師質を呈す瓦を用いたもので縁辺は磨耗している。

焼土塊 (3) 土師質の胎土で、手づくねた様な痕跡がある。

金属製品

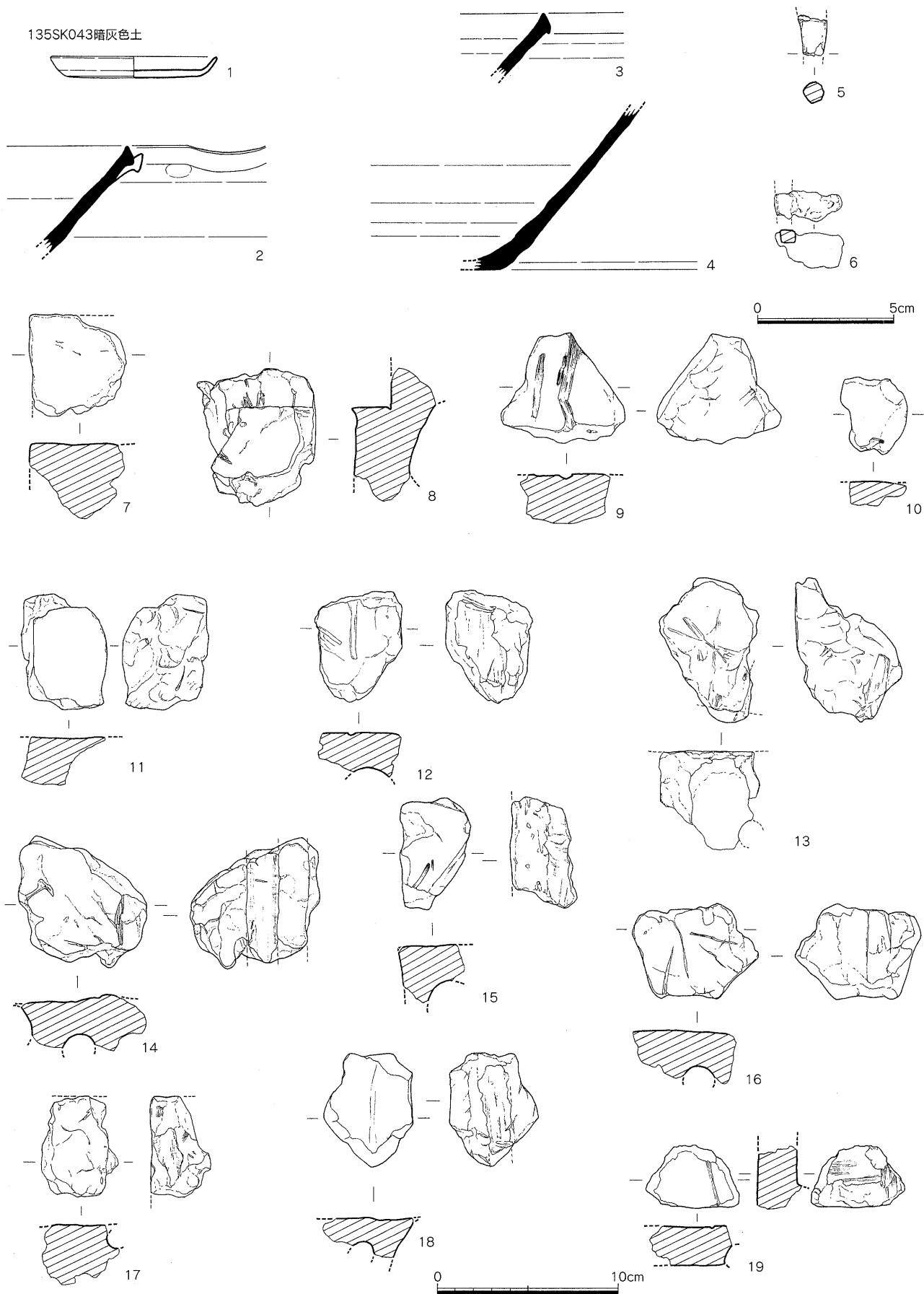
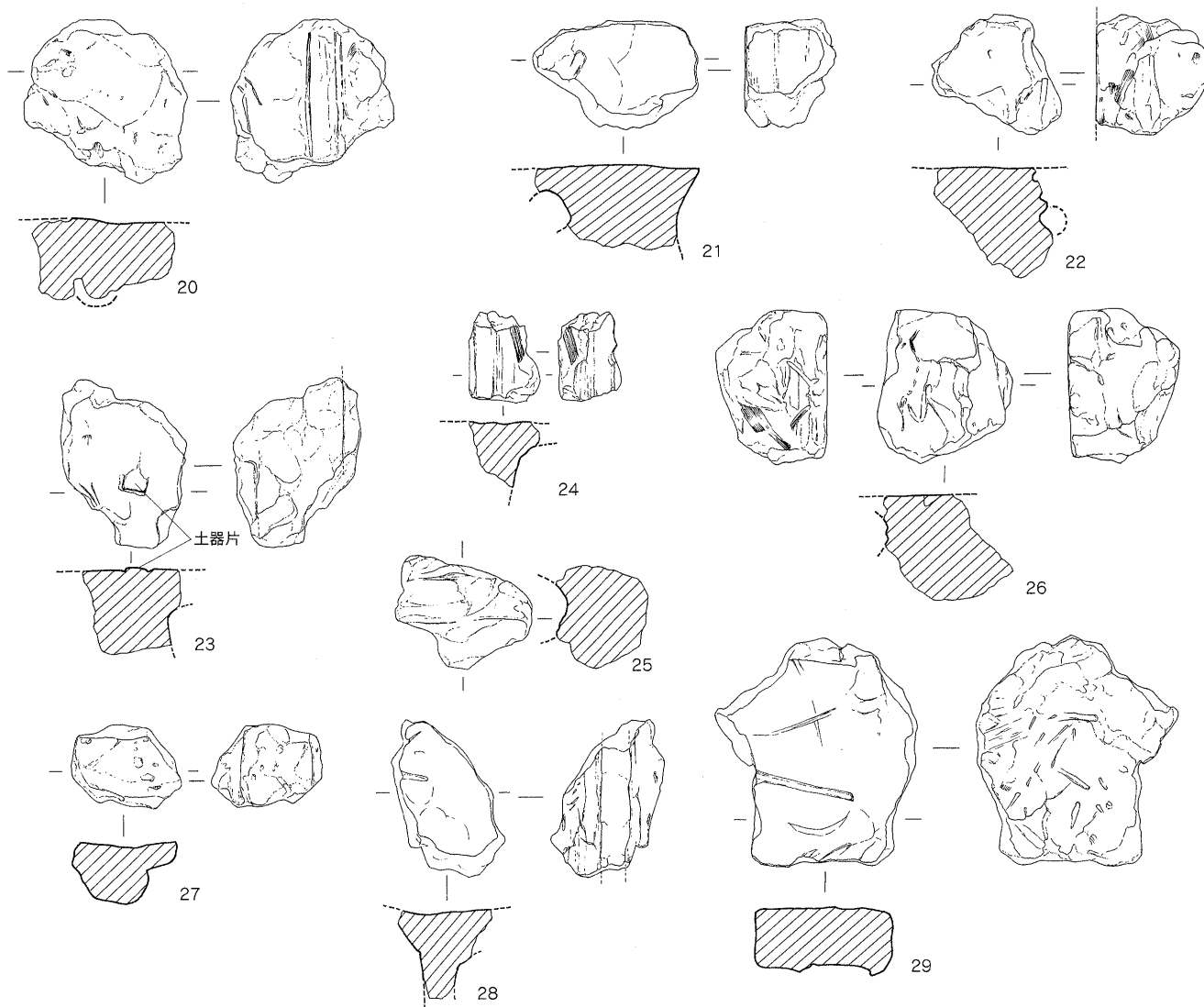
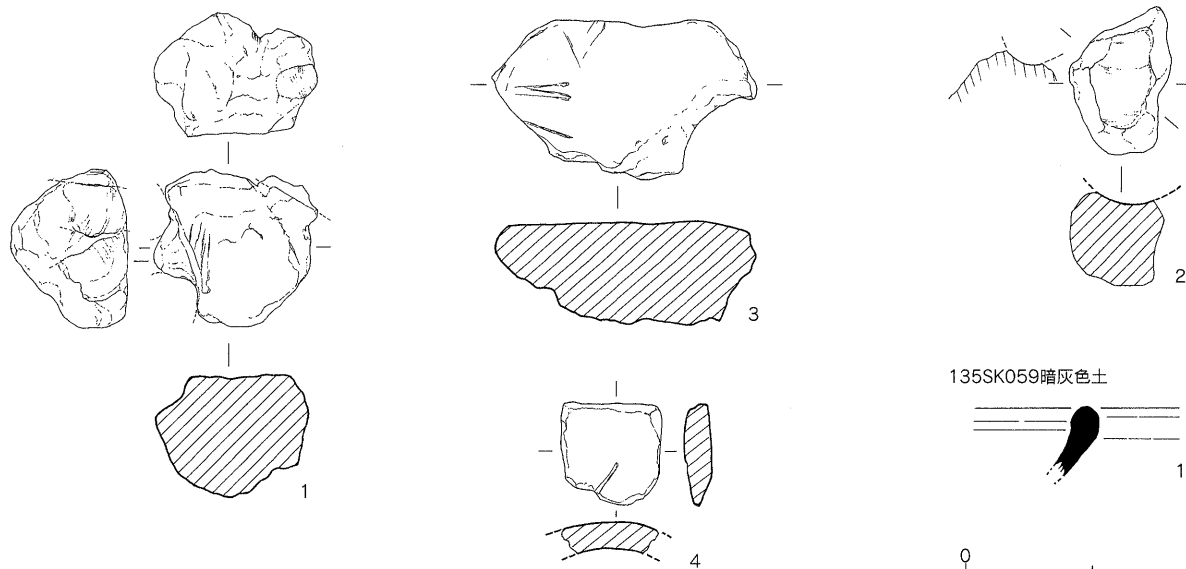


Fig.13 135SK043 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

135SK043



135SK044 暗灰色土



135SK059暗灰色土



0 10cm

Fig.14 135SK043 · 044 · 059 出土遺物実測図 (1/3)

鉄釘 (4) 0.8mm角の角柱状をなし、レントゲン写真によれば頭がL字に曲げられている。

135SK019黒灰色土出土遺物 (Fig.12、Pla.12)

土師器

坏a (1、2) 底部は糸切りの上に板状圧痕が残される。内底部には強いナデが見られる。1は口径16cm、器高3.2cm、底径10.7cmに復元される。2は口径15cm、器高2.6cm、底径10.9cmの完形品。

碗c (3) 底部はナデによって仕上げられ、断面三角形の高台が付けられる。

鉢 (4) 口縁の屈曲部が最も厚く、端部は短く屈曲する。外面には叩きが、内面にはケズリが施される。

瓦器

碗 (5) 体部と底部は緩やかなカーブで連なり、低平な高台が付けられる。外面の体部側に屈曲する部位を持つ。内面はミガキcが見られる。

須恵質土器

鉢 (6) 均一でストレートに開く体部を持つ。口縁端部は平坦面を形成し、中央にわずかな沈線状の窪みがある。東播系の製品と考えられる。

甕 (7) 内面は剥落する部分が多いがナデで仕上げられ、外面には平行タタキが一部直交して施される。

灰釉陶器

皿 (8) 口縁端部が僅かに屈曲し、一部が外に張り出す断面三角形の高台が付けられる。釉は内底中央には掛けられておらず重ね焼きの付着が見られる。胎土は硬い須恵質で釉は透明感のある緑色で温度の加減のためかアバタ状を呈す。口径9.7cm、器高2.7cm、高台径5.2cmに復元される。

国産陶器

甕 (9) 内面には粘土紐の接合痕跡が残るがナデで仕上げられ、外面には格子と斜格子目のタタキの痕跡が残る。胎土は灰褐色を呈しざらつく感じがある。東海系の製品か。

土製品

紡錘車 (10) 須恵質でタタキ目のない平瓦を二次的に加工して作られたもので、約0.8cmの円形の穿孔が中央にある。

焼土塊 (11、12) 土師質のもので、11は瓦玉状を呈し、12は角のある形状を呈す。用途不明。

135SK034暗灰色土出土遺物 (Fig.12、Pla.12)

土師器

小皿a (1~6) すべて底部に糸切りが見られる。1には板状圧痕が、6には赤色系の付着物が見られる。

坏a (7~9) すべて底部に糸切りが見られる。7には回転ナデに伴うらせん状の条線が体部外面に残される。8と9には板状圧痕が見られる。これらは小皿aとともに大宰府XV期頃の所産か。

須恵質土器

鉢 (10) 片口を持つもので、口縁端部は玉縁状の中央が窪む形状を呈す。口径33cm、器高11.5cm程度に復元される。東海系の製品か。

135SK043暗灰色土出土遺物 (Fig.13・14、Pla.12)

土師器

小皿a (1) 底部に糸切りが見られる。口径9.2cm、器高7.5cm程度に復元される。

須恵質土器

鉢 (2~4) 片口を持つもので、口縁端部は玉縁状で下に突出する形状を呈す。東海系の製品か。

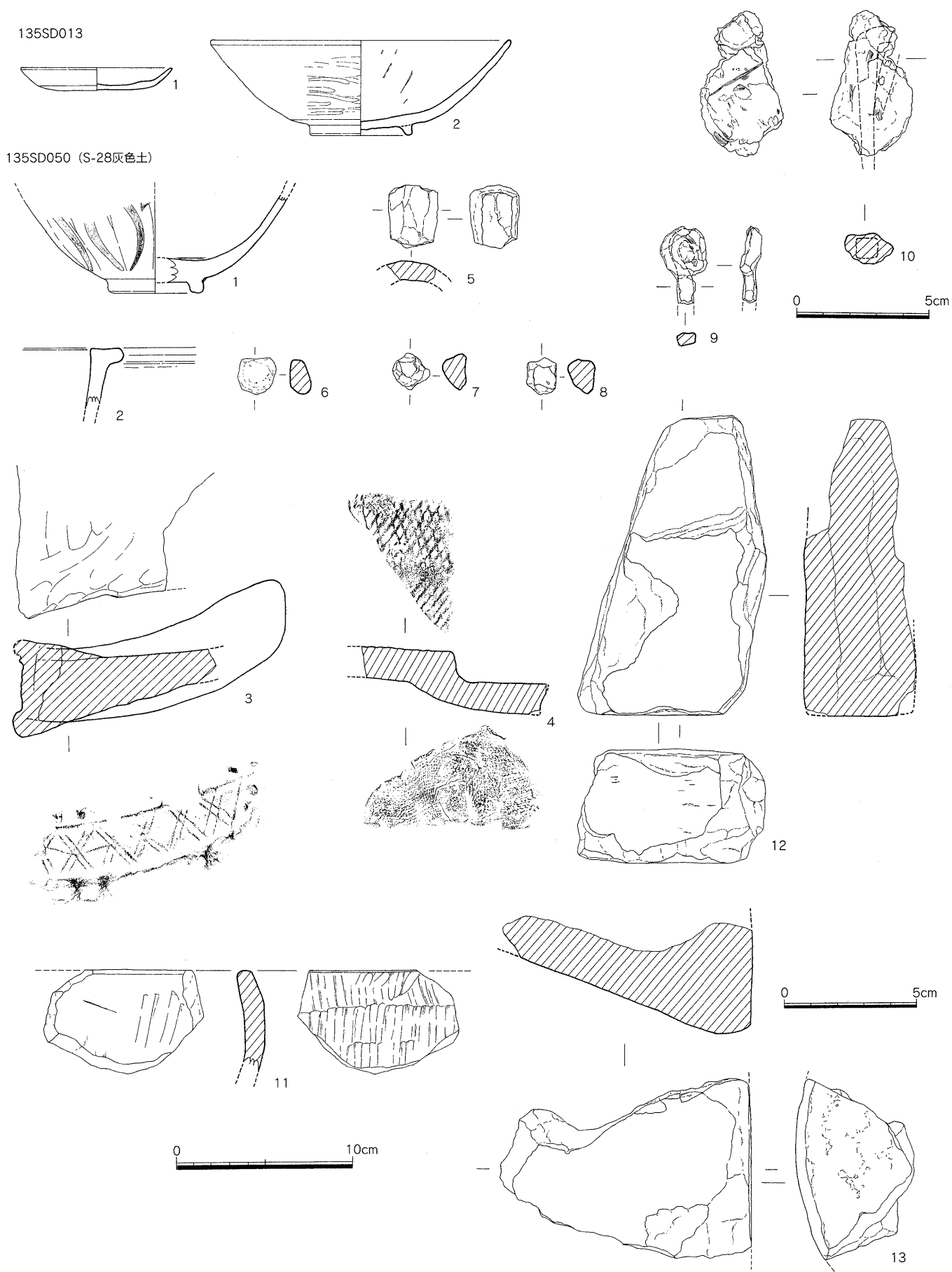


Fig.15 135SD013 · 050 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

金属製品

筒状製品（5） 片一方に通減し断面形状が角を持つ楕円形を呈す。腐食の過程で膨張したように見られ、本来は太目の釘状の製品であった可能性がある。

鉄釘（6） 断面長方形の角釘に錆上の付着物が取り付く。

土製品

土壁状土製品（7～29） 土師質に焼けたもので7・8は矩形に連なる面を、9～11は平坦な面を、12～19は平坦な面の背面に径が2cm程度の棒状の圧痕を、20～22は割り竹状の圧痕を、残りは角を持つ角柱状の圧痕を持つ。竹や角材を芯として泥を塗った壁状の構造物が熱を受けて焼土塊となり崩壊したものと考えられる（『大宰府条坊跡XI』1999年p186参照）。図化以外に70片以上が出土している。

135SK044暗灰色土出土遺物（Fig.14、Pla.12）

土製品

土壁状土製品（1～3） 土師質に焼けたもので径が3cm以上の棒状の圧痕が残る。

焼土塊（4） 厚さ1cmほどの土師質のもので、スサ交じりの胎土で、断面形状はカーブを持つ。

135SK059暗灰色土出土遺物（Fig.14）

須恵質土器

鉢（1） 端部が内側に丸みを持つ特徴を有すもので、丹波篠窯系の製品と考えられる。

溝

135SD013出土遺物（Fig.15、Pla.12）

土師器

小皿a（1） 底部は糸切りで板状圧痕を有す。口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.8cm程に復元される。

瓦器

椀（2） 高台は低平で口縁端部はほとんど屈曲しない。内面にミガキbを、外面に横方向のミガキcを残す。口径17cm、器高5.3cm、高台径5.8cm程度に復元される。

135SD050（S-28灰色土）出土遺物（Fig.15・16、Pla.12）

龍泉窯系青磁

椀（1） 鎚連弁を持つII-bタイプのもので、本遺構の埋没の下限が陶磁器区分E期以降になることを示す遺物である。

土師質土器

鍋（2） 短くL字に屈曲する口縁部を持つ。口縁上面には縄などの痕跡はない。

瓦

軒平瓦（3） 斜格子の内区の上と右外に連続珠文、下に連続三角文の外区を持つ。縦断面の形状はバチ形で額の段はない。焼成は須恵質。九州歴史資料館瓦分類515系統に属す。

無文磚（12） 表面が剥落するが、4面が残る。胎土は白色の瓦質。板状の芯に上下左右から粘土板を重ねて立方体を形成する手法を採る。

丸瓦（4） 細かい斜格子の叩き目を有す。

土製品

鞆羽口（5） 直径6cm程度に復元される筒状のもので、図の下側が灰黒色を呈し、差し込み側になるものと見られる。

焼土塊（6～8） 土師質の塊で7は石を含んでいる。鞆羽口と比較すればやや軟質である。

金属製品

鉄釘（9、10） 棒状部の断面形状は長方形をなし、レントゲン写真によれば9は頭が蕨手状に輪を描き、10はL字に屈曲し、別のもう一本と錆によって癒着している。

石製品

石鍋（11） 内傾する体部を持つ。鋳が無く縦耳のAタイプと考えられる。

砥石（13～15） 砂岩ないし花崗岩を用いたもので、粗・中砥で用いた置き砥石と考えられる。それぞれ一面の滑面を残す。14は赤色の縞模様が入る天草系の砂岩。

135SD050（S-31暗灰色土）出土遺物（Fig.16、Pla.12）

土師器

坏a（1） 外底部に糸切りと板状圧痕が残る。口径15.4cm、器高3.4cm、底径11.4cm程度に復元される。

緑釉陶器

碗（2） 底部は円盤状に厚みを持つが、外底部は浅いケズリによって高台が表現される。内底部は弧を描くように釉が剥離した部位があり、重焼きの痕跡とみられる。ごく淡い緑色の釉がかかる。酸化気味だが須恵質を呈し、京都洛西系の製品か。

石製品

丸石（3） 黒灰色の丸石で基石であった可能性がある。

砥石（4、5） 砂岩製のもので4は二面、5は一面の滑らかな使用面がある。

135SD055（S-20暗灰色土）出土遺物（Fig.16）

龍泉窯系青磁

碗（1） 鎚連弁を持つII-bタイプで、S-28灰色土1同様、本遺構の埋没の下限を示す遺物である。

135SD055（S-52灰色土）出土遺物（Fig.16、Pla.12）

土製品

焼土塊（1） 土師質を呈し、スサなどの混入物は見られない。

135SD060（S-53灰色土）出土遺物（Fig.16、Pla.12）

緑釉陶器

碗（1） 硬い須恵質の胎土で、内面は平滑に仕上げる。高台は削り出しで段はない。内面と高台外面に淡い緑色の釉が薄く掛けられる。洛西系の製品か。

白磁

碗（2） 胎土は灰色味のある白色を呈し、釉は透明。口縁はラッパ状に開き、端部が短く屈曲する。外面口縁直下までケズリがおよび段を成す。未分類。

金属製品

鑿状工具（3） 鉄製で断面形状は長方形を呈し、先端に歯が付く。

135SD060（S-5黒色粘）出土遺物（Fig.17、Pla.12）

土師器

小皿a（1～10） すべて底部に糸切りが見られる。2・7・10以外にはその上に板状圧痕が残される。9は白味が強く器高も高いことから、他の群とは異なる製品である。

坏a（11～15） 小皿同様にすべて底部に糸切りが見られる。大宰府XV期前後の所産と考えられる。

碗c（16） 肉厚で端部が方形の高台であり、平安期でも古い様相を呈す。

大碗c（17） 高さ2cmほどの高い高台が付けられる。内底部に煤が付着している。火気を伴う使用があったことが想定される。

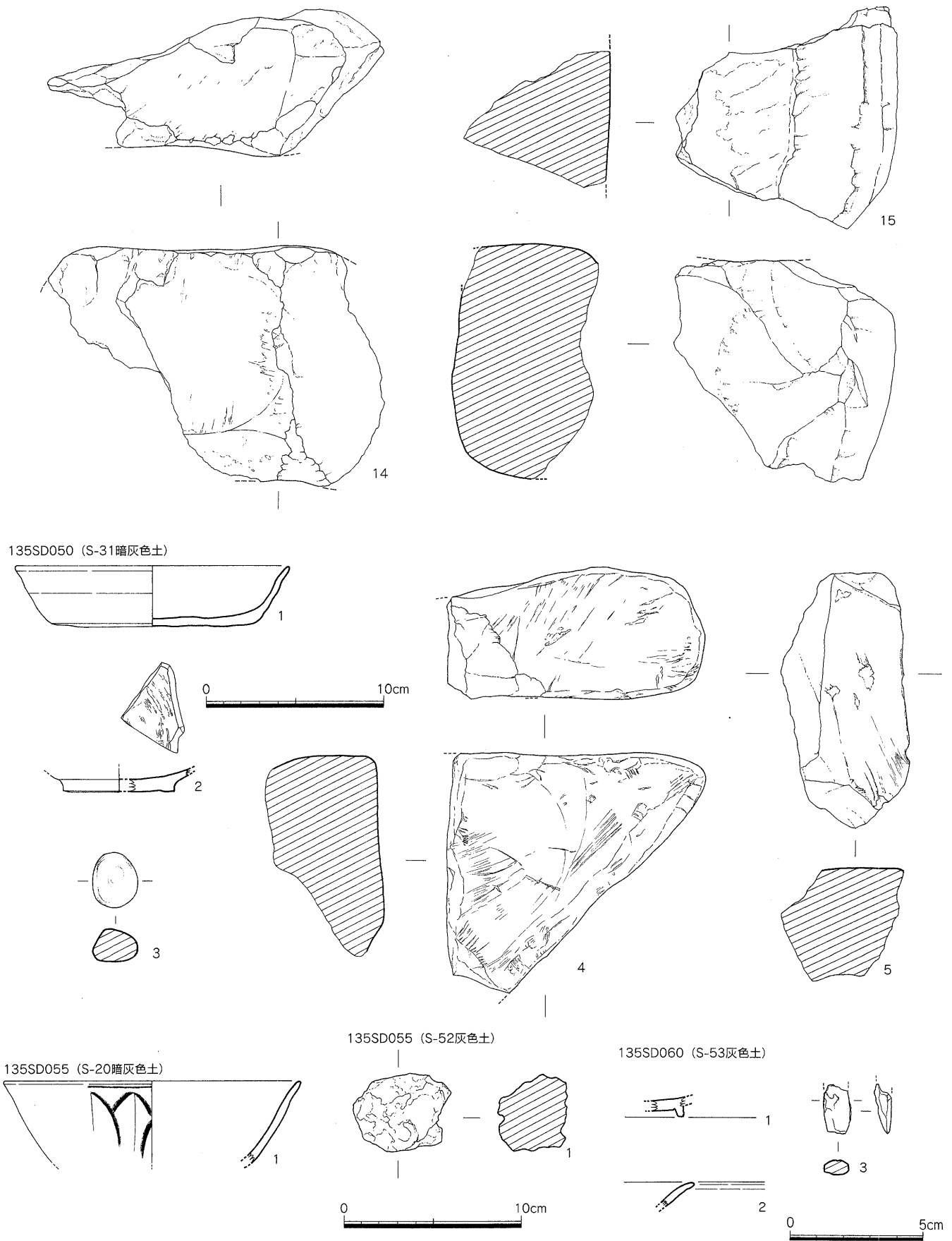


Fig.16 135SD050・055・060 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

黒色土器

碗 (18) 外に広がる高台を持つ。内底面にはミガキcが施される。A類。

瓦器

碗 (19～22) 口縁端部付近は屈曲が目立たない形状を成し、内面はミガキbの後ミガキcが施される。21は高台の断面形状が低平な三角形を成す。22は口縁内側に沈線があり、厚みが端部に向かって増している。内面の磨きは細く機械的に平行に施されている。これらの特徴からこの一点だけは畿内産の製品と考えられる。

緑釉陶器

碗 (23) 丸味を持つ底部に外に張り出す短い高台が付けられる。内底に沈線がある。焼きは表面と芯が黒色を呈し瓦質に近い。釉の変質と剥落は著しいが、全面に施されている。周防系の製品の特徴に合致する。

青磁

器種不明 (24) 内面に瓜割り状の縦方向の窪みと外面口縁部下に屈曲を持つ。灰緑色の不透明な釉が施される。

青白磁

合子 (25) 身側の製品で、形によって成形され外面下部に花卉状の連続した膨らみを有す。施釉は外底部には及ばず、外底部に2箇所が目跡らしい痕跡が見られる。完形品。

土製品

土壁状土製品 (26～29) 土師質に焼けたもので26には径が1.5cmほどの棒状の圧痕が、27・29にはスサ状の繊維の痕跡が、28には刳殻状の痕跡が見られる。

135SD060 (S-5黒灰色土) 出土遺物 (Fig.18・19、Pla.12)

土師器

小皿a (1～23) すべて底部に糸切りが見られる。また1・9・18以外には板状圧痕が残される。

坏a (24～30) すべて底部に糸切りが見られる。また28以外には板状圧痕が残される。

碗c (31、32) 31は平底で深い形状をし、高台も長く古い様相を呈す。32は底部が中央に窪み高台は断面三角形を呈す。胎土に角閃石を含む。プロポーシオンや胎土から他所からの搬入品である可能性も考えられる。

黒色土器

碗 (33) 底部が中央に窪み、高台は外に開き断面三角形を呈す。B類。

瓦器

碗 (34、35) 低平な高台が付き、35は外底面に三角形のヘラ描きが見られる。

土師質土器

鍋 (36) L字に短く屈曲する口縁部上面にハケ状工具による条線が刻まれる。体部はハケ状工具でナデられる。

鉢 (37) 平坦な底部片で、外底面に押圧によりできた長方形や弧状の突出部がある。

須恵質土器

鉢 (38) 底部中央が若干膨らむ底部片で径は8.6cmを測る。東播系の製品と考えられる。

灰釉陶器

碗 (39) 体部は膨らみながら立ち上がり、口縁に向かって外反する形状を成す。胎土は須恵質で、光沢のない灰白色の釉が内外面に薄く掛けられる。

135SD060 (S-5黑色粘)

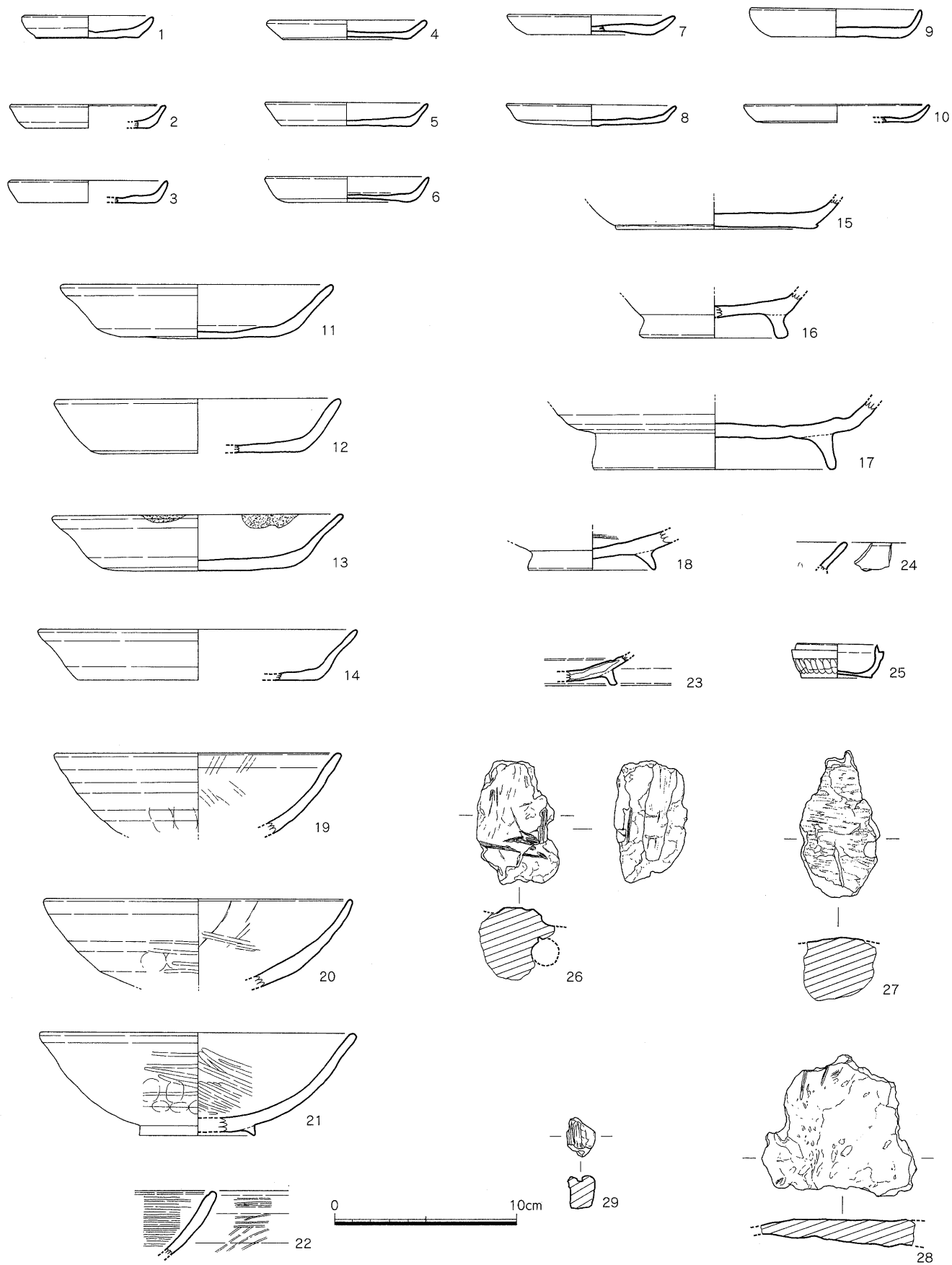


Fig.17 135SD060 出土遺物実測図1 (1/3)

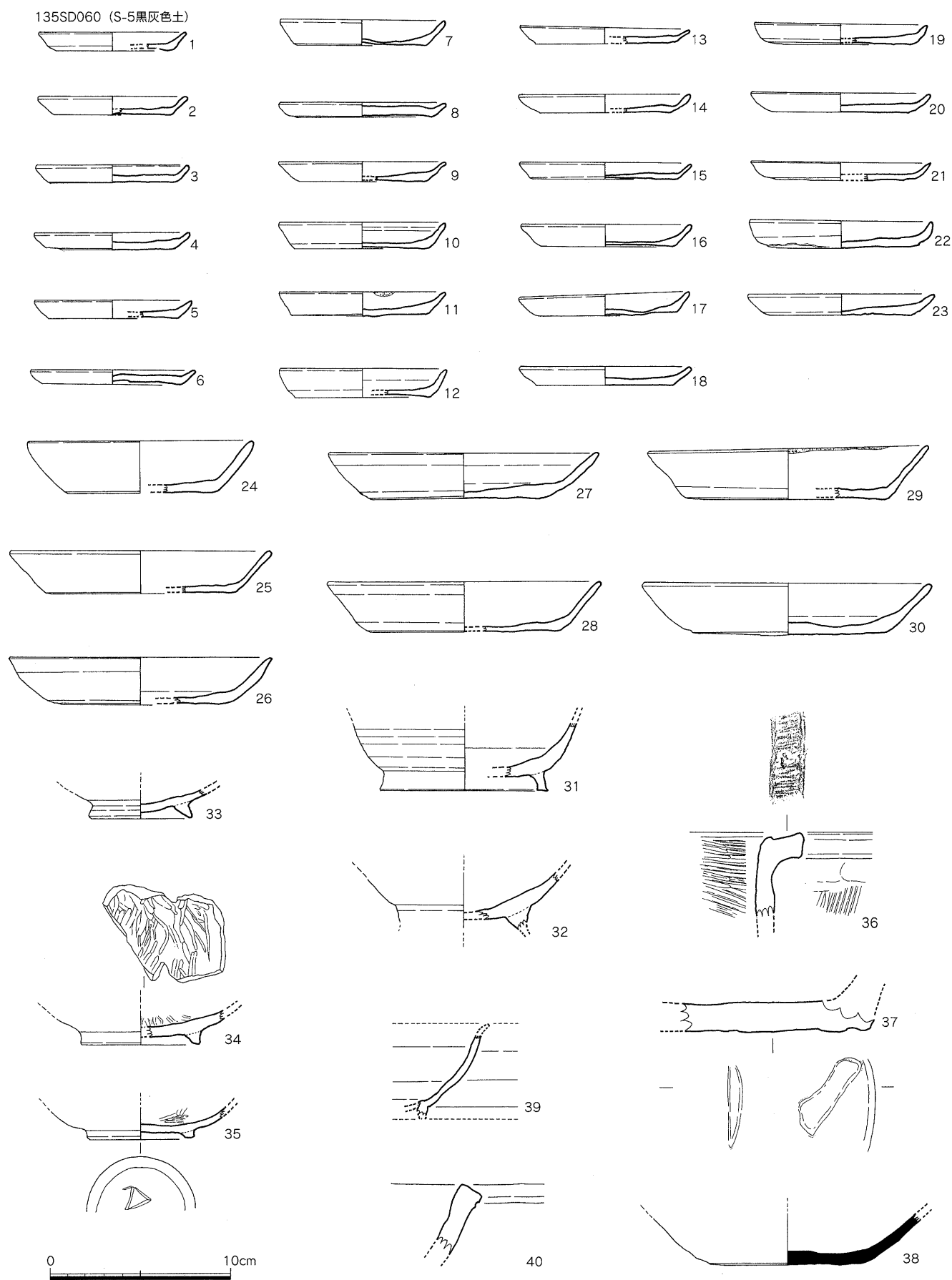


Fig.18 135SD060 出土遺物実測図2 (1/3)

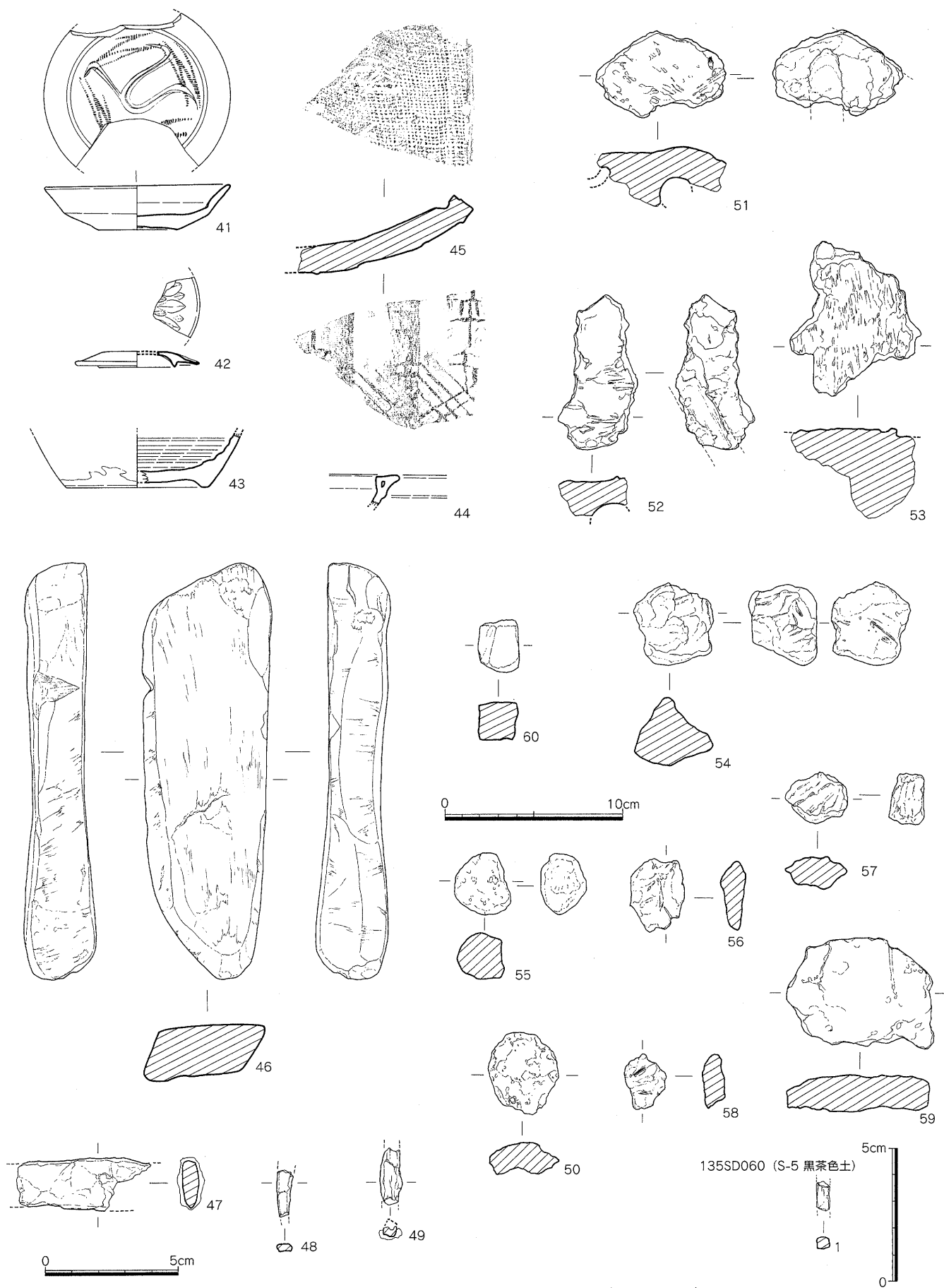


Fig.19 135SD060 出土遺物実測図3 (1/2、1/3)

縄文土器

鉢 (40) 外開きの口縁端部に平坦面を持つ形状で、胎土は茶褐色系で金雲母を多く含んでいる。後晩期の所産か。

同安窯系青磁

皿 (41) ヘラ状工具によるS字状の片彫の文様とクシ状工具による点描文を有すI-1b類の典型例で、本遺構の埋没が陶磁器区分のD期以降である事を示す資料である。

青白磁

合子蓋 (42) 陣笠を伏せたような形状で、内面に返りを持つ。外側は型によると思われる放射状の鐫を持つ陽刻の連弁が重ねて表現されている。胎土は灰白色で黒色の微粒子を含む。釉は光沢のある淡青色を呈し、内外面に施され、身が接する返り外側から口縁端部の間が露胎している。太宰府・博多においては類例がみられない。

白磁

壺 (43) ケズリ出しによるゴケ底を持つもので、外面に緑味を帯びた濁った白色を呈す釉が体部下位まで掛けられる。II系に属すとみられる。未分類。

中国陶器

鉢 (44) 胎土に暗赤褐色の釉が掛けられ、口縁端部を成形時に折り返すことによって三角形に仕上っている。折り曲げにより体部と口縁部の間に細い管状の隙間ができています。未分類。

瓦

平瓦 (45) 須恵質で格子目に「平井」の文字が入る。九州歴史資料館分類の901H cタイプに相当する（『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000九州歴史資料館）。

石製品

砥石 (46) 雲母片岩を用いたもので、それぞれの面が滑らかであるが未発達である。手持ちの粗ないし中砥として用いられたものか。

金属製品

刀子 (47) 長さ5.1cm、身幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。厚みは腐食時の膨張により増した数値となっている。

鉄釘 (48、49) 方柱状の釘片で48は幅が0.3×0.6cm、49は0.5cm四角か。

滓 (50) 重量感のあるメタル質のもので茶褐色の錆部分と黒銀色の金属質部分とが混在する。

土製品

土壁状土製品 (51～53) 土師質に焼けたもので2cm以上の径を持つ棒状の痕跡が残る。また、わら状の繊維や粉状の圧痕が顕著に見られる。報告以外に約30点の塊が出土している。

焼土塊 (54～59) 土師質で若干繊維痕跡が見られる。59は凹凸があるが面を成している。

瓦玉 (60) 須恵質の瓦を打ち欠いたもの。平面形は3×2.3cmの長方形を呈す。

135SD060 (S-5黒茶色土) 出土遺物 (Fig.19)

金属製品

鉄釘 (1) 約0.5cm角の方柱状を成す。

135SD065 (S-10灰色土) 出土遺物 (Fig.20)

土師器

小皿a (1) 底部に板状圧痕を残し、体部はつまみ上げたように短く外に立ち上がる。

土師質土器

黒色土器

椀 (5) つまみ出した様な、低平で断面三角形を呈す高台を有す。B類。

135SD065 (S-10黒灰色土) 出土遺物 (Fig.20、Pla.12)

土師器

小皿a (1) 底部は糸切りで形成される。

坏a (2、3) 2は底部と体部境の稜は不鮮明で、口縁端部は極く僅かに外反する。口径12.7cm、器高3.4cm底径6.2cmに復元される。3は底部に糸切りの痕跡があり、体部は直線的に外に開く形状を成す。

鉢 (4) 口縁端部が短くL字状に折り曲げられた形状を呈す。外面はハケ状工具でナデられる。

鍋 (5・6) 5は鐳を持つもので、鐳から口縁までは高さ約1.5cmほどで、先端がやや内傾する。6は体部外面に格子目の叩きを有すもので2次的被熱により胎土が還元化している。

瓦

軒丸瓦 (7) 瓦当面の文様は内区に縦方向が短い連弁があり、圈線を挟んで連続珠文、連続三角文帯がそれを取り囲む。焼成は瓦質。

平瓦 (8～12) 格子目の叩きを有すもので、焼成は8が瓦質を呈すほかは須恵質を呈す。

土製品

焼土塊 (13) 硬い土師質を呈す。表面はひだ状の斑がある。全体の形状は不明。

石製品

丸石 (14) 扁平で平面形は楕円形を呈す白色の石。基石の可能性はある。

金属製品

鉄鏃 (15) 断面形状が茎部分では隅丸の正方形を呈し、身部分では0.6×0.8cmの長方形を呈す。

135SD065 (S-15暗灰色土) 出土遺物 (Fig.21)

石製品

用途不明 (1) 滑石製石鍋の転用品と考えられ、径約1cmの穴が斜めに穿たれる。

135SD065 (S-15灰色土) 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿a (1) 底部には糸切りを残す。口縁端部は先端に向かって細くなる。

土師質土器

鉢 (2) 全体に均一の厚みがあり、口縁端部付近が若干屈曲する形状を呈す。

瓦

軒丸瓦 (3) 焼成は須恵質で、内区に十字に配置された珠文、圈線を挟んで連弁を示す珠文が配される。九州歴史資料館瓦分類の208系に属す。

金属製品

鉄釘 (4) 先端が曲がってJ字状を呈す。レントゲン写真ではL字形の頭部が観察される。長さ5.2cm、幅約1.3cmを測るが、腐食により横方向は2倍ほど膨張している。

滓 (5) 全体に土器質のもので一部が鉍物質で多孔質となり、一部には鉄錆状の褐色の部位が認められる。

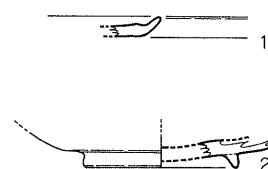
135SD065 (S-68) 出土遺物 (Fig.21)

須恵器

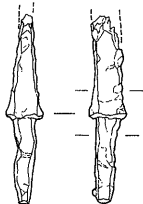
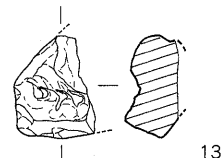
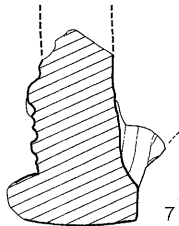
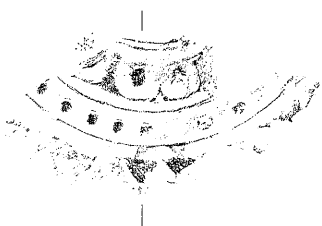
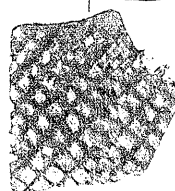
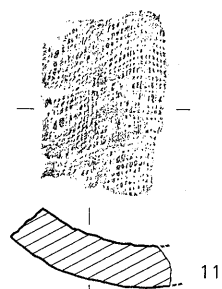
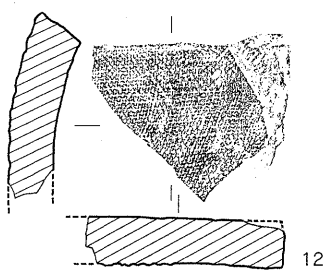
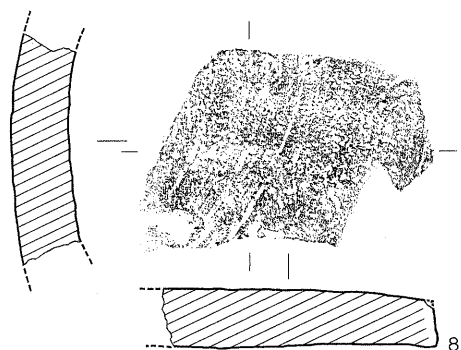
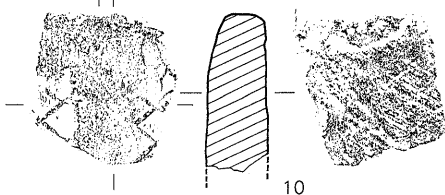
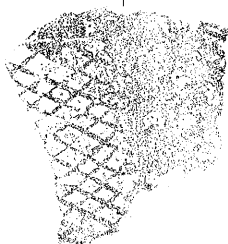
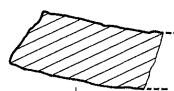
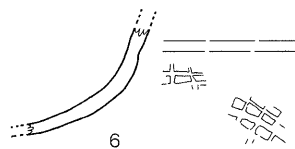
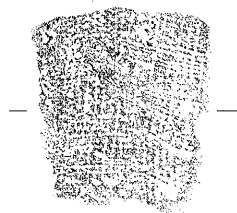
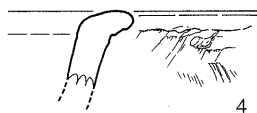
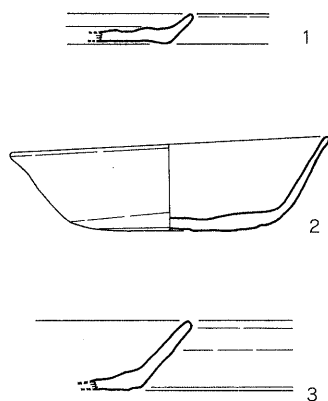
蓋 (1) 端部が嘴上に折れ曲がる3タイプの蓋である。

坏 (2) かえりを持つ身で、底部は手持ちのヘラケズリが施される。外口径は13cm、立ち上がり部

135SD065 (S-10 灰色土)



135SD065 (S-10 黑灰色土)



0 10cm

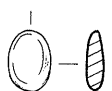
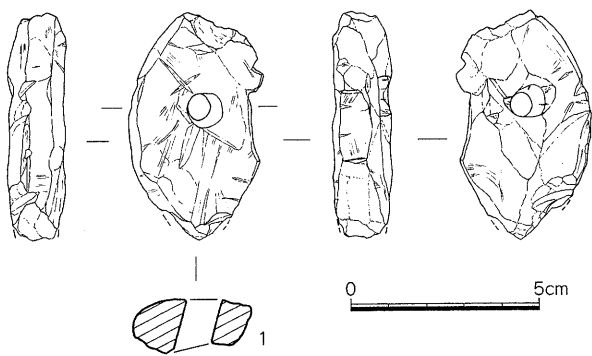
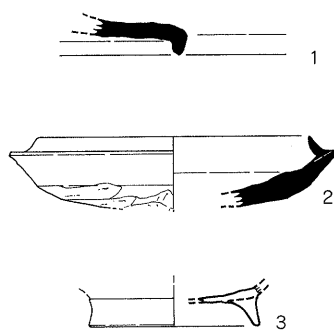


Fig.20 135SD065 出土遺物実測図 (1/3)

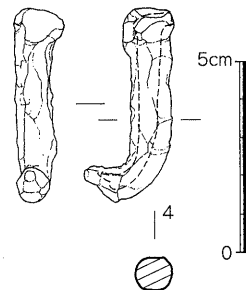
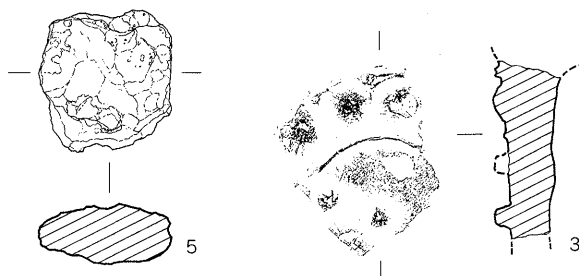
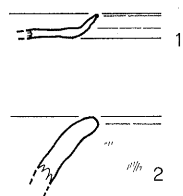
135SD065 (S-15暗灰色土)



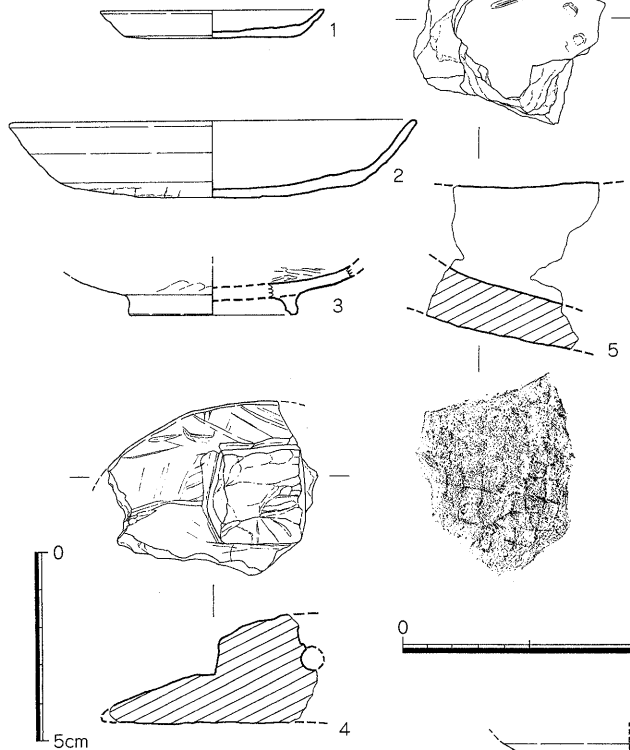
135SD065 (S-68)



135SD065 (S-15灰色土)



135SX001 黑灰色土



135SX004 暗灰色土

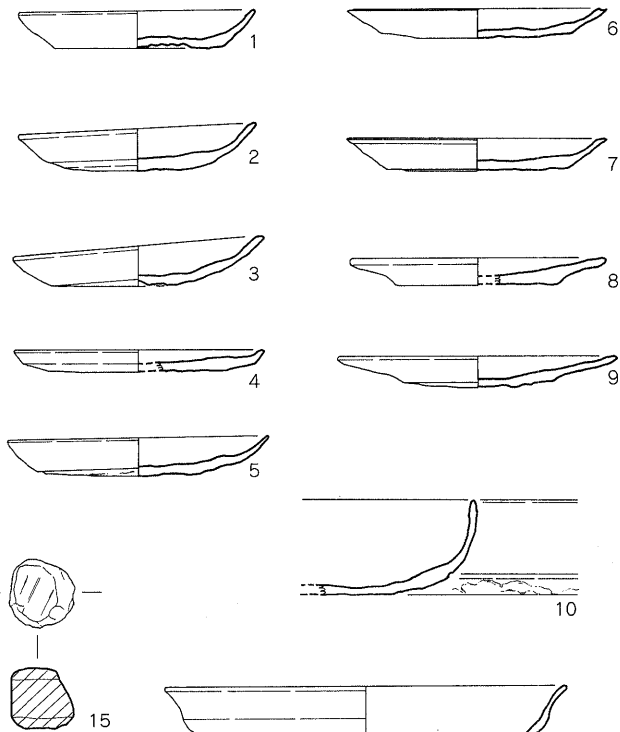


Fig.21 135SD065 · SX001 · 004 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

の径は10.6cm、器高2.8cmに復元される。縄文土器を除けば最も古い遺物の一つである。

土師器

碗c (3) 高さ1cmほどの高台が外に開き気味に付けられる。径は6.4cmに復元される。

その他の遺構

135SX001黒灰色土出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿a (1) 磨耗しているため底部の切り離し技法は不明。口径9cm、器高1.2cm、底径7.1cmに復元される。

丸底坏a (2) 押し出し技法により底部が丸底化するが、底の回転ヘラ切り痕や体部との境の角など、もとの坏の状態を残している。口径16.2cm、器高3cm、底径12.2cmに復元される。

瓦器

碗 (3) 平たな底部に低平な短い高台が付けられる。内面にはミガキcが施される。

石製品

石鍋補修材 (4) 石鍋の穴を塞ぐ補修材で、突起の横方向に0.6cm大の穿孔が見られる。

土製品

焼土塊 (5) 茶褐色の焼土が格子目叩きを有す平瓦片を取り巻いている。瓦は意図的に混和されたものか。

135SX004暗灰色土出土遺物 (Fig.21、Pla.12)

土師器

小皿a1 (1～7) 磨耗により不鮮明なものも含むが、回転ヘラ切りが残るもので2～5は丸底の傾向が見られ、6・7は口縁端部上面が平坦面を持ち、a2タイプなど他の器種の影響が見られる。

小皿a2 (8、9) ごく浅く、体部が横方向に延びる形状を呈す。底部には回転ヘラ切りが残る。口縁端部には平坦面や沈線が見られない。9は白色味を帯びる。

坏a (10) 口縁が上に立ち上がり、全体形が箱型を呈す。底部は回転ヘラ切りが残る。

丸底坏a (11) 緩やかな丸底を呈し、口縁端部が外側に屈曲する。口径16cm、高さ4.1cm+ α に復元される。小皿の傾向と併せ大宰府X期前後の様相かと考えられる。

碗c (12～14) 高台は外に開き高さ1cm以上で、坏部の底面は平坦な傾向が見られる。調整は磨耗のため不明。12は口径15cm、器高5.5cm、底径7.2cmに復元される。

土製品

瓦玉 (15) 土師質の平瓦を打ち欠いて成形したもので、全体に磨耗が進行している。

135SX007灰色土出土遺物 (Fig.22)

土師器

小皿a (1) 1は底部に糸切りの痕跡を残し、口径9.2cm、器高0.9cm、底径7.6cmに復元される。

瓦器

碗 (2) 平らな底部に低平で断面形状が三角形を呈す高台が付く。磨耗で調整は不明。

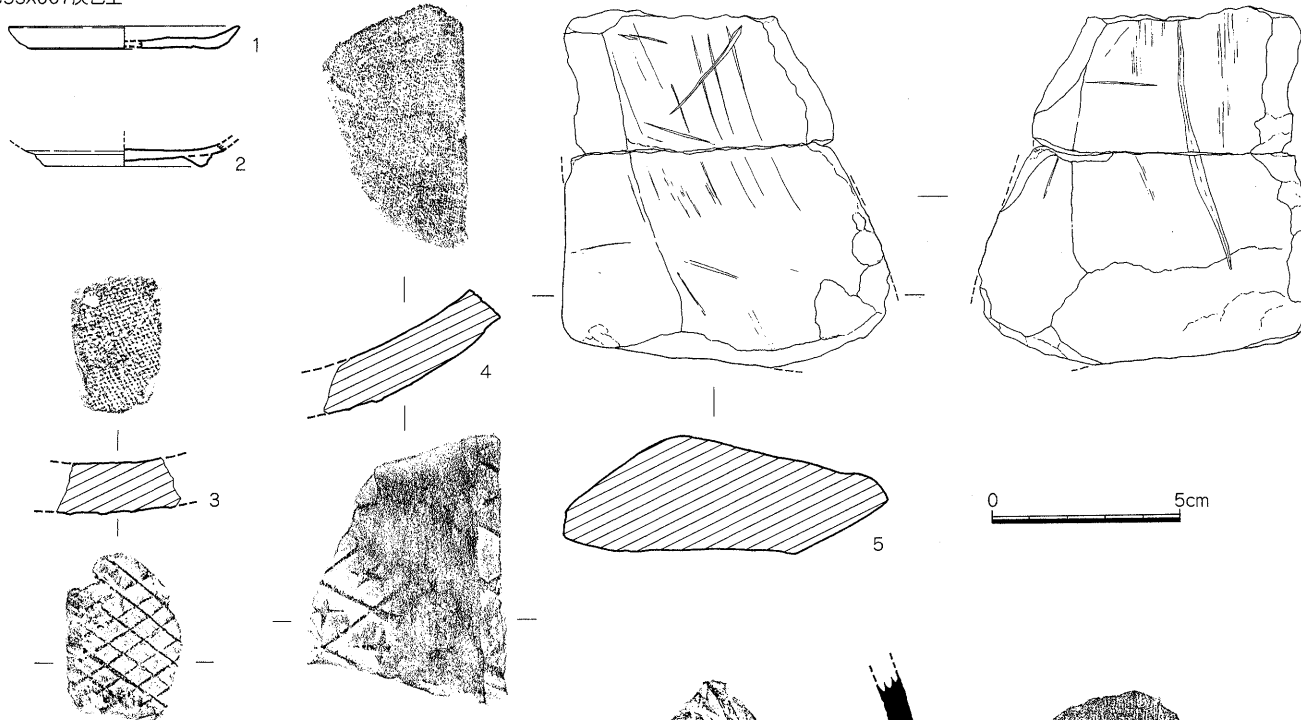
瓦

平瓦 (3、4) 斜格子の叩き目を有す平瓦片で、格子内の一部に十字、×印、縦線などが配される。3は須恵質、4は瓦質を呈す。

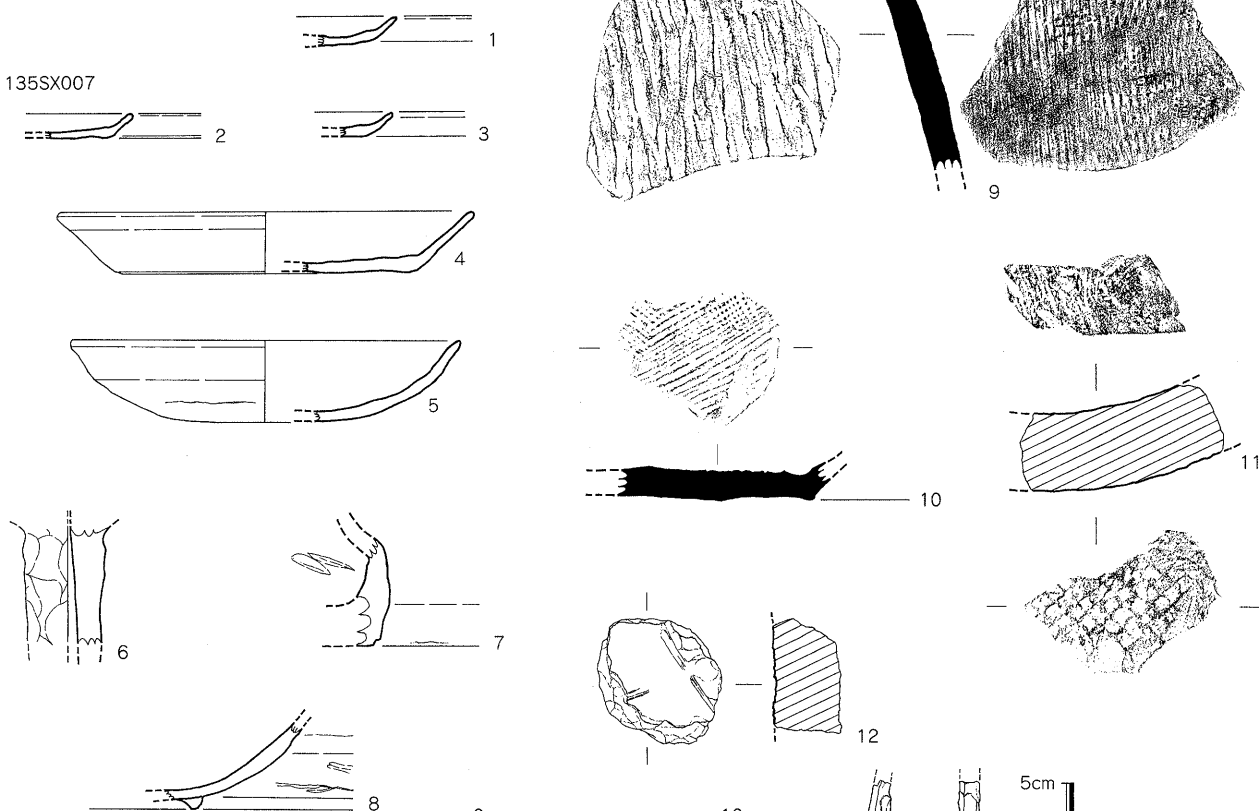
石製品

砥石 (5) 粗い砂岩を素材とし、形状は不整形で面は滑らかではない。

135SX007灰色土



135SX007



135SX014

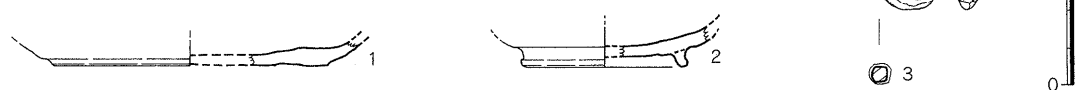


Fig.22 135SX007・014 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

135SX007出土遺物 (Fig.22)

土師器

小皿a (1～3) 底部に糸切りの痕跡を残す。

坏a (4) 底部に糸切りと板状圧痕を残す。口径16.6cm、器高2.4cm、底径12cmに復元される。

丸底坏a (5) 丸底で口縁はごく僅かに外反する。口径15.4cm、器高3.3cmに復元される。

器台 (6) 中心に0.9cmの芯の抜き跡がある筒状を呈すもので、外面は指押さえの痕跡が残る。

壺 (7) 底部から肩の高さまでが4cm程度でナデによって仕上げられる。

瓦器

椀 (8) 丸底の坏部に断面形状が三角形の低い高台が付く。

須恵質土器

甕 (9、10) 9は平行な条線からなる叩き目と当て具痕が見られる胴部片で、10は内底面にハケ状工具による条線が深く刻まれる底部片である。

瓦

平瓦 (11) 目の細かい正格子の叩き目を有す。焼成は硬い須恵質。

土製品

焼土塊 (12) 土師質で表面にわら状の繊維痕跡が見られる。

135SX014出土遺物 (Fig.22)

土師器

坏a (1) 底部に糸切りの痕跡が残される。底径は10.8cmに復元される。

瓦器

椀 (2) 外側に丸く突出する外開きの高台を持つ。底径は6.6cmに復元される。

金属製品

鉄釘 (3) 断面形状は0.5cmの方形を成す。平面形状は先端が曲がりJ字を呈している。

135SX016出土遺物 (Fig.23)

瓦

平瓦 (1) 胎土は土師質を呈し、叩き目はアミダ状を呈す。

135SX024出土遺物 (Fig.23)

石製品

丸石 (1) 平面の径が0.9cmほどの白色を呈すもので、碁石の可能性がある。

135SX033茶灰色土出土遺物 (Fig.23)

中国陶器

播鉢 (1) 若干内側に傾きながら立ち上がり口縁端部はごく短くL字に屈曲する。約0.4cm間隔の播り目が施されている。未分類。

石製品

丸石 (2) 青緑色を呈す扁平な丸石で、碁石の可能性がある。

金属製品

鉄釘 (3) 厚さ0.4cmほどの断面形状が方形を呈すもので、中央付近が屈曲する。

土製品

瓦玉 (4) 須恵質の丸瓦を素材とするもの。幅約2.5cm。

135SX037出土遺物 (Fig.23)

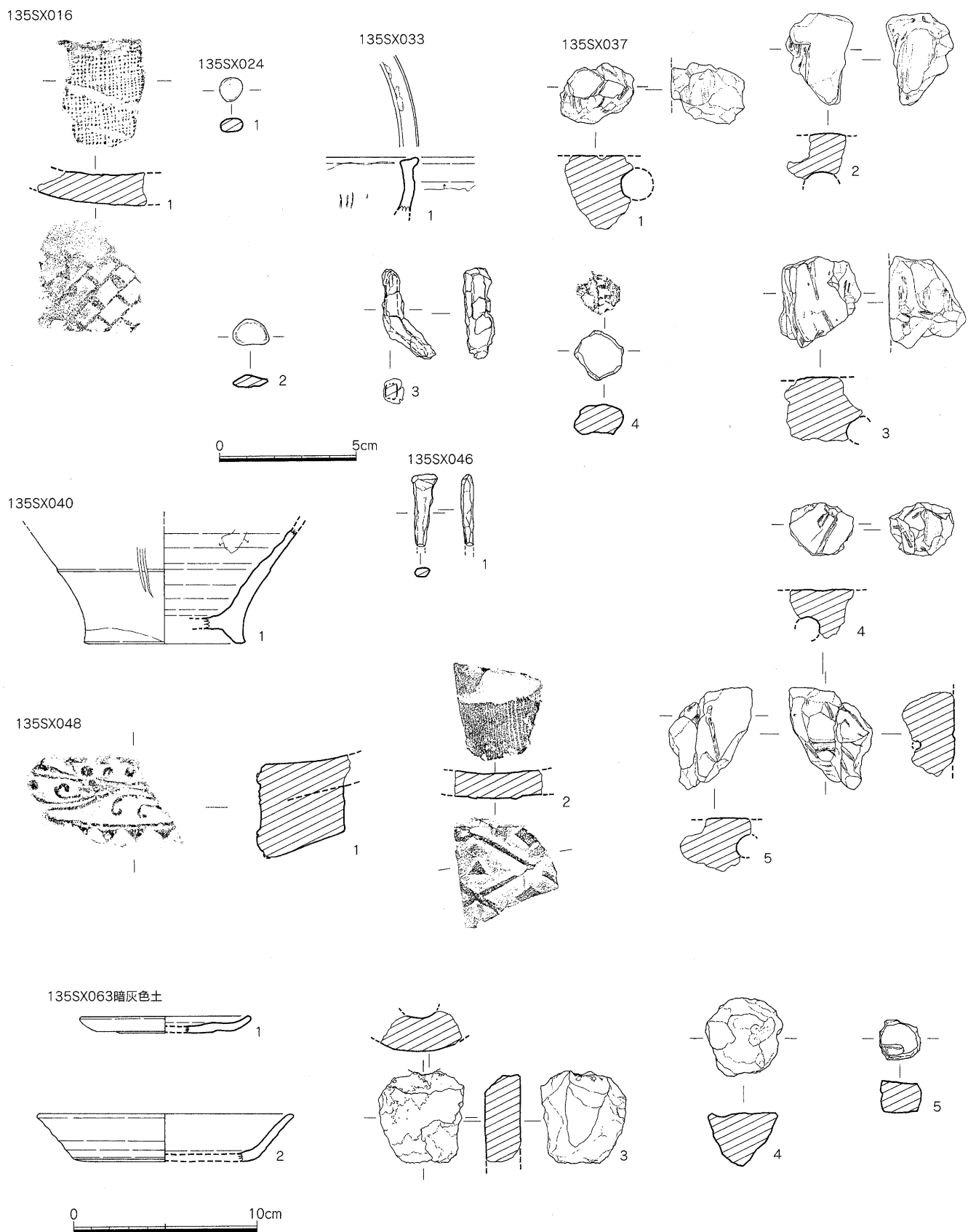


Fig.23 135SX016 · 024 · 033 · 037 · 040 · 046 · 048 · 063 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

土製品

土壁状土製品（1～5） 土師質でわら状の繊維質の痕跡を含む。直径が11.5cm程度の棒状の圧痕が見られる。

135SX040出土遺物（Fig.23）

白磁

壺（1） ケズリ出しにより外に張り出すような形状の高台を形成している。胴部下に横方向の段があり、縦方向に二条の沈線が施される。胎土は白灰色を呈し、釉は光沢のある淡い緑灰色を呈す。Ⅱ系の壺ないし水注の下部と考えられる。未分類。

135SX046出土遺物（Fig.23）

金属製品

鉄釘（1） 頭部に向かってバチ形に太くなる形状を成す。長さ2.7cm + α。

135SX048出土遺物（Fig.23）

瓦

軒平瓦（1） 瓦当文様は中央に左に流れる偏行唐草文を、その上に連続珠文、下に連続三角文を配す。焼きは堅い須恵質。老司系（九州歴史資料館560系）に属する古い様式のものである。

平瓦（2） 大きな斜格子に三角や菱形の文様が入る叩き目を有す。焼きは堅い須恵質。

135SX063暗灰色土出土遺物（Fig.23）

土師器

小皿a（1） 底部に糸切り痕を残す。口径9.4cm、器高1cm、底径7.4cmに復元される。

坏a（2） 底部に糸切り痕を残す。口径14cm、器高2.7cm、底径10cmに復元される。

土製品

轆羽口（3） 直径が6～7cm程度に復元されるもので、口の端部から遠ざかるにつれ色調が黒灰色、黒茶色、橙色に漸移している。

焼土塊（4） 土師質で混和物が見られない。

瓦玉（5） 須恵質の平瓦を細かく打ち欠いたもので径約2.3cmを測る。

各層出土遺物

淡灰色土出土遺物（Fig.24）

緑釉陶器

碗×皿（1、2） 胎土は明灰色を呈す硬い須恵質で、削り出し高台を持つ。釉はほとんど剥落するが、高台外側に淡い緑色味を帯びた釉が残存する。2の胎土は青灰色を呈す硬い須恵質で、明緑色の光沢のある釉が内外面に薄く掛けられる。洛西系の製品か。

灰釉陶器

壺（3） 胎土は灰白色を呈す硬い須恵質で、口縁部端部が跳ね上がった形状を成す。濁った淡灰緑色の釉が内面に薄く掛けられる。

朝鮮系無釉陶器

壺（4） 直線的に斜め上方に延びる体部を持つ。底部縁はナデの加減のせいか下方に突出する形状を成す。内面のロクロ目は顕著で外面は滑らか。焼成は胎土芯は茶褐色に、外側は黒青灰色に焼かれている。

瓦

平瓦（5～7） 斜格子の叩きを有すもので、7には格子内に十字が足される部位がある。端部処理は

淡灰色土

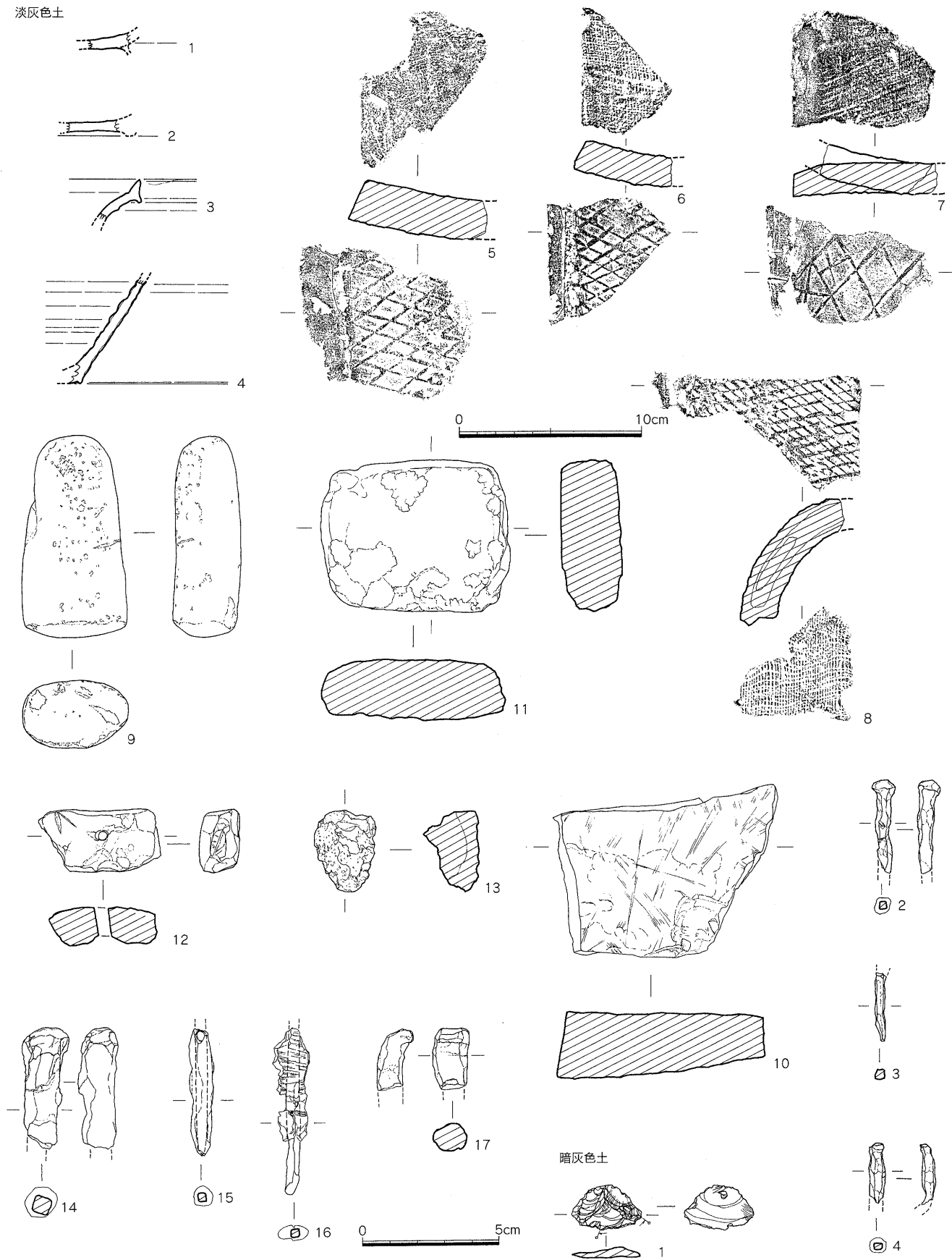


Fig.24 第135次調査 淡灰色土・暗灰色土出土遺物実測図 (1/2、1/3)

6に分割境線の切込みが見られる他はケズリにより仕上げている。焼成はすべて須恵質。

丸瓦(8) 目の細かな斜格子の叩き目を有す。小口は内側から切り込まれた跡が残り、外側は破碎したままの割れ口である。硬い須恵質を呈す。

石製品

磨り石(9) 長さ7.4cm、幅3.9cm、厚さ2.5cmの片方が若干太い棒状を成すもので、太い側の端部は平滑な凸面を成している。敲打によるものと考えられるアバタ状の小規模な窪みが点在する。安山岩製と考えられる。

砥石(10) 砂岩製の板状を呈すもので、研磨面は1面である。面は平滑だが素地の凸を残している。

用途不明石製品(11、12) 11は長さ7.0cm、幅5.5cm、厚さ2.3cmを測り、整形されて石鹼状を呈すもので、用途は不明。蛇紋岩製。12は滑石製の鍋の転用品か。0.5cm大の穿孔がある。

金属製品

鉄釘(14~17) いずれも断面形状が方形を成す鉄釘で、16には錆が付着して残った木目が残存する。17は腐食でかなり膨張しているが、折り曲げられた頭部を持つようである。

滓(13) 土器状のベースに黒色のガラス質のものが付着する。

暗灰色土出土遺物 (Fig.24)

石製品

剥片(1) 黒曜石を素材とする剥片で、背面右下に連続する微細剥離が見られる。

金属製品

鉄釘(2~4) 0.3~0.4cm角の細めの鉄釘である。2と4には折り曲げられた頭部が残る。

(5) 小結

a、主要遺構の時期

以上、遺物の出土傾向から各主要遺構の埋没した時期は以下のように考えられる。

井戸跡SE030はVII期頃の9世紀後半、同じくSE042はVII期からVIII期頃の9世紀後半、溝跡SD013、065はXII・XIII期の11世紀後半から12世紀前半以降、SD060は陶磁器区分D期以降の12世紀中頃以降、SD050,055は陶磁器区分E期以降の13世紀以降、井戸跡SE038は近世以降となる。また、その他の遺構ではSX003,007,027は12世紀前半以降、SX037は12世紀中頃以降、SX012は近世以降である。

b、遺跡の時期的変遷

主要遺構の変遷を再度整理すれば、第II期政庁が機能していた9世紀後半段階において、本地点は井戸が展開する屋敷地であったと考えられる。その後、現在の「どんかんみち」に沿う方向で切れ切れの溝が調査区中央付近を横断するように穿たれ、第III期政庁廃絶後の12世紀中頃にそれが埋没すると約2m北側に平行して穿たれた切れ切れの溝群が、鎌倉時代まで引き続き機能していたことになる。南側の古い溝SD060,065が機能していた頃には、竹や木組みの芯材を持つ塗り壁の構造物がSK043やS-5の至近に建っていたことになる。ここでは竈を用いた小規模な金属製品の加工が行われていた。

今回の調査では道路を想定する必要条件が満たされておらず、切れ切れの溝群の性格を区画施設以上に詳細に述べることはできなかった。祭事の道として「どんかんみち」が現にこの北側を通過しており、溝の経年変化に伴う北への偏向が指摘されており、今後の調査ではこの点を補う調査が望まれる。

3、第146次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市朱雀4丁目（大字太宰府字御垣野）2605-3に位置する。1993（平成5）年10月26日に専用住宅建築の問い合わせがあった。ここは西隣接地の大宰府条坊跡第135次調査で、道路遺構とみられる東西溝・連続土坑が検出されており、また、建物基礎が遺跡を破壊する可能性があることから、試掘調査を行った。調査は対象地の北半、道路に隣接する部分で実施した。開発対象面積は130m²、調査面積は36.5m²。調査は井上信正（当時、嘱託技師）・山村信榮が担当し、1993（平成5）年11月30日から行い、12月7日にほぼ終了した。なお、建物基礎部分は完掘したが、そのほかの部分は未調査のまま保存されている。遺物はパンケース1箱出土し、現在、太宰府市文化ふれあい館収蔵庫に収蔵している。

(2) 基本層位（Fig.25・27、Pla.4）

地表より真砂土が約1.05m堆積しており、その下には旧水田に関する層位が0.1～0.2mほど堆積している。この旧水田関連層を除去したところで、遺物包含層及び遺構が検出されたため、遺構面を覆う層位を暗茶色土層として遺構面検出および遺物収集を行った。調査区が狭小であったこともあり、遺構と遺物包含層の区別が十分にできなかったことも想定されるが、検出した遺構と壁面土層の関係を再整理し報告した。

(3) 検出遺構（Pla.4）

溝

146SD001（Fig.26・27、Pla.4）

調査区南半分で検出した遺構である。調査区の範囲が狭小の上、付近の遺構の切り合いが多いため、この遺構の種類を特定するのは極めて困難であるが、平面調査及び調査区東壁の土層観察も併せて東西に走行する溝と判断した。その規模については不明な点が多いが、調査区東壁では幅約1.65m、深さ0.3m程度であることがわかる。なお、SD001黒茶色土については調査区東壁の土層観察で南に水平に延びている様子が確認されるため、遺物包含層と考えられる。

146SD009（Fig.27、Pla.4）

調査区西側で検出した。ほぼ東西に走行する。検出長は約1m、幅約1m、深さ約0.1m。調査区西壁土層観察では下層のSD025の堆積土の一部のようにもみえるが、溝の東端が閉じているため別遺構とした。なお下層のS-17とは規模等類似しており、同一遺構の可能性はある。

146SD018（Fig.26・27、Pla.4）

調査区西側で検出した東西溝である。東に対してやや南に振れている。検出長4.5m、幅0.65～0.9m、深さ0.1～0.2m。SD001と切り合い関係にあり、本遺構が古い。下層のSD025と同様に走行していることから一連の遺構の可能性が認められる。ただ調査区西壁土層で不整合関係にあるようにみえるため、別遺構としている。

146SD023（Fig.26・27）

調査区東側でSD001の下層で検出した東西溝である。

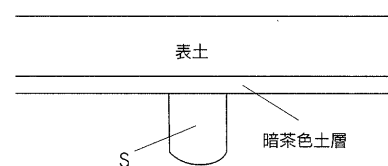
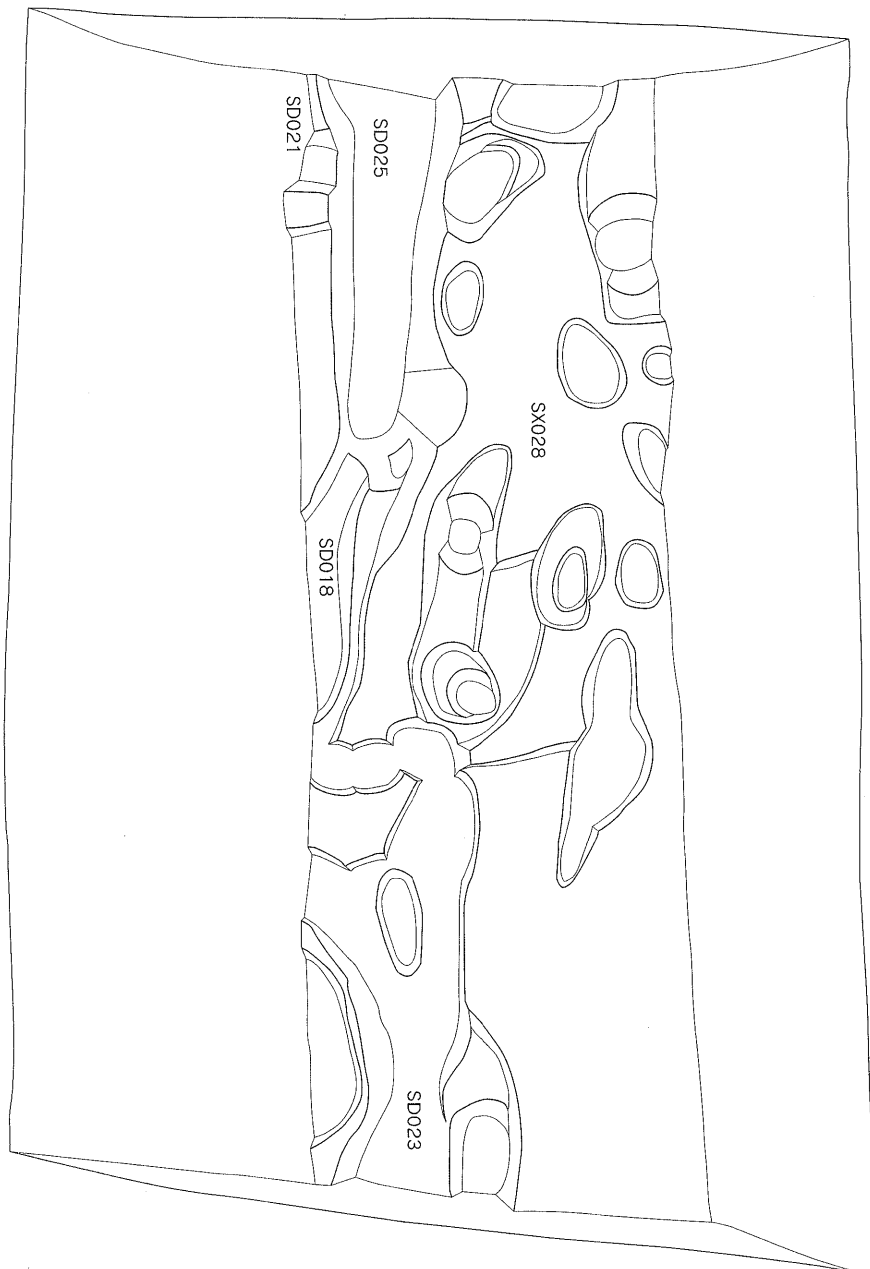


Fig.25 第146次調査土層模式図

Y-44.679



Y-44.673



X56.251



X56.255

Fig.26 第146次調査遺構全体図 (1/50)

検出長約2.5m、幅1m前後、深さは調査区東壁土層観察より最大約0.25m。調査区内で溝の西側が閉じている。西延長上にはSD025があり、同一の契機で施工された可能性が考えられる。

146SD025 (Fig.26・27、Pla.4)

調査区西側でSD001等の下層で検出した東西溝である。検出長約2.6m、幅最大0.95m、深さは調査区東壁土層観察より最大約0.5m。調査区内で溝の東側が閉じている。SD018の項で述べたように、別遺構としているものの両者は同一遺構の可能性が考えられる。

その他の遺構

146SX014

調査区東半で検出したたまり状遺構である。

146SX021 (Fig.26・27、Pla.4)

調査区西端で検出した遺構である。切り合い関係よりSD001より新しい。溝もしくは土坑とみられる。

146SX028 (Fig.26)

SX014除去後に検出した、たまり状遺構または土坑である。長軸が東西を向いていることから、今回調査で検出した東西溝群と関連した連続土坑の一つとも捉えられる。

(4) 出土遺物

溝

146SD001黒茶色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿a1 (2) 口径9.0cm、器高1.0cm、底径6.0cmを計る。底部切り離しは糸切り。板状圧痕あり。

坏a (3・4) いずれも底部が残存する破片である。3は残存高0.75cm、4は残存高1.3cm。底部切り離しはいずれも糸切り。4は板状圧痕あり。

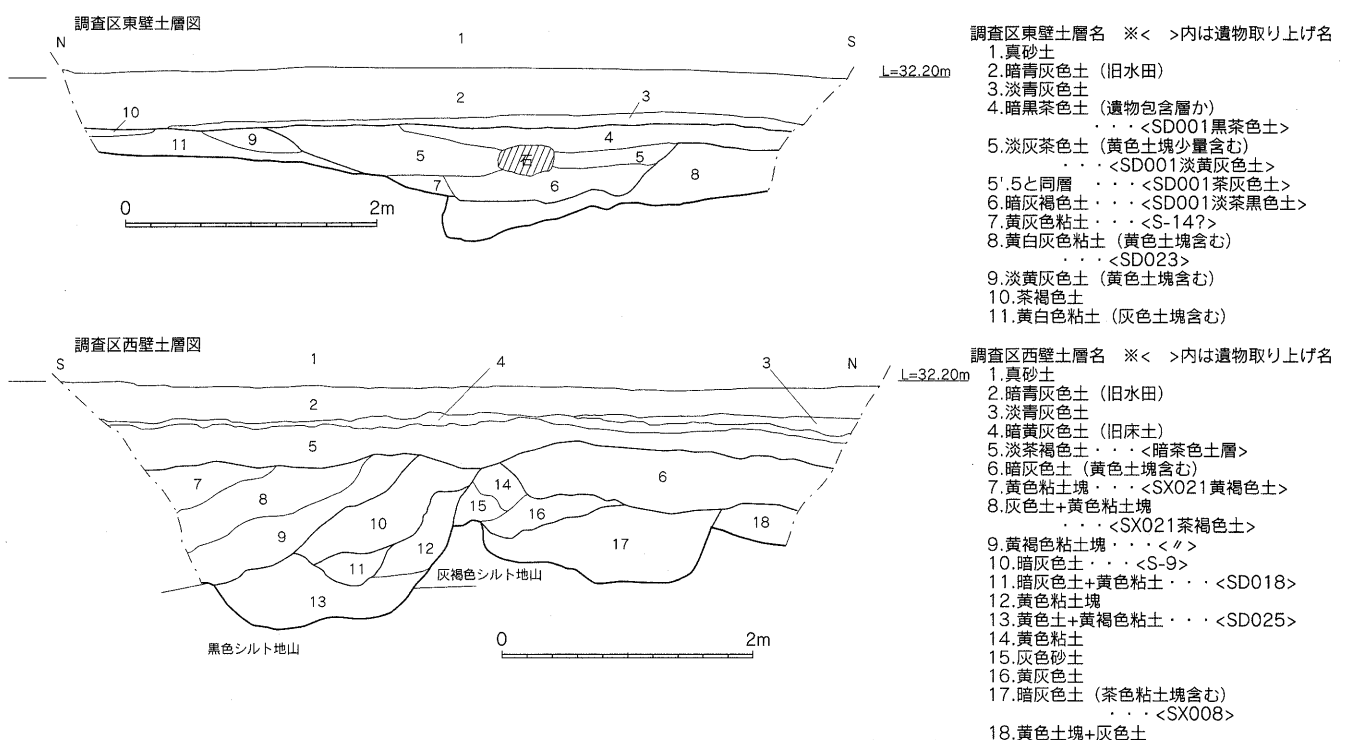


Fig.27 第146次調査区壁土層図 (1/60)

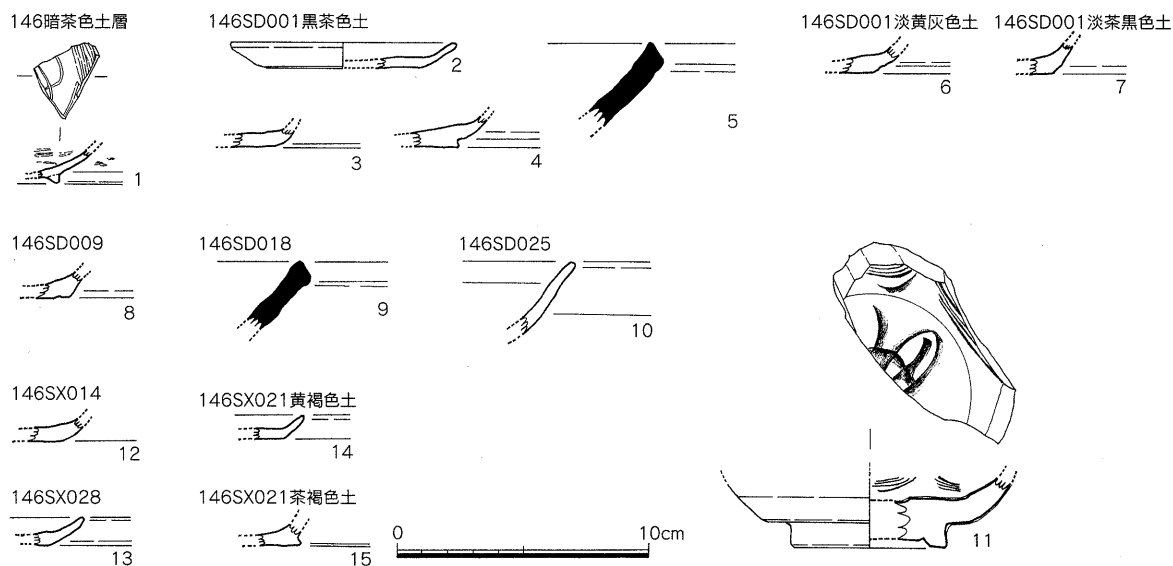


Fig.28 第146次調査出土遺物実測図 (1/3)

須恵質土器

鉢 (5) 口縁部の破片である。残存高3.3cm。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.1cm以下の黒色砂粒、白色砂粒を多く含む。焼成・還元は良好で、口縁部は青灰色、その他は明灰色を呈す。

146SD001淡黄灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

坏a (6) 底部が残存する破片である。残存高1.0cm。底部切り離しは糸切り。

146SD001淡茶黒色土出土遺物 (Fig.28)

坏a (7) 底部が残存する破片である。残存高1.2cm。底径は推定約12cm前後に復元される。底部切り離しは糸切り。

146SD009出土遺物 (Fig.28)

土師器

坏a (8) 底部が残存する破片である。残存高1.1cm。底部切り離しは糸切り。

146SD018出土遺物 (Fig.28)

須恵質土器

鉢 (9) 口縁部の破片である。残存高2.8cm。内外面とも回転ナデを施すが、内面下半は風化により調整不明。胎土は0.1cm以下の黒色砂粒、白色砂粒を多く含む。焼成・還元は良好で、青灰色を呈す。

146SD025出土遺物 (Fig.28)

土師器

丸底坏 (10) 口縁部の破片である。残存高3.0cm。

龍泉窯系青磁

碗 (11) 底部の破片である。残存高2.8cm、高台径6.2cm。I-2a類。

その他の遺構

146SX014 (146SX028) 出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿a1 (13) 口縁部の破片である。残存高1.1cm。底部切り離しは不明。SX028で出土している。

坏a (12) 底部の破片である。残存高0.9cm。底部切り離しは糸切り。SX014で出土している。

146SX021黄褐色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿a1 (14) 口縁部の破片である。残存高0.9cm。底部切り離しは糸切り。

146SX021茶褐色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

坏a (15) 底部の破片である。残存高0.9cm。底部切り離しは糸切り。

各層出土遺物

暗茶色土出土遺物 (Fig.28)

瓦器 (1) 底部が残存する破片である。残存高1.4cm。器壁は薄く、胎土も精良である。内外面に細かなミガキを施し、内面見込みのミガキは螺旋暗文状である。畿内系の瓦器である。

(5) 小結

調査区が狭小であったため、遺構の全貌を十分に捉えることができなかったが、総じてみると、12世紀代の東西溝群を検出したといえる。

ここは太宰府天満宮の神幸式で知られる「どんかん道」が東西に走行している場所の南脇にあり、平安時代以来つづく道路遺構が付近で検出されると期待されていたところであり、西隣の大宰府条坊跡第135次調査でも平安時代後期の東西溝群を検出している。こうしたことから検出した東西溝は一連の道路関連遺構と考えられる。本調査区だけで十分なことを述べることはできないが、周辺調査とあわせることで新たな知見が得られるものと期待したい。

4、第148次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市朱雀5丁目2547-14である。観世区画整理地内における専用住宅立替に伴って、道路のセットバック等の区画整理事業関連工事が行われることが、担当課である区画整理課（以下「担当課」と記載）より協議依頼が持ち込まれた。対象地は、鏡山推定条坊案における左郭8条2坊にあたり、敷地南面に通称「どんかん道」が通っていることから、学説史上条路が検出されることが予想された。このことから担当課と協議した結果、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査期間は1994（平成6）年1月27日から1994（平成6）年2月8日で、対象面積180m²、調査面積は50m²を測る。調査は中島恒次郎が行った。

(2) 基本層位 (Fig.29)

現地表面より約0.5mが宅地造成土によって構成され、その下位に遺構が確認できた。遺構面は2面確認でき、遺構1面から下位に0.2mほどの堆積土があり、その下位に2面目が確認できている。

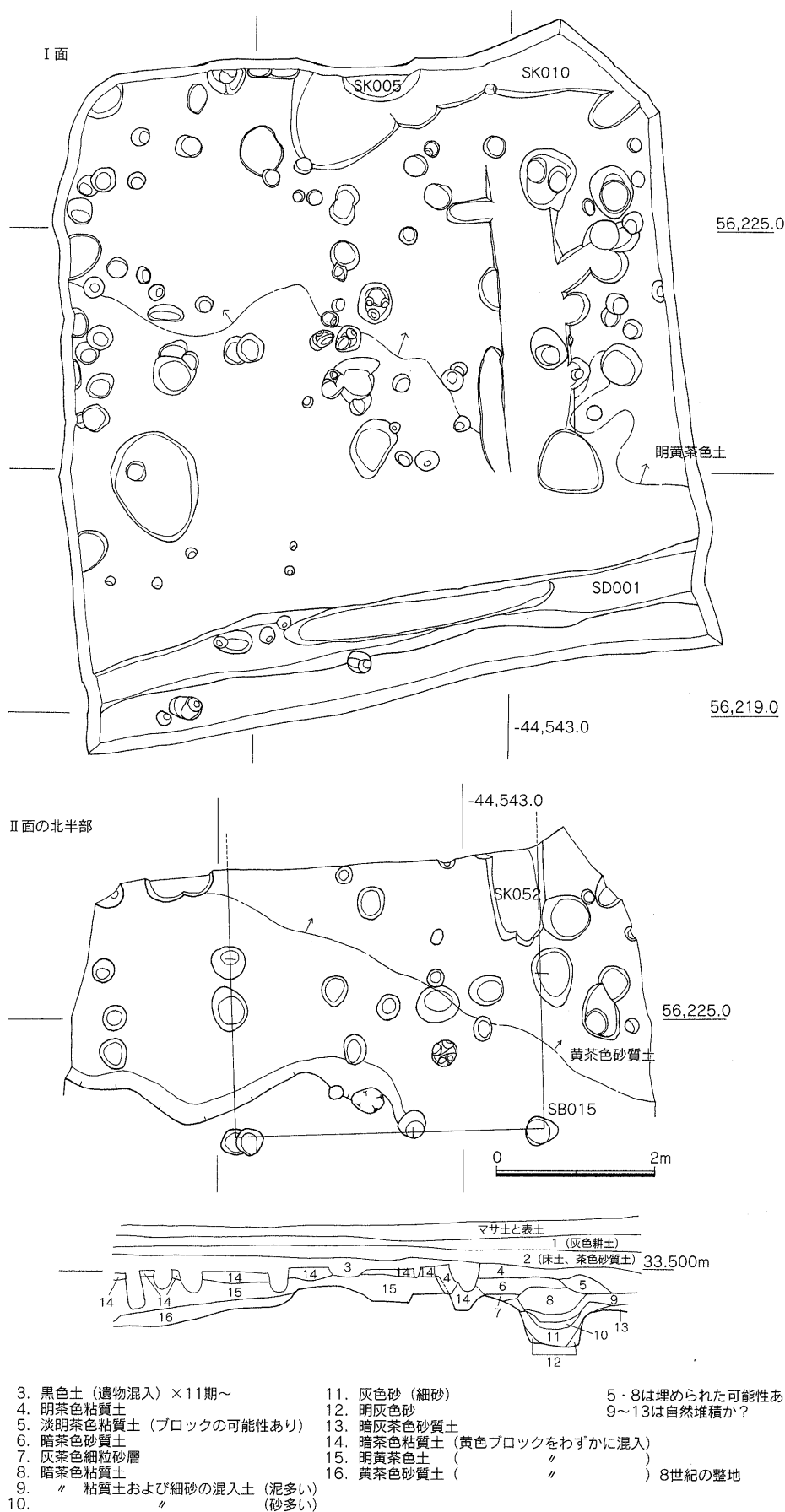


Fig.29 第148次調査遺構全体図・東壁土層実測図 (1/80)

(3) 検出遺構 (Pla.5)

検出できた遺構は、東西溝、掘立柱建物、土坑であり、東西溝についてはその埋没時期などから条路と考えられる。また調査区の北東部には黄茶色砂質土が確認できる。この土層の性格については、人為性を説明するブロック土が混入していることから、人為的な整地層と考えられる (Fig.29)。あとは、性格不明の小穴が多数検出できた。

掘立柱建物

148SB015 (Fig.29)

調査区北半部に確認できた建物で、調査区北側へ展開するものと考えられるため、全体規模については判然としない。調査区内の状況からは、南北棟になるものと推定される。各柱間は、桁行2.18m (小尺約7尺)、梁行1.80・2.23m (小尺約6尺・7.5尺) を測る (計測点は柱穴任意中点)。梁行のうち南西柱間がやや広い。

土坑

148SK005 (CD-27)

調査区北端において検出した土坑で、全形は不明であるが、計測可能な箇所 の最長部分は1.7m、深さは0.2mをそれぞれ測る。I面にて検出。

148SK010

調査区北東部で検出した浅い土坑で、148SK005が介在しているが148SK039と同一のものと考えられる。なお土坑としたが、遺構規模が浅いことから凹みへの堆積層の可能性も残る。

148SK052

調査区北東部において検出した土坑で、調査区北側へのびていることから全形については判然としない。南北に長く検出長軸長1.2m、短軸長0.7mを測り、深さは0.1mであった。II面にて検出。

溝

148SD001 (Pla.5、CD-28・29)

調査区南端に検出した東西溝であり、溝主軸が調査区東へゆくにつれて北に隔たっている。検出全長7.5m、幅0.7mを測り、残りの良いところで、約0.5mの深さがあった。溝短軸方向の断面形状は、台形を呈しており、溝内の堆積土の観察では溝両側から自然に堆積し埋没していったものと考えられる。ただし、溝内の堆積土には砂層ないしは砂混じりの土層で、上方細粒化傾向にあることから、溝が管理されなくなった一時期から急速に埋没していったものと考えられる。なおその上位にある5・8層は粘質土がブロック状に堆積していることから、溝が自然堆積した後、人為的に整地された可能性もある。

政庁南門中点からの距離は、溝東端任意中点で南へ約485mを測り、小尺計算で約1640尺 (1小尺=0.296m) を測り、溝西端任意中点で約486mを測り、小尺計算で約1645尺 (1小尺=0.296m) を測る。条路北側側溝とするには傾斜角度が大きく、都での事例を考慮すると不適であるかのように解することができる。したがって、ここでは、遺構情報の提示にとどめ今後の資料増加によって検討する。

(4) 出土遺物

出土遺物の多くは、平安時代中期から後期に位置づけられる遺物が多くを占めており、当該時期に形成ないしは埋没を想定するに足る遺構であることがわかる。しかし、少数であるが、古墳時代前期に位置づけられる土器が混入する状況で出土しており、周辺において古墳時代前期の遺構が埋没している可能性を示唆しているものと考えられる。また、搬入品として畿内産土師器が出土している。

掘立柱建物

148SB015出土遺物

調査時に掘立柱建物という認識をしていなかったこともあり、単独での遺物取り上げを行っていない。報告時で認識した148SB015の柱穴を含む遺構は、以下のものになる。148SX007、148SX011、148SX018、148SX034、148SX043である。

土坑

148SK005出土遺物 (Fig.30、Pla.12・13)

土師器

小皿a1 (4・5) 口径8.8cm～9.1cmを測り、やや底部が押し出しによって突出しており、4は回転糸切り、5は回転ヘラ切りによって底部切り離し処理がなされている。

丸底坏a (6～8) 口径14.4cm～14.8cmを測り、押し出しによる底部丸底化は図られているものの、6は相対的に他のものより平底に近い形状をとる。内面にはいずれも「コテあて」とされるミガキbによる仕上げが観察できる。底部切り離し処理は、いずれも回転糸切りである。

148SK010出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿a1 (9) 小破片で口径を推定するには至っていない。底部切り離し処理は、回転糸切り。

坏a (10) 直線的に口縁部へ至るもので、丸底化が消失し坏a化した時期のものと考えられる。底部切り離しは、回転糸切り。

灰釉陶器

碗c (11) 高台のみの破片で皿である可能性も残る。見込み部分が研磨されており、朱が見込みおよび破片化した箇所にも付着していることから、欠損後にも朱塗り潰し行為がなされていたものと判断できる。ただし、遺構での出土状況から先の土師器との共時性に関しては定かではない。

溝

148SD001出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿a1 (1・2) 小破片であり口径を明確に推定できなかった。形態上二者の区別はできないが、底部切り離し処理が異なり、1が回転糸切り、2が回転ヘラ切りによって処理されている。

坏 (3) 口縁部から体部の破片で、口径の推定は困難であった。内面には放射状一段暗文が施され、外面は手持ちによる横方向のヘラ磨きによって仕上げられている。破片化していることもあり、手持ち成形であるとする根拠が得がたいが、暗文の施文、口縁端部の推定される形状から畿内産土師器と考えられる。

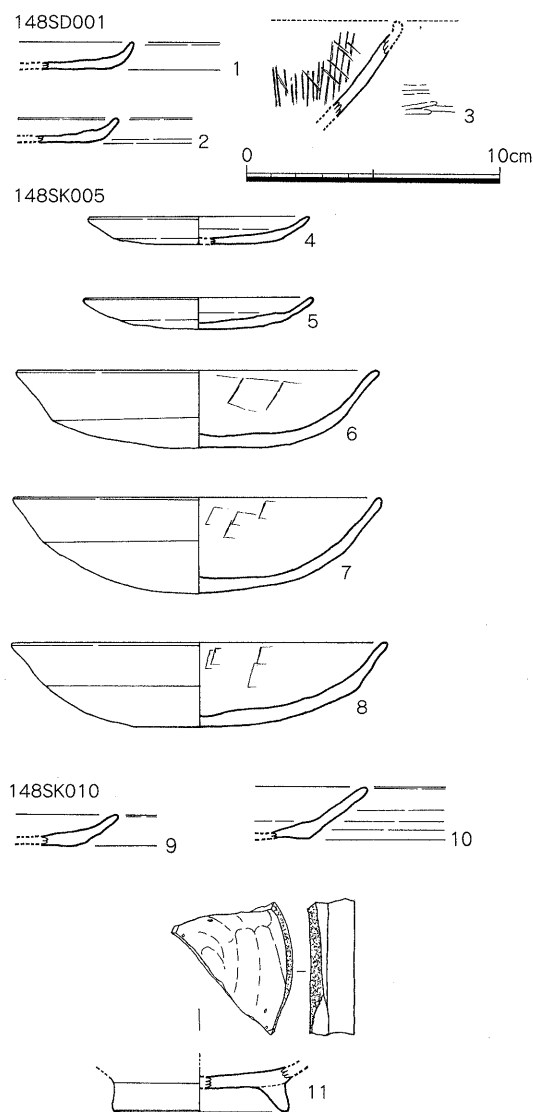


Fig.30 第148次調査溝・土坑
出土遺物実測図 (1/3)

その他の遺構

その他の遺構は、先に遺構解説の項にて記載したように、小穴および凹み状のものが該当しており、出土遺物としても小破片が主な出土遺物である。実測図として掲載できなかったものは、すべて出土遺物一覧にて記載しているが、古式土師器、製塩土器（焼塩壺・煎熬土器）、滑石破片などが出土している。

148SX016出土遺物 (Fig.31)

金属製品

釘（1～4） いずれも欠損しているもので、全長が計測できるものではなかった。木質状の付着物が観察され、木への打ち込みが想定されるが、出土遺構が小穴であり建築用として使用されたものと想定できる。

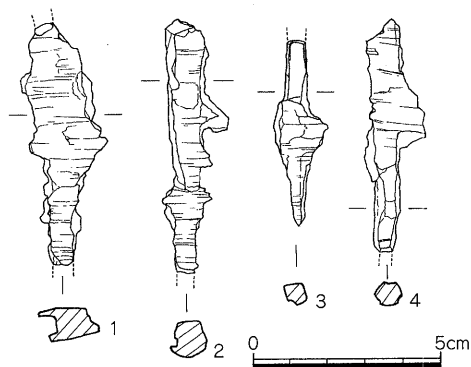


Fig.31 148SX016 出土遺物
実測図（1/2）

148SX018出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a1（5） 破片資料で、口径の推定は困難であった。底部切り離し処理は、磨耗のため不明。口縁端部および底部と体部境界部分の外面が暗茶褐色に変色している。

148SX019出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a1（6・7） 破片資料で、口径の推定は困難なものであった。底部切り離し処理は、6が回転糸切りで、7は磨耗のため不明。

丸椀（8） 全体形状の傾きから丸底坏ではなく丸椀と推定した。口縁端部処理のため、口縁端部外面がやや凹んでいる。

148SX033出土遺物 (Fig.32)

土師器

丸底坏（9） 口縁部の破片資料で、全体形状の傾きから丸底坏と判断した。内面には「コテあて」と考えられるミガキbによって仕上げられた痕跡が観察できる。

椀c2（10） 高台から底部にかけての破片資料で、高台脇の形状から椀c2と判断される。内外面には回転ナデ痕跡が観察できる。

148SX048出土遺物 (Fig.32)

土師器

椀×坏（12） 直線的な体部形態へ移行する可能性もあり、想定分類に幅をもたせた。内外面ともに回転ナデによって仕上げる。

坏（13） 直線的な体部形態を有し、色調は淡褐橙色を内外面ともに呈している。

灰釉陶器

皿（11） 全形が判然としないが、傾きから皿と判断される。内外面ともに淡緑灰色の薄層の釉が観察できる。

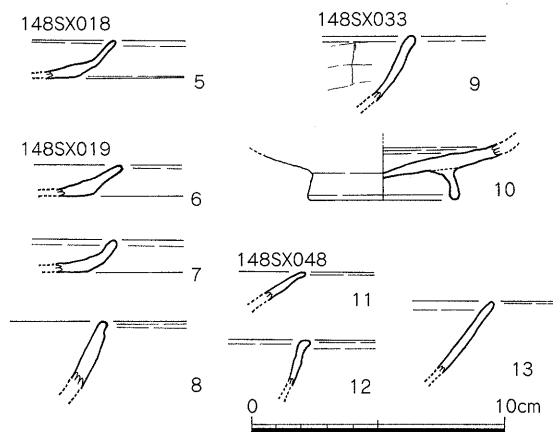


Fig.32 第148次調査その他の遺構
出土遺物実測図（1/3）

各層出土遺物

茶褐色土出土遺物 (Fig.33)

I面遺構検出時の遺物で、遺物出土一覧に記載とおりであるが、須恵器として篠産のこね鉢が出土している。堆積土中の遺物から推定される堆積時期下限は、平安時代後期にあると考えられる。

須恵器

こね鉢 (1) 口縁部から体部上位の破片資料で、口縁端部を丸く肥厚させている。焼成・還元ともに良好で、胎土中には暗茶褐色の微粒子を多く含んでいる。形状および胎土特徴から篠産須恵器と判断される。

茶色土出土遺物 (Fig.33)

II面遺構検出時の遺物で、遺物出土一覧に記載のとおりであるが、特筆すべきものとして、畿内産須恵器で通称壺gと呼称される底部糸切り処理のものが出土している。この土層の堆積時期下限は、茶褐色土同様に平安時代後期と考えられる。ただし上位遺構からの混入品と考えられる鎌倉期の土師器坏aが出土している。また、周辺における生産行為を想定させる轆羽口破片が出土している。

須恵器

小壺 (2) 奈良文化財研究所分類の壺gに該当すると考えられ、底部切り離し処理は回転糸切りによって処理されている。内面には「回転ナデ」による凹凸が明瞭に残り、胎土中に黒灰色の微粒子を少量含んでいる。畿内からの搬入品と考えられる。

瓦

平瓦 (3) 「佐」と判読できる文字瓦で、格子目が不規則であることから、九州歴史資料館分類の平瓦II-5類に該当すると考えられる。

淡茶色土出土遺物 (Fig.33)

調査区北東部に確認した堆積土で、遺構II面形成時の土層である。堆積土からは古くは古式土師器の器台が出土し、黒色土器など平安時代の遺物が出土している。調査時は奈良時代後半に形成された堆積層と考えていたが、出土遺物からは平安時代中頃が形成時期であると考えた方が蓋然性は高いものと考えられる。

瓦

平瓦 (4) 先の茶色土出土の平瓦と同じく、「佐」と判読できる文字と不規則な格子叩き痕跡が観察できることから、九州歴史資料館分類の平瓦II-5類に該当するものと考えられる。

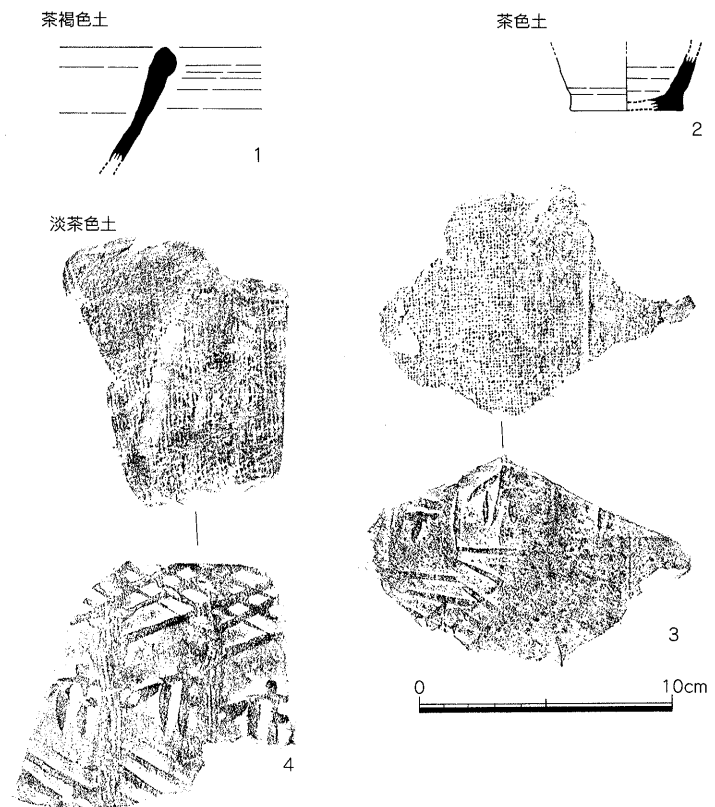


Fig.33 第148次調査土層出土遺物実測図 (1/3)

(5) 小結

政庁Ⅲ期施工条坊の残存形態として想定されている、通称「どんかん道」沿いの調査であり（狭川、1990）、検証と実態解明を含む調査目的があった。調査の結果、現況道路に沿う溝（148SD001）が確認でき、推定条路の北側側溝の可能性を示唆する成果であった。形成時期は判然としなかったが、溝堆積土の観察からは、時間経過とともに次第に埋没していった過程が読み取れる。埋没時期は平安時代後期にあたり、狭川が導きだした政庁Ⅲ期施工条坊の廃絶時期に符合する。したがって、今次調査において検出した溝（148SD001）は先に記した条路北側側溝の可能性が高いことになる。

一方、道路、境界施設などに規制されると考えられる宅地内施設に関しては、掘立柱建物の建造方向が正確には合致していない。溝（148SD001）が著しく東へゆくにつれて北上がりを示すのに対して、建物はその上がり方が緩やかである。建物の時期は建造ならびに廃絶時期が判然とせず、定かなことは明らかにできないが、下位にある淡茶色土の堆積時期が平安時代中期以降と考えられることから、政庁Ⅲ期施工条坊が敷設される時期を前後するものと考えられ、建物建造時期も可能性として、平安時代中期以降に建てられたものとも考えることも可能である。しかし、境界施設である道路方向と整合しないことを考えると、政庁Ⅲ期施工条坊が敷設される以前の建築の可能性が高いものと考えられ、政庁Ⅲ期施工時の大宰府の状況として、既存の建物は残したまま施工された可能性を示唆しており、道路施工と宅地内諸施設のあり方に関して一律な解釈は困難であるという成果を得た。今後は政庁Ⅱ期施工条坊と宅地内諸施設との関係と併せて、施工行為の理念の差を考え、さらには施工背景にある歴史的な差を読み取る諸作業を行ってゆく必要がある。

【引用文献】

狭川真一（1990）「大宰府条坊の復原」『条里制研究 第6号』pp.69～85

5、第171次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀5丁目2528（旧大字太宰府字鼓石）で、1993（平成5）年11月に対象地において造成・住宅建築工事計画の届出が、地権者よりあったことから、確認調査を同年12月2日に実施した。その結果当時の地表面から約1.2mの深さから遺構が確認され、工事に先立つ記録保存が必要となったため、発掘調査を1995（平成7）年8月22日から9月22日に実施した。開発対象面積は1,300m²、調査面積は336m²を測る。調査は山村信榮が行った。

(2) 基本層位（Fig.35）

調査地は、東西に延びる御笠川の自然堤防の南縁にあたる部位と考えられ、西側は黄色粘土を基調とする安定地盤があり、東側と南側は河川堆積によるとみられる砂礫の堆積層がある。土層堆積は表面の耕作土直下は区画整理事業による花崗岩風化土（真砂土）盛土層で、東側では褐色系の耕作土が薄く幾層にも折り重なっている様子が見られた。南側ではその耕作土のレベルが河川堆積による砂と粘質土層に入れ替わっている。遺構はこれらを除去した下から検出されている。

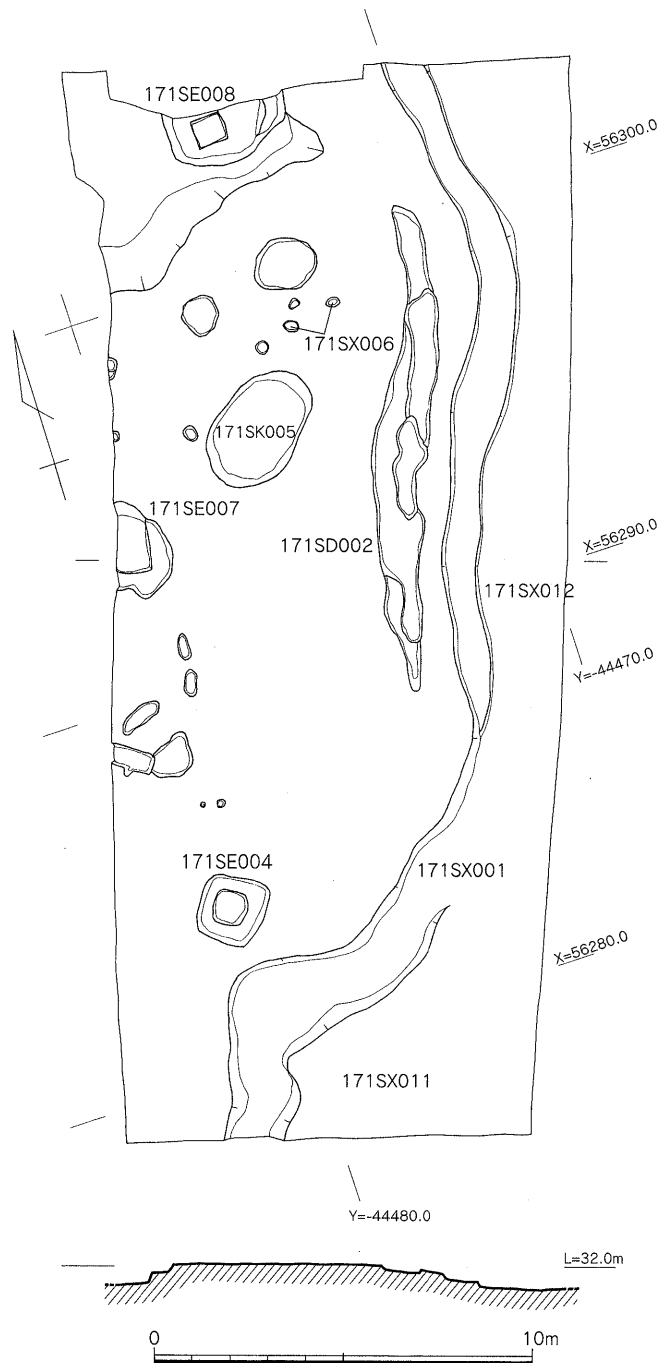


Fig.34 第171次調査遺構全体図（1/200）

(3) 検出遺構（Pla.7）

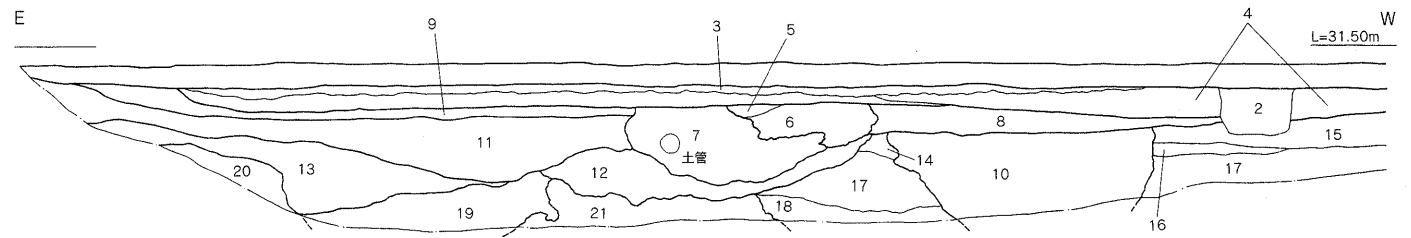
遺構は調査区中央から西側の高位の側で井戸、土坑、溝などが発見された。井戸の深さが0.6～1m程度の残存状況であることから、ピットなどの浅い遺構は削平によって消失した可能性が考えられる。

井戸

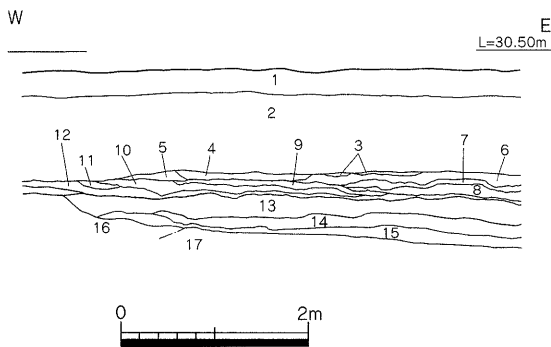
171SE004（Fig.36、CD-38）

調査区南西部で隅丸方形のプランで検出したもので、黒灰色土を除去した段階で黒色土の台形状の落ち込みが見られ、それを掘り下げた下位で一辺約0.8mの方形の板組の井戸枠が確認された。枠の裏込めは黒色と黄色を呈するブロック状の粘土からなる。出土遺物から平安時代後期の所産と考えられる。

調査区南壁土層図



調査区東側北壁土層図



〈北壁土層土色名〉

1. 暗灰色土…現耕土
2. 黄褐色土…真砂土盛土
3. 青灰色土…盛土前耕土
4. 暗青灰色土…
5. 暗青褐色土…
6. 灰褐色土…耕土?
7. 茶褐色土…床土?
8. 灰褐色土…耕土?
9. 茶褐色土…床土?
10. 灰褐色土…耕土?
11. 灰褐色土 (粗砂入)
12. 茶褐色土…耕土?
13. 暗灰色土…耕土?
14. 暗灰褐色土
15. 灰色土と白色粗砂 (ラミナ入) の互層
16. 白色粗砂
17. 灰白色粗砂と黄灰色粘土の互層

〈南壁土層土色名〉

1. 暗灰色土…現耕作土
2. カクラン
3. 白灰色砂礫層
4. 淡黄色砂土ブロック+灰色土ブロック
5. 灰色土
6. 白色細砂
7. 灰色粘質土
8. 茶褐色粗砂+灰色土ラミナ
9. 茶褐色粗砂ラミナ
10. 淡茶灰色土 (弱粘)
11. 灰色土+黒黄色粘土ブロック
12. 灰色粗砂
13. 灰色粘土ブロック
14. 灰色土 (粗砂入)
15. 淡赤褐色土
16. 暗灰褐色土
17. 白色粗砂+灰褐色粗砂 (互層)
18. 白色粗砂
19. 白色砂
20. 黄褐色土
21. 灰色粘質土

Fig.35 第171次調査区南北壁土層図 (1/80)

171SE007 (Fig.36, CD-39)

調査区南中央の壁際で検出したもので、黒灰色土の上層埋土を除去した段階で、黒灰色と黄色を呈するブロック状の粘土からなる方形の落ち込みが見られた。本来はこれが方形の井戸枠となっていたものと考えられる。枠の裏込めは黄色粘土ブロックからなる。出土遺物から平安時代後期の所産と考えられる。

171SE008 (Fig.36, CD-40)

調査区北西部の壁際で検出したもので、茶褐色、暗灰色土を除去した段階で黒色砂の方形の落ち込みが見られ、それを掘り下げると一辺約0.8mの方形の板組の井戸枠が確認された。出土遺物から平安時代前期の所産と考えられる。

土坑

171SK005 (Fig.36, CD-41)

調査区中央部で楕円形のプランで検出したもので、埋土は黒灰色土である。長さ3.4m、幅2.0m、深さ1.0mを測る。遺物が出土せず、形成時期は不明である。

溝

171SD002 (Fig.37, CD-42)

調査区北東部の台地の落ち際で検出したもので、茶褐色土で埋没する。落ちに沿う南北方向で、本遺構の東下に広がる水田土壌と考えられるSX001と土質が近似することから有機的な関連が想定され、灌漑に伴う溝の可能性がある。出土遺物から近世以降の可能性がある。

その他の遺構

171SX001

調査区東部の台地の落ち際、SD002の西側で検出したもので、茶褐色土からなる。水平に同系統色

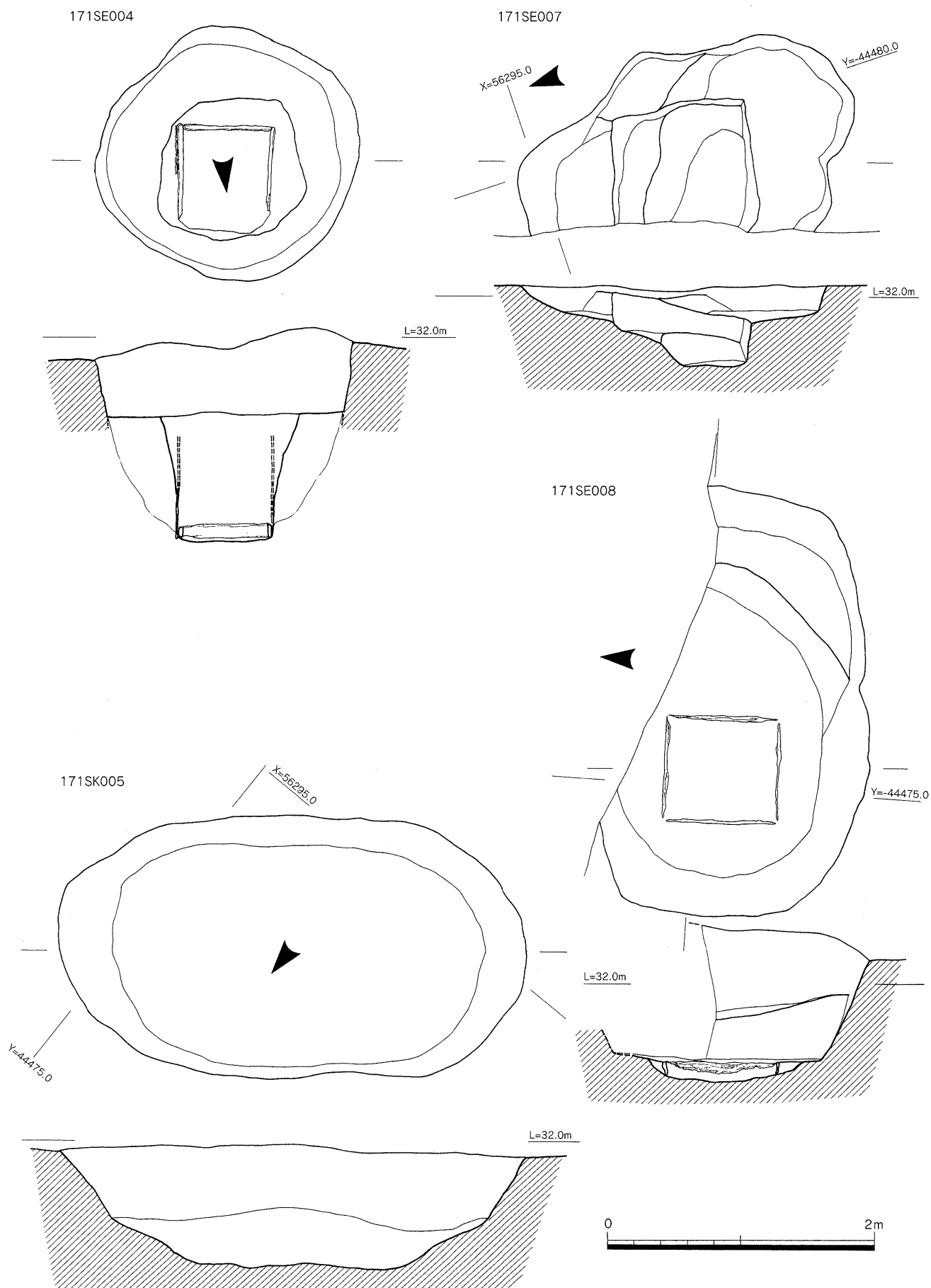


Fig.36 第171次調査井戸・土坑実測図 (1/40)

の土壌が幾重かに堆積していることから、水田土壌の可能性が考えられる。調査時点では龍泉窯系青磁碗Ⅰ類片が出土した記録があることから中世以降の所産と見られる。

171SX003

調査区北西部の台地の落ち際にある溜まり状遺構で、黒色土と黄土ブロックの混和土が堆積していた。下層でSE008が検出された。

171SX009

調査区北西部の台地の落ち際にある溜まり状遺構で、黒色粘土ブロックと暗灰色土の混和土が堆積していた。SX001に切られる。下層でSX011が検出された。

171SX011・012

調査区東部の台地の落ち下、SX001の下層で検出された流紋を伴う粗い砂の堆積層で、河川堆積層ないしその氾濫によって形成されたものと考えられる。溝のような状況でなく土壌は広がるように堆積していた。平安時代後期以降の所産と考えられる。

(4) 出土遺物

井戸

171SE004黒色土出土遺物 (Fig.38、Pla.13)

土師器

坏d (1) 外底部から胴部に回転ヘラケズリが施される。内面にはミガキが見られない。

丸底坏a (2) 底部から体部にかけてのカーブは滑らかで、厚みは底部よりも若干口縁部付近が厚い。

小皿a (3) 底部はヘラ切りで、口縁部端部が若干開き気味である。

小皿c (4) 皿の高さに対してやや丈高で開き気味の高台が付く。

黒色土器

碗c (5) 内外面に手持ちのミガキが残る。外面の屈曲部にごく細い横沈線が見られる。

瓦

丸瓦 (6) 焼きは土師質で「平井」銘のタタキ痕跡を持つ。

171SE004出土遺物 (Fig.38、Pla.13)

土師器

丸底坏a (1~3) 指押さえにより体部と底部の境が丸みを持つ形状であるが、1は底部の平坦な形状を残している。3は碗cの可能性もある。

小皿a (4) 底部はヘラ切りによる切り離しで、口縁部は直線的な形状を成す。

土師質土器

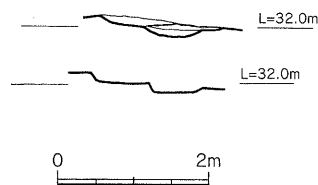
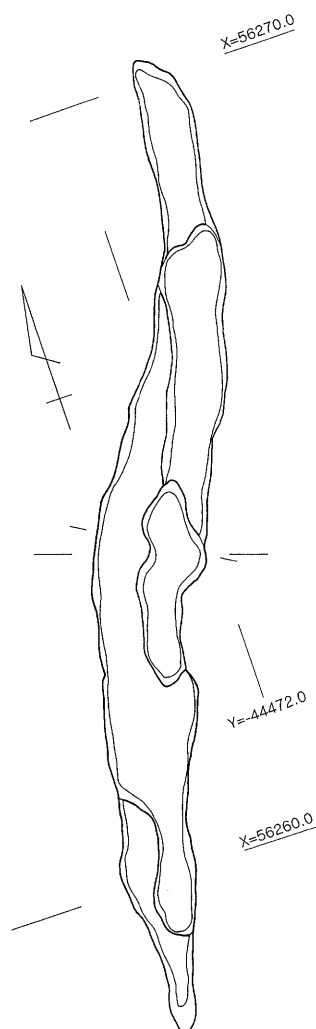
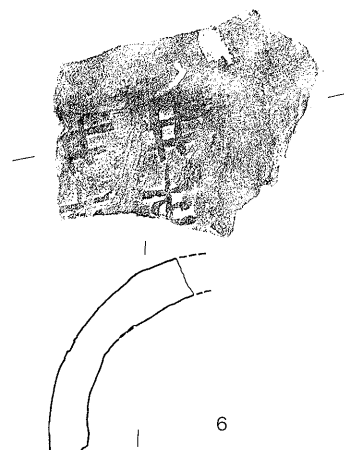
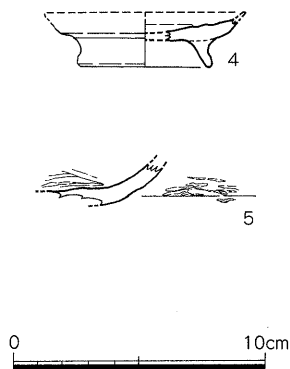
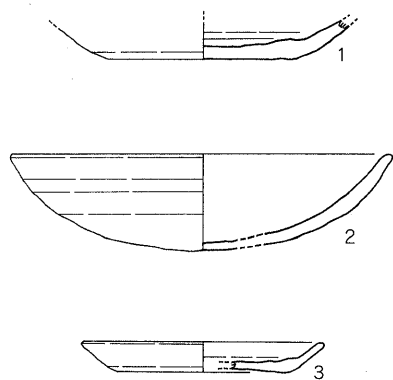
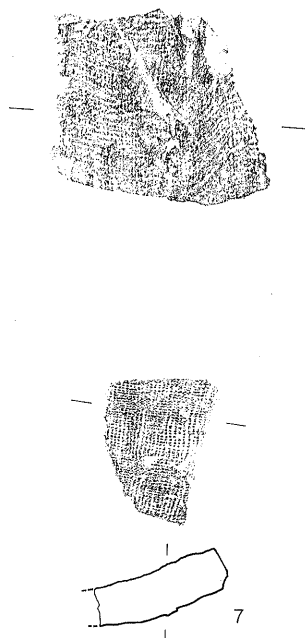
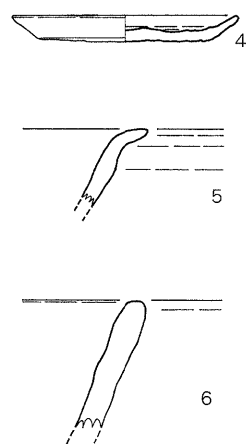
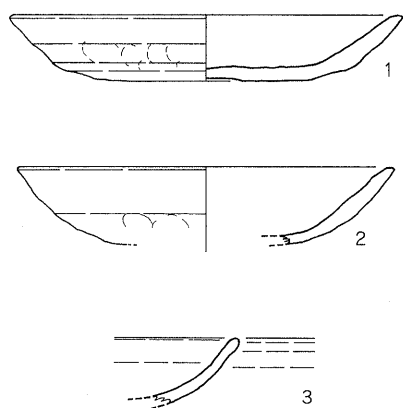


Fig.37 171SD002 実測図 (1/100)

171SE004黒色土



171SE004



171SE007黒灰色土

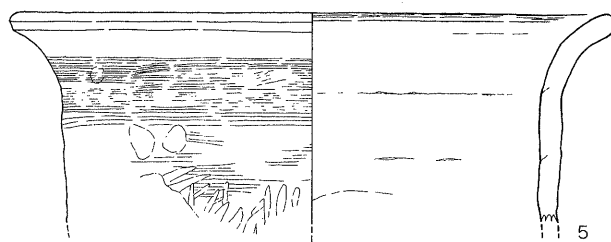
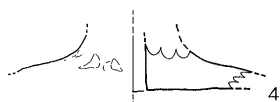
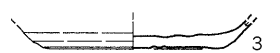
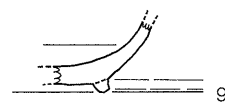
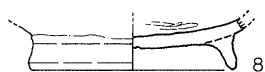
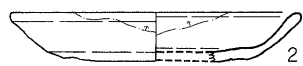
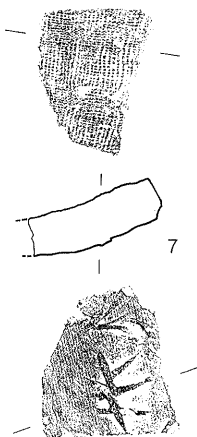
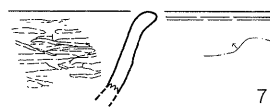
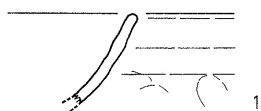
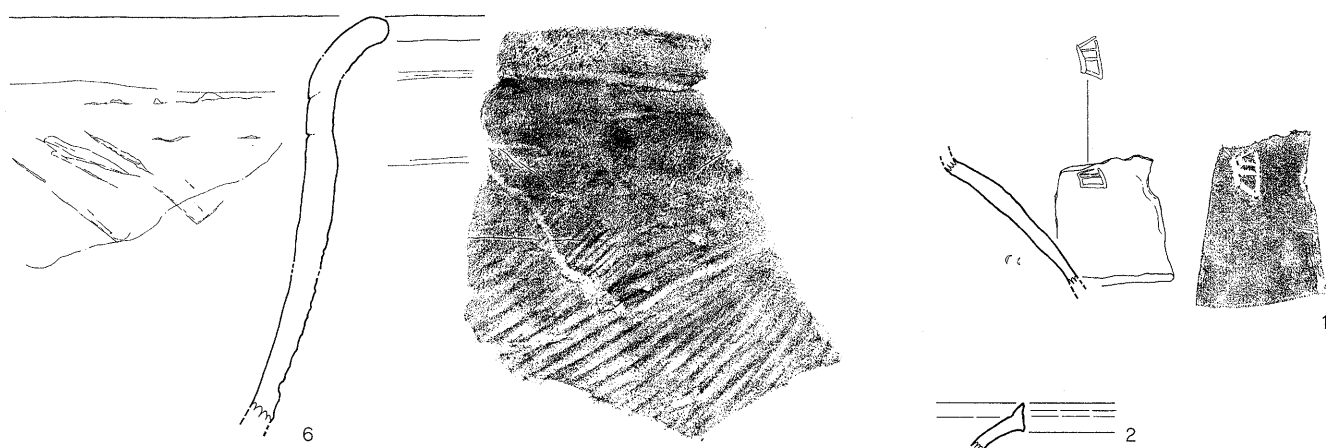


Fig.38 171SE004・007 出土遺物実測図 (1/3)

171SE007黒灰色土

171SE007黒灰色土+黄色土ブロック



171SE008

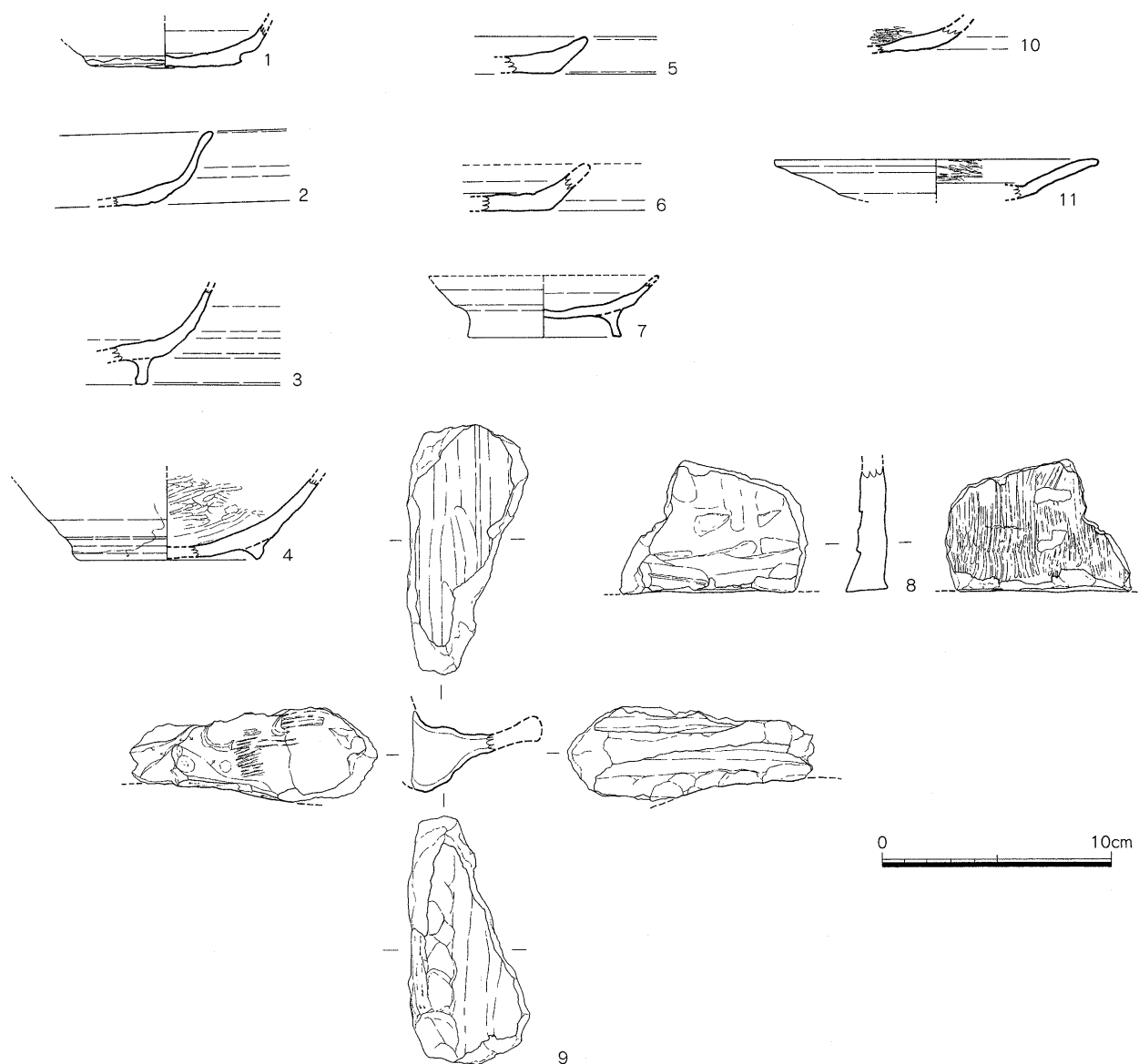


Fig.39 171SE007・008 出土遺物実測図 (1/3)

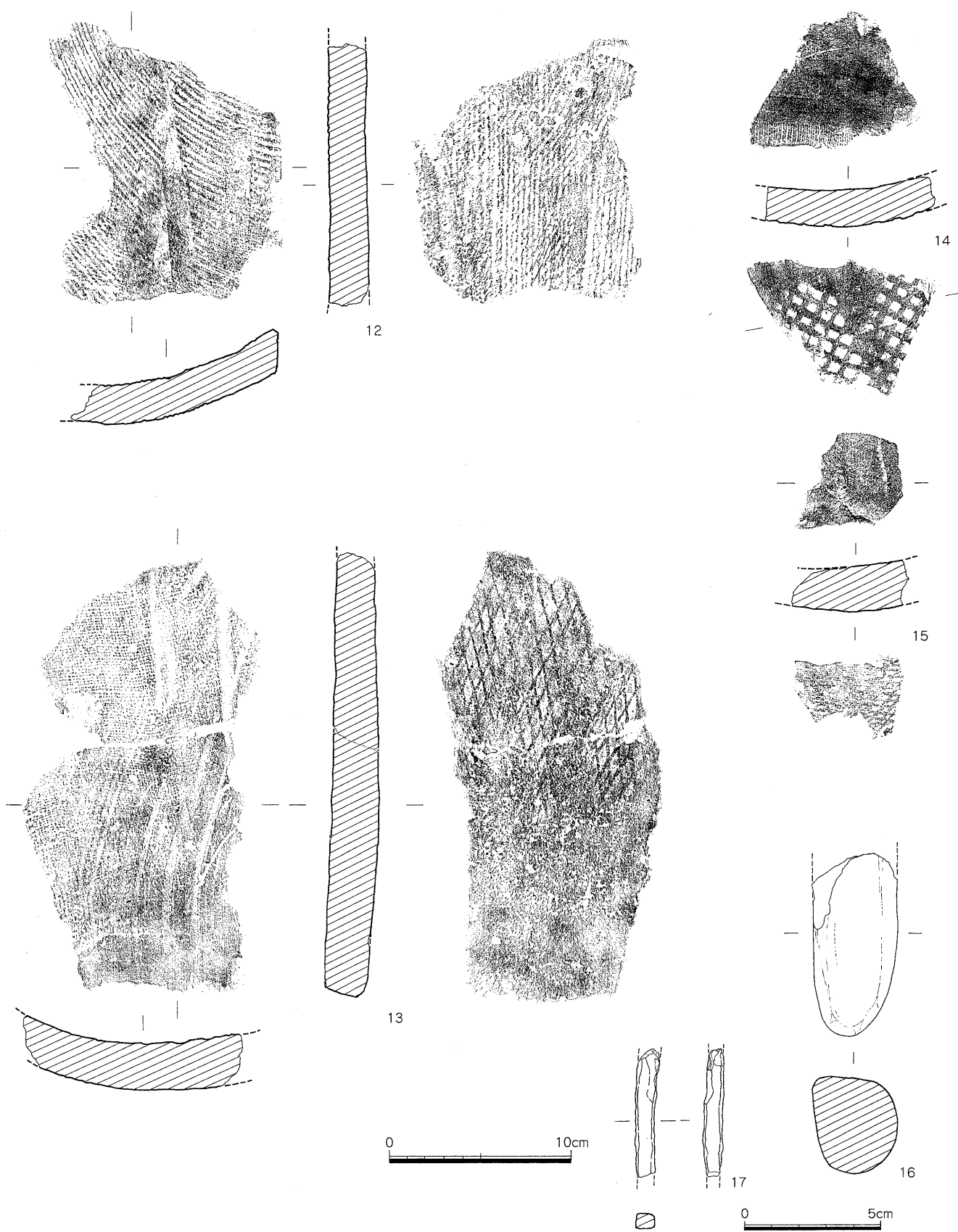


Fig.40 171SE008 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

鉢（5、6） 5は嘴状に外に屈曲する形状を成す。6は体部より先端にかけ厚みを持っている。

瓦

平瓦（7） 焼きは須恵質である。全容がわからないが模様は文字である可能性がある。

171SE007黒灰色土出土遺物（Fig.38・39、Pla.13）

土師器

坏（1） 胴部下半に指押さへの痕跡が残る。丸底になるものと思われる。

小皿a（2、3） 2は口縁部端部が厚い形状を成し、双方ともに底部に板状圧痕が残る。2は口縁部の一部に煤が付着しており、3は内底部に黒色の有機質の皮膜が付着している。

器台（4） 坏と筒状部の屈曲部位と思われ、外面には指押さえが顕著に残る。

甕b（5、6） 5は直立する胴部にゆるいカーブを持つ口縁部が連なる。内面はナデが施され、外面は口縁部下には横方向のハケ状工具によるナデが、その下位にはタタキが施される。外面下位に煤が付着している。6は内面に板状工具の小口が見られ、外面下位に斜め方向のタタキが残される。内面上位に煤が付着する。

黒色土器

碗（7） 口縁部端部が外反する形状を成し、内面に手持ちのミガキcが横方向に施される。A類。

碗c（8） ゆるいカーブを持つ底部を有す。内面にはミガキcが施され、外面高台内は板状圧痕が見られる。B類。

灰釉陶器

碗（9） 短く外に開き気味の高台が付くもので内面に釉が残る。

171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物（Fig.39、Pla.13）

越州窯系青磁

水注×耳壺（1） 胴部上位の破片で、肩の部分に耳か把手が付けられていた痕跡が胎土の盛り上がりや釉の流れからわかる。その脇に横方向で漢字の「四」が焼成・施釉前にヘラ書きされる。胎土は混入物を含まず、淡い橙色灰色を呈し、焼きは陶器質であり、釉は光沢のあるくすんだオリーブ色を呈す。中国での伝世品などには漢詩や紀年銘を刻んだ例が知られるが、大宰府では出土例を聞かない。

灰釉陶器

壺（2） 硬い須恵質の胎土を持つ。ラッパ状に開く口縁部片で、端部は跳ね上げられる。内面に薄く淡い緑灰色を呈す釉が施される。外面も透明の皮膜状の光沢を持つ。

171SE008出土遺物（Fig.39・40、Pla.13）

土師器

坏a（1） 1はヘラによる底部切り離しが段状に残されているもので、2は底部から体部へは緩いカーブを成して移行している。

碗c（3、4） 3はヨコナデで仕上げられ、丈高の高台が取り付け付く。4は断面形が三角を呈し、内面には手持ちのミガキcが残される。体部は開き気味に立ち上がる。

皿a（5、6） 肉厚で短く立ち上る口縁部を持つ。

皿c（7） 底部はヘラ切り後に板状圧痕跡が見られ、高台は開き気味の直線的な形状を成す。

移動式竈（8、9） 8は裾部の小片で外面には縦方向のハケ、内面には粗いケズリの上にナデが施される。9は焚き口の鏝部分と考えられ、本体から剥離した面にはハケ状工具の条線が、鏝の部位はナデが、竈内側にあたる側にはケズリが残されている。

黒色土器

坏（10、11） 内面に手持ちのミガキ^cを持つもので、10は底部にはヘラ切りが残る高台を持たないもので、11は浅く外に開く形状を成し、皿の可能性もある。全てA類。

瓦

平瓦（12～15） 12は縄目、他は格子目の叩きの痕跡が見られる。12と13には弓切りの痕跡が残る。14は正格子で15はごく目が細かい斜格子である。焼きは12と14が須恵質、13は瓦質、15は土師質。

石製品

棒状石製品（16） 先端が丸い棒状を呈すもので、表面は全体に平滑であり磨り石の可能性が考えられる。

金属製品

鉄釘（17） 長さ4.6cm、厚さ0.6cmの方柱状をなし、両端は折損する。

その他の遺構

171SX001出土遺物（Fig.41）

瓦

丸瓦（1） 玉縁部分を含む破片で、焼きは土師質。叩きは磨耗のため詳細はわからない。

石製品

砥石（2） 砂岩製で二面の研ぎ面を残している。中砥程度の目を持つものと考えられる。

171SX003出土遺物（Fig.41、Pla.13）

緑釉陶器

椀（1～3） 1は体部下半の小片で、外面にケズリ、内面に細い圈線を残す。釉は光沢のある透明な緑色を呈し、須恵質の胎土を持つ。2は底部外面に糸切りの痕跡を残す削り出しによる蛇の目高台を持つ。外底部に赤味を帯びるが、全体では灰色の硬い須恵質で、釉は黄緑色を呈す。3は輪高台になるものと思われ、外面下半部は回転ヘラ削りが施され、内面上位に傷状の横沈線が数条残される。釉は光沢のある深緑色を呈し、外面には釉斑が見られる。須恵質で底部に赤味が見られる。京都洛西系の製品か。

灰釉陶器

壺（4） 淡灰色の硬質な胎土を持つ。高台の接合部位と見られ、内底部には灰被りによってできた斑のある釉が残される。

171SX009出土遺物（Fig.41、Pla.13）

緑釉陶器

椀（1） 須恵質の胎土で、口縁部端部が外反する。釉は光沢のある緑色で、釉の中に濃い緑色の小斑が内外面に散在する。

椀×皿（2） 灰色を呈す硬い須恵質の胎土で、口縁部端部が短く外反する。釉調は光沢のある薄い緑色を呈す。

国産陶器

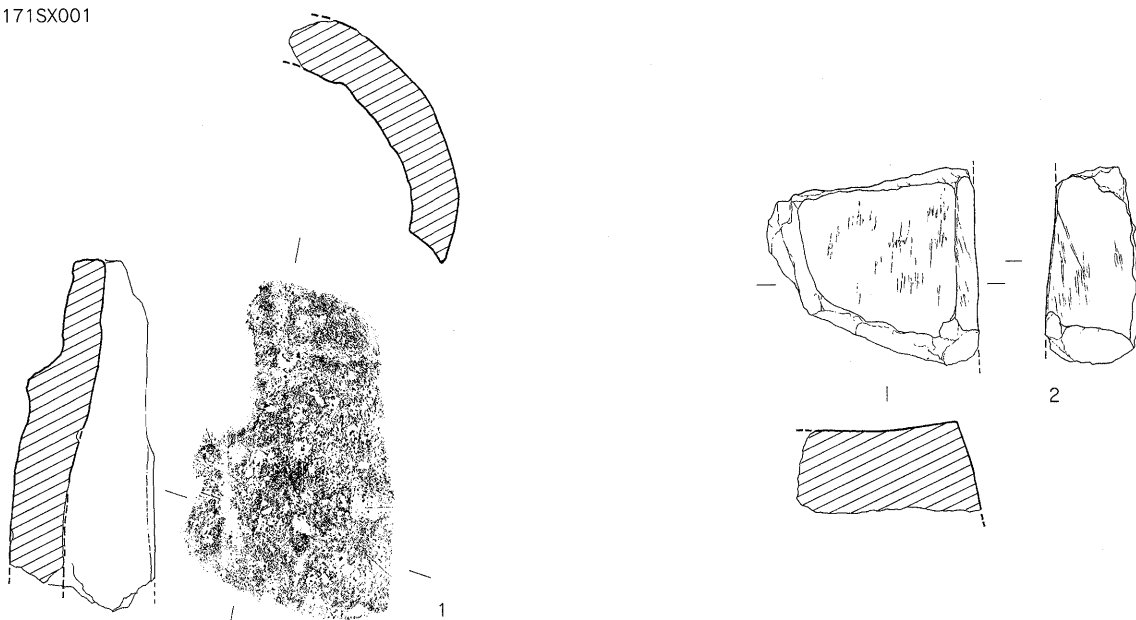
壺（3） 外開きで端部が折り返される高台を持つ。内面には灰被りによってできた斑のある釉が残される。

大皿（4） 口縁部が二段に屈曲するもので、白土と緑釉で彩色される。唐津三彩系の製品と見られる。

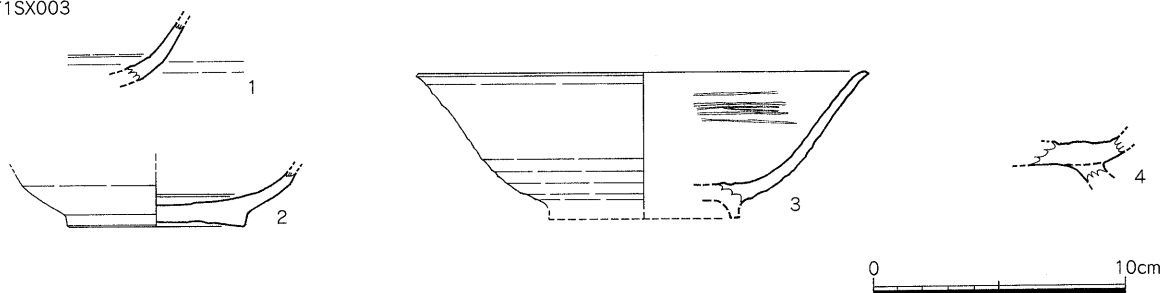
金属製品

筭（5） 長さ7.6+ α cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmの暗緑色を呈す銅製の筭^{こうがい}。断面は一面が平たいカマボコ形を成す。

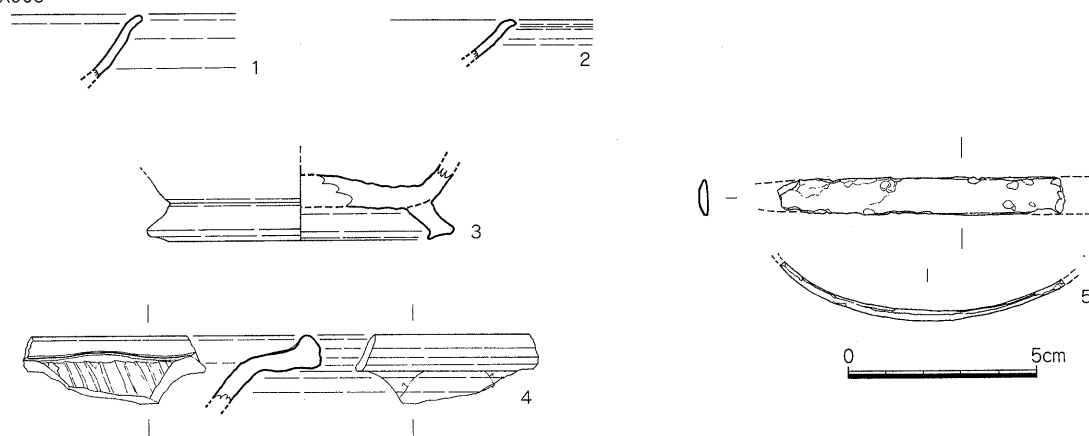
171SX001



171SX003



171SX009



171SX011

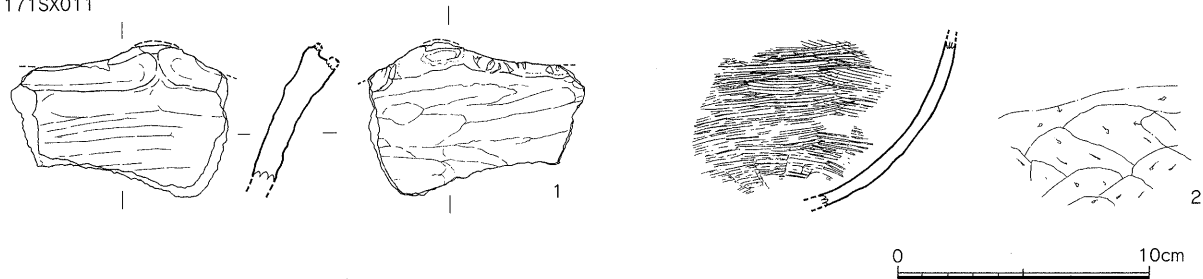
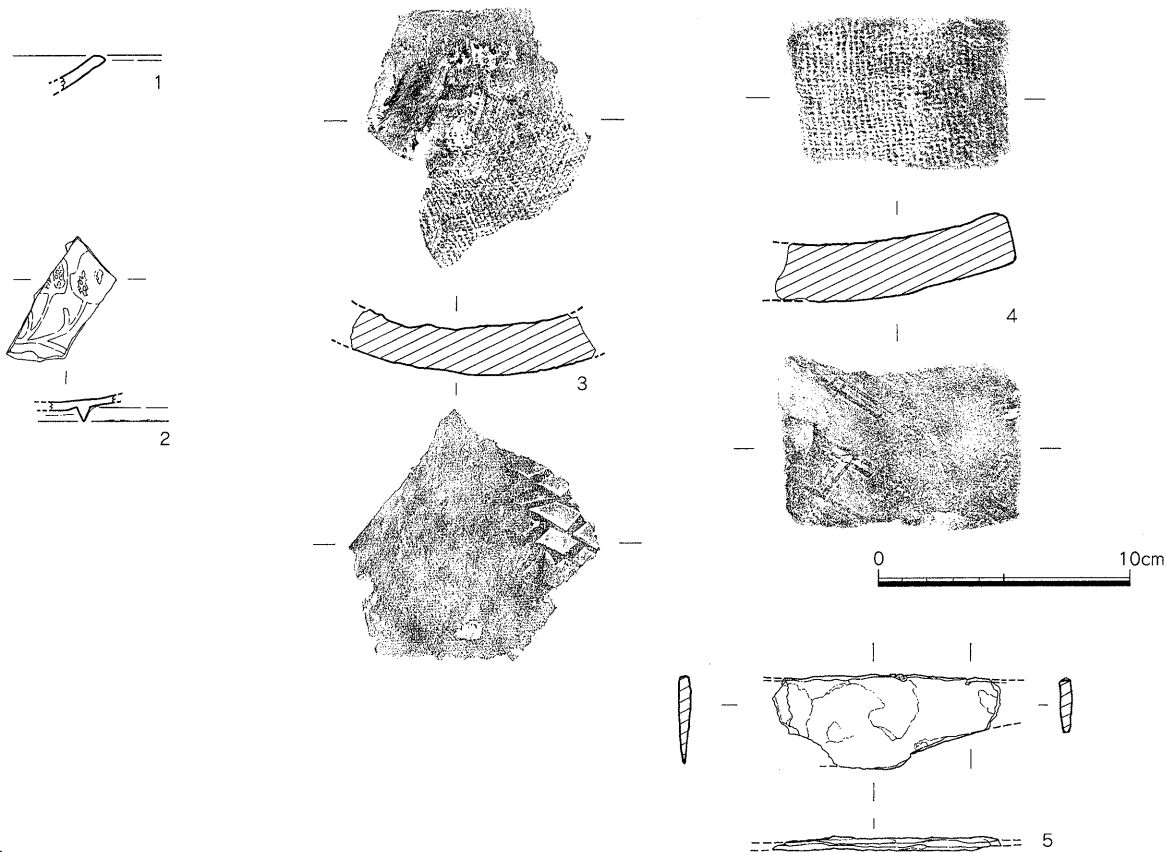


Fig.41 171SX001・003・009・011 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

茶褐色土



表土

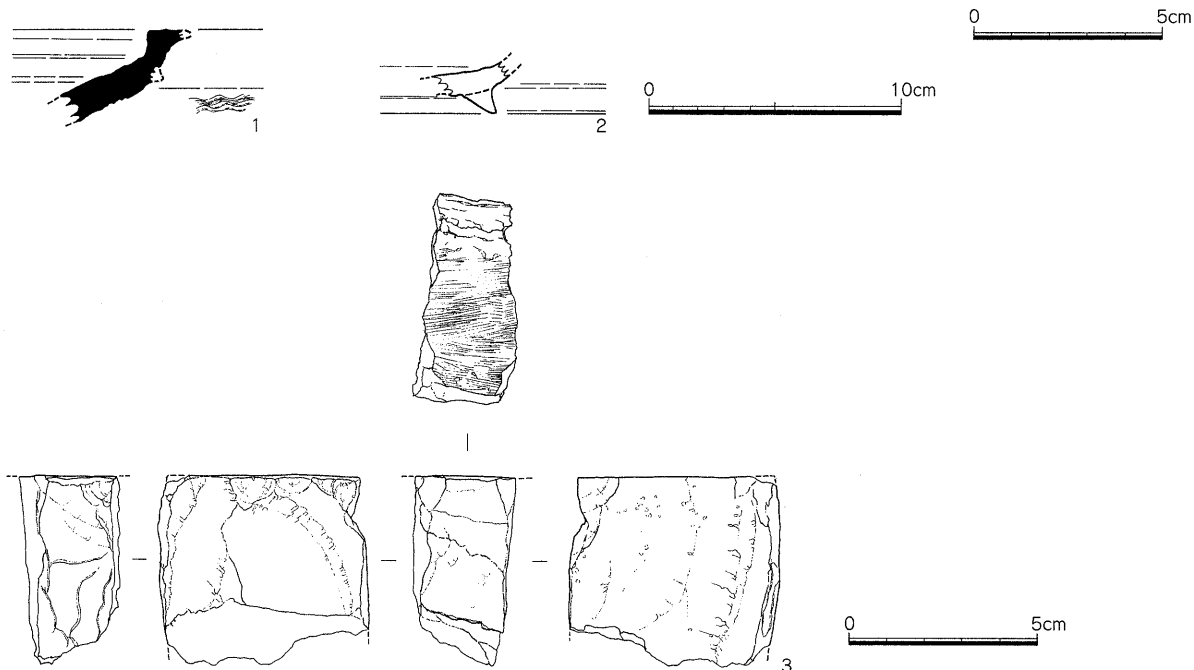


Fig.42 第171 次茶褐色土・表土出土遺物実測図 (1/3、1/2)

171SX011出土遺物 (Fig.41、Pla.13)

縄文土器

深鉢 (1) 波状口縁部の波頭部位に窪みがあり、左右の端部には不定形な刻みが施される。内面は板状工具によるシャープな条線が、外面は幅太いナデの痕跡がある。晩期前半頃の所産か。胎土は角閃石を含み黒色を呈す。

古式土師器

壺(2) 外面下位にケズリが、内面下位には放射状気味のハケ状工具の痕跡が残る。布留式古相以降の所産か。

各層出土遺物

茶褐色土出土遺物 (Fig.42)

灰釉陶器

坏×皿(1) 小片のため傾きなど問題が残るが、割合ストレートに開き、口縁端部が若干外反する。灰色の硬い須恵質の胎土で、内外面に薄く灰緑色の釉が掛かる。

青白磁

坏×皿(2) 高台は三角形を成し、内面には内型によると思われる草花文を描く。高台端部は釉を削り出している。

瓦

平瓦(3、4) 3は左右で斜格子の目が揃わず、アミダ状を成す。4の叩きは長方形で二重の格子を成す。

金属製品

刀子(5) 幅2.5cm、厚さ0.4cm、長さ6.1cmが残存する。身と茎の境の部位。

表土出土遺物 (Fig.42)

須恵器

甕(1) 二重に屈曲する口縁部端部で、赤色気味に焼きあがり、外面突出部には波状工具で装飾を施す。

灰釉陶器

坏(2) 高台は外に開く三角形を呈す。体部は肉厚で、内底はヨコナデ後に一方向の強いナデを残す。釉はほとんど剥落している。

石製品

砥石(3) 砂岩製で3面の研ぎ面を残している。中砥程度の目を持つものと考えられる。

(5) 小結

a. 主要遺構の時期

SE004・007の出土遺物は、白磁は碗のIV類などを含む陶磁器出土傾向C期の様相で、共伴する土師器小皿はヘラ切りのみで、丸底坏は浅手の傾向が見られるなど大宰府土器編年XII期前後頃の様相を持つ。SE008は8世紀の遺物も含むが主体はVI期より多少新しい様相といえる。

b. 遺跡の時期的変遷

遺跡は井戸の残存状況から高位の側がかなり削平されていると考えられるが、集落的様相は遺物の出土傾向から8世紀が一つの画期であったと思われる。9世紀後半には井戸SE008の存在から屋敷地の進出があったと思われる。越州窯青磁や緑釉陶器などの出土傾向は周辺の条坊域の傾向とかわらず、活発な消費があったと考えられる。12世紀前半前後に再度井戸SE004・007が穿たれるが、その後は特に東側の低位な側は耕作地化したと考えられ、鎌倉時代から現代に至る耕作面が土壌として残されている。

縄文時代後晩期の縄文土器が出土しているが、該期の遺物包含層は残されていなかった。近隣では条坊跡第43次調査で晩期の文化層が確認されており、御笠川と鷺田川に挟まれた沖積地において微高地縁辺に小規模な生活痕跡を残す状況が指摘される。

6、第191次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀5丁目73で、大宰府条坊跡の中心付近に位置する。平成9（1997）年2月6日に（株）甲山建築設計事務所から筑陽学園敷地内で計画されている校舎増築と仮設建物建築の2ヶ所について埋蔵文化財の有無の照会があった。その依頼に基づき1997年3月12、26日に試掘調査を実施し、校

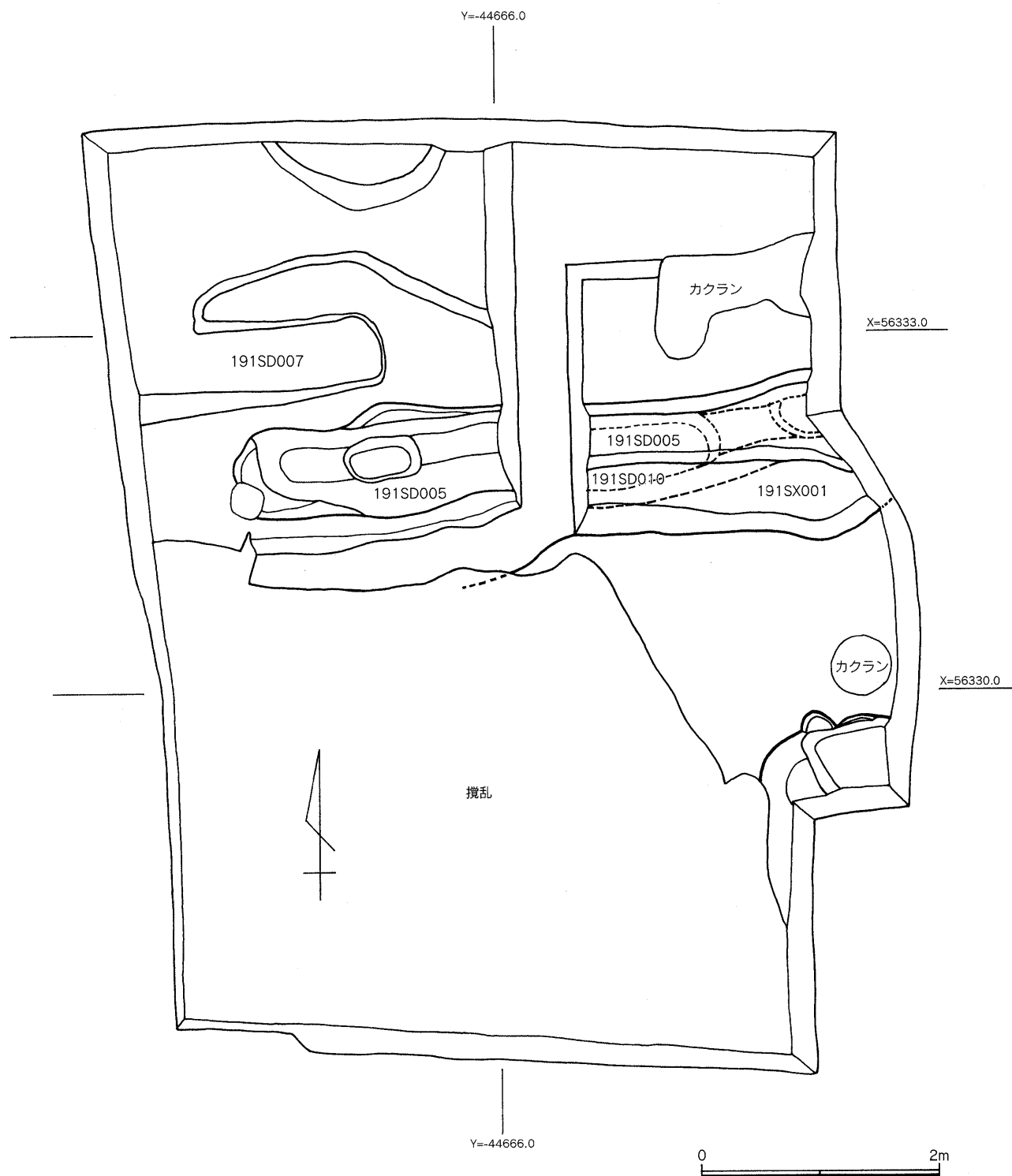


Fig.43 第191次調査遺構全体図（1/50）

舎増築部分については遺構の大半が攪乱で消滅し、東側のみ遺構の残存が確認された。仮設建物建築箇所についてもGL-30cmの所で遺構を確認した。その後、協議の結果、遺構に影響をおよぼす校舎増築部分については、発掘調査を行うこととなった。

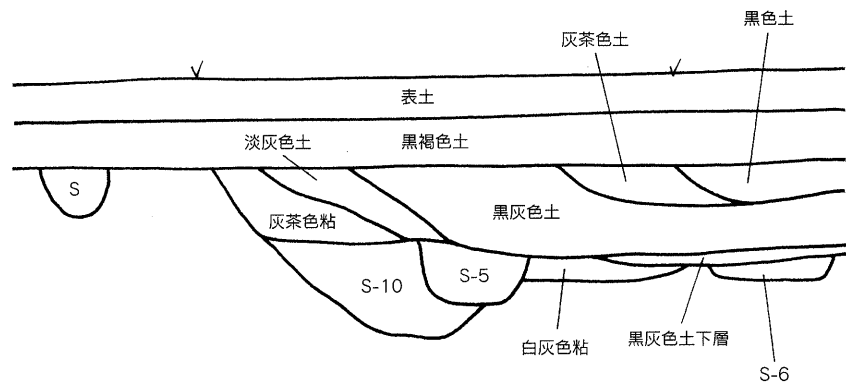


Fig.44 第191次調査土層模式図

調査費用については学校法人筑陽学園が負担した。調査区は試掘調査所見をもとに東側のみ設定したが、パイプや電線等の埋設物があったため、当初の調査計画より面積をやや縮小した。

現地での調査は、1997（平成9）年4月7日～4月17日にかけて実施した。調査対象面積は19242.50m²、調査面積は43m²を測る。調査は狭川真一が担当した。

(2) 基本層位 (Pla.8)

表土は真砂土が約0.3m、その下に0.25mほど黒褐色土が遺構面を覆っている。つまり、地表面から0.55～0.7mの深さに遺構面が存在する。今回の調査範囲の西側は地表面より0.35～0.9mの深さまで攪乱が入り遺構はもちろん遺物も全く存在しない。また、本調査までには至らなかったが、仮設建物建築部分の試掘結果から、表土直下0.3mに遺構があり、遺構が掘り込まれている粘質が強い茶灰色土やその下層の茶褐色土は、整地の可能性が考えられる。中央大路に近い位置にあるものの、御笠川にも近いこともあり遺構の残存状況がやや不安定である。

(3) 検出遺構 (Pla.8)

溝

191SD005

長さ5m、幅0.6～1.0m、深さ0.3mの東西溝で、SX001に関連するものである。9世紀後半頃の埋没。

191SD007

長さ2.2m、幅0.6～0.8m、深さ0.1mの東西溝。11世紀後半頃埋没。

191SD010 (CD-47)

長さ5m、幅0.8m

程度、深さ0.5mの東西溝で、191SX001に関連するものである。奈良時代に埋没。

その他の遺構

191SX001 (CD-47)

幅3.5m以上、深さ約0.4m、検出長6.1m

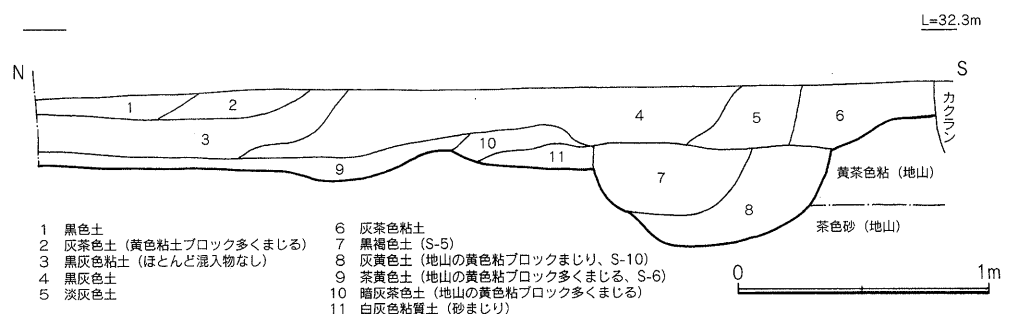


Fig.45 第191次調査東壁土層図 (1/30)

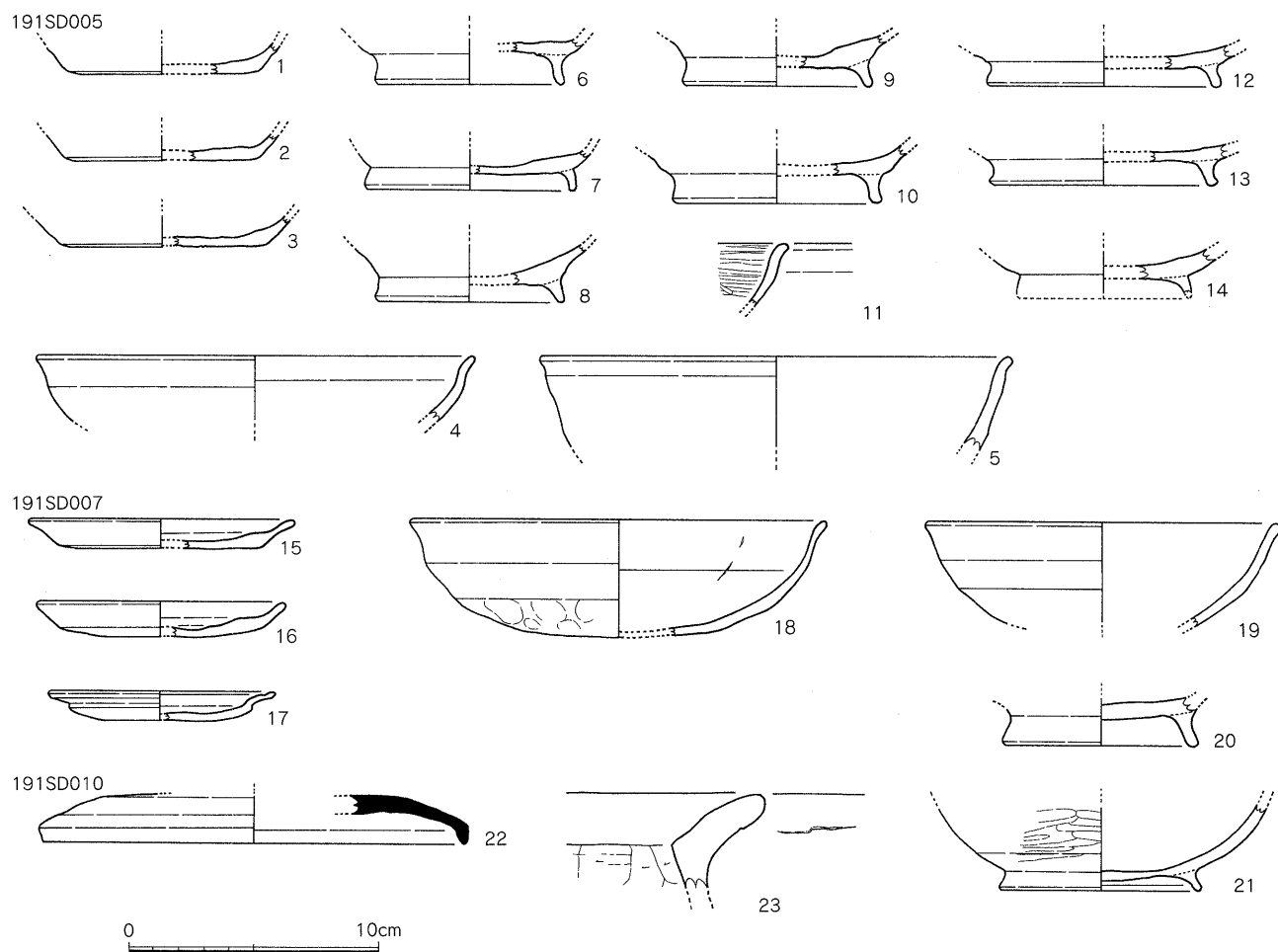


Fig.46 第191次調査溝出土土器実測図 (1/3)

の段落ち状を呈している。8世紀に埋没が始まり11世紀に終わっている。

(4) 出土遺物

溝

191SD005出土土器 (Fig.46)

土師器

坏a (1~3) 底部と体部の境は僅かに丸味を帯びる。内面底部は不定方向のナデ。底部切り離しは回転ヘラ切り。復元底部径は7.7~8.2cm。

碗 (4、5) 小破片であるが、復元口径17.6cmと19.0cm。内外面ともヨコナデで、口縁端部を僅かに外反させる。

碗c (6~10) 底部の破片で、復元高台径7.6~8.4cm。8の内面は研磨されたような痕跡が見られる。

黒色土器

碗 (11) 内面にミガキcが施されている。

碗c (12~14) 内面にはミガキcが確認できるが、色調は薄い黒灰色を呈している。復元高台径7.0~9.4cm。

191SD007出土土器 (Fig.46、Pla.13)

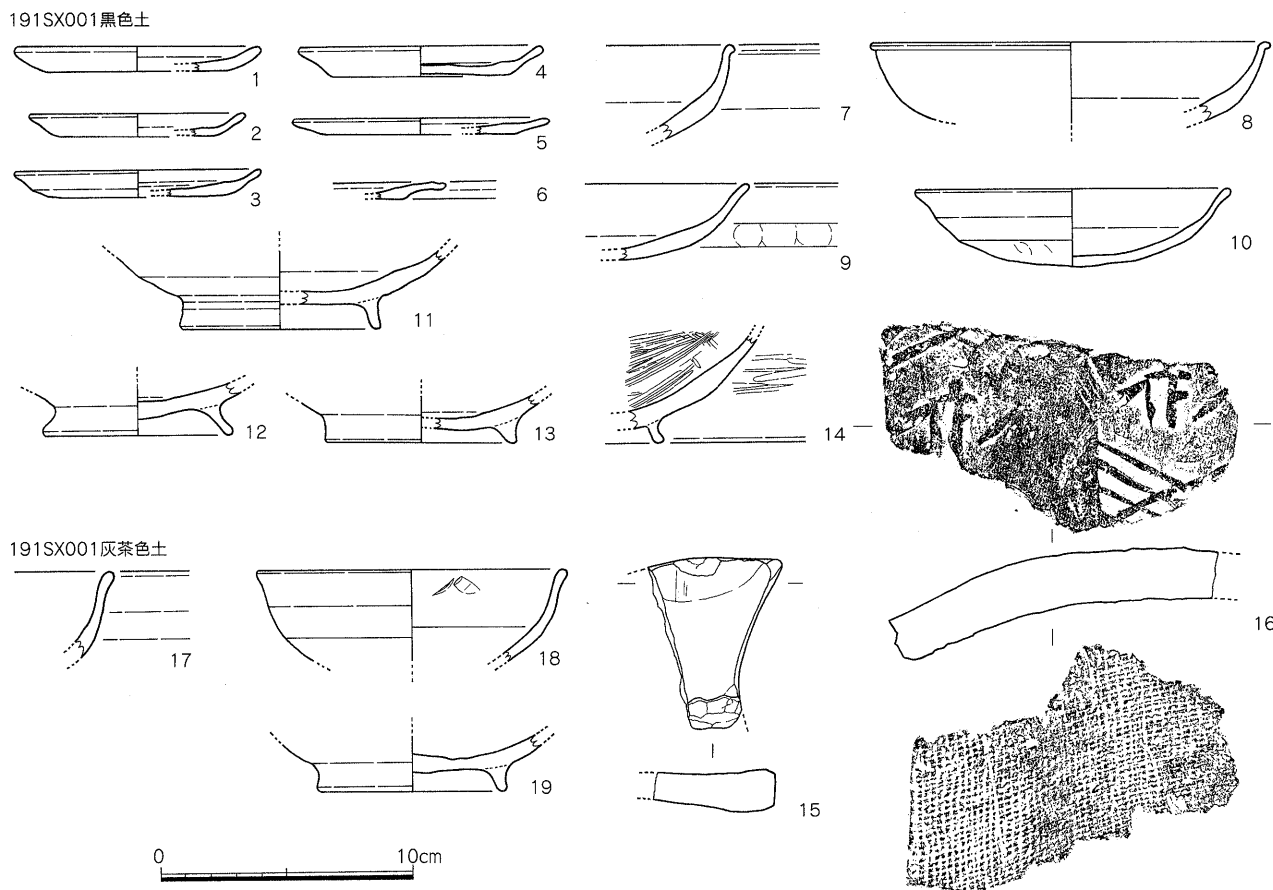


Fig.47 191SX001 黒色土・灰茶色土出土遺物実測図 (1/3)

土師器

小皿a (15、16) 底部切り離しは回転ヘラ切り。復元口径10.7cmと10.0cm。16の底部は丸味を帯び不安定である。

小皿a2 (17) 底部外面は粗いケズリのあとナデている。口縁部は折り曲げ外反させている。端部内面に浅い沈線が巡る。復元口径9.1cm。

丸底坏a (18、19) 18は内面ミガキb、外面底部は押し出し。器壁が薄い。復元口径16.7cm。19は復元口径14.3cm。

碗c (20、21) 20は高い高台を貼付する。内面にはミガキのような痕跡も見られるが、摩滅し不明瞭。復元高台径7.9cm。21は外面には手持ちミガキ (ミガキc) が施されている。内面は摩滅し調整不明。高台内側に沈線状の段が巡っている。復元高台径8.1cm。

191SD010出土遺物 (Fig.46)

須恵器

蓋3 (22) 内外面とも回転ナデ。復元口径17.0cm。

甕 (23) 内面はヘラケズリし、口縁部と明瞭な屈曲を付けている。外面調整は摩滅し不明瞭。

その他の遺構

191SX001黒色土出土遺物 (Fig.47、Pla.13)

土師器

小皿a (1～5) 摩滅しているが、底部切り離しが確認できるものはヘラ切りである。復元口径は8.6～10.2cm。器高0.65～1.2cm。底径6.2～7.4cm。

小皿a2 (6) 摩滅しているが、口縁端部内面に浅い段が確認できる。胎土は薄い黄灰色で精製され

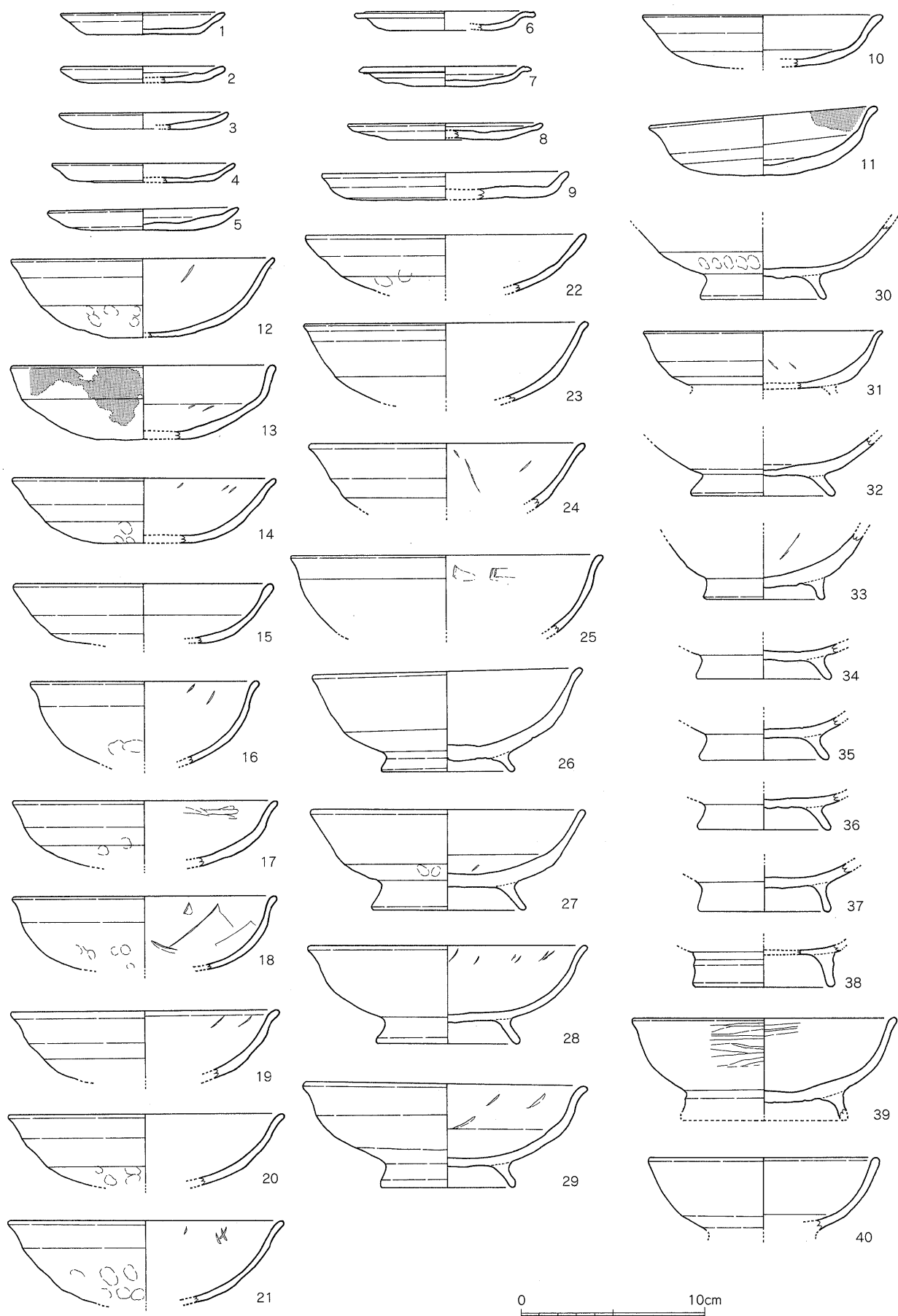


Fig.48 191SX001 黑灰色土出土遺物実測図 (1/3)

てはいない。

碗c (7、8) 体部が丸味を帯び、口縁端部を折り曲げ、丸く作り出している。8の復元口径は15.8cm。

丸底坏a (9、10) 内面ミガキb、外面底部は押し出した際に付いた指頭圧痕が確認できる。10の復元口径は12.5cm。

碗c (11~13) 11はやや細い高台、12は横開きの高台、13は低い高台を貼付する。全体的に摩滅しているが、丸底坏cである可能性も考えられる。復元高台径7.6~8.0cm。

黒色土器

碗c (14) 内面はミガキcが平行に力強く施され、溝状に確認できる。内外面とも部分的に器面が小爆発を起こしている。外面下半のミガキの存在は不明瞭。

石製品

砥石 (15) 2面が研磨されている。大きさは6.7×5.3cm、厚さ1.7cm。砂岩製。

瓦

平瓦 (16) 斜格子の叩きに「佐瓦」の異体字と推測される文字が陽刻されている。

191SX001灰茶色土出土遺物 (Fig.47)

土師器

碗 (17、18) 口縁部は僅かに外反する。内面にはミガキbを施す。外面はヨコナデ。

碗c (19) 全面うっすらと摩滅しているため、調整は不明瞭である。高台内面は黒灰色を呈し、板状圧痕を粗くナデている。

191SX001黒灰色土出土遺物 (Fig.48・49、Pla.13)

土師器

小皿a (1~5) 底部切り離しは全てヘラ切り。復元口径9.0~10.4cm。器高0.9~1.25cm。底径5.4~8.0cm。

小皿a2 (6~8) 復元口径9.4~10.6cm。6、7は精製された橙色の胎土で、口縁端部が屈曲し、その内面に沈線が巡る。7の口縁端部には外面にも細い沈線が巡っている。8は他と異なり端部の屈曲はないが、内面に摩滅した浅くて鈍い沈線が巡る。

皿a (9) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後簡単にナデている。復元口径13.4cm。器高1.5cm。復元底径10.9cm。

坏a (10、11) 体部中位で若干屈曲し、底部切り離しはヘラ切り、その後は未調整。内面はナデ、その他は回転ナデ。11の口縁部内面には煤が付着している。

丸底坏a (12~15) 復元口径14.2~14.4cm。内面はミガキbでコテ当て痕が残る、外面底部に底部押し出しの際の指頭圧痕が残る。13は体部中位で若干屈曲し、外面に煤が付着している。

丸底坏 (16~25) 高台が付くのかどうかについて、判断が難しいものを並べた。口縁端部が僅かに外反する。内面はミガキbでコテ当て痕が残る。外面底部は残存範囲が少ないため、不明瞭なものもあるが、全体として底部押し出しの際の指頭圧痕が残る。復元口径12.4~17.0cm。

丸底坏c (26~38) 外開きの細い高台を貼付している。内面はミガキbでコテ当て痕が残る、外面底部に底部押し出しの際の指頭圧痕が確認できる。38は他と若干異なりあまり開かず高い。復元口径14.4~15.5cm。復元高台径6.6~8.4cm。

碗c (39~40) 39は内外面とも手持ちミガキ (ミガキc) が施されている。胎土は精製されていて外面は橙灰色、内面は灰褐色を呈する。復元口径14.4cm。40は外面下半にはヨコハケ状の細い沈線が

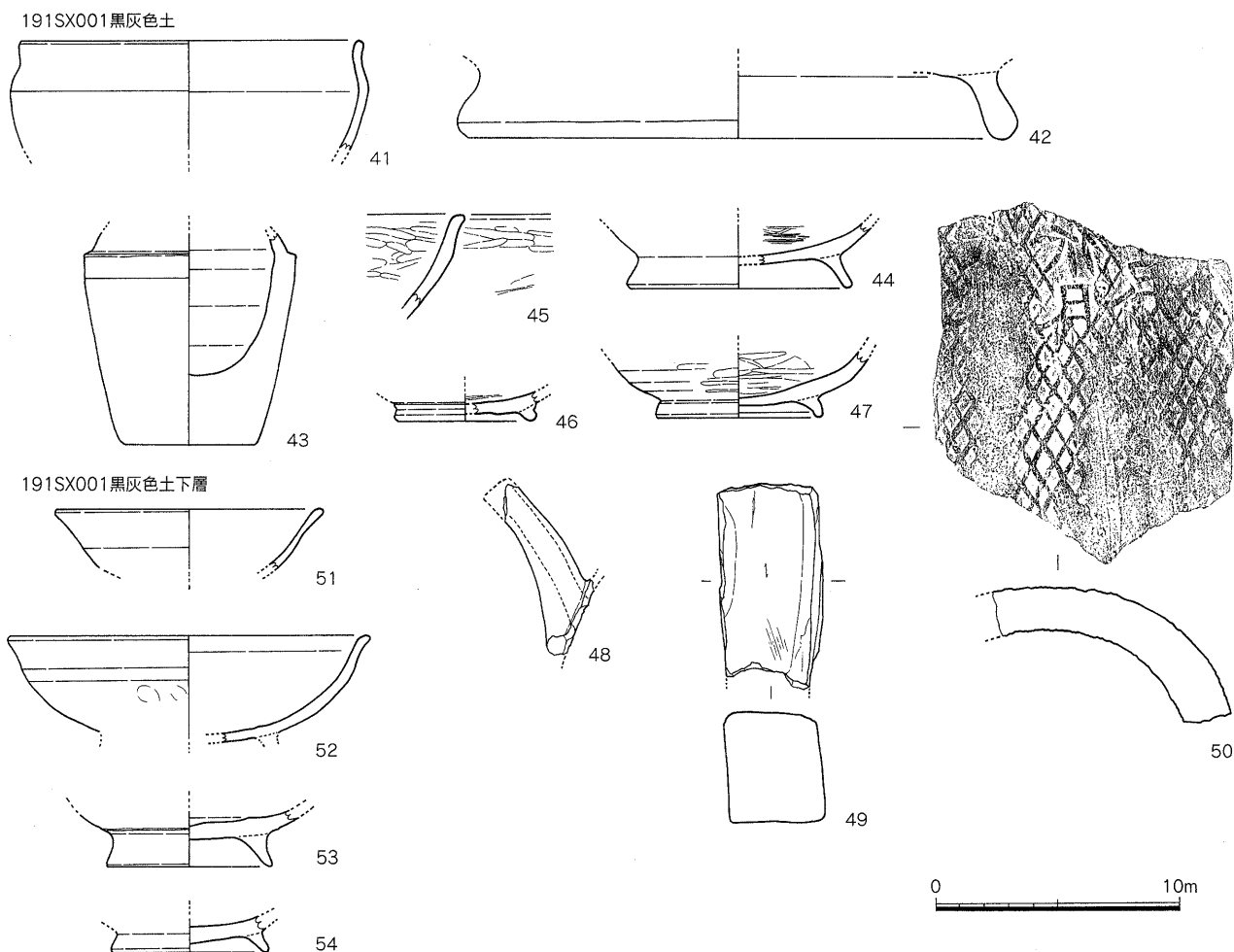


Fig.49 191SX001 黒灰色土・黒灰色土下層出土遺物実測図 (1/3)

見られるが、ヨコナデの一種と思われる。内面底部はナデ、その他はヨコナデである。

碗 (41) 小片で器形が推測しがたいが、復元口径14.0cm。色調は橙色と灰茶色を呈する。外面はヨコナデ、内面はヨコナデであるが、ミガキのようにもみえる。

鉢 (42) 分厚い高台で、復元高台径22.8cmを測る。体部の形状は推測しがたいが、鉢のようなものだったと考えられる。

壺 (43) 二重口縁のような形状を示す。口縁部は欠損するが、9cm程の器高と見られる。色調は薄い橙色で、焼成は良好で須恵器に近い。体部外面は縦方向のミガキ、口縁端部と内面はヨコナデ。底部は未調整である。底部径は5.4cm。

黒色土器

碗c (44~47) 44はA類。外開きの細い高台を貼付する。45~47はB類。高台は低い高台を貼付する。

越州窯系青磁

水注 (48) 水注の注ぎ口の部分で、釉調は灰緑色で半透明、部分的に貫入が入り、僅かに褐斑がある。越州窯系青磁IもしくはIII類。

石製品

砥石 (49) 大きさは4.2×4.5cm、長さ8.4cm。2面研磨されている。砂岩製。

瓦

丸瓦 (50) 斜格子の叩きに「佐瓦」の異体字と推測される文字が陽刻されている。

191SX001淡茶色土

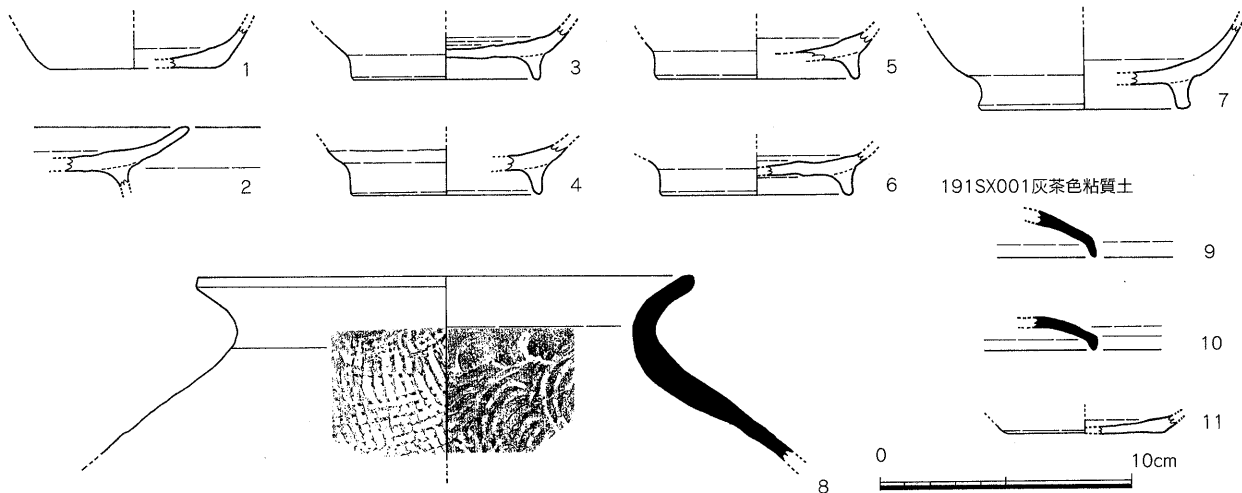


Fig.50 191SX001 淡茶色土・灰茶色粘質土出土土器実測図 (1/3)

191SX001黒灰色土下層出土遺物 (Fig.49)

土師器

碗 (51) 直線的に開く体部である。小片だが復元口径11.0cm。

碗c (52~54) 52は丸底坏cである可能性が高い。53・54は全体的に摩滅しているが、外開きの細かい高台を貼付する。

191SX001淡灰色土出土遺物 (Fig.50)

土師器

坏a (1) 底部はヘラ切り後未調整。板状圧痕が残る。復元底径6.8cm。

小皿c (2) 体部の器高は1.7cmで、1cm近い高台が付くと見られる。

碗c (3~7) あまり外開きしない、1cm前後の高台を貼付する。復元高台径は7.5~7.7cm。3の内面はヨコナデが強く同心円状に残る。

須恵器

甕 (8) 復元口径19.7cm。

191SX001灰茶色粘質土出土遺物 (Fig.50)

須恵器

蓋3 (9、10) 口縁部の小片で、内外面とも回転ナデ。

土師器

坏a (11) 底部切り離しはヘラ切り。復元底径6.2cm。

各層出土遺物

黒褐色土出土遺物 (Fig.51)

瓦

平瓦 (1) 斜格子に「平井」と陽刻された文字瓦。

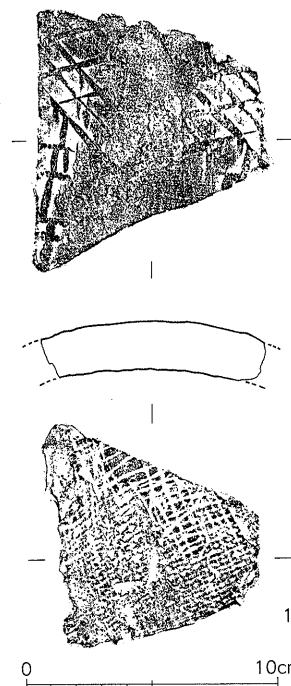


Fig.51 第191次調査黒褐色土出土土器実測図 (1/3)

(5) 小結

調査面積が狭小なうえに南側の大半は大きな攪乱で破壊されていたが、段落ち状遺構とそれに伴う溝遺構2条を検出した。遺構の状況から東西にのびるこの段落ちは道路の痕跡である可能性がきわめて高く、検出した溝もこれに伴う側溝と考えられる。

遺構の時期は、概ね8世紀代に構築され、9世紀後半頃にやや規模を小さくして作り直され、最終的に埋没したのは11世紀後半頃と考えられる。新規の側溝の任意中点は政庁南門から南へ375mとなり、条坊痕跡と考えられるどんかん道あるいはその南側を調査した条坊跡第135次調査の道路遺構と比較すると約80mの距離にある。奈良時代の遺構を踏襲するように後代の遺構も構築されていることや、硬化面こそ認定できないが溝の北側（推定路面側）に薄い整地があること等から東西方向の道路と認定し、条坊の痕跡の可能性を考えておきたい。また、井上信正氏作成の大宰府条坊復原案によると、丁度この溝付近を東西路が通ることが予想されており、この調査成果は、井上案を補強する結果となった。

また周辺地区の調査成果をみると、西隣の条坊第93次調査では大きな掘立柱建物が確認されている。このことはこの付近一帯が大宰府の古代都市の中でも政庁に極めて近接していることから、重要な位置であったことを示唆するものである。今回は大半が攪乱を受けており、明らかにできなかった部分が多いが、遺構の残存状況を推定すると、東側の運動場方向によく残っているものと考えられる。

7、第202次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀5丁目44で、御笠川の南岸、筑陽学園の西隣に位置する。この地において、平成4（1992）年度に鼓石第2公園の設置計画があがり、1995（平成7）年9月に都市計画課より1997年9月に工事を開始したいとの意向が示され、協議を重ねた結果、平成10年度に調査を行うことになり、1998（平成10）年7月13日から8月11日にかけて発掘調査を実施した。表土剥ぎと平行し、トレンチを設定したところ、北側は氾濫原で遺構の存在が確認できなかったため、遺構が確認された南側のみ調査を行った。調査対象面積1270m²、調査面積275m²を測る。調査は宮崎亮一・狭川真一が担当した。なお、完成した公園内には、付近一帯の調査成果含めた遺跡説明板を設置した。

(2) 基本層位

御笠川とは国道3号線を挟んだ位置にあり、旧地形図を見ると御笠川の氾濫原の周辺部に位置してい

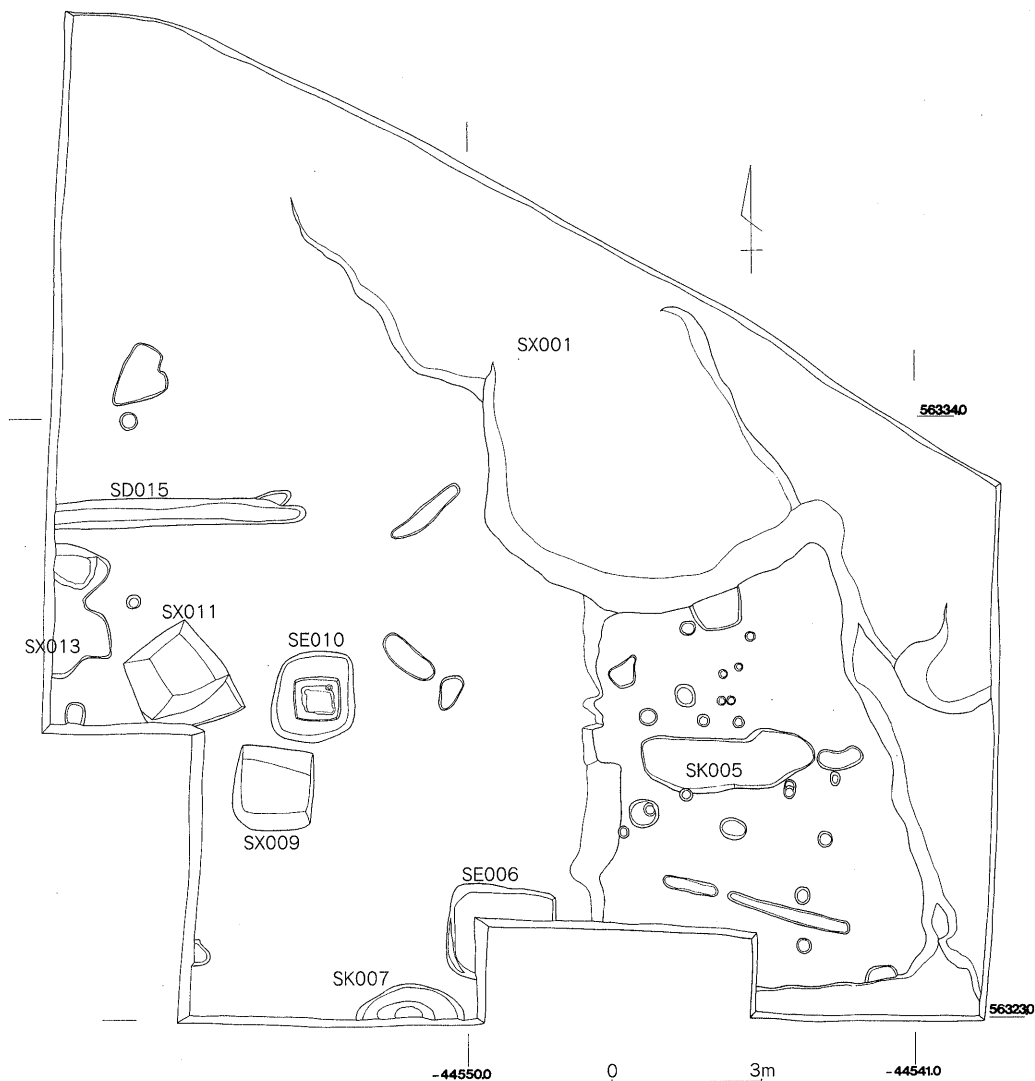


Fig.52 第202次調査遺構全体図（1/150）

る。調査区中央より北側は氾濫や攪乱によって、遺構の存在は確認できなかった。調査区中央付近には南北方向の段差が存在し、以前の田圃の畦畔の段差と推測される。その耕作面を覆うように真砂土が覆っている。調査直前はゲートボール場として利用されていた。

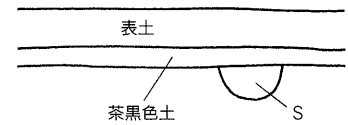


Fig.53 第202次調査土層模式図

(3) 検出遺構 (Pla.9)

井戸

202SE006 (Fig.54、CD-50)

調査区南辺部で検出されたため、底面まで調査することができなかった。その形状やさらに遺構が深く続く状況から井戸と推測した。検出された部分の規模は東西2.2m、南北1.95m、深さは0.85m以上

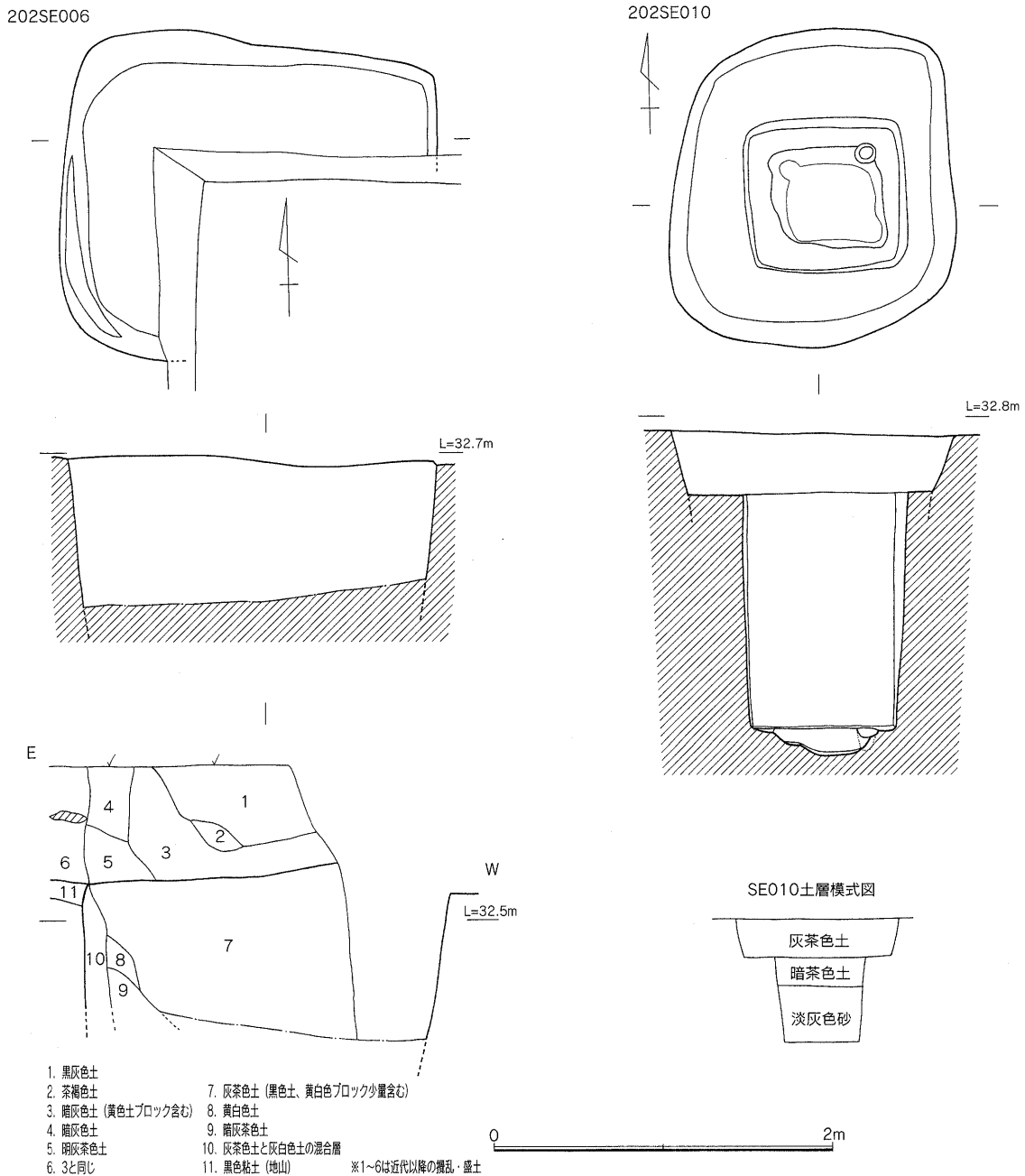


Fig.54 202SE006・010 遺構実測図 (1/40)

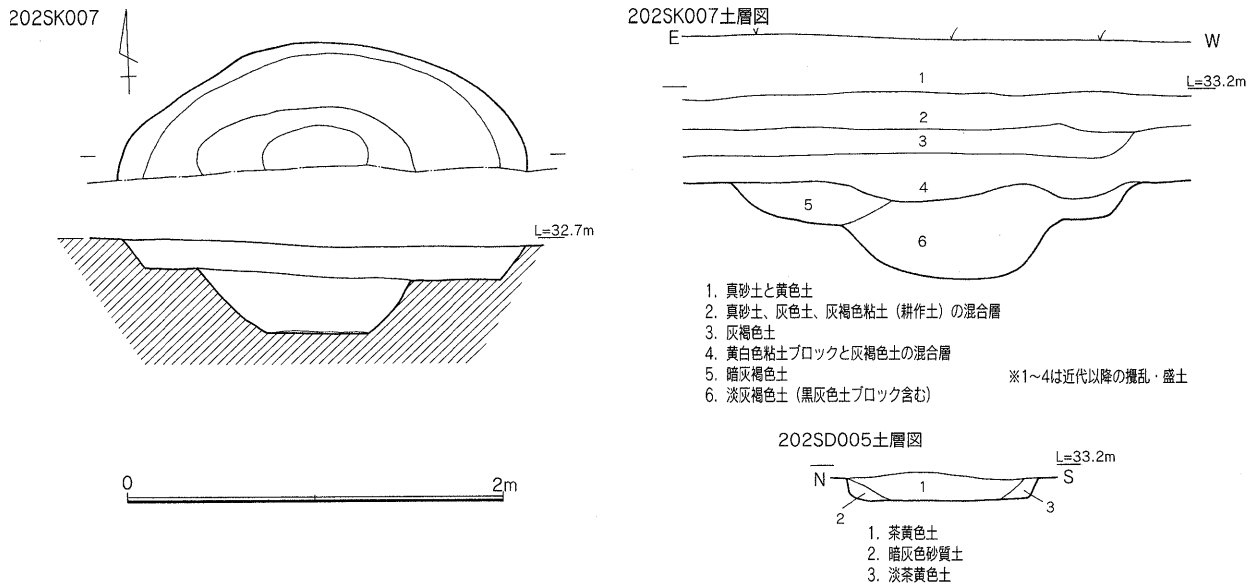


Fig.55 202SK007・SD005 遺構および土層図 (1/40)

である。埋土はほぼ灰茶色土の単層で、おそらく井戸のウラゴメ部分を調査したものと考えられる。9世紀前半頃の埋没。

202SE010 (Fig.54、Pla.9・CD-51・52)

掘り方は隅丸方形を呈し、規模は東西1.7m、南北1.85m、深さ1.9mを測る。底面には僅かに窪みがあって、一辺約0.5mの方形井戸枠痕跡と推測され、その4隅に支柱の痕跡と思われる径10cm程の窪みが僅かに残る。上面では東西0.94m、南北0.9mの井戸枠痕跡と見られる埋土の違いを確認したが、底面の方形井戸枠痕跡を見る限り、埋土の違いは、井戸枠の崩壊部分を含めた範囲と認識すべきであろう。遺物は遺構面から約0.3mの間に多く出土し、それ以下は遺物量が少なくなる。井戸枠内の埋土は暗灰色土で、炭が少々混じり、約1mで淡灰色砂に変わる。それ以下もこの2層（暗灰色土・淡灰色砂）が約15cmごとに交互に堆積している。湧水は全くない。9世紀後半頃の埋没。

土坑

202SK007 (Fig.55、CD-53)

調査区南端に位置し、全体が把握できない。現状では土坑としか言えないが、井戸の可能性も考えられる。確認できた土坑の規模は、東西2.2m、南北0.65m以上あり、土坑内中央にはさらに長径1.15mの土坑が存在し、そこまでの深さは0.5mを測る。埋土は基本的に灰褐色系の埋土である。11世紀後半12世紀前半頃の埋没か。

溝

202SD005 (Fig.55、CD-54)

規模は東西3.5m、南北1～1.2m、深さ0.13～0.17mを測り、現況は細長い土坑のような形を示している。東西両端付近は田圃当時の段差や攪乱があり、削平を受けているものと推測され、溝はさらに続いていたと考えられる。時期の特定は遺物量が少なく困難である。

202SD015

東西溝で、長さ5.2m、幅0.35～0.6m、深さ0.15m前後を測る。U字形した明瞭な溝である。埋土は灰茶色土の単層で、固くしまっていた。遺物が2点と少ないため時期の特定は困難である。

その他の遺構

202SX001

調査区の北側に広がる氾濫原で、ここからは昭和50年12月6日製造のインスタントラーメンの包装紙が見つかるように、現代までの攪乱や盛り土がなされている。

202SX009・011・013

方形の攪乱穴である。攪乱層に遺物が混じっている。

(4) 出土遺物

井戸

202SE006出土遺物 (Fig.56)

須恵器

坏c (1) 復元高台径8.0cm。

壺f×d (2、3) 2は二重口縁の破片で、復元口径13.0cmを測る。3は底部で復元底径10.8cmを測る。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

土師器

坏a (4) 復元底径6.8cm。底部はヘラ切りと見られるが、摩滅し不明瞭。

皿a (5) 復元口径12.6cm、器高1.8cm、復元底径9.1cmを測る。底部はヘラ切り後未調整。

坏 (6) 直線的に開く口縁部の破片で、復元口径13.8cm。調整は内外面とも回転ナデ。

坏c (7) 安定感のある高台を貼付し、体部もやや厚みがある。復元高台径9.8cm。

碗c (8) 復元高台径9.4cm。胎土は極端に精製されてはいないが、外面は回転ヘラケズリ、内面はミガキを施した痕跡が確認でき、器面は綺麗に仕上がっている。

黒色土器

碗c (9) 復元高台径9.1cm。内面にミガキcを施す。A類。

202SE010灰茶色土出土遺物 (Fig.56)

土師器

坏a (10~12) 全て底部のみで、復元底径6.2~8.0cmを測る。底部と体部との境がやや丸味を帯びている。底部調整はヘラ切り。

碗c (13~15) 高台付近の破片で、復元高台径は6.2~8.0cm。外面の調整はヨコナデ。13はやや高い高台を貼付する。

黒色土器

碗c (16~18) 高台付近の破片で、復元高台径は6.2~8.2cm。外面はヨコナデ、内面はミガキcで、18はミガキ痕跡が明瞭に残っている。全てA類。

202SE010暗茶色土出土遺物 (Fig.56)

土師器

坏a (19、20) 全て底部のみで、復元底径6.6~8.0cmを測る。底部と体部との境がやや丸味を帯びている。底部調整はヘラ切り。

坏c (21) 復元底径6.3cm。

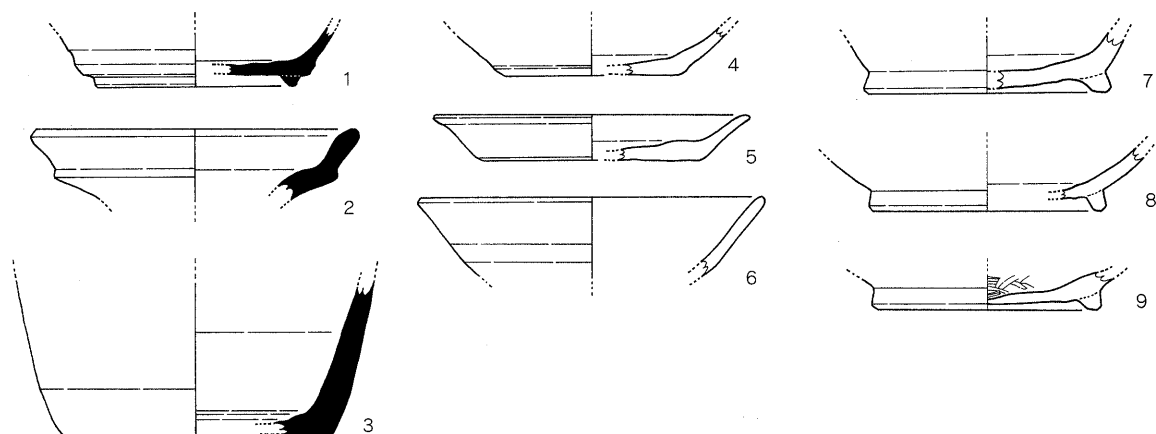
大皿c (22) 砂粒が目立つほど非常に粗い胎土である。高台直径は18cm程に復元できる。

黒色土器

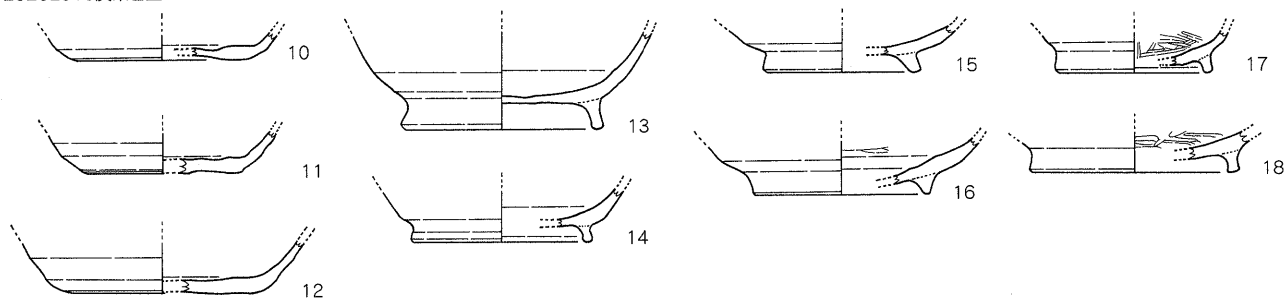
碗c (23、24) 23は高台付近の破片だが、高台は欠損している。外面調整はヨコナデ。内面は摩滅している。24の内面は丁寧に磨かれている。全てA類。

碗 (25) 直線的に開く口縁部で、内面はミガキc、外面は回転ナデを施す。A類。

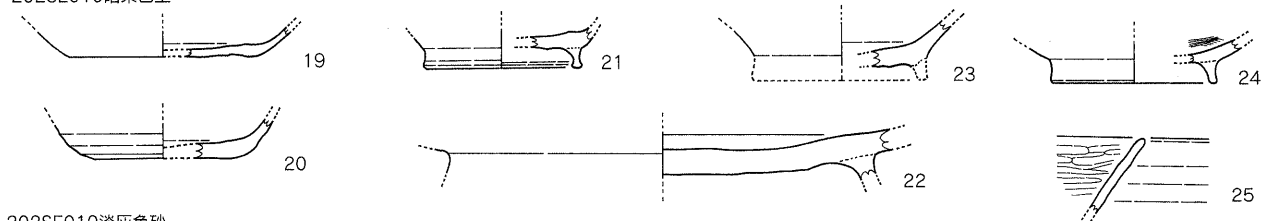
202SE006



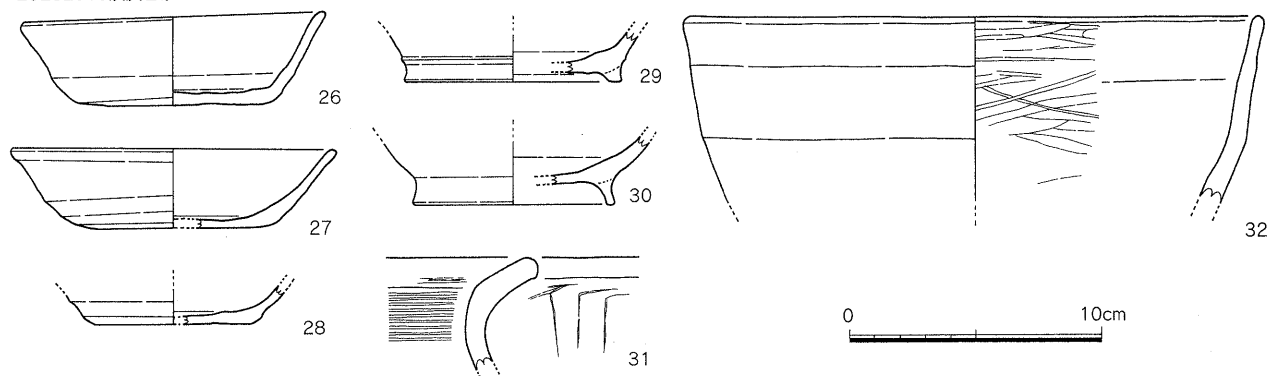
202SE010 灰茶色土



202SE010 暗茶色土



202SE010 淡灰色砂



0 10cm

Fig.56 第202次調査井戸出土土器実測図 (1/3)

202SE010 淡灰色砂出土遺物 (Fig.56、Pla.13)

土師器

坏a (26~28) 26は口径12.1cm、器高3.6cm、底径7.7cm。27は口径12.9cm、器高3.2cm、底径8.0cm。28は復元底径6.2cm。全て底部ヘラ切り後未調整である。

坏c (29) 復元高台径は8.6cm。体部との境に逆台形の低い高台を貼付する。

碗c (30) 復元高台径は8.0cm。内外面ともヨコナデである。

甕 (31) 外面は体部調整を行った際に当たったと見られるハケ工具痕が付いている。内面はヨコハケ。口縁端部はヨコハケのあとナデ。

黒色土器
鉢 (32) 復元口径23.0cm。
僅かに外開き。外面は摩滅し、でこぼこしている。内面はミガキcが施されているが、部分的に器面が小爆発し粗れている。

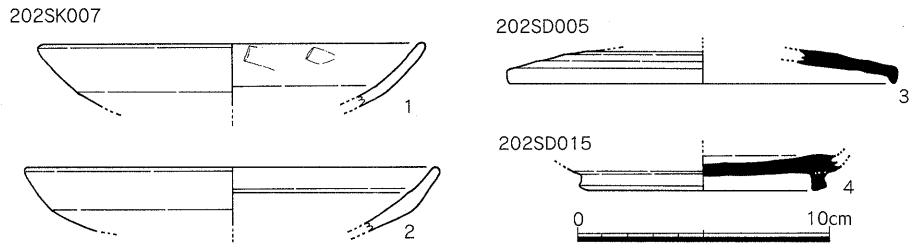


Fig.57 第202次調査土坑・溝出土土器実測図 (1/3)

土坑

202SK007出土遺物 (Fig.57)

土師器

丸底坏 (1、2) 復元口径はそれぞれ15.4cm、16.5cm。体部は中位でわずかに屈曲している。内面はミガキb。

溝

202SD005出土遺物 (Fig.57)

須恵器

蓋3 (3) 復元口径15.3cm。外面は上半部が回転ヘラケズリ。その他はナデもしくは未調整である。

202SD015出土遺物 (Fig.57)

須恵器

坏c (4) 復元高台径9.8cm。

その他の遺構

202SX001出土遺物 (Fig.58、Pla.13)

土師器

小皿a2 (1) 復元口径10.8cm。器高1.2cm、底径6.6cm。体部は朝顔型に外反し、口縁端部に浅い溝がある。

灰釉陶器

壺×瓶 (2) 復元高台径9.2cm。内面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ。内面には薄い緑灰色の、外面には灰褐色の釉が部分的に施釉されている。内面は内側が窪む浅い段が付けられている。安定した方形状の高台が外開きに貼付されているが、高台端部は欠落が目立つ。

平鉢 (3) 復元高台径11.3cm。外面は回転ヘラケズリ、内面は使用によって摩滅し滑らかである。また、内面には薄い緑灰色の釉が部分的に残存している。

緑釉陶器

碗c (4) 高台はケズり出しの高台とみられ、黄緑色の釉は内外面とも僅かに残存している。胎土は軟質である。復元高台径6.2cm。

202SX009出土遺物 (Fig.58)

須恵質土器

捏鉢 (5) 復元口径27.6cm。調整は内外面とも回転ナデ。内面底部付近は使用によって研磨されている。東幡系。

202SX011出土遺物 (Fig.58)

石製品

滑石加工品 (6) 1面を除き、全ての面に加工が施されている。用途については不明。

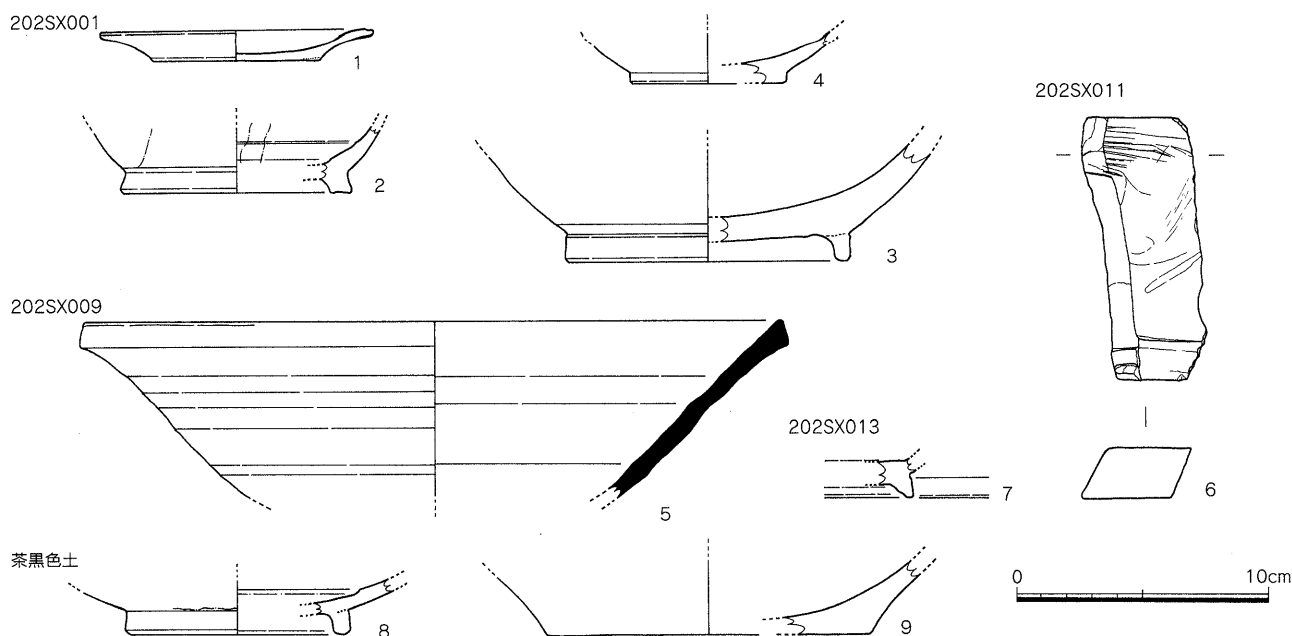


Fig.58 第202次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

202SX013出土遺物 (Fig.58)

緑釉陶器

碗c (7) 部分的に剥落しているが、内外面とも施釉されている。釉調は暗緑色で光沢がある。高台内面には僅かに段が付いている。外面の高台接合部分はU字形に凹んでいる。胎土は淡黄茶色土の土師質である。

各層出土遺物

茶黒色土出土遺物 (Fig.58、Pla.13)

灰釉陶器

段皿 (8) 復元高台径8.9cm。釉調は緑灰色で光沢があるが、ややムラがある。胎土は淡灰色で目立った砂粒もなく精製されている。内面は中央付近を窪ませ、段を付けている。段より内側は施釉されていない。高台内外面は施釉されず、高台畳付けには目跡が残す。

弥生土器

甕 (9) 底部と体部の境は明瞭な屈曲を付け、外反しながら立ち上がっていく。復元底径12.7cm。

(5) 小結

御笠川の南側に位置し、河川氾濫や重機等による土地の改変が著しく、遺構の残存状況は全体として良くない。最も高い部分にはピット等が明瞭に残っているため、削平を受けなければ、明確な生活痕跡が存在していた可能性が考えられる。

今回の調査で検出された2条の溝 (SD005とSD015) は、井上信正氏作成の条坊案によると左郭八条にあたる。また、2条の溝は削平され、部分的に残っている状況を示しているため、ずれた位置に存在するが、溝が続いていたとすると溝間は約4mで平行することになり、条坊の道幅が概ね3mで検出されている調査例からも、溝は道路側溝である可能性が十分考えられる。

8、第205次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀5丁目57-1で、1997（平成9）年5月15日に確認調査を実施し、現地表から北側で0.5m、南側で0.3mの深さで遺構面を確認し、南半部では複数の遺構面が展開していることが判明していた。1999（平成11）年2月に当該地において住宅建築（木造2階建）が計画され、家屋の構造上北側道路に面した部分で現地表面より0.6mの掘り下げが必要とされた。そのため、破壊される北端の6×6m部分の記録保存が必要となったため、発掘調査を1999（平成11）年3月16・17日に実施した。破壊を免れた部分は家屋下に保存されている。開発対象面積は295m²、調査面積は36m²である。調査は城戸康利が担当した。

(2) 基本層位

調査区は、御笠川の南約100m、「どんかん道」の北30mに位置する。遺構面は北から南へとゆるい傾

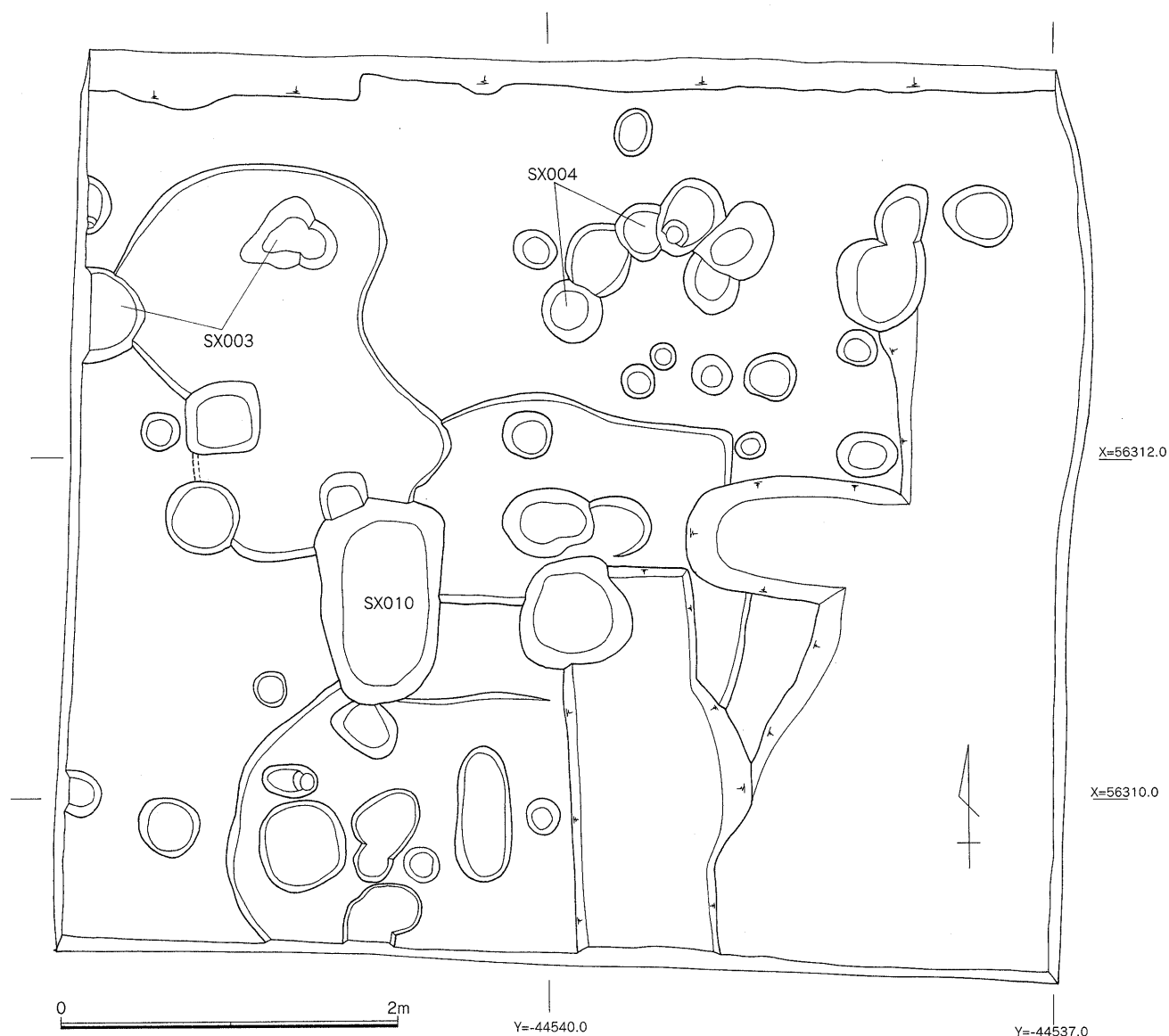


Fig.59 第205次調査遺構全体図（1/40）

斜で高くなっており、川への落ち際に位置していると考えられる。0.2m厚ほどの表土下には暗茶色土になるが、当該地を畑にするために客土をしたものと考えられる。客土の厚さは0.5mである。その直下に遺構面が現れる。したがって、遺構面は削平を免れたものが残存していると考えられる。地山は黄色粘質土の安定したものであるが、東端は灰色の砂層になっている。

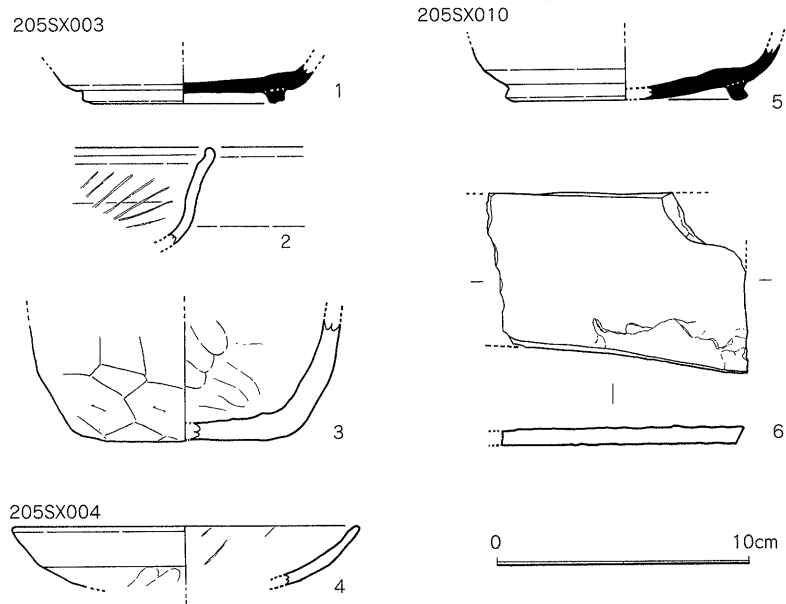


Fig.60 第205次調査出土遺物実測図 (1/3)

(3) 検出遺構 (Pla.10)

6×6mのはほぼ方形の調査区で小穴、土坑を検出した。北端および東側は攪乱が多い。小穴は掘立柱の掘り方の可能性はあるが調査区では確認できなかった。大きく浅い土坑は部分的に残る堆積土で一部にはその下層で遺構を検出した。

不明遺構

205SX003

調査区西側にある小穴群である。直径約0.4m、深さ0.1m程度である。灰褐色の埋土をしている。S-19を切っている。

205SX004

北側に展開する小穴群である。直径0.3mほどで深さは0.3～0.5mを測る。黒色の埋土である。S-5を切っている。

205SX010 (Pla.10・CD-63)

調査区中央で検出した性格不明の土坑である。長辺1.1m、短辺0.7mの略長方形をしている。深さは0.25mで、底部は南に高くなり、その差は0.1mほどである。埋土は灰褐色の単一層であった。S-8に切られ、S-19・21を切っている。

(4) 出土遺物 (図205-2)

不明遺構

205SX003出土遺物 (Fig.60、Pla.13)

須恵器

坏c (1) 高台径8.0cmを測る。外面底部は回転ヘラ切りで未調整である。色調は内外面とも明灰色を呈し、胎土には白色の粒子を含む。

坏 (2) 都城系の土師器坏である。内外をヨコナデした後、内面に暗文を施している。橙茶色を呈し、胎土は細かいが白色の粒子を含む。

壺×甕 (3) 壺または甕の底部片である。内面はナデ、外面は不定方向のヘラケズリ、底部は未調整である。よく焼けていて赤茶色を呈し、表面は微細なヒビが入っている。胎土には角閃石を含んで

いる。このほか縄目をもつ平瓦片も出土している。

205SX004出土遺物 (Fig.60)

土師器

丸底坏 (4) 口径13.8cmを測る。内面にミガキbの痕跡が確認される。内外面とも淡茶灰色を呈し、胎土に0.2cm以下の白色粒子を含む。

205SX010出土遺物 (Fig.60、Pla.13)

須恵器

坏c (5) 高台径9.6cmを測る。底部は回転ヘラ切りである。内外面ともに明灰色を呈し、よく焼けている。

石製品

用途不明品 (6) 板状の石である。厚さ0.7cm、幅7cmで3辺は粗い研磨で形を整えられている。平坦面は層理に沿って割れているようである。変成岩を使用している。

(5) 小結

調査区が狭小で遺跡の全容は判然としない。調査地は御笠川南岸の自然堤防上に位置していると考えられるが、道を挟んだ北側で行われた第202次調査では遺構が島状に残存していたことや、本調査区東側の地山が水流による堆積砂であることから、氾濫原もしくは河道の近くであった可能性が高い。そのような立地のなかで古代から中世前期の遺物を検出した。「どんかん道」の北30mに位置するが、中世以降の遺構ならびに遺物は検出しなかった。

V、調査まとめ

今回報告した調査をまとめると

- ・奈良時代に構築されたと推測される東西溝が検出された（191次）。
- ・「どんかん道」に沿う形で溝や連続土坑群が検出された（135・146・148次）。

第191次調査で検出されたSD010やSX001は奈良時代に構築され、幾度かの改変を重ねながら11世紀後半頃に埋没している。奈良時代の東西道路が発見される例は少なく、この遺構が道路と認められるならば、第178次調査以来のことになり、不明瞭な奈良時代の条坊復元する上で貴重な資料となる。

また、今回報告した調査で注目されるものは、「どんかん道」と平行する溝の確認である。第135次の切れ切れの溝群(135SD050・055・060・065)と第146次の溝群(146SD018・023・025)は隣接しているため、一連のものと考えられるが、第148次SD001とは南北差約30mあり、その性格は計算上では同一遺構とは言い難い。しかし、どんかん道の西側延長上で調査された第60次・61次・70次で斜行する道に沿う形で道路側溝ではないかといわれる溝が確認されている。そのため、この東西道路が当初から斜行していたのか、正方位で施工されていた道路が、御笠川の氾濫や都市変遷など様々な影響を受ける中で、現在のどんかん道のように斜行した道に変化したものなのか現時点では不明瞭というほかないが、現在のどんかん道のように斜行していたと見るならば、第135・146次の溝と第148次SD001は同一機能を持っていたとしても問題はない。

また、第135・146次の溝と第191・202次の南北距離は80m～85mと条坊を考える上ではわずかな誤差とは言い難い。さらに南方で確認されている第209次調査の東西路（S-90）との南北距離は、191SD010で264m、202SD015で268m、均等に3分割すれば88mと89mとなり、大雑把に言えば均等に溝が確認されているように見えるが、第209次調査より南側は92mの間隔をおいて東西路が確認されている。それぞれの誤差が全く異なる機能を持つ溝のためなのか、当初から間隔が異なっていたことによるものか意見が分かれるところであり、現状では言及できない。

以上のことから今回報告したそれぞれの溝が、条坊の東西道路か一条坊内をさらに細分する区画溝になるのかについては、調査面積が狭いこともあり明確には言い難く、今後の事例増加を待たなければならぬが、調査時から言われていたように、現在のどんかん道と合わせて、条坊を解明する上では興味深い情報である。

Tab. 1 検出条坊関連遺構任意中点座標値一覧

第135次調査

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		政庁南門中点からの距離 (m)		方位
		X	Y	南北距離	東西距離	
135SD050	東端任意中点	56253.20	-44703.70	-454.286	121.582	E-4° 25' 58" -N
	西端任意中点	56252.20	-44716.60	-455.415	108.692	
135SD055	東端任意中点	56255.80	-44686.30	-451.512	138.955	E-6° 6' 0" -N
	西端任意中点	56254.40	-44699.40	-453.043	125.870	
135SD060	東端任意中点	56251.70	-44704.70	-455.796	120.597	E-4° 53' 57" -N
	西端任意中点	56250.50	-44718.70	-457.136	106.610	
135SD065	東端任意中点	56253.40	-44685.70	-453.906	139.579	E-2° 59' 25" -N
	西端任意中点	56252.70	-44699.10	-454.740	126.187	

第146次調査

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		政庁南門中点からの距離 (m)		方位
		X	Y	南北距離	東西距離	
146SD018	東端任意中点	56252.579	-44676.331	-454.633	148.956	E-6° 30' 15" -S
	西端任意中点	56252.912	-44679.243	-454.329	146.040	
146SD023	東端任意中点	56252.999	-44672.635	-454.176	152.647	E-7° 1' 22" -S
	西端任意中点	56253.237	-44674.567	-453.957	150.713	
146SD025	東端任意中点	56252.792	-44677.222	-454.429	148.063	E-2° 55' 58" -S
	西端任意中点	56252.898	-44679.291	-454.344	145.993	

第148次調査

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		政庁南門中点からの距離 (m)		方位
		X	Y	南北距離	東西距離	
148SD001	東端任意中点	56220.80	-44540.08	-485.047	285.518	E-12° 4' 26" -N
	西端任意中点	56219.20	-44547.56	-486.722	278.054	

第191次調査

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		政庁南門中点からの距離 (m)		方位
		X	Y	南北距離	東西距離	
191SD010	東端任意中点	56332.255	-44663.8	-374.836	160.689	

第202次調査

遺構番号	計測位置	遺構中点座標値		政庁南門中点からの距離 (m)		方位
		X	Y	南北距離	東西距離	
202SD005	東端任意中点	56327.171	-44543.031	-378.711	281.503	E-1° 19' 28" -S
	西端任意中点	56327.251	-44546.491	-378.666	278.042	
202SD015	東端任意中点	56334.927	-44538.491	-370.910	285.965	
	西端任意中点	56334.927	-44533.391	-370.859	291.064	

南門中点座標 X=56708.68

Y=-44820.73

※数値は小数点以下第3位を五捨五入している。

X方向の-値は政庁から南へ移動したことを示す

Y方向の値は中軸線から東へ移動したことを示す

※ 距離は政庁中軸線の振れを基準に計算したもの。

政庁中軸線方位

N-0° 34' 24" -E

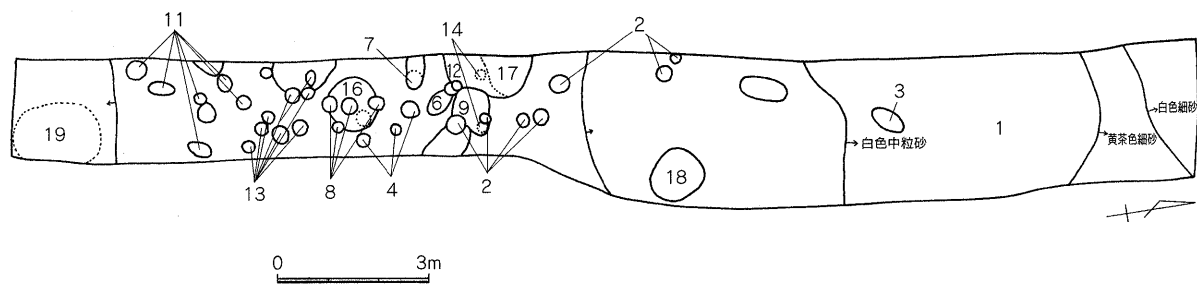


Fig.61 第124次調査略測図 (1/150)

Tab.2 第124次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	124SD001	河川	白色細粒砂←黄茶色細粒砂←白色中粒砂		鎌倉期～室町期	
2		ピット群			平安後期	
3		凹み	青灰色細粒砂		鎌倉期～室町期	
4		ピット群	黒灰色細粒砂		不明	
5		欠番				
6		ピット	灰黒色砂		平安前期末	
7		ピット	黒灰色細粒砂		平安後期以降	
8		ピット群	黒灰色細粒砂		鎌倉期	
9		凹み			平安期	
10		欠番				
11		ピット群	黒灰色細粒砂		平安後期	
12		凹み	灰黒色細粒砂		平安後期	
13		ピット群	灰黒色細粒砂		平安後期	
14		ピット群	灰黒色細粒砂	S-14→S-12→S-9	鎌倉期	
15		欠番				
16		凹み			平安後期	
17	124SK017	土坑			平安前期	
18	124SK018	土坑			平安後期	
19	124SK019	土坑	黒灰色粘土		平安後期	

Tab. 3 第124次調査 出土遺物一覧表

S-1 白色細粒砂

須 恵 器	坏c、甕
土 師 器	坏a(糸)
龍泉窯系青磁	碗Ⅱb(1)、Ⅰ4(1)、Ⅰ(3)、皿Ⅰ(1)
高麗青磁	碗Ⅲ(1)
緑釉陶器	碗〔京都〕
白 磁	碗Ⅱ1(1)、Ⅴ4b(1)、Ⅳ(2)、皿Ⅸ(3)
中国陶器	壺破片(1)、他器種：盤Ⅱ
瓦 器	碗c
瓦	類 丸瓦、平瓦(縄目)
弥生土器	器台
土製品	円盤型土製器

S-1 黄茶色細粒砂

須 恵 器	坏c、甕
土 師 器	丸底坏a(へ)、坏a
龍泉窯系青磁	碗Ⅰ(1)、ⅣⅠ(1)、Ⅳ(1)、Ⅱb(2)
同安窯系青磁	碗Ⅰb(1)
須恵質土器	こね鉢〔東播〕
白 磁	碗Ⅳ(1)、皿Ⅵ(1)、Ⅸ(2)
中国陶器	他器種小盤Ⅱ
瓦 器	碗c
瓦	類 平瓦(格子)

S-1 白色中粒砂

須 恵 器	供膳具、甕
土 師 器	坏a(糸)
龍泉窯系青磁	碗Ⅰ(1)、Ⅱb(1)、皿Ⅰ(1)
同安窯系青磁	碗Ⅰb(1)
白 磁	碗Ⅳ1c(1)
中国陶器	他器種：破片(1)
瓦 類	平瓦(縄目)
石 器	砥石

S-2

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a(へ)、煮沸具、丸底坏a(へ)、碗c、甕
白 磁	碗Ⅱ(4)
瓦 類	破片

S-3

須 恵 器	壺
土 師 器	坏a(へ、糸)、小皿a1(へ)
白 磁	碗Ⅱ(1)、Ⅳ(2)、皿Ⅸ(1)
須恵質土器	鉢
瓦 類	平瓦(格子)

S-4

須 恵 器	甕
土 師 器	丸底坏、小皿a1(糸)、鍋
瓦 器	碗
瓦 類	丸瓦

S-6

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a(へ、ⅤⅢ)
製塩土器	煎熬土器
黒色土器A	碗c1
灰釉陶器	壺
瓦 類	破片(縄目)

S-7

須 恵 器	坏、甕
土 師 器	丸底坏a(へ)、煮沸具、小皿a1(へ)
黒色土器A	碗c
白 磁	碗Ⅱ(2)、Ⅳ(1)、皿Ⅸd(釉取りなし)
瓦 類	破片

S-8

土 師 器	小皿a1(へ)、煮沸具
黒色土器A	碗
黒色土器B	破片、碗
越州窯系青磁	碗Ⅲ(1)
龍泉窯系青磁	碗Ⅰ(1)
白 磁	碗Ⅳ(1)
瓦 器	碗c
瓦 類	平瓦(縄目)
弥生土器	甕

S-9

須 恵 器	甕
土 師 器	供膳具

S-11

須 恵 器	坏、甕
土 師 器	坏(円盤状高台)、小皿a1(糸)、甕
瓦 類	平瓦(格子)

S-12

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a(へ)
白 磁	碗Ⅳ×Ⅴ(1)
瓦 類	平瓦

S-13

須 恵 器	供膳具
土 師 器	甕a(雲母)、坏
黒色土器A	碗
瓦 器	破片
瓦 類	破片(焼けている)
その他	炭化物

S-14

須 恵 器	破片
土 師 器	坏a(XV期)、碗c
越州窯系青磁	碗Ⅰ(1)
瓦 器	碗
瓦 類	平瓦(格子)

S-16

土 師 器	碗c1
製塩土器	煎熬土器
瓦 類	破片(縄目)

S-17

土 師 器	碗c1、煮沸具、坏
瓦 類	丸瓦(縄目)

S-18

土 師 器	丸底坏a(へ)、坏a(へ)、小皿a(へ)
白 磁	碗Ⅳ(1)、Ⅱ(1)
石製品	石鍋A群

S-19

須 恵 器	甕、蓋3
土 師 器	坏a(へ)、丸底坏a、鍋、小皿a2、碗c2
黒色土器B	碗c
白 磁	碗Ⅴ1(1)
瓦 類	平瓦(縄目、格子)

黄茶色土

須 恵 器	甕、蓋1、蓋c、坏c、壺d×f、蓋3、高坏
土 師 器	小皿a1(へ)、坏a(糸、XV期)、高坏、碗c2、煮沸具
製塩土器	煎熬土器
黒色土器A	甕(把手付)、碗c2、鉢
黒色土器B	碗
瓦 器	碗c、小皿
越州窯系青磁	碗Ⅱ(1)、Ⅰ5b(1)、Ⅰ(1)
龍泉窯系青磁	碗Ⅲ(1)、Ⅱb(3)、Ⅰ(2)
白 磁	碗Ⅳ(12)、Ⅴ1(7)、Ⅱ(5)、Ⅴ4(3)、小壺
緑釉陶器	碗〔防長系〕、碗
中国陶器	壺破片(2)、他器種破片(3)
瓦 類	平瓦(格子)、丸瓦(縄目)
その他	鉾澤

Z

土 師 器	小皿a1(糸)、坏a(糸)
龍泉窯系青磁	碗Ⅲ(1)、Ⅱb(1)
須恵質土器	こね鉢〔東播〕

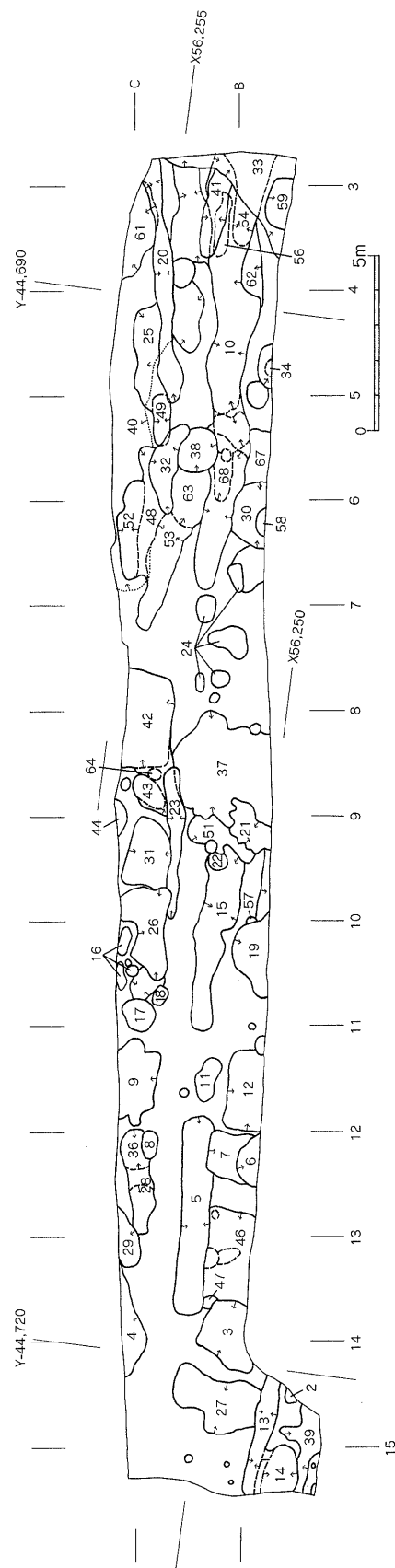


Fig.62 第135次調査略測図

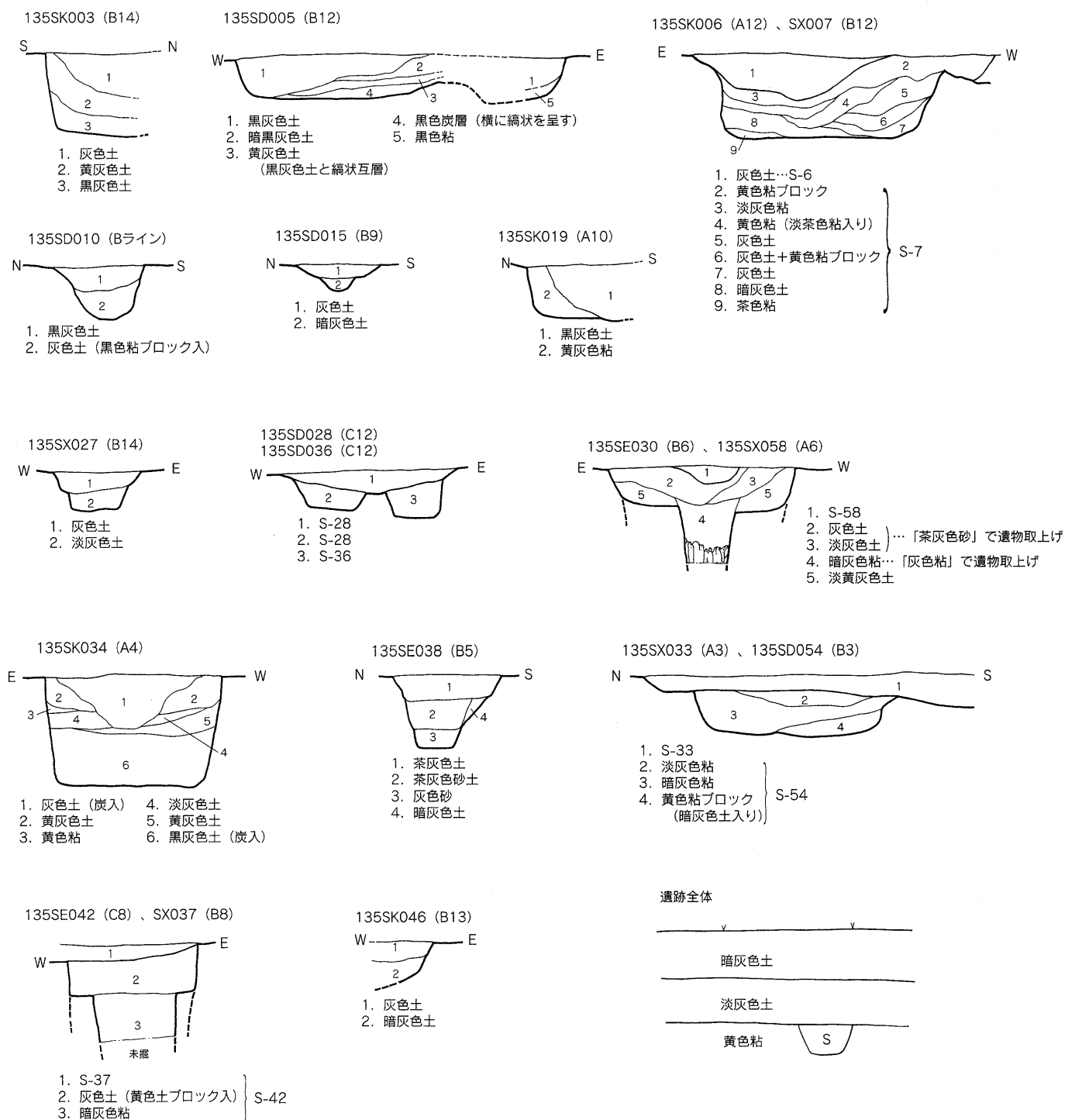


Fig.63 第135次調査遺構土層略図

Tab. 4 第135次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	135SX001	溜り	黒灰色土		12世紀～	A15
2		溜り	灰色土			A14
3	135SK003	土坑	灰色土←黄灰色土←黒灰色土		12世紀前～	B14
4		溜り	暗灰色土		11世紀前～	C14
5	(=135SD060)	溝	黒灰色土		12世紀中～	B12
6		土坑	暗灰色土	S-7→6	13世紀前～	A12
7		溜り	灰色土→黄灰色土	S-7→6		B12
8	(=135SD050)	溝	暗灰色土			B12
9	(=135SD050)	溝	灰色粘 (黄色粘ブロック混じり)		13世紀前～	C11
10	(=135SD065)	溝	黒灰色土		12世紀前～	Bライン
11	(=135SD060)	溝	灰色土			B11
12		溜り	灰褐色土		近世～	B11
13	135SD103	溝	黒灰色土	S-13→1	12世紀前～	A15
14		溜り	黒灰色土	S-14→1		A15
15	(=135SD065)	溝	灰色土		12世紀中～	B9
16		小穴群			13世紀後～	C10
17	(=135SD050)	溝				B10
18	(=135SD050)	溝				B10
19		土坑	黒灰色土		13世紀前～	A10
20	(=135SD055)	溝	暗灰色土		13世紀前～	B4
21		溜り				B9
22		小穴	灰色土			B9
23	(=135SD050)	溝	灰色土	ごく浅い		B8
24		小穴群				B7
25	(=135SD055)	溝	灰色土		12世紀中～	B4
26	(=135SD050)	溝	暗灰色土		13世紀前～	B10
27		溜り	灰色土 (黄色土ブロック入り) ←淡灰色土		12世紀前～	B14
28	(=135SD050)	溝	灰色土	28→29	13世紀前～	C12
29		溜り	灰色土	28→29		C12
30	135SE030	井戸	灰茶色砂土		9世紀後半～	B6
31	(=135SD050)	溝	暗灰色土		12世紀中～	B9
32	(=135SD055)	溝	灰色粘		12世紀中～	B5
33		溜り	茶灰色土			A3
34		土坑	暗灰色土		12世紀前～	A4
35		欠番				
36	(=135SD050)	溝	暗灰色土 (黄色粘ブロック入り)		13世紀前～	C12
37		溜り	灰色土		12世紀中～	B8
38	135SE038	井戸	茶灰色土		近世～	B5
39		溜り	暗灰色土			A15
40		整地	淡灰色粘+黄色粘			C4、5
41		溝	黒灰色土			B3
42	135SE042	井戸	灰色土		9世紀後半～	C8
43		土坑	暗灰色土		12世紀前～	B8
44		土坑	暗灰色土			C9
45		欠番				
46		溜り	灰色土 (黄色土ブロック入り) ←暗灰色土			B13
47		小穴	茶灰色土			B13
48		溜り	灰色土 (黄色土ブロック入り)		12世紀中～	B6
49	(=135SD055)	溝	灰色土		12世紀中～	B5
50	135SD050	溝	(=S-8, 9, 17, 18, 23, 26, 28, 31, 36)		13世紀前～	C9～12
51		溜り	灰色土 (黄色粘ブロック入り)			B9
52	(=135SD055)	溝	灰色土	S-52→48	12世紀中～	B6
53	(=135SD060)	溝	灰色土	S-53→48	12世紀中～	B6
54	(=135SD065)	溝	黒灰色土 (黄色土混じり)	S-54→10→33		B3
55	135SD055	溝	(=S-20, 25, 32, 49, 52, 53)		13世紀前～	B2～7
56		溝	暗灰色土	56→10→41		B3
57		小穴		57→19		A9
58		小穴		30→58		A6
59		土坑				A3
60	135SD060	溝	(=S-5, 11, 15)		12世紀中～	B9～13
61	135SX061	溜り	灰色粘			C3
62	(=135SD065)	溝	茶灰色砂			A3
63		溜り	暗灰色土 (黄色土ブロック入り)			B5
64		溜り	茶灰色土			B8
65	135SD065	溝	(=S-10, 54, 62, 68)		12世紀前～	B2～7
66		欠番				
67		溜り	灰色土			A5
68	(=135SD065)	溝	黄灰色土	S-68→10		B5

Tab. 5 第135次調査 出土遺物一覧表1

S-1黒灰色土

須恵器	壺c3、甕
土師器	坏a（ヘラ）、坏a（イト）、小皿a（イト）、丸坏、甕×鉢
黒色土器A	碗
瓦	鈿碗
越州窯系青磁	碗；I-2ウ(1)、II-2(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器×甕(1)
瓦	類丸瓦（二重格子）、平瓦（縄目、無文）
石製品	滑石製用途不明製品
土師質土器鉢	
緑釉陶器	合子(1)
国産陶器	甕（常滑）(1)
白磁	碗；II(1)、IV(7)、V-1c(1)、V-2×VIII-4(1)、V(2)、破片(4) 皿；VI×VII(2) 碗×皿(2)、鉢III(1)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(1)
土製品	焼土塊、瓦玉、炉壁（平瓦（格子目）が付着）

S-2

須恵器	坏
土師器	破片
瓦	類平瓦（格子）

S-3黒灰色土

須恵器	甕3、甕、甕a×b
土師器	碗c、甕
龍泉窯系青磁	碗；I-4(1)
瓦	類丸瓦（格子）、平瓦（無文）
白磁	碗；II×皿V～VII(1)
石製品	滑石製不明製品

S-3灰色土

須恵器	甕3、甕、甕
土師器	小皿a、甕3
越州窯系青磁	碗；I×III(1)、III(1)
同安窯系青磁	碗、破片(2) その他；破片(1)
瓦	類丸瓦（縄目）、平瓦（無文）
白磁	碗；IV(3)、II×IX(1)、破片(5) 皿；III(1) 碗×皿(2)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(3) 甕(1)
土製品	瓦玉(1)

S-3黄灰色土

須恵器	坏a、坏c3、甕c、甕、甕e(肥後系?)、甕
土師器	坏a(イト)、丸坏、小皿a(ヘラ)
越州窯系青磁	碗；大碗I-2ウ(1)
龍泉窯系青磁	碗；I(1)
同安窯系青磁	皿；I-2b(1)
瓦	類平瓦（縄目、無文）
石製品	砥石、礬石(黒)
緑釉陶器	碗(1)、破片(1)
白磁	碗；II(1)、V～VIII(1)、破片(3) 皿；破片(1) その他；破片(2)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(1)
土製品	瓦玉(1)

S-4暗灰色土

須恵器	甕c（肥後産）、甕
土師器	坏a、小皿a（ヘラ）、小皿a2、碗c
瓦	類平瓦（格子）
緑釉陶器	碗(1)、碗×皿(1)
土製品	円錐状土製品、瓦玉

S-5黒色粘

須恵器	坏c3、皿、甕
土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）、脚付鉢、丸坏
黒色土器A	碗
瓦	鈿碗
越州窯系青磁	碗；I×III(1)
龍泉窯系青磁	碗；I(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(2) 皿；I-2b(1)、I(1)
瓦	類丸瓦（縄目、格子）、平瓦（縄目、格子、無文）
石製品	礬石（白）
緑釉陶器	破片(1)
国産陶器	甕（常滑）(1)、甕（備前）(1)
白磁	碗；II(1)、IV-1a(1)、IV(1)、V-1×VIII-2(1)、V～VIII(2) V-4×VIII-1・3(1)、V～VII(1)、VI×VII(1)、VIII(2)、破片(7) 碗×皿(2)、耳蓋(1)
青白磁	合子(1)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(1) 甕；IV(2)
土製品	焼土塊
その他	碗×特殊器種(青磁)

S-5黒灰色土

須恵器	甕、坏c3
土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）、小皿a（ヘラ）、碗c、脚付鉢、器台
黒色土器B	碗
瓦	鈿碗
越州窯系青磁	碗；I(2)、III(1)
龍泉窯系青磁	碗；I(3) 皿；破片(2)
同安窯系青磁	碗；I-1b(11)、破片(2) 皿；I-2b(2)、I(1)、破片(1)
瓦	類丸瓦（格子）、平瓦（文字「平井」・格子） 平瓦（縄目、二重格子、格子、無文）
石製品	石鉢、礬石
土師質土器鉢A、鉢	
須恵質土器鉢（東播系）	
灰釉陶器	碗(1)
国産陶器	甕（備前×常滑）(1)、甕（備前×常滑）(1)
白磁	碗；II(2)、IV-1a(2)、IV-1b(1)、IV(8)、V-1c(1)、V-4(1)、V(2) V-1×VIII-2(2)、V-4×VIII-1・3(3)、V～VII(6)、VIII(3) 破片(16) 皿；II-2(1)、III-2(4)、III(3)、II×III-2(1)、V×VIII(1)、 V～VII(5)、VI～VII(1)、V～VIII(1)、VIII-1b(1)、III×碗VIII(1) 甕他；耳蓋×水注（II系）(2)、甕×水注(未分類)(1)、甕×水注(1) 破片(3)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(4)、耳蓋(2)、破片(1) 鉢；I(1)、III(1)、破片(新種)(1)、破片(1) 甕；IV(2)、破片(2)
青白磁	合子(1)
縄文土器	深鉢
土製品	焼土塊

S-6

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ）、丸坏
龍泉窯系青磁	碗；II-b(1)
瓦	類平瓦（縄目）、平瓦（格子、無文）
須恵質土器鉢（東播系）	
白磁	碗；V-2(1)、V×VII(1)、V～VII(1) 皿；V～VII(1) その他；破片(1)

S-7

須恵器	坏c3、甕、甕d
土師器	坏a（イト）、小皿a（ヘラ）、丸坏、碗c、甕、器台
瓦	鈿碗
同安窯系青磁	皿；I(1)
瓦	類丸瓦（格子、無文）、平瓦（格子）、平瓦（無文・瓦質）
石製品	砥石
須恵質土器甕	
白磁	碗；II(3)、IV(2)、V-2c(1)、V-2(1)、V-4×VIII-1・3(1)、破片(8) 皿；II×III(1) その他；破片(3)
中国陶器	鉢(1)
土製品	坏型土製品（手づくね）、焼土塊

S-7灰色土

土師器	小皿a（イト）、丸坏、甕
瓦	鈿碗
龍泉窯系青磁	碗；II(1)
瓦	類平瓦（格子＋十字）、平瓦（格子、無文）
石製品	砥石、円盤状、and-f
須恵質土器鉢（東播系）、甕	
白磁	碗；II×VIII(1)、IV×VIII(1)、V-1×VIII-2(2)、V(1)、破片(3) 皿；V～VII(3) その他；破片(1)
土製品	焼土塊

S-8

須恵器	坏、鉢、甕b
土師器	坏a（ヘラ）、碗c
瓦	類平瓦（格子）
中国陶器	甕×甕(2)
土製品	焼土塊

S-9

土師器	坏a、碗c
龍泉窯系青磁	碗；I(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(1)
瓦	類平瓦（縄目、格子、無文）
土師質土器鉢×鉢	
白磁	碗；VIII(1)、破片(1) 皿；III(1) 水注×甕（II系）(1)、破片(2)
土製品	瓦玉、焼土塊

S-10灰色土

須恵器	甕、甕d
土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）、丸坏
瓦	鈿碗
龍泉窯系青磁	碗；II-b(1)、破片(1)
同安窯系青磁	皿；破片(1)
瓦	類平瓦（格子）、丸瓦（無文）
白磁	碗；IV(2)、V-4×VIII-1・3(2)、VIII(1)、破片(1) 皿；V～VII(1)、VI×VII(1) その他；破片(1)
中国陶器	甕；甕×耳蓋(1) 甕；IV(1)

Tab.6 第135次調査 出土遺物一覧表2

S-10黒灰色土

須 恵 器	坏c3、蓋2、蓋4、甕、蓋aXb
土 師 器	坏a（ヘラ）、坏a（イト）、小皿a（イト）、碗c
黒色土器B	碗
瓦	器碗
越州窯系青磁	碗；I(1)、II(1) 舍利子(1)
龍泉窯系青磁	碗；I(1)、破片(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(4)、III(1)、破片(3)
	皿；I(1)、破片(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器蓋(1)
瓦	類軒丸瓦、丸瓦（縄目、格子、二重格子、無文）
石 製 品	墓石（白）
土師質土器鉢、鉢	
白	磁碗；IV(7)、V(1)、V-2b(1)、V-3(1)、V-1×VIII-2(2)、V～VII(1) V-4×VIII-1・3(2)、VI×VII(1)、VIII(2)、破片(13) 皿；III-2(1)、破片(1) 水注×蓋（III系）(1)、破片(3)
中国陶器	蓋；蓋×耳蓋(2)、破片(1)
	蓋×水注(1)
土 製 品	焼土塊

S-11

土 師 器	坏九坏
瓦	器碗
瓦	類平瓦（無文）
白	磁碗；V-1×VIII-2(1)

S-12

須 恵 器	破片
土 師 器	坏九坏
瓦	類丸瓦
肥前系陶磁器	破片
白	磁碗；VI-b(1)、破片(1)

S-13

土 師 器	坏a（イト）、小皿a（ヘラ）、碗c
瓦	器碗
瓦	類軒丸瓦、軒平瓦

S-14

須 恵 器	坏X鉢、蓋X鉢、甕
土 師 器	坏a（イト）、坏a（ヘラ）、小皿a（イト）、小皿a（ヘラ）
黒色土器A	碗
瓦	器碗
越州窯系青磁	皿；II(1)
瓦	類平瓦（縄目、無文）
白	磁碗；IV(2)、V-4×VIII-1・3(1)、破片(5) 皿；VIII(1) 碗×皿(1)
青 白	磁皿(1)
土 製 品	焼土塊

S-15暗灰色土

須 恵 器	甕、蓋
土 師 器	坏a、坏c、碗c
同安窯系青磁	皿；I-2b(1) その他破片(1)
瓦	類丸瓦（格子、無文）、平瓦（縄目）
白	磁碗；破片(1)
石 製 品	用途不明滑石製品

S-15灰色土

須 恵 器	蓋（肥後系）、鉢b、甕、蓋d
土 師 器	坏a（ヘラ）、坏a（イト）、小皿a（イト）、皿a（イト）、碗c
黒色土器B	碗
瓦	器碗
越州窯系青磁	碗；I-4(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(3)、I(1)
瓦	類平瓦（縄目、格子、無文）
土師質土器鉢	
須恵質土器甕	
白	磁碗；IV(2)、破片(1)
中国陶器	蓋；蓋×耳蓋(1)
	鉢；VI(1)
金属製品	鐔

S-16

須 恵 器	甕
土 師 器	坏
白	磁皿；IX(2) (S-17と接合)
瓦	類平瓦（格子）

S-17

須 恵 器	甕、蓋X鉢
土 師 器	坏a（イト）
瓦	類平瓦（無文）
白	磁碗；破片(1)
	皿；IX(1) (S-16と接合) その他；破片(1)
中国陶器	器蓋(1)

S-18

土 師 器	坏a（イト）
白	磁碗；破片(1)

S-19黄灰色粘

須 恵 器	蓋c
土 師 器	坏a（イト）、丸坏
瓦	器碗
同安窯系青磁	碗；破片(1)
瓦	類丸瓦（格子、無文）、平瓦（縄目、格子）
石 製 品	石鉢
白	磁碗；IV-1a(1)、IV(1)、V-4×VIII-1・3(1)、VIII(1)、破片(1)
土 製 品	丸玉、焼土塊

S-19黒灰色土

須 恵 器	甕、蓋、高坏
土 師 器	坏a（イト）、小皿a（イト）、碗c、丸坏、甕a
黒色土器B	碗c
瓦	器碗
越州窯系青磁	碗；I-1(1)、I-5(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(1)
瓦	類丸瓦（格子）、平瓦（縄目、格子、無文）
石 製 品	石鉢、チャート原石
土師質土器鉢	
須恵質土器鉢（東播系）	
灰釉陶器	皿(1)
国産陶器	甕（備前X常滑）(1)
白	磁碗；II(2)、IV(6)、V-4b(1)、V(1)、V-1×VIII-2(1)、VI×VII(1) VIII(1)、破片(2) 皿；II-1(1) 破片(1)
中国陶器	蓋；IX(1)、蓋V×耳蓋V-2(1)
土 製 品	瓦玉、紡錘車（瓦二次利用）、焼土塊

S-20暗灰色土

須 恵 器	蓋c、蓋、甕
土 師 器	小皿a（イト）、甕把手、破片
瓦	器碗
龍泉窯系青磁	碗；I-4(1)、II-b(1)
瓦	類丸瓦（格子、無文）、平瓦（無文）
須恵質土器鉢（東播系）	
白	磁碗；V(1)、V-4×VIII-1・3(1)、VIII-1(1)、VIII(1)、破片(2) 皿；III(1)、V～VII(1)
中国陶器	蓋；耳蓋(2)

S-21

須 恵 器	坏a、甕
土 師 器	坏a
黒色土器B	碗
同安窯系青磁	破片(1)
瓦	類丸瓦（格子）
白	磁碗；IV(1)、破片(2)

S-22

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a（イト）、甕X鉢
瓦	器碗
白	磁碗；V-3(1)

S-24

須 恵 器	坏a、甕
土 師 器	坏a、甕X鉢
瓦	類丸瓦（無文）、平瓦（縄目、格子）
石 製 品	墓石（白）

S-25灰色土

須 恵 器	蓋1、坏c3、甕
土 師 器	蓋3、甕把手、器台
瓦	類丸瓦（格子）、平瓦（無文）
同安窯系青磁	碗；破片(1)
	破片(1)
瓦	類丸瓦（格子）、平瓦（無文）
白	磁碗；II(1)、IV(7)、V-4b×c(1)、V-4×VIII-1・3(1)、破片(5) 皿；III(1)
中国陶器	蓋；蓋×耳蓋(1)
黒釉陶器	天目碗(1)
土 製 品	瓦玉

S-26

須 恵 器	坏c3、甕、蓋
土 師 器	坏aX小皿a（イト）
黒色土器A	碗
瓦	類平瓦（二重格子）、平瓦（格子）
白	磁碗；II(1)、IV-1(1)、IV(1)、V-2b(1)、V(1) 皿；破片(1) その他破片(2)
中国陶器	蓋；蓋×耳蓋(2)

S-26暗灰色土

須 恵 器	坏
土 師 器	甕
龍泉窯系青磁	碗；I(1)
須恵質土器鉢（東播系）	
白	磁碗；IV(3)、V-3(1)、V(1)、V～VIII(1) 皿；VI×VII(1)
中国陶器	甕；破片(1)

Tab.7 第135次調査 出土遺物一覧表3

S-27淡灰色土

須恵器	坏a、甕
土師器	坏a(イト)、坏c3、高坏
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(無文)
白磁	皿; VII-2a(1)

S-27灰色土

須恵器	坏c3、蓋c
土師器	小皿a(イト)、小皿a(ヘラ)、高坏
瓦	類 碗
越州窯系青磁	碗; I(1)
同安窯系青磁	碗; II(1)
輸入陶磁器(未分類)	破片(1)
瓦	類 平瓦(縄目、格子、無文)
石製品	滑石片
須恵質土器	鉢(東播系)
白磁	碗; II-3×4(1)、IV-a(2)、IV(2)、IV×V(1)、V-1×VIII-2(1) 皿; V(1)、破片(4) 破片(4)

S-28灰色土

須恵器	坏c3、蓋2、蓋c、蓋蓋、甕、蓋e
土師器	小皿a(イト)、丸坏、碗c、甕、器台
黒色土器A	坏a
越州窯系青磁	合子(1)
龍泉窯系青磁	碗; II-b(1)
同安窯系青磁	皿; 破片(1)
瓦	類 薄(無文)、軒平瓦、丸瓦(格子)、平瓦(縄目、格子)
石製品	砥石、石鉢A、石鉢
土師質土器	鉢B
須恵質土器	甕、破片(篠簞系)
緑釉陶器	蓋(1)
灰釉陶器	碗(1)
白磁	碗; II(1)、IV-a(1)、IV(1)、V-1(1)、V-2b(1)、V(3)、 V-2×VI-1(1)、V-4×VIII-1・3(1)、V~VIII(1)、破片(2) 皿; II-1(1)、IX-2(1) 水注×蓋(1)、破片(4)
中国陶器	蓋; 蓋×耳蓋(2)
土製品	焼土塊、轉羽口

S-30茶色砂土

須恵器	坏c3、甕
土師器	碗c、甕
黒色土器A	碗(薩摩産)
瓦	類 丸瓦(格子)

S-30灰色粘

須恵器	坏、蓋b
土師器	坏d、甕
黒色土器A	碗
瓦	類 丸瓦(無文)

S-30

須恵器	坏、鉢b、蓋b、蓋d
土師器	坏a、碗c、甕
黒色土器A	碗
土製品	埴埴

S-31暗灰色土

須恵器	坏c3、甕、蓋a×b
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
瓦	類 碗
同安窯系青磁	碗; I-1b(1)
瓦	類 平瓦(縄目、格子)
石製品	砥石、礬石
瓦質土器	甕
緑釉陶器	碗(京都産)(1)
白磁	碗; II-4×5(1)、IV(5)、V-1×VIII-2(1)、V-4×VIII-1・3(1) VIII(1)、破片(6) 皿; III(1)、V~VII(1) 水注×耳蓋(III系)(2)、破片(4)
中国陶器	鉢; VI(1) 甕; 破片(1) 蓋×耳蓋(2)
弥生土器	蓋×甕
土製品	瓦玉

S-32灰色粘

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	碗; I(1)、破片(1)
同安窯系青磁	碗; I-1c(1)、破片(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器蓋×甕(1)
瓦	類 平瓦(縄目、格子)
白磁	碗; II×V×VIII(1)、V-4×VIII-1・3(1)、V(1)、VII(1) V~VIII(2)、破片(1)、碗×皿(1)
中国陶器	蓋×耳蓋(1)
土製品	須恵器片の二次利用品

S-33茶灰色土

須恵器	蓋3、甕、蓋a×b
土師器	坏a(イト)、坏c3、小皿a(イト)、碗c
越州窯系青磁	碗; I(1)
龍泉窯系青磁	碗; I(3)
輸入陶磁器(未分類)	破片(1)
同安窯系青磁	碗; I-1b(1)、破片(1)
瓦	類 平瓦(格子)
石製品	礬石(黒)、石鉢、砥石
須恵質土器	鉢(東播系)
肥前系陶磁器	染付皿(1)
国産陶器	蓋(1)
白磁	碗; IV(2)、V~VII(2)、VIII-1(1)、破片(9) 皿; VIII-2c(1)、IX-1(1) 水注×蓋(III系)(1)、破片(5)
青白磁	蓋(1)
中国陶器	鉢; I(1)、すり鉢(1)
金属製品	鐔
土製品	瓦玉
その他	産地不明染付皿(1)

S-34黄茶灰色土

土師器	坏a(イト)
黒色土器A	碗
瓦	類 丸瓦(無文)

S-34暗灰色土

須恵器	坏c3、甕
土師器	坏a(イト)、坏a(ヘラ)、小皿a(イト)、小皿a(イト・赤色顔料付着) 蓋c、碗c
黒色土器A	碗
龍泉窯系青磁	碗; I-2b(1)
瓦	類 丸瓦(格子)
石製品	砥石、石鉢
須恵質土器	鉢(東播系)
白磁	碗; V-4a×VIII-3(1)

S-34黒灰色土

須恵器	破片
土師器	坏a
龍泉窯系青磁	碗; I-2(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器蓋×甕(1)
白磁	破片(1)
弥生土器	蓋×甕
土製品	焼土塊

S-36暗灰色土

土師器	坏a(イト)、碗c
龍泉窯系青磁	碗; II(1)
同安窯系青磁	碗; I-1b(1)
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(縄目、格子)
石製品	石鉢
国産陶器	甕(備前×常滑)(2)
白磁	碗; I(1)、IX×V(1)、IV-1a(1)、V-4a×VIII-3(1)、VIII-1(1) 破片(1) 蓋×水注(III系)(2)
中国陶器	甕; 破片(1) 水注×蓋(1)

S-37灰色土

須恵器	蓋3
土師器	坏a(イト)、坏a、坏c3、碗c、甕
瓦	類 碗
龍泉窯系青磁	碗; II-b(1)
同安窯系青磁	碗; 破片(1)
瓦	類 丸瓦(格子、無文)、平瓦(縄目)
須恵質土器	鉢(東播系)
国産陶器	甕(備前×常滑)(1)
白磁	碗; II(2)、IV(2)、V-4×VIII-1・3(2)、V~VII(1) VIII(1)、破片(2) 皿; III-1(1)、III(1)、IX(1)
中国陶器	蓋×水注(1)
縄文土器	浅鉢
土製品	瓦玉

S-37

須恵器	坏c3、甕、蓋b、蓋d
土師器	小皿a(ヘラ)、碗c
黒色土器A	碗×皿
龍泉窯系青磁	碗; I(1)
瓦	類 平瓦(縄目)、平瓦(格子)
国産陶器	甕(備前×常滑)(1)
白磁	碗; II(1)、IV(2)、破片(3) 皿; V~VII(1)、V×VI(1)、破片(1) 碗×皿(1)、破片(1)
中国陶器	鉢; 破片(1) 甕; 破片(2)
石製品	石鉢
土製品	焼土塊

Tab. 8 第135次調査 出土遺物一覧表4

S-38茶灰色砂土

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a(イト)、甕a
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器甕×壺(1)
瓦	類 丸瓦(無文)、平瓦(縄目)
白	磁 碗; IV(1)、V~VIII(1) 碗×皿(1)
	蓋; 破片 (III系) (1)
金 属 製 品	洋

S-38灰色砂

須 恵 器	坏×甕、甕
土 師 器	坏a(イト)、坏a、小皿a(イト)、碗c
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(縄目、格子)
石 製 品	石鉢A
白	磁 碗; II×IV(1)
	皿; V~VII(1)
金 属 製 品	洋
そ の 他	石灰

S-38茶灰色土

須 恵 器	坏c3
土 師 器	坏a(イト)、小皿a(イト)、丸坏、碗c
瓦	類 碗
同安楽系青磁	皿; I-1b(1)、I(1)
瓦	類 丸瓦(縄目、格子)、平瓦(縄目、二重格子)
石 製 品	石鉢B
土 師 質 土 器	鍋×鉢
瓦 質 土 器	甕
国 産 陶 器	碗(1)、甕(2)、甕(備前×常滑)(1)、壺×甕(1)
白	磁 碗; IV-1a(1)、VIII(1)、VII×VIII(1)
中 国 陶 器	鉢; I(1)
土 製 品	焼土塊

S-39

土 師 器	坏a(ヘラ)、甕×鉢
瓦	類 碗
瓦	類 丸瓦(縄目)、平瓦(縄目)
木 製 品	木炭
国 産 陶 器	甕(備前×常滑)(1)

S-40

須 恵 器	坏c3、坏、甕、壺×鉢
土 師 器	坏a(イト)、甕
黒色土器A	碗c
龍泉窯系青磁	碗; I(1)、II-b(1)
	皿; I-2b(1)
同安楽系青磁	碗; I-1b(1)
輸入陶磁器	朝鮮系無釉陶器壺×甕(1)
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(縄目、格子)
須 恵 質 土 器	鉢(東播系)
白	磁 碗; V(1)、V-4×VIII-1・3(1)、VIII-1(1)、破片(1)
	碗×皿(1)、水注×耳壺(II系)(1)、水注×耳壺(1)、破片(1)
中 国 陶 器	壺×耳壺(2)、壺×甕(1)
土 製 品	板状土製品

S-41黒灰色土

須 恵 器	坏c3、蓋c、甕
土 師 器	坏a(ヘラ)、坏a、小皿a(イト)、丸坏
瓦	類 碗
龍泉窯系青磁	碗; I-1a(1)
同安楽系青磁	碗; I-1b(1)、III-1(1)
瓦	類 丸瓦(縄目)、平瓦(縄目)
石 製 品	石鉢
白	磁 碗; V-2a×VI-1a(1)、V-4b(1)、VIII-2×3(1)、VIII(1)、破片(3)
	その他; 破片(1)
中 国 陶 器	耳壺×壺(1)

S-42灰色土

須 恵 器	坏c3、坏c2、蓋c、甕、壺、壺×瓶、高坏
土 師 器	坏a、皿、碗c、甕、甕a、高坏
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
瓦	類 軒平瓦、丸瓦(格子)、平瓦(二重格子、格子、縄目)
緑 釉 陶 器	碗×皿(1)
白	磁 碗; I(1)、破片(1)
弥 生 土 器	甕

S-42暗灰色粘

須 恵 器	坏c3、坏×皿、蓋、壺a、壺d
土 師 器	坏a、小皿a2、碗c、甕a、甕
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(二重格子、縄目、格子)
石 製 品	石鉢
緑 釉 陶 器	碗(1)

S-43暗灰色土

須 恵 器	坏、甕
土 師 器	坏a(ヘラ)、小皿a(イト)、甕×鉢
龍泉窯系青磁	碗; I-4(1)
須 恵 質 土 器	鉢(東播系)
白	磁 碗; V~VIII(1)
	水注×壺(1)、破片(1)
弥 生 土 器	甕(板付式)
土 製 品	焼土塊

S-44暗灰色土

須 恵 器	蓋a×b
土 師 器	坏a(ヘラ)、碗c
須 恵 質 土 器	甕
白	磁 碗; IV(1) その他; 破片(2)
土 製 品	焼土塊

S-46灰色土

須 恵 器	坏c3、蓋c、甕(赤色顔料付着)、甕、鉢b、ハソウ
土 師 器	坏a(イト)、丸坏、碗c、脚付鉢、甕、器台
黒色土器A	碗
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器(壺×甕) (1)
瓦	類 平瓦(縄目)、平瓦(格子)
石 製 品	玄武岩ブレード
国 産 陶 器	壺×甕(1)、甕(1)
白	磁 碗; IV(1)、V-1×VIII-2(1)、VI(1)、破片(1)
	皿; V~VII(1) 蓋; 破片(1)

S-46暗灰色土

須 恵 器	蓋、甕
土 師 器	坏a(イト)、小皿a(ヘラ×イト)、甕a
黒色土器A	碗
瓦	類 碗
瓦	類 丸瓦(無文)、平瓦(格子)
白	磁 碗; 破片(4)
	皿; III(1)、V~VII(1) その他; 破片(3)
中 国 陶 器	壺×鉢(1)、水注(III系)(1)

S-47

須 恵 器	壺×蓋
土 師 器	丸坏
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器壺(1)
瓦	類 平瓦(格子)
白	磁 碗; 皿VI-2b(1)

S-48灰色土

須 恵 器	甕
土 師 器	坏a(イト)、小皿a(イト)
黒色土器A	碗
瓦	類 碗
龍泉窯系青磁	碗; I-1a(1)、I(「金玉満堂」)(1)、I(1)
同安楽系青磁	碗; I-1b(1)、破片(1)
	皿; 破片(1)
瓦	類 軒平瓦(老司式)、丸瓦(格子)、平瓦(二重格子、格子)
石 製 品	磁石(砂岩)、石鉢
土 師 質 土 器	鍋×鉢
須 恵 質 土 器	鉢(東播系)
国 産 陶 器	壺(1)、ガイシ(1)
白	磁 碗; I(1)、IV(2)、V-4×VIII-1・3(1)、破片(4)
	水注×壺(1)
中 国 陶 器	鉢; I(1)
	甕; IV(1)
	水注×耳壺(1)、壺×耳壺(1)、壺×鉢(1)

S-49灰色土

土 師 器	坏a(イト)
瓦	類 平瓦(無文)
須 恵 質 土 器	甕
白	磁 碗; VIII(1)
中 国 陶 器	壺; 破片(1)

S-51

土 師 器	破片
龍泉窯系青磁	碗; 破片(1)
同安楽系青磁	皿; 破片(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器壺×甕(1)
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(縄目)
白	磁 破片(1)

S-52灰色土

須 恵 器	小壺
土 師 器	坏a×小皿a(イト)、高坏蓋、甕把手、器台
瓦	類 碗
越州窯系青磁	碗; I-2ア(1)、I-2ウ(1)、I-2ab×III-1b(1)
龍泉窯系青磁	碗; I-3a(1)、I(1)
同安楽系青磁	碗; I-1c(1)
	皿; 破片(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器壺×甕(1)
瓦	類 平瓦(文字「佐」)、平瓦(縄目、格子)
国 産 陶 器	甕(備前×常滑)(1)
白	磁 碗; IV(1)、V-4c(1)、V(1)、VIII-2×3(1)
	皿; V~VII(1)
	破片(1)
中 国 陶 器	壺; 壺×耳壺(2)、耳壺(1)
	鉢; I(2)、IV(1)

Tab. 9 第135次調査 出土遺物一覧表5

S-53灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、坏×小皿a(イト)、碗c、丸坏
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗
瓦	筒
同安楽系青磁	碗：I-1b(1)
瓦	類 丸瓦(格子、無文)、平瓦(格子、無文)
石製品	石鍋B
土師質土器	甕×鉢
須恵質土器	甕
緑釉陶器	碗(1)
白磁	碗：IV-1(1)、IV(1)、破片(未分類)(1)、破片(1)
	皿：III(1)
	破片(2)
中国陶器	甕、甕×耳蓋(1)、耳蓋(1)
	甕×甕(2)
土製品	瓦玉、焼土塊

S-54黒灰色土

須恵器	坏c3、坏c1×2、甕(環状把手)、甕b
土師器	坏a(イト)、小皿a(ヘラ)、甕
瓦	筒
龍泉窯系青磁	碗：I-2(1)
同安楽系青磁	皿：I-2b(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器破片(1)、朝鮮系無釉陶器甕×甕(1)
瓦	類 軒丸瓦、平瓦(縄目)
石製品	石鍋
国産陶器	甕(備前×常滑)(1)
白磁	碗：V-2a×VIII-4(1)

S-54暗灰色土

須恵器	甕a×b
土師器	坏a(イト)
黒色土器A	碗
瓦	類 軒丸瓦、丸瓦(無文)

S-57

土師器	丸坏
-----	----

S-58

須恵器	甕×鉢
土師器	丸坏、碗c、甕
土師質土器	脚付鉢

S-59

須恵器	碗
土師器	坏a(イト)
須恵質土器	鉢(瀬窯系)
白磁	皿：V～VIII(1)
	甕×水注(1)、破片(1)

S-61灰色粘

須恵器	甕、甕
瓦	類 丸瓦(無文)、平瓦(格子)

S-62茶灰色砂

須恵器	甕3
土師器	坏a×小皿a(イト)
同安楽系青磁	皿：II(1)
金属製品	滓

S-63暗灰色土

須恵器	坏×甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、坏c×碗c、小皿a×坏a(イト)
黒色土器A	碗
越州窯系青磁	碗：I-2aウ(1)
瓦	類 丸瓦(無文)、平瓦(格子)
白磁	碗：II(1)、V-4b×c(2)
	破片(2)
金属製品	滓
土製品	糠羽口、焼土塊

S-64茶灰色土

土師器	坏c3、碗
瓦	類 丸瓦(格子)
土製品	焼土塊

S-67

須恵器	甕
黒色土器A×B	碗
白磁	水注×甕(1)

S-68

須恵器	坏c3、坏IV
土師器	碗c
龍泉窯系青磁	碗：I(1)
瓦	類 丸瓦(無文)、平瓦(縄目、無文)
須恵質土器	鉢(東播系)、鉢
白磁	碗：II(1)、V-4×VI×VII(1)
	碗×皿(1)
中国陶器	鉢：III(1)
	甕、破片(1)
	水注×甕(1)
土製品	伊壁×焼土塊

暗灰色土

須恵器	坏c3、甕c、甕
土師器	坏a(イト)、碗c、甕、高坏
越州窯系青磁	碗：I-1(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(3)、II-b(2)、II(1)、破片(4)
同安楽系青磁	碗：III(1) 皿：I(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器甕×甕(1)
瓦	類 軒平瓦(老司式)、丸瓦(無文)、平瓦(縄目、無文)、サン瓦
石製品	石鍋
土師質土器	鍋A
肥前系陶磁器	染付：丸坏(3)、丸碗(1)、碗(5)、皿(1)、重ね鉢(1)
	鉢(1)、破片(1)
国産陶器	碗(2)、皿(1)、大皿(2)、坏(1)、甕(常滑)(1)、甕(1)、甕(1)
	甕×鉢(1)、甕×瓶(1)、破片(3)
国産磁器	坏(4)、破片(5)
白磁	碗：II(4)、IV-1a(1)、IV-1(3)、IV(9)、V-1×2(1)、V(2)
	V-1×VIII-2(3)、V-1×VIII-2(1)、V-4×VIII-1×3(1)
	V×VI(1)、V×VIII(1)、V～VII(3)、V～VIII(1)、VI-1a(1)
	VII×VIII-2(1)、VIII-1(1)、VIII(1)、破片(14)
	皿：III-1(1)、V～VII(1)、IX-1(1)、IX(2)
	水注(III系)(3)、水注(1)、破片(12)
中国陶器	甕×耳蓋(4)
土製品	焼土塊、伊壁

淡灰色土

須恵器	坏c3、甕c、甕3、甕(車輪文)、甕、小甕、甕d×f
土師器	坏a(イト)、坏a(ヘラ)、坏a×b、小皿a(イト)、丸坏、碗c、甕
	甕×鉢把手、高坏
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗
瓦	筒 鉢
越州窯系青磁	碗：I-3(1)、I-5(1)
龍泉窯系青磁	碗：I(3)、I-4(2)、II-b(6)、破片(8)
	皿：I-2c(1) その他：破片(4)
龍泉×同安楽系青磁	碗(1)
同安楽系青磁	碗：I-1b(7)、I(2)、破片(6)
	皿：I-1b(1)、I-2b(1)、I(1)、破片(2)
	破片(1)
輸入陶磁器(未分類)	朝鮮系無釉陶器甕(1)
瓦	類 丸瓦(格子)、平瓦(縄目、格子、無文)
石製品	石斧(縄文系)、砥石、石鍋、棒状すり石、碁石
	滑石製用途不明製品
須恵質土器	甕
灰釉陶器	碗(2)、碗×皿(1)、甕(1)
肥前系陶磁器	染付：丸碗(2)、碗×瓶(2)
	磁器、鉢(1)
国産陶器	碗(1)、皿×碗(1)、甕(備前×常滑)(1)、甕(3)、甕(1)、破片(5)
国産磁器	碗(1)、碗×瓶(1)
白磁	碗：II(6)、II×V～VII(1)、IV-1a(3)、IV-1(2)、IV(15)、V(4)
	V-1(1)、V-1×2(1)、V-1×VIII-2(7)、V-2(4)
	V-2×VIII-4(1)、V-3b(1)、V-1×VIII-2(1)
	V-4×VIII-1×3(5)、V～VII(6)、V～VIII(4)
	VI～VIII(2)、VII×VIII(1)、VIII(4)、破片(42)
	皿：III-1(1)、III(1)、III×碗V×碗VIII(1)、V-2(1)、V～VII(4)
	VIII-1b(1)、VIII(2)、V～VII×碗II(2)、皿IX×碗IX(1)
	破片(2)
	合子(1)、水注×甕(III系)(2)、水注(III系)(3)、破片(17)
青白磁	碗(1)
中国陶器	甕：破片(1)
	鉢：VI(1)
	甕(2)、甕×鉢(3)、甕×水注(3)、水注(2)
金属製品	滓
土製品	焼土塊

表土

須恵器	坏c3、甕
土師器	坏a(イト・墨書?)、碗c
龍泉窯系青磁	碗：I(2)、II-b(1)
同安楽系青磁	碗：I-1b(2)、I-1c(1)、I-2b(1)
瓦	類 丸瓦、平瓦(格子)
土師質土器	七輪
国産陶器	甕(常滑)(1)、甕(2)、破片(1)
白磁	碗：IV-1a(1)、V(2)、V-2×VI×VIII-4(1)、破片(1)
	皿：IX-1(1)
中国陶器	甕：耳蓋(1)

Tab. 10 第135次調査 土師器供養具計測表

A:内底ナデ B:板状圧痕
単位はcm。()は復元径。

SK034暗灰色土

種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	イト	R-004	1	9.0	1.0	7.0	○	○
	小皿a1	イト	R-007	2	(9.2)	1.2	(7.9)	○	
	小皿a1	イト	R-006	3	(9.3)	1.1	(7.0)	○	
	小皿a1	イト	R-003	4	9.4	1.1	7.4	○	
	小皿a1	イト	R-005	5	(9.6)	1.1	(7.6)	○	
	小皿a1	イト	R-002	6	9.7	1.2	7.2	○	
	坏a	イト	R-008	7	14.5	3.1	10.3	○	○
	坏a	イト	R-009	8	(15.0)	3.1	9.8	○	○
	坏a	イト	R-010	9	15.4	3.1	10.1	○	○

SX004暗灰色土

種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	一	R-001	1	9.4	1.6	6.8	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-002	2	(9.5)	1.9	7.0	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-004	3	10.0	2.0	6.7	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-005	4	(10.0)	0.9	(7.0)	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-049	5	10.4	1.7	8.0	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-006	6	(10.4)	1.2	(7.6)	○	○
	小皿a1	ヘラ	R-008	7	(10.4)	1.3	(7.2)	○	○
	小皿a2	一	R-009	8	(10.2)	1.1	(6.6)	○	○
	小皿a2	ヘラ	R-007	9	(11.2)	1.3	6.0	○	一

SD060(S-5黒色粘)

種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿b?	イト	R-006	1	(7.3)	1.25	(5.8)	○	○
	小皿a1	イト	R-008	2	(8.6)	1.3	(6.9)	○	一
	小皿a1	イト	R-011	3	(8.8)	1.2	(7.6)	○	○
	小皿a1	イト	R-013	4	8.8	1.05	7.2	○	○
	小皿a1	イト	R-005	5	(9.0)	1.3	(7.1)	○	○
	小皿a1	イト	R-010	6	9.0	1.35	7.7	○	○
	小皿a1	イト	R-012	7	(9.2)	1.1	(7.0)	○	
	小皿a1	イト	R-014	8	(9.3)	1.2	8.0	○	○
	小皿a	イト	R-026	9	(9.4)	1.6	(6.85)	○	○
	小皿a1	イト	R-007	10	(10.2)	1.0	(8.9)	○	一
	坏a	イト	R-016	11	(15.0)	2.95	(8.6)	○	○
	坏a	イト	R-004	12	(15.8)	3.6	(11.8)	○	一
	坏a	イト	R-015	13	(16.0)	3.1	(10.5)	○	○

SD060(S-5黒灰色土)

種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a	イト	R-010	1	(8.2)	1.1	6.2	○	
	小皿a	イト	R-011	2	(8.3)	1.0	(6.5)	○	○
	小皿a	イト	R-050	3	(8.6)	1.0	(7.2)	○	○
	小皿a1	イト	R-039	4	8.7	1.0	7.2	○	○
	小皿a	イト	R-049	5	(8.8)	1.0	(7.2)	○	○
	小皿a	イト	R-042	6	(9.2)	0.8	(7.5)	○	○
	小皿a	イト	R-043	7	9.2	1.4	7.3	○	○
	小皿a1	イト	R-040	8	(9.2)	0.8	(7.8)	○	
	小皿a	イト	R-013	9	(9.3)	1.1	(6.8)	○	
	小皿a	イト	R-038	10	9.3	1.4	7.4	○	○
	小皿a	イト	R-041	11	9.3	1.4	7.7	○	○
	小皿a	イト	R-047	12	9.3	1.5	7.5	○	○
	小皿a	イト	R-051	13	(9.4)	0.9	(7.7)	○	○
	小皿a	イト	R-014	14	(9.5)	1.0	(7.2)	○	○
	小皿a	イト	R-053	15	9.5	1.0	8.0	○	○
	小皿a	イト	R-046	16	(9.5)	1.2	7.3	一	○
	小皿a	イト	R-048	17	9.5	1.2	7.7	○	○
	小皿a	イト	R-012	18	(9.6)	1.0	(7.5)	○	
	小皿a	イト	R-045	19	9.6	1.1	8.0	○	○
	小皿a	イト	R-015	20	(10.0)	1.1	(7.6)	○	○
	小皿a	イト	R-027	21	(10.0)	1.05	(8.2)	○	○
	小皿a	イト	R-044	22	10.2	1.5	8.4	○	○
	小皿a	イト	R-052	23	10.4	1.2	8.0	○	○
	坏a	イト	R-036	24	(12.6)	2.9	(8.4)	一	○
	坏	イト	R-036	25	(14.5)	2.4	(10.5)	○	○
	坏	イト	R-016	26	(14.6)	2.6	(9.5)	○	○
	坏a	イト	R-034	27	(15.0)	2.6	10.3	○	○
	坏	イト	R-035	28	(15.2)	2.8	(10.8)	○	
	坏a	イト	R-033	29	15.6	2.9	10.2	○	○
	坏a	イト	R-026	30	16.1	2.95	10.8	○	○

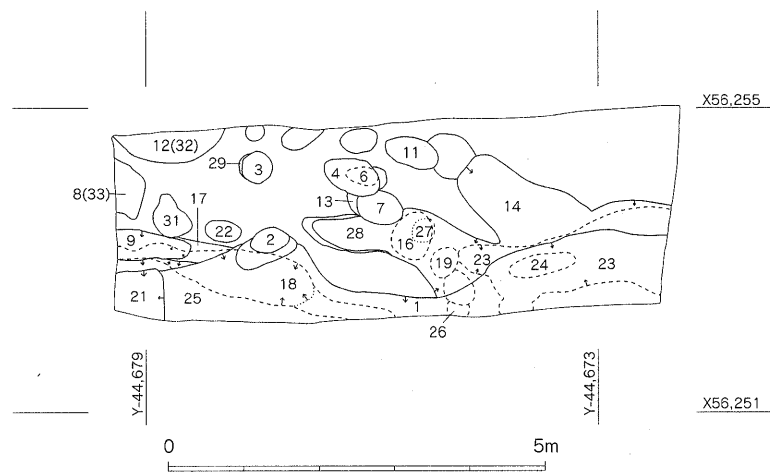


Fig.64 第146次調査略測図 (1/100)

Tab.11 第146次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	146SD001	溝	S-1黒茶色土は包含層の可能性あり。淡茶黒色土→茶灰色土→灰黄灰色土→黒茶色土	25・18→17→1→2・21 14→1	平安後期～	
2		小穴		1→2	～C期	
3		小穴			～D期	
4		小穴		13→7→4 6→4	～D期	
6		小穴		6→4	12世紀～	
7		小穴		13→7→4	平安後期～	
8		たまり?	S-8=S-33、33の上層			
9		溝	17と同一遺構の可能性あり	18→17→9	D期	
11		小穴				
12		たまり?	S-12=S-32、32の上層			
13		小穴		13→7→4	D期	
14		たまり		16・19・28→14→1・13	平安後期～13世紀??	
16		小穴		27→16→14	C期～	
17		溝	S-9と同一遺構の可能性あり。暗灰茶色土	18→17→1・9	平安後期～	
18	146SD018	溝		18→17→1	平安後期	
19		小穴		19→14		
21	146SX021	溝×土坑	茶褐色土→黄褐色土	1→21		
22		小穴			平安後期	
23	146SD023	溝	東西溝	23→1	平安～	
24		溝		24→1	平安後期～	
25	146SD025	溝	東西溝	25→18	D期	
26		小穴				
27		小穴		27→16		
28	146SX028	たまり状遺構×土坑	S-14西側の下層のたまり	28→14	平安後期～	
29		小穴				
31		小穴				
32		小穴	S-32=S-12、12の下層		D期～	
33		たまり?	S-33=S-8、8の下層			
暗茶色土		遺構面を覆う人工層位				
Z		出土地不明の遺物				

Tab. 12 第146次調査 出土遺物一覧表

S-1黒茶色土

須 恵 器	蓋3、蓋×供膳具、環c×蓋b×e、環c、蓋c
土 師 器	小皿a1、貯蔵具、鉢、碗c、環、煮炊具（角閃石入）、環a（へら、糸）
黒色土器B類?	供膳具
瓦	器碗
越州窯系青磁	蓋；水注×蓋(1)
龍泉窯系青磁	碗；I(2)、II-b(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(2)、I-1c(1)、III-1c(1) 皿；I(2)
須 恵 質 土 器	こね鉢（東播系）
白	碗；IV(3)、IV-1(1)、VIII-3×4?(1)、片(5)
	皿；VIII?(1)、片(3)
	煮他；四耳蓋(1)
中 国 陶 器	他器種；片(3)
青 白	磁 合子(1)
土 製 品	不明製品
瓦	類 片（格子目）、平瓦（横目）
金 風 製 品	銅片

S-1淡黄灰色土

須 恵 器	環
土 師 器	環a（糸）、供膳具
中 国 陶 器	蓋；片(1)
瓦	類 片

S-1茶灰色土

須 恵 器	環
土 師 器	小皿、環a×皿a、供膳具
瓦	類 碗
白	碗；片(1)
瓦	類 平瓦（格子目）

S-1淡茶黒色土

土 師 器	環a（糸?）、丸環×碗
同安窯系青磁	碗；I-1b(1)
須 恵 質 土 器	こね鉢??
瓦	類 片
中 国 陶 器	片（1）

S-2

土 師 器	碗c
越州窯系青磁	碗；II(1)
白	碗；片(1)

S-3

土 師 器	環a、片
白	碗；VIII-3×4(1)

S-4

土 師 器	小皿×高台、環a（糸）
越州窯系青磁	碗；I?(1)

S-6

土 師 器	環a（糸）、小皿a1（糸）
瓦	類 片

S-7

土 師 器	環皿a（糸?）
-------	---------

S-8

土 師 器	煮炊具、環、丸環×環、鉢?
白	碗；VI(1)
瓦	類 片

S-9

土 師 器	環a（糸）、供膳具、煮炊具
龍泉窯系青磁	碗；I-2(1)
同 産 陶 器	片（近現代）
青 磁（未分類）	龍泉窯系青磁×同安窯系青磁 片(1)

S-11

土 師 器	小皿a（糸）、環
-------	----------

S-12

土 師 器	碗c、環a（糸）、鉢
同安窯系青磁	碗；片(1)
白	碗；片(2)
瓦	類 片、平瓦（格子目）

S-13

白	碗；V-4×VI(1)、煮他；蓋(1)
瓦	類 片（格子目）

S-14

須 恵 器	貯蔵具
土 師 器	煮炊具、環a（糸?）
製 塚 土 器	煎茶土器
龍泉窯系青磁	皿；片(1)
同安窯系青磁	碗；I(1)
白	碗；IV(2)、片(3) 皿；I?(1)
瓦	類 片
石 製 品	滑石石鏡

S-16

白	碗；IV(1)
---	---------

S-17暗灰茶色土

須 恵 器	環?
土 師 器	環×小皿
白	碗；V×VIII(1)、片(1)
瓦	類 片（横目）

S-18

土 師 器	碗c、片
須 恵 質 土 器	こね鉢（東播系）
白	碗；片（1）
瓦	類 丸瓦（格子目）、平瓦（格子目）、片（横目）

S-19

土 師 器	供膳具
-------	-----

S-21黄褐色土

土 師 器	環a、小皿a1（糸?）
白	碗；II-5?(1)

S-21茶褐色土

土 師 器	供膳具、環a?（糸）
白	碗；片(1)

S-22

土 師 器	供膳具
白	碗；煮他；小煮?
土 製 品	棒状生産用具?

S-23

土 師 器	供膳具
-------	-----

S-24

土 師 器	片
白	碗；片(1)

S-25

須 恵 器	環
土 師 器	環
龍泉窯系青磁	碗；I-2a(1)
同安窯系青磁	皿；I(1)
須 恵 質 土 器	こね鉢??
緑 釉 陶 器	供膳具（洛西か）
白	碗；V-1×VIII-2(1)
瓦	類 平瓦（格子目）

S-26

土 師 器	片
-------	---

S-27

須 恵 器	環c
-------	----

S-28

土 師 器	小皿a
-------	-----

S-29

土 師 器	小皿a1、片
-------	--------

S-31

土 師 器	小皿、環
白	碗；片(1)
瓦	類 片
石 製 品	黒曜石片

S-32

須 恵 器	環
土 師 器	小皿a、碗c
龍泉窯系青磁	碗；I-2(1)
須 恵 質 土 器	鉢??
瓦	類 平瓦（格子目）

S-33

須 恵 器	環c
土 師 器	片

暗茶色土

須 恵 器	鉢?、高杯、蓋
土 師 器	小皿a1（へら）、皿a×環a（へら）、丸環×碗、碗c1、環a
黒色土器A類	環×環
瓦	器碗（畿内系）、片
龍泉窯系青磁	碗；I(1)、I-1(1)、I-2(1)、II-b(2)、片(2)
	皿；I(1)、I-1c(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(1)、II×III(1)
	皿；I(1)、I-2b(1)
高麗青磁?	碗；碗片（1）
須 恵 質 土 器	こね鉢、片
白	碗；IV(2)、IV-1a(1)、V(3)、V-4×VIII(1)、片(8)
	皿；IX(1) 煮他；四耳蓋III(1)
青 白	磁 合子(1)
黒 釉 陶 器	片
同 産 陶 器	片（現代）
土 製 品	不明製品
瓦	類 平瓦（横目）、片（格子目）、道具瓦?
石 製 品	滑石製品片、墓石?、黒曜石片
中 国 陶 器	他器種；片(2)
そ の 他	コンクリート片

表土

須 恵 器	環、供膳具
土 師 器	煮炊具
龍泉窯系青磁	碗；I-2a(1)、II-b(1)
同安窯系青磁	碗；I-1b(1) 皿；片（1）
高麗青磁	碗；II（見込にスタンプ文?）(1)
須 恵 質 土 器	こね鉢（東播系）
白	碗；IV(1)、IV-1a(1)、IV-2b(1)、VIII-3×4(1)、片(3)
同 産 陶 器	碗（現代）
瓦	類 平瓦（格子目）、片（横目）
そ の 他	コンクリート塊

Z

須 恵 器	蓋3、供膳具
土 師 器	供膳具
瓦	碗c
須 恵 質 土 器	こね鉢（東播系）
白	碗；II(1)

Tab. 13 第146次調査 土師器供膳具計測表

S-1黒茶色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	イト?	R-001	Fig. 28-2	(9.0)	1.0	(6.0)	—	○
	坏a	イト	R-002	Fig. 28-4	—	1.3+	—	—	○
	坏a	イト	R-003	Fig. 28-3	—	0.75+	—	—	—

S-1淡茶黒色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	Fig. 28-7	—	1.2+	—	—	—

S-1淡黄灰色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	Fig. 28-6	—	1.0+	—	○	—

S-6

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	—	1.1+	—	—	—	—

S-9

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	Fig. 28-8	—	1.1+	—	—	—

S-12

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	—	R-002	—	1.1+	—	—	—	—

A: 内底ナデ B: 板状圧痕
単位はcm。()は復元径。

S-14

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	Fig. 28-12	—	0.9+	—	—	—

S-17暗灰茶色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	—	R-001	—	0.8+	—	—	○	—

S-21茶褐色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	イト	R-001	Fig. 28-15	—	0.9+	—	—	×

S-21黄褐色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	イト	R-001	Fig. 28-14	—	0.9+	—	—	—

S-25

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏a	—	R-002	Fig. 28-10	—	3.0+	—	—	—

S-28

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	イト	R-001	Fig. 28-13	—	1.1+	—	—	—

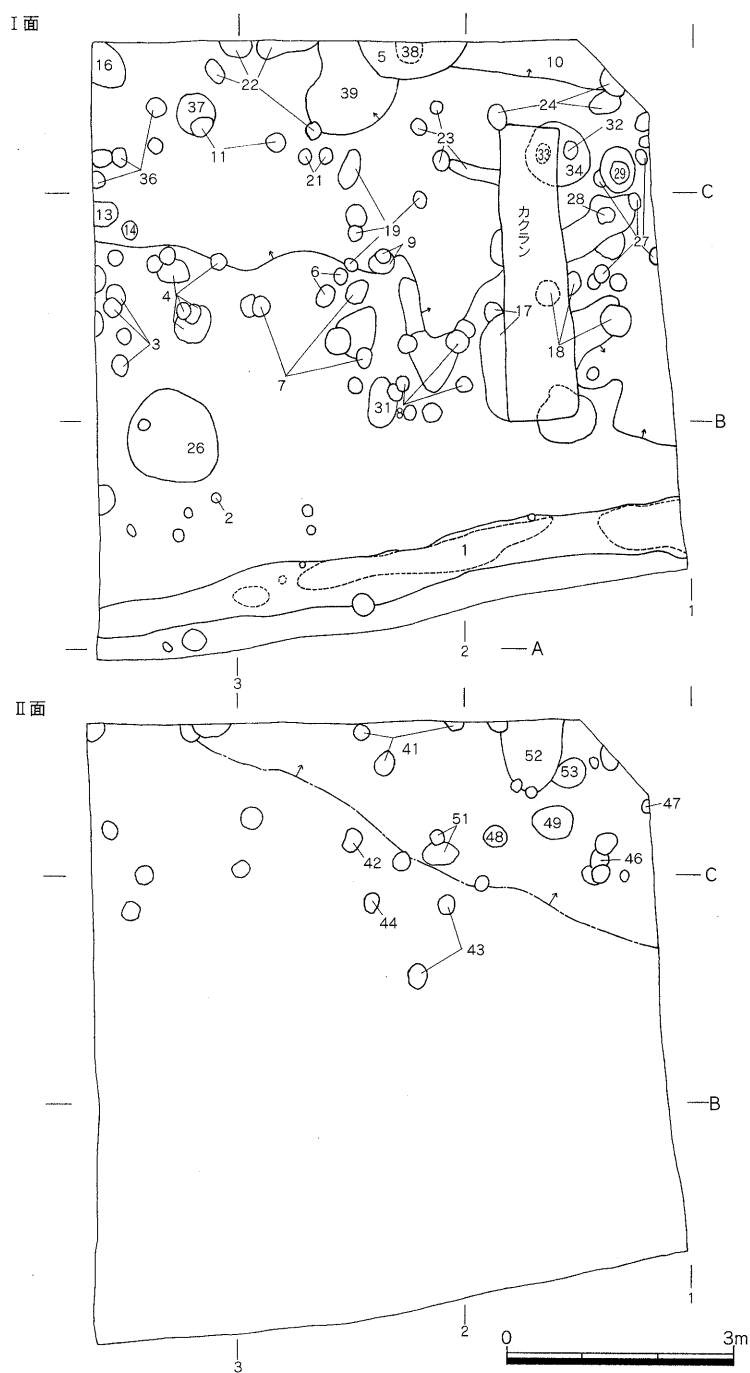


Fig.65 第148次調査略測図 (1/100)

Tab. 14 第148次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	148SD001	溝			平安後期	A1～3
2		ピット			平安後期	A3
3		ピット群			鎌倉期	B3
4		ピット群			平安後期	B3
5	148SK005	土坑			平安後期	C2
6		ピット群			平安後期	B2
7		ピット群			平安期	B2
8		ピット群			平安中期以降	B2
9		ピット			平安後期	B2
10	148SK010	土坑			平安後期以降	C1
11		ピット群			平安後期以降	C2・3
12		凹み			古代	A3
13		ピット			平安中期以降	B3
14		ピット			鎌倉期以降	B3
15	148SB015	掘立柱建物			平安中期	
16		ピット			鎌倉期	C3
17		ピット群			鎌倉期以降	B1
18		ピット群			平安後期以降	B1
19		ピット群	黒灰色粘土		平安後期	B2
20		欠番				C2
21		ピット群			平安期以降	C2
22		ピット群			平安中期以降	C2
23		ピット群			平安中期以降	C1
24		ピット群			平安中期以降	A3
25		欠番				B1
26		凹み			古墳期	B1
27		ピット群			平安中期以降	C1
28		ピット			平安期	B2
29		ピット			平安中期以降	C2
30		欠番				C2
31		ピット			古代	B2
32		ピット			平安中期以降	C2
33		ピット			平安中期以降	C2
34		ピット			鎌倉期	C2
35		欠番				
36		ピット			平安中期以降	C3
37		ピット			平安前期	C3
38		ピット			平安中期以降	C2
39	148SK039	土坑			平安中期以降	C2
40		欠番				
41		ピット群			平安中期以降	C2
42		ピット			平安中期以降	C2
43		ピット群			古代	B2
44		ピット			古代	B2
45		欠番				
46		ピット			古代	C1
47		ピット			奈良前期	C1
48		ピット			平安中期	C1
49		ピット			平安中期	C1
50		欠番				
51		ピット群			古代	C2
52	148SK052	土坑			平安中期	C1
53		ピット			平安後期以降	C1

Tab. 15 第148次調査 出土遺物一覧表1

S-1

須恵	器	甕、甕
土師	器	小皿al、坏[畿内産土師器]、碗c2、皿
瓦	類	平瓦(格子)

S-2

土師	器	供膳具
----	---	-----

S-3

須恵	器	甕
土師	器	碗c、小皿al(糸)、坏a(糸)

S-4

須恵	器	供膳具、甕
土師	器	丸底坏a(へ)、甕

S-5

須恵	器	甕
土師	器	丸底坏a(へ)、小皿a(へ)、甕a
越州窯系青磁	碗	碗Ⅱ系(1)
瓦	類	破片

S-6

土師	器	甕、供膳具
----	---	-------

S-7

土師	器	甕、坏×皿
土製	品	フイゴ羽口

S-8

須恵	器	蓋3
土師	器	丸碗
黒色土器	B	破片
瓦	類	破片(格子)

S-9

須恵	器	甕
土師	器	小皿al(へ)、甕

S-10

須恵	器	蓋、蓋3
土師	器	坏a(糸)、甕a、碗c、丸底坏a(へ)
		甕(増製)、小皿a(へ)、鍋
越州窯系青磁	他器種	破片
白磁	碗Ⅱ(2)、V(1)	
緑釉陶器	碗[東海系]	
灰釉陶器	碗	
瓦	類	破片

S-11

須恵	器	蓋、蓋3
土師	器	丸底坏a(へ)、甕、碗c

S-12

土師	器	甕(丹塗)
----	---	-------

S-13

土師	器	供膳具
----	---	-----

S-14

須恵	器	甕
土師	器	坏a(糸)
黒色土器	A	破片
越州窯系青磁	鉢他	破片(1)
瓦	類	破片

S-16

須恵	器	蓋
土師	器	丸底坏、小皿al(糸)、煮沸具

S-17

土師	器	坏a(へ)、煮沸具、坏c
黒色土器	A	碗

S-18

須恵	器	坏c
土師	器	碗c、小皿al
石製	品	石鍋(滑石)

S-19

土師	器	小皿al(へ)、碗c、丸底坏
黒色土器	A	甕
白磁	V×VI(1)	
瓦	類	破片
土製	品	フイゴ羽口

S-21

土師	器	坏c×碗c
----	---	-------

S-22

須恵	器	供膳具
土師	器	煮沸具、高台、坏
黒色土器	B	碗
石製	品	剥片(黒曜石)

S-23

須恵	器	坏
土師	器	甕、碗c2
瓦	類	平瓦(縄目)

S-24

土師	器	碗、煮沸具
瓦	類	破片

S-26

古式土師	器	甕
------	---	---

S-27

須恵	器	甕、供膳具
土師	器	碗、小皿a
黒色土器	A	碗

S-28

土師	器	供膳具
古式土師	器	二重口縁蓋、甕

S-29

須恵	器	蓋
土師	器	小皿al(へ)、煮沸具

S-31

須恵	器	蓋、供膳具
----	---	-------

S-32

須恵	器	甕、坏
土師	器	坏、小皿a(糸)、高台
製塩土器		座塩蓋
黒色土器	A	供膳具
瓦	類	破片(格子)
石製	品	破片(滑石)

S-33

土師	器	碗c2
石製	品	破片(滑石)

S-34

土師	器	坏a(糸)
白磁	碗Ⅱ(1)	

S-36

土師	器	坏a×小皿a(へ)
灰釉陶器	碗	
瓦	類	丸瓦(格子)
石製	品	礬石
土製	品	フイゴ羽口

S-37

土師	器	碗c×坏c、煮沸具
古式土師	器	支脚

S-38

須恵	器	供膳具
土師	器	碗c、坏a×皿a
瓦	類	破片

S-39

須恵	器	供膳具
土師	器	煮沸具、碗c、坏×皿
瓦	類	破片
古式土師	器	甕

Tab. 16 第148次調査 出土遺物一覽表2

S-41		
須恵	器	供膳具
土師	器	坏a×小皿a(×7)、小皿a2
S-42		
土師	器	供膳具
S-43		
土師	器	煮沸具、供膳具
S-44		
須恵	器	蓋1
土師	器	皿×坏
S-46		
土師	器	煮沸具
S-47		
須恵	器	坏c
S-48		
須恵	器	蓋1
土師	器	丸碗、煮沸具
灰釉陶	器	皿
S-49		
須恵	器	坏c
土師	器	供膳具
黑色土器	B	破片
S-51		
須恵	器	蓋4
土師	器	供膳具、煮沸具

S-52		
須恵	器	甕、坏×皿
土師	器	碗c、煮沸具
黑色土器	A	碗
S-53		
土師	器	甕、供膳具
製塩土	器	煎茶土器
白磁	碗	IV (1)
茶褐土		
須恵	器	供膳具、こね鉢(籬)、甕、蓋c
土師	器	碗c1、把手、坏a
黑色土器	A	甕、碗c
白磁	碗	V 1
瓦	類	破片
石製	品	石鍋A群
茶色土		
須恵	器	坏c、蓋3、甕b、甕g(米)、甕、小坏c
土師	器	碗c、坏a、鍋、煮沸具、小皿a、丸碗
黑色土器	A	碗c
越州窯系青磁	碗	I (1)
龍泉窯系青磁	他器種	破片(3)
白磁	碗	IV (1)、II (1)、皿破片(1)
淡茶色土		
須恵	器	坏c、蓋3
土師	器	甕、煮沸具、蓋3
黑色土器	A	坏×碗
黑色土器	B	碗
古式土師	器	器台
瓦	類	丸瓦(格子)、平瓦(縄目)

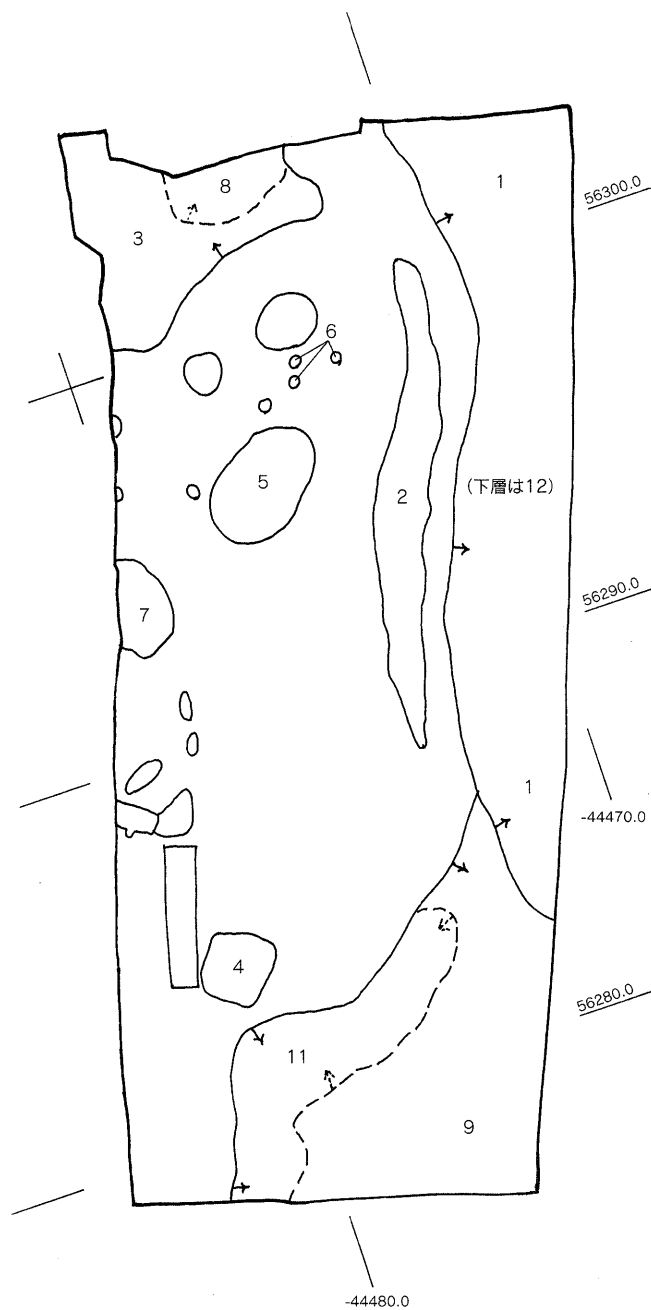


Fig.66 第171次調査遺構略測図 (1/200)

Tab. 17 第171次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	171SX001	旧水田耕作土	茶褐色土		13世紀～	
2	171SX002	溝	茶褐色土			
3	171SX003	溜り	黒色土+黄色土ブロック		12世紀～	
4	171SE004	井戸	黒灰色土		12世紀～	
5	171SK005	土坑				
6	171SX006	小穴群	茶褐色土			
7	171SE007	井戸	黒灰色土+黄色土ブロック		12世紀～	
8	171SE008	井戸	黒灰色土	8→3	9世紀～	
9	171SX009	旧河川か	黒色粘ブロック+暗灰色土	9→1	13世紀後～	
11	171SX011	旧河川か		11→9		
12	171SX012	旧河川か	白色砂	12→1		

Tab.18 第171次調査 出土遺物一覧表

S-1

須恵器	坏c4、坏a、甕、甕(土師質)、蓋?
土師器	柄c、甕、甕b、破片
黒色土器A	柄c
瓦	類 丸瓦(玉縁・無文・瓦質)、平瓦(縄目・瓦質) 平瓦(無文・土師質)、破片(瓦質)
石製品	砥石
金属製品	鉄錆塊

S-2

須恵器	甕、蓋?、破片
土師器	小皿a、柄c?、鉢?、破片
越州窯系青磁	柄; I-2aア
瓦	類 平瓦(格子・土師質)、平瓦(無文?・瓦質)
国産陶器	すり鉢
白磁	柄; VIII? (高麗青磁?)、皿; 破片

S-3

須恵器	丸坏c、鉢?、甕、蓋b、瓶類、破片
土師器	小皿a、柄c?、坏c×柄c、丸底坏、甕、破片
黒色土器A	柄c?、破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	柄; I、II、鉢他; I
龍泉窯系青磁	柄; I-2aウ
同安窯系青磁	柄; 破片
瓦	類 平瓦(縄目・須恵質)、平瓦(縄目・瓦質) 平瓦(格子・須恵質)、平瓦(格子・瓦質) 平瓦(無文・須恵質)、平瓦(土師質) 丸瓦(格子・瓦質)、破片
石製品	石鍋
緑釉陶器	柄、柄(京都系)
灰釉陶器	蓋
国産陶器	柄
白磁	柄; I、IV、V、破片、蓋他; 破片
弥生土器	破片
土製品	炭土塊

S-4

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、坏c、丸底坏、小皿a、柄c、鉢、高坏?、甕a、破片
黒色土器A	破片
輸入陶磁器	朝鮮系無釉陶器(甕×蓋)
瓦	類 平瓦(文字・瓦質)、平瓦(文字・須恵質) 平瓦(格子・須恵質)、平瓦(縄目・須恵質) 平瓦(縄目・瓦質)、平瓦(無文・須恵質)
白磁	柄; II、破片
	皿; VI
石製品	石鍋

S-4黒色土

須恵器	甕、鉢?
土師器	坏a(へら)、丸底坏、小皿a(へら)、柄c×小皿c 蓋3×鉢、高坏×器台、破片
黒色土器A	破片
黒色土器B	柄
瓦	類 平瓦(斜格子・須恵質)、平瓦(縄目・瓦質) 丸瓦(文字・瓦質)

S-6

須恵器	甕
土師器	坏a(へら)、甕a?、破片
黒色土器A	破片
瓦	類 平瓦(縄目・瓦質)

S-11

須恵器	甕、破片
土師器	坏a(イト)、坏×柄、甕b、破片
同安窯系青磁	柄; I
瓦	類 平瓦(須恵質)
石製品	砥石
白磁	柄; II、皿; VIII、蓋他; 破片
弥生土器	甕、鉢(後期)、破片
縄文土器	粗製深鉢(後期・北久根山式カ)
金属製品	鉄錆塊

S-7黒灰色土+黄色土? ロッ

須恵器	甕
土師器	坏a、坏c×柄c、坏×柄、破片
越州窯系青磁	柄; I×高麗青磁(S-8に接合)
瓦	類 平瓦(格子・瓦質)、平瓦(無文・瓦質)

S-7黒灰色土

須恵器	坏c、甕、蓋、破片
土師器	坏a、丸底坏、小皿a(へら)、小皿a、柄c、坏×柄、甕 甕b、器台、破片
黒色土器A	柄c、破片
黒色土器B	柄c、破片
越州窯系青磁	柄; I-2、破片
瓦	類 平瓦(格子・須恵質)、平瓦(格子・瓦質) 平瓦(縄目・須恵質)、平瓦(縄目・瓦質) 平瓦(無文・瓦質)
灰釉陶器	柄
白磁	柄; IV、皿; I-1、VIII、蓋他; 破片
中国陶器	他器種; 褐釉破片

S-8

須恵器	坏c4、坏c3、甕(飛尾産?)、甕×蓋、蓋?、蓋c 蓋3、蓋、鉢?、破片
土師器	坏a、丸坏、坏×柄、柄c、大柄c、小皿、皿、甕、甕×蓋 破片
黒色土器A	坏、柄?、蓋
黒色土器B	坏、柄?、破片
越州窯系青磁	柄; I×高麗青磁(S-7黒灰土黄土ブロックに接合) 鉢他; 合子I
瓦	類 平瓦(格子・瓦質)、平瓦(格子・須恵質) 平瓦(縄目・須恵質)、平瓦(縄目・瓦質) 丸瓦(格子・須恵質)、丸瓦(無文・瓦質)
灰釉陶器	蓋
土製品	移動式竈

S-8黒色砂

須恵器	甕
土師器	坏a、柄×坏、甕、破片
黒色土器A	坏c、破片
黒色土器B	坏×柄
越州窯系青磁	柄; I

S-9

須恵器	坏c4、坏c3、甕、蓋、破片
土師器	坏a(イト)、坏b、小皿a(イト)、柄c、甕、蓋a×b、破片
黒色土器A	柄c、破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	柄; I、I-1a、II
龍泉窯系青磁	柄; I、II-b
輸入陶磁器	朝鮮系無釉陶器(蓋×甕)
瓦	類 平瓦(格子・須恵質)、平瓦(縄目・須恵質) 平瓦(縄目・瓦質)、平瓦(無文・須恵質) 平瓦(無文・瓦質)、丸瓦(凸型格子・瓦質) 丸瓦(二重格子・須恵質)、丸瓦(無文・須恵質)、破片
石製品	ob-f、石鍋、砥石
瓦質土器鉢	鉢
緑釉陶器	柄
灰釉陶器	蓋
国産陶器	柄、蓋×甕(備前×常滑)、唐津三彩大皿
白磁	柄; I-1、IV、V、皿; VII、蓋他; 破片
中国陶器	蓋; 褐釉破片、甕; III
弥生土器	甕×鉢、器台
金属製品	鉄錆

表土

須恵器	甕、蓋a、坏c3、鉢a
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、甕、脚付鉢
黒色土器A	柄c
越州窯系青磁	柄; I-2aウ、II-2
石製品	砥石、書石
灰釉陶器	柄(東海)
肥前系陶磁器	染付(丸柄、鉢、筒柄)
国産陶器	土瓶、蓋
国産磁器	土瓶蓋、褐釉甕、破片

茶褐色土

須恵器	蓋3、甕、蓋、蓋b
土師器	坏a(イト)、丸坏、柄c
龍泉窯系青磁	柄; I、他器種、坏
瓦	類 平瓦(格子・瓦質)
灰釉陶器	坏×皿
国産陶器	甕(備前×常滑)
白磁	柄; IV、VIII 蓋他; 坏IX、破片
中国陶器	蓋; 褐釉破片
金属製品	柄型滓、鉄塊

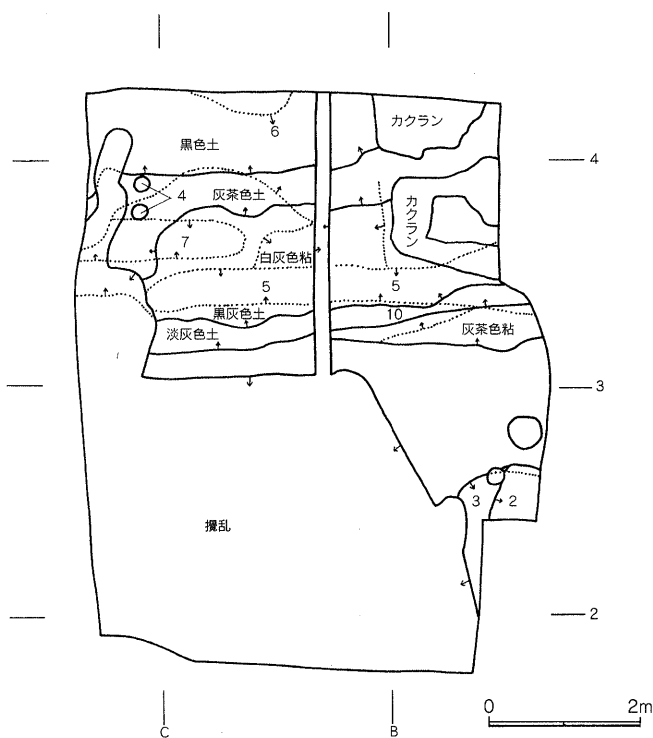


Fig.67 第191次調査遺構略測図 (1/100)

Tab. 19 第191次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	191SX001	溝または段落ち			8世紀～11世紀	A～C3
2		土坑?				A2
3		土坑?				A2
4		ピット群				C3
5	191SD005	溝		S-5→S-1	9世紀後半	AB3
6		溝状遺構		S-6→S-1		BC4
7	191SD007	溝状遺構	黒褐色土	S-7→S-6→S-1	11世紀後半	BC3
10	191SD010	溝			奈良時代	AB3

Tab. 20 第191次調査 出土遺物一覧表

S-1黒色土

須恵器	甕、蓋、坏a、蓋3、坏c、蓋c
土師器	小皿a（へラ）、小皿c、小皿a2、坏a、丸底坏a、柄c、高坏
	甕、把手
黒色土器A	柄c
黒色土器B	柄c、破片
白磁	碗；XII-1a (1)
石製品	砥石
瓦	類平瓦（無文、格子、縄、文字瓦）、丸瓦（無文、格子）

S-1灰茶色土

須恵器	甕、破片、坏
土師器	小皿a?、坏a、坏、柄c、柄、甕、高台
黒色土器A	破片
瓦	類平瓦（格子、縄、無文）、丸瓦（無文、縄）

S-1淡灰色土

須恵器	坏c、坏、蓋3、甕、破片
土師器	坏a、柄c、丸底坏?、甕
黒色土器A	柄c、坏、破片
土製品	土施土塊
石製品	石核（黒曜石）
金属製品	鉄釘
瓦	類平瓦（縄、格子、無文、破片）、丸瓦（格子、無文）

S-1灰茶色粘

須恵器	蓋3、甕、蓋×鉢、破片
土師器	坏a、甕
瓦	類平瓦（縄）

S-1黒灰色土

須恵器	甕、蓋、坏c、破片、蓋3、高坏
土師器	小皿a、小皿a2、坏a、坏c、柄c、柄a、丸底坏a、丸底坏c、皿a
	高坏、甕、蓋?
黒色土器A	柄c、柄
黒色土器B	柄c、破片
瓦	柄
越州窯系青磁	柄；II (5)、I (3)、II-2a (1)
	皿；II (1)、II 輪花 (1)、水注 (1)
龍泉窯系青磁	柄；
緑釉陶器	破片 (2)
白磁	柄；破片 (1)
金属製品	鉾津、鉄釘
石製品	石灰、石鍋、砥石
瓦	類丸瓦（無文、格子）、平瓦（縄、格子、無文、文字瓦）

S-1黒灰色土下層

須恵器	蓋3、甕、破片
土師器	坏、丸底坏c、柄c、甕
黒色土器A	柄c、柄
瓦	類平瓦（格子、無文、縄）

S-2黒褐色土

須恵器	破片
土師器	坏c、坏、甕、破片
黒色土器A	破片
瓦	類平瓦（縄）
その他	炭

S-3

須恵器	坏、坏c、蓋3、甕
土師器	坏c、高台、甕
黒色土器A	破片
瓦	類平瓦（無文）

S-4

土師器	坏、破片
瓦	類破片（無文）

S-5

須恵器	坏c、蓋?、蓋3、高坏脚、蓋×鉢、破片
土師器	坏、坏c、坏a、小皿a?、柄c、柄、大柄、つまみ、高坏?、甕
黒色土器A	柄c、破片
越州窯系青磁	柄；I (2)、II (2)
白磁	柄；破片 (1)
瓦	類平瓦（無文、縄、格子）

S-6

須恵器	甕、破片
土師器	坏c×柄c、坏、把手、甕
高麗青磁	柄；破片? (1)
瓦	類平瓦（無文、格子、縄）、丸瓦（格子、無文）

S-7

須恵器	甕、蓋×鉢
土師器	小皿a（へラ）、小皿a2、坏a、坏c、丸底坏a、丸底坏c、柄c、甕
黒色土器A	柄c、破片
石製品	墓石
瓦	類破片、平瓦（縄、破片、無文）

S-10

須恵器	蓋3、破片
土師器	甕、破片、坏c

黒褐色土

須恵器	坏a、坏c、坏、蓋?、蓋3、つまみ、蓋?、甕
土師器	小皿a、坏a、坏a（イト）、坏、柄c、蓋4、高坏、高台、甕、破片
黒色土器A	破片
黒色土器B	柄c
越州窯系青磁	蓋；II (1)
白磁	柄；破片 (1)、皿；V (1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
石製品	石鍋破片?（滑石製品）
瓦	類破片、平瓦（格子、縄、無文、文字瓦）、丸瓦（無文、格子）

白灰色粘

須恵器	破片
土師器	小皿×坏、破片
瓦	類破片

表土

須恵器	甕、蓋、蓋×鉢?、坏c、破片、蓋（篠簜）
土師器	小皿a（イト）、小皿（へラ）小皿、破片（灯明皿?）、坏a、丸底坏a、丸底坏c、柄c、柄a、高坏、甕、高台、破片、
黒色土器A	柄c、破片
瓦	柄c
越州窯系青磁	柄；II-2f (1)、蓋×水注 (1)
龍泉窯系青磁	柄；I-4 (1)、I (1)、III-2 (1)
須恵質土器鉢	鉢
灰釉陶器	破片
	柄；II-1 (2)、II (1)、IV-1a (1)、IV (5)、V-3 (1)
白磁	V-1×VIII-2 (3)、破片 (4)、
	皿；V-VII (1)、V (1)、VI-1 (1)、白磁破片 (11)
青白磁	破片 (1)
国産磁器	破片（現代）
石製品	丸石、砥石?
瓦	類破片、丸瓦（格子）、平瓦（格子、縄、無文）

カクラン

須恵器	甕、蓋×鉢、破片
土師器	小皿a（へラ）、坏a、坏、柄c、甕
黒色土器A	柄c
白磁	柄；破片 (1)、皿；IX-1 (1)、白磁破片 (1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
国産磁器	破片
金属製品	鉄屑
瓦	類平瓦（縄、格子、無文）、丸瓦（格子、無文）

Tab. 21 第191次調査 土師器供養具計測表

A: 内底ナデ B: 板状圧痕
単位はcm. () は復元径。

S-1黒灰色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-004 Fig. 48-3	(9.2)	0.9	(5.4)	—	—	—
	小皿a	ヘラ	R-005 Fig. 48-5	10.4	1.25	8.0	—	—	—
	小皿a	ヘラ	R-006 Fig. 48-1	9.0	1.15	(6.0)	X	—	—
	小皿a	ヘラ	R-017 Fig. 48-2	(9.0)	0.9	(6.0)	○	—	—
	小皿a	ヘラ	R-047 Fig. 48-4	(10.0)	1.05	(7.6)	○	○	—
	小皿a2	—	R-002 Fig. 48-8	(10.6)	0.9	(6.2)	—	—	—
	小皿a2	—	R-003 Fig. 48-6	(9.8)	0.95	(5.8)	—	—	—
	小皿a2	?	R-046 Fig. 48-7	(9.4)	1.1	(7.7)	○	—	—
	坏a	ヘラ	R-011 Fig. 48-10	(13.0)	—	—	○	—	—
	坏a	ヘラ	R-012 Fig. 48-11	12.4	3.7	?	○	—	—
	坏a	ヘラ	R-025 Fig. 48-12	11.2	2.5	—	○	○	—
	皿a	ヘラ	R-048 Fig. 48-9	(13.4)	1.5	(10.9)	○	—	—
	碗	—	R-007 Fig. 48-18	(14.4)	—	—	X	—	—
	碗	—	R-008 Fig. 48-16	(12.4)	—	—	X	—	—
	碗	—	R-015 Fig. 48-32	—	—	7.8	—	X	—
	碗c	ヘラ	R-016 Fig. 48-29	(15.5)	5.7	7.3	—	—	—
	碗c2	—	R-039 Fig. 48-33	—	3.4+	—	—	—	—
	碗c2	—	R-051 Fig. 48-39	(14.4)	5.5+	—	○	○	—
	中碗c	—	R-013 Fig. 48-40	(12.6)	—	—	—	—	—
	丸底坏a	—	R-009 Fig. 48-15	(14.2)	—	—	—	—	—
	丸底坏a	—	R-010 Fig. 48-23	(15.5)	—	—	—	—	—
	丸底坏	—	R-001 Fig. 48-25	(17.0)	—	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-026 Fig. 48-13	(14.2)	4.0	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-031 Fig. 48-14	(14.4)	3.55	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-033 Fig. 48-12	(14.4)	4.2	—	—	○	—
	丸底坏	—	R-027 Fig. 48-19	(14.6)	3.7+	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-028 Fig. 48-22	(15.2)	3.0+	—	—	○	—
	丸底坏	—	R-029 Fig. 48-21	(15.0)	4.5+	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-030 Fig. 48-20	(15.0)	3.8+	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-032 Fig. 48-17	(14.4)	3.5+	—	—	—	—
	丸底坏	—	R-034 Fig. 48-24	(15.0)	3.5+	—	—	—	—
	丸底坏c	ヘラ	R-035 Fig. 48-26	14.8	5.4	—	—	○?	—
	丸底坏c	ヘラ	R-036 Fig. 48-28	(15.2)	5.3	—	—	○	—
	丸底坏c	—	R-037 Fig. 48-27	(15.0)	5.4	—	—	—	—
	丸底坏c	—	R-038 Fig. 48-30	—	3.9+	—	—	—	—
	丸底坏c	—	R-045 Fig. 48-31	(13.0)	3.1+	—	—	—	—
	丸底坏c×碗c	—	R-040 Fig. 48-37	—	2.5+	—	—	—	—
	丸底坏c×碗c	—	R-041 Fig. 48-36	—	2.0+	—	—	—	—
	丸底坏c×碗c	—	R-042 Fig. 48-35	—	2.3+	—	—	—	—
	丸底坏c×碗c	—	R-043 Fig. 48-34	—	1.9+	—	—	○	—
	丸底坏c×碗c	—	R-044 Fig. 48-38	—	2.3+	—	—	—	—

S-1黒灰色土下層

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗c	ヘラ	R-001 Fig. 49-52	(14.8)	—	—	—	—	—
	碗c	—	R-002 Fig. 49-53	—	—	(6.8)	—	—	—
	碗c	ヘラ	R-003 Fig. 49-54	(6.4)	—	—	—	—	—
	碗	—	R-004 Fig. 49-51	—	—	—	—	—	—

S-1淡灰色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿c	—	R-007 Fig. 50-2	—	—	—	○	—	—
	坏a	ヘラ	R-001 Fig. 50-1	—	—	(6.8)	—	○	—
	碗c	—	R-002 Fig. 50-3	—	—	(7.5)	X	○	—
	碗c	—	R-003 Fig. 50-4	—	—	(7.5)	○	—	—
	碗c	—	R-004 Fig. 50-7	—	—	(8.4)	—	—	—
	碗c	—	R-005 Fig. 50-5	—	—	(8.2)	—	—	—
	碗c	—	R-006 Fig. 50-6	—	—	(7.7)	○	○	—

S-1灰茶色粘

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001 Fig. 50-11	—	—	(6.2)	—	—	—

S-1灰茶色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	碗	—	R-001 Fig. 47-18	(12.3)	—	—	—	—	—
	碗	—	R-002 Fig. 47-17	—	—	—	—	—	—
	碗c	ヘラ	R-003 Fig. 47-19	—	—	(7.5)	?	○	—

S-1黒色土

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a	—	R-005 Fig. 47-1	(9.8)	1.0	(7.0)	—	—	—
	小皿a	—	R-006 Fig. 47-2	(8.6)	0.9	(6.2)	—	?	—
	小皿a	—	R-007 Fig. 47-3	(9.8)	1.1	(7.2)	—	—	—
	小皿a	ヘラ?	R-008 Fig. 47-5	(10.2)	0.65	(7.4)	—	—	—
	小皿a	ヘラ?	R-009 Fig. 47-4	(9.7)	1.2	(7.0)	○	○	—
	小皿a2	—	R-001 Fig. 47-6	—	—	—	—	—	—
	丸底坏a	ヘラ	R-011 Fig. 47-9	—	—	—	—	○	—
	丸底坏a	ヘラ	R-012 Fig. 47-10	(12.5)	3.1	—	—	○	—
	碗c	—	R-002 Fig. 47-13	—	—	(7.6)	—	—	—
	碗c	—	R-003 Fig. 47-11	—	—	(8.0)	—	—	—
	碗c	—	R-010 Fig. 47-12	—	—	(7.6)	—	○	—
	碗c	—	R-013 Fig. 47-8	(15.8)	—	—	—	—	—
	碗c	—	R-014 Fig. 47-7	—	—	—	—	—	—

S-5

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001 Fig. 46-1	—	1.2+	(7.7)	○	—	—
	坏a	ヘラ	R-002 Fig. 46-2	—	1.1+	(8.0)	○	○	—
	坏a	ヘラ	R-003 Fig. 46-3	—	1.3+	(8.2)	○	○	—
	碗c	—	R-004 Fig. 46-6	—	1.8+	(7.6)	—	—	—
	碗c	—	R-005 Fig. 46-7	—	1.7+	(8.4)	○	○	—
	碗c	—	R-006 Fig. 46-8	—	2.3+	(7.6)	—	—	—
	碗c	—	R-007 Fig. 46-9	—	2.0+	(7.6)	○	○	—
	碗c	—	R-008 Fig. 46-10	—	2.2+	(8.4)	—	—	—
	碗	—	R-009 Fig. 46-4	—	2.7+	—	—	—	—
	大碗?	—	R-010 Fig. 46-5	—	3.7+	—	—	—	—

S-7

器別	器種	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a	—	R-001 Fig. 46-15	(10.7)	1.2	(8.0)	—	○	—
	小皿a	ヘラ	R-003 Fig. 46-16	(10.0)	1.4	(8.2)	—	—	—
	小皿a2	—	R-002 Fig. 46-17	(9.1)	1.2	—	—	○	—
	丸底坏a	—	R-004 Fig. 46-18	(16.7)	—	—	—	—	—
	丸底坏	ヘラ	R-005 Fig. 46-19	(14.3)	—	—	—	—	—
	碗c	—	R-006 Fig. 46-21	—	—	(8.1)	—	—	—
	碗c	—	R-007 Fig. 46-20	—	—	(7.9)	—	—	—

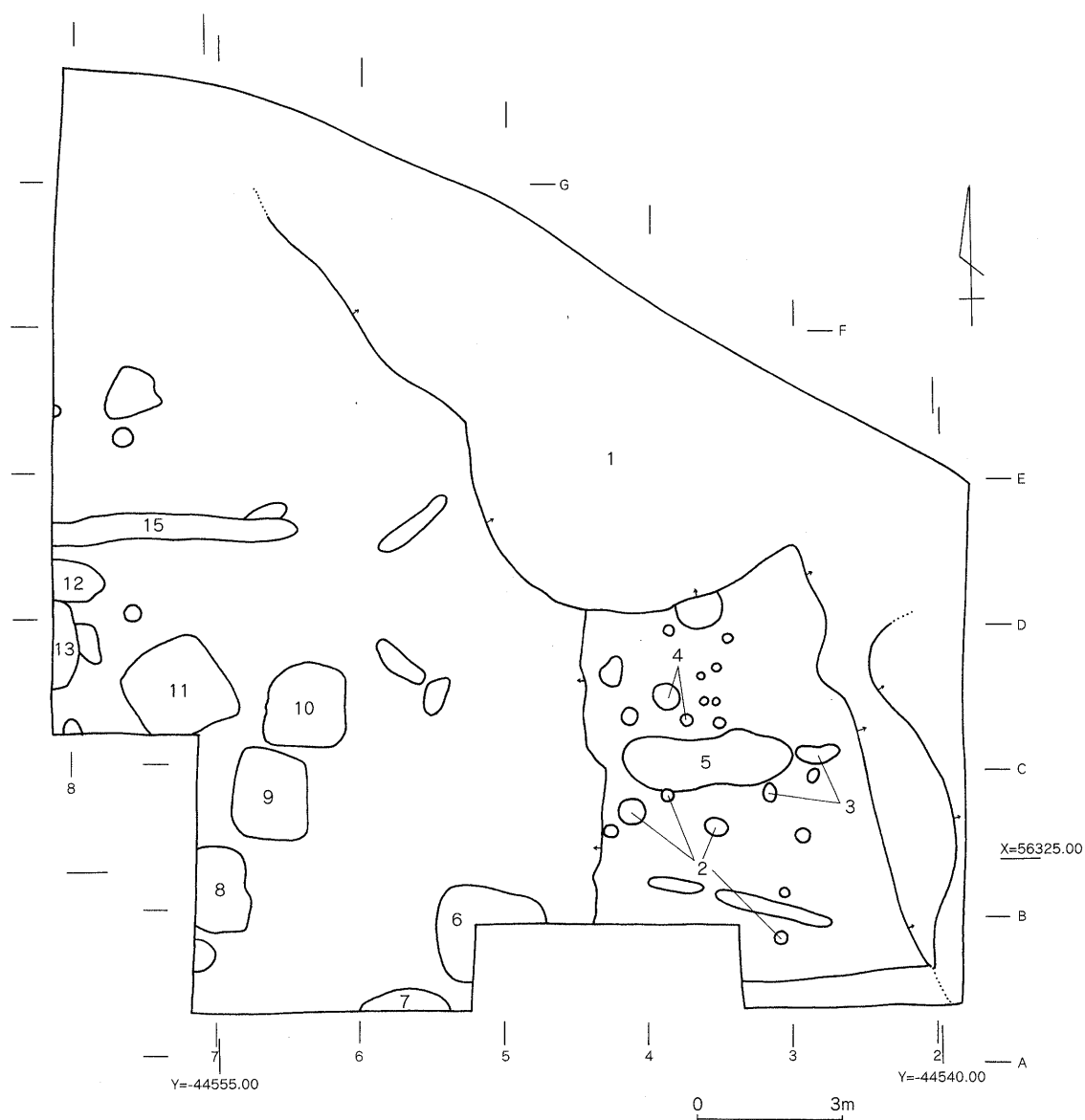


Fig.68 第202次調査遺構略測図 (1/150)

Tab. 22 第202次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1	202SX001	氾濫原	茶灰色土			2ライン
2		ピット群				B3
3		ピット群				C2
4		ピット群				C3
5	202SD005	溝				C3
6	202SE006	井戸			9世紀前半頃	A5
7	202SK007	土坑			11世紀後半～12世紀前半頃	A5
8		窪み				B7
9	202SX009	攪乱	黄褐色土ブロックと灰茶色土の混合土、重機の掘削痕跡?			B6
10	202SE010	井戸	灰茶色土		9世紀後半頃	C6
11	202SX011	攪乱				C7
12		攪乱				D8
13	202SX013	攪乱				C8
15	202SD015	溝				

Tab. 23 第202次調査 出土遺物一覧表

S-1

須恵器	環c、環、蓋3、蓋×鉢、破片、甕
土師器	小皿a、小皿a（へラ）、小皿a2、環a（イト）、碗c、丸底環a つまみ、破片（イト）
黒色土器A	碗c、破片
黒色土器B	碗c、破片
越州窯系青磁碗	II（1）、I（3）
龍泉窯系青磁碗	I（3）、I-2（1）、I-3（1）、II（1）、II-b（1） III（1）、破片（1）
同安窯系青磁碗	I-1b（1）、皿、I（1）
緑釉陶器	碗
灰釉陶器	平鉢、蓋×鉢
国産陶器	破片、碗c（唐津）
白磁	碗；I（1）、II（1）、IV（1）、IV-1a（1）、V-1×VIII-2（1）、 V-4×VIII-3（1）、VIII-2（1）、XI?（1）、破片（6） 皿；V×VI（1）、V-1×VIII-2（1）、蓋破片（1）
中国陶器	蓋破片（1）、破片（3）
国産磁器	破片（現代）、碗
石製品	石灰
石製品	鉾澤
金属製品	鉄釘
瓦	類 丸瓦（格子）、平瓦（格子、縄）

S-2

須恵器	甕
土師器	小皿a（イト）、環a（イト）、甕×鉢、破片

S-3

須恵器	蓋3、甕、破片
土師器	環c、破片

S-4

土師器	環a、環、甕
瓦	類 破片

S-5

須恵器	蓋3、環、破片
土師器	小皿a、環、破片
瓦	類 平瓦（無文）、破片

S-6

須恵器	環、環c、つまみ、甕、甕×鉢、蓋f×d
土師器	環a、環d、皿a（へラ）、碗c、甕
黒色土器A	環a、碗c
石製品	焼酎石
瓦	類 平瓦（縄、無文）

S-7

須恵器	蓋×鉢
土師器	小皿a、丸底環a、丸底環、破片
黒色土器A	破片
白磁	碗；II-1×3（1）、破片（1）
瓦	類 平瓦（縄）、破片（縄）

S-8

土師器	環、甕
-----	-----

S-9

須恵器	蓋3、破片
土師器	小皿a（イト）、環a、碗c、甕
白磁	蓋破片（1）
国産磁器	皿、破片（現代）
瓦	類 平瓦（格子）

S-10灰茶色土

須恵器	環、蓋4、大碗c、甕、破片
土師器	環a、環a（へラ）、碗c、把手、甕
黒色土器A	碗c、破片
越州窯系青磁碗	I（4）、I艇へラ（1）、I-2（2）、I-1a（1） 環×皿（1）
緑釉陶器	破片（防長産?）
白磁	碗；I（1）、破片（1）、皿；V-VII（1）
瓦	類 丸瓦（格子）、平瓦（縄、格子、無文）

S-10暗茶色土

須恵器	環、甕、破片
土師器	環a、環c、環、碗c、蓋3?、大皿c、甕、小皿a×環a
黒色土器A	碗c
瓦	類 平瓦（縄、無文）、丸瓦（格子）

S-10淡灰色砂

須恵器	蓋3、甕、蓋?
土師器	環a（へラ）、環、碗c、甕
黒色土器A	碗c、鉢
越州窯系青磁碗	I（2）
瓦	類 平瓦（格子）
弥生土器	破片

S-11

須恵器	環a、環、蓋、甕
土師器	小皿a（イト）、小皿c、環a、環a（イト）、環、碗c、大碗 丸底環c、高環、甕
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁碗	II（2）、I（1）
灰釉陶器	破片（1）
白磁	碗；II（1）、破片（1）、V-4×VIII-3（1）
中国陶器	C群（1）
国産磁器	破片（現代）
石製品	滑石製品、石鍋
瓦	類 丸瓦（縄、格子）、平瓦（縄）

S-12

須恵器	甕
土師器	環a（イト）、破片

S-13

須恵器	環
土師器	環
緑釉陶器	碗c（京都産）
瓦	類 平瓦（格子）

S-15

須恵器	環
土師器	環

系黒色土

須恵器	環、環c、蓋3、蓋c、蓋4、蓋?、蓋（高台なし）、甕、破片
土師器	小皿a（イト）、小皿a、環a（イト）、環a、環c、碗c、高環、甕
黒色土器A	碗c、碗、小甕
瓦質土器	破片?
越州窯系青磁碗	I（1）、II（1）
瓦質土器	破片?
緑釉陶器	破片（新しい?）
灰釉陶器	段皿
白磁	碗；V-4×VIII-3（1）、V-VIII（1）、VII×VIII（1）、破片（3） 皿、VIII?（1）、盤I（1）
金属製品	鉄釘
瓦	類 平瓦（縄、格子、無文）、丸瓦（無文）
弥生土器	甕（後期）

樽引

須恵器	環a、環c、蓋3、甕、破片
土師器	小皿a（へラ）、環a、環c、丸底環a
白磁	碗；V-1×VIII-2（1）、XII（1）、盤?（1）
国産磁器	碗（現代）
瓦	類 平瓦（格子、無文）、破片、破片（縄）

表土

須恵器	蓋、甕
土師器	小皿a、小皿a（イト）、環a、丸底蓋a、破片
瓦	類 碗c
白磁	碗；II-4（1）、IV-1a（1）、XII×XIII（1）
国産磁器	破片（現代）
瓦	類 平瓦、破片（縄）、破片

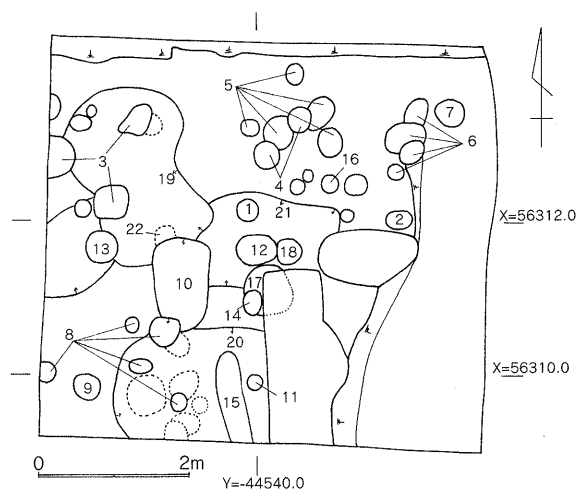


Fig.69 第205次調査遺構略測図 (1/100)

Tab. 24 第205次調査遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土ほか	遺構間関係	時期	地区番号
1		小穴	灰色土		平安後期	—
2		小穴				—
3	205SX003	小穴群	灰褐色土	19→3		—
4	205SX004	小穴群	黒色土	5→4	平安	—
5		小穴群	灰褐色土	5→4	古代	—
6		小穴群	黒色土		古代	—
7		小穴	灰褐色土			—
8		小穴群	灰褐色土			—
9		小穴	黒色土 SX004に似た埋土			—
10	205SX010	土坑	灰褐色土			—
11		小穴	黒色土 SX004に似た埋土			—
12		小穴	黒色土		平安	—
13		小穴	灰色土		平安	—
14		小穴		17→14	平安	—
15		溝?	灰褐色土 調査区外へ			—
16		小穴	黒色土		近世	—
17		小穴	黒茶色土	21→17→14		—
18		小穴				—
19		溜まり?	茶黄色土 浅い			—
20		溜まり?	茶黄色土			—
21		溜まり?	灰黄色土			—
22		小穴		22→19		—

Tab. 25 第205次調査 出土遺物一覧表

S-1

須恵	器	蓋3
土師	器	坏a(イト)、小皿a

S-2

土師	器	破片、小皿a(イト)
石製	品	砥石片(砂岩)、平玉石

S-3

須恵	器	坏c、蓋3、蓋1、甕
土師	器	坏(搬入)、蓋
製塩土	器	破片?
瓦	類	平瓦(縄目)

S-4

須恵	器	破片
土師	器	丸坏
瓦	類	破片
龍泉窯系青磁		破片

S-5

須恵	器	甕、坏、蓋3
土師	器	坏

S-6

須恵	器	蓋c
土師	器	碗、坏
瓦	類	丸瓦

S-7

須恵	器	破片
土師	器	破片

S-8

須恵	器	破片
土師	器	坏?(搬入?)、破片、小皿a(イト)

S-9

須恵	器	甕×蓋
土師	器	碗c、小皿a
その他		炭

S-10

須恵	器	蓋3、大蓋、坏c、甕、蓋c、蓋b
土師	器	甕、甕、坏d、坏c
石製	品	板石、平玉石

S-11

土師	器	小皿a、坏a
----	---	--------

S-12

須恵	器	蓋3、碗
土師	器	小皿c、丸坏、甕、甕(古代)、小皿a2、小皿a
黒色土器	器	B破片

S-13

須恵	器	破片
土師	器	甕、坏(イト)
青磁		破片
石製	品	平玉石(白)

S-14

須恵	器	甕
土師	器	碗、甕

S-15

須恵	器	蓋、小坏c
土師	器	碗c、破片、小皿a(ヘラ)、小皿a2
黒色土器	器	B破片

S-16

須恵	器	蓋3
国産陶	器	破片(現代か)

S-17

須恵	器	坏a
土師	器	破片

S-18

須恵	器	甕
土師	器	破片

S-19

須恵	器	破片
土師	器	甕

S-20

土師	器	破片
----	---	----

S-21

土師	器	破片
----	---	----

S-22

土師	器	破片
----	---	----

暗茶色土

須恵	器	蓋c、蓋、坏c、甕
土師	器	坏c、蓋、坏d
瓦	類	平瓦(縄目)
石製	品	頁岩(用途不明)

試掘トレンチ埋土

土師	器	小皿a2
国産陶	器	現代破片
瓦	類	平瓦(縄目)

写真図版

写真図版には遺構の主な写真と遺物写真の目録を掲載している。
その他の写真を含む遺構写真および遺物の拡大写真は、カラー情報
でCDに収録している。

※ 遺物写真中の番号は図版番号を示す。

例 26 - 31
 / \
Fig.番号 挿図番号



第124次調査区全景（北から）



第124次調査区西壁土層状況（東から）



第135次調査区全景（南から）



第135次調査区全景（南東から）



第135次調査区西側（掘削後、西から）



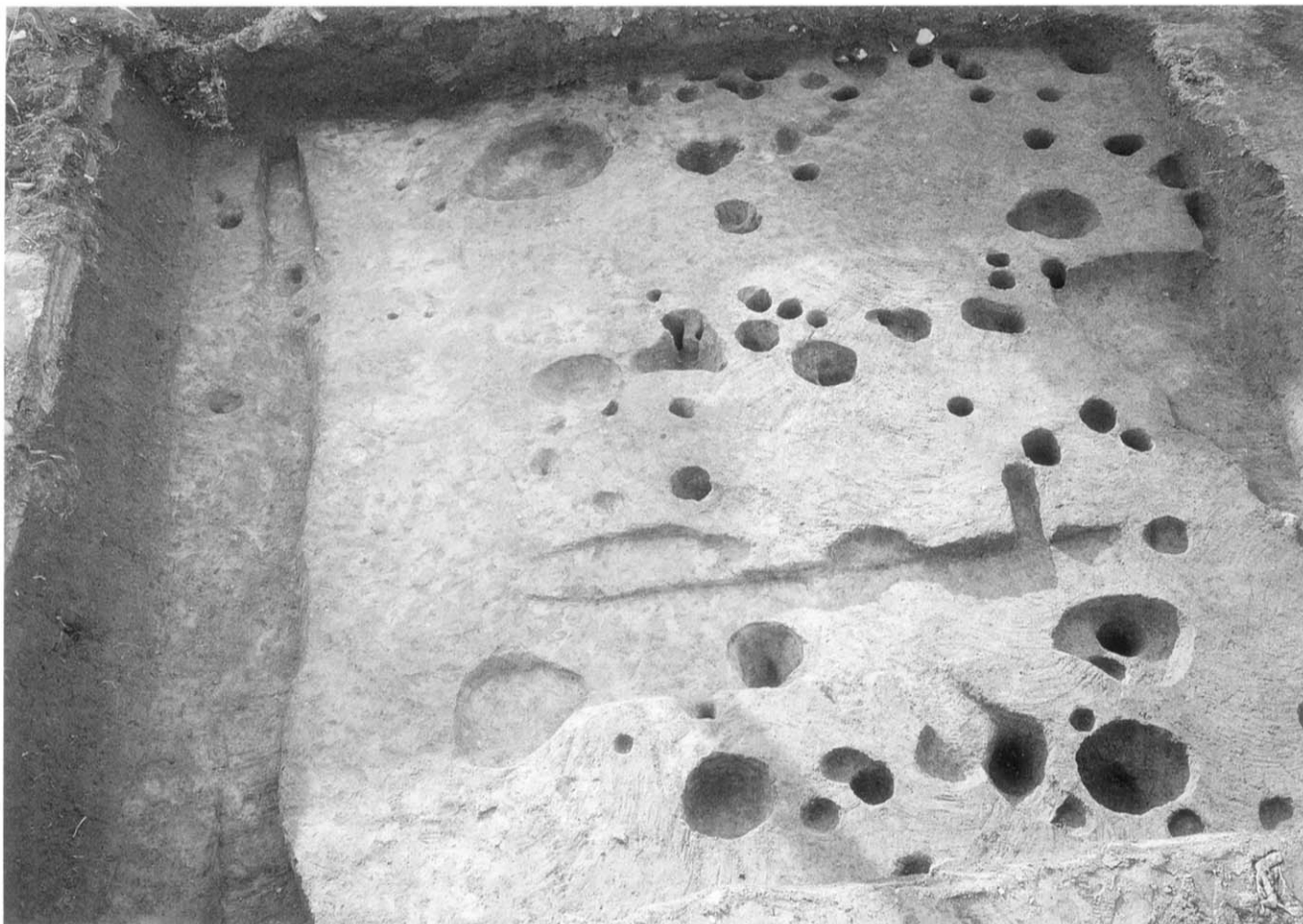
第135次調査区東側（掘削後、東から）



第146次調査区全景（東から）



第146次調査区西壁土層観察状況（東から）



第148次調査I面全景（東から）



148SD001完掘状況（西から）



第171次調査区全景（東から）



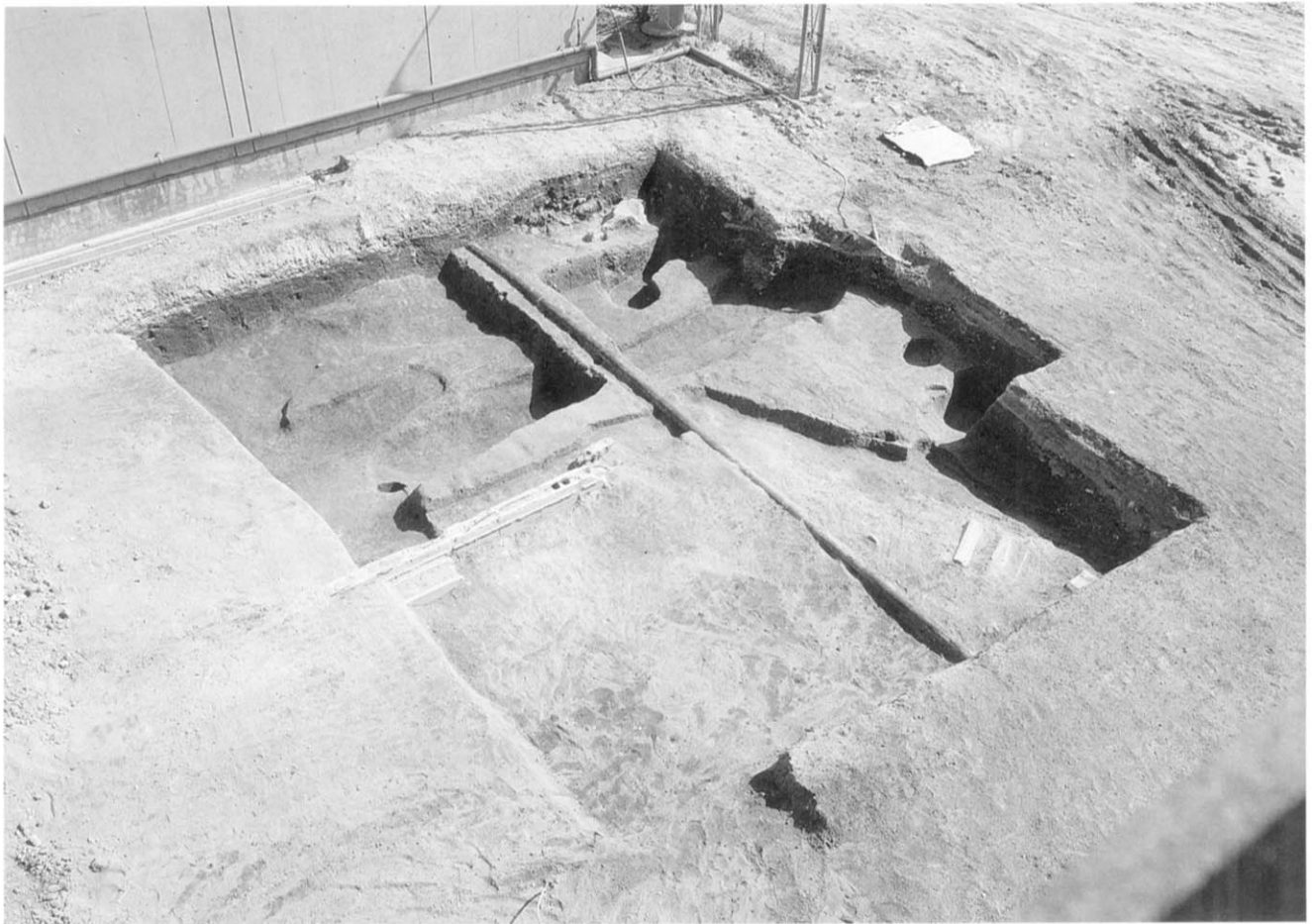
第171次調査区南側俯瞰（北から）



第171次調査区北側俯瞰（北から）



第171次調査区北壁土層状況（南から）



第191次調査区全景（南西から）



第191次調査東壁土層状況（西から）



第202次調査区全景（西から）



202SE010全景（西から）



第205次調査区全景（南から）



205SX010完掘状況（西から）



どんかん道（第171次調査地上空より西側を望む）



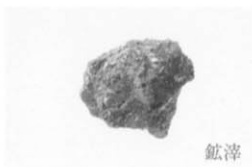
調査地周辺より大宰府政庁跡を望む（第202次調査地上空より）



条124SK017出土遺物



条124次黄茶色土出土遺物



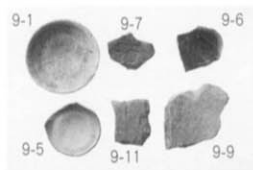
鉾澤



条135SE030灰茶色砂土出土遺物



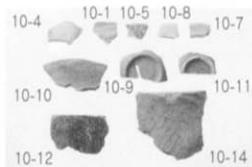
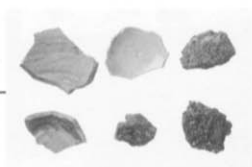
9-1



条135SE030出土遺物



条135SE038茶灰色砂土・茶灰色土出土遺物



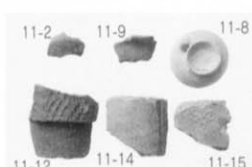
条135SE042暗灰色粘土出土遺物



条135SE042灰色土出土遺物



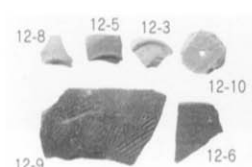
11-13



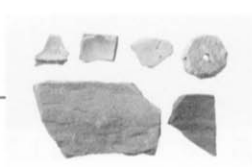
条135SK019黑灰色土出土遺物



条135SK019黑灰色土出土遺物



条135SK034暗灰色土出土遺物



条135SK034暗灰色土出土遺物



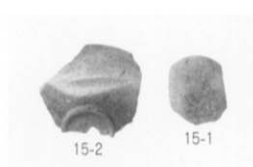
条135SK043暗灰色土出土遺物



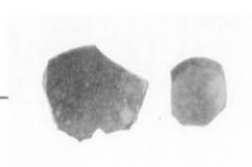
土壁状土製品



条135SK044暗灰色土出土遺物



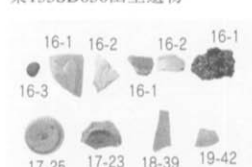
条135SD013出土遺物



条135SD050出土遺物



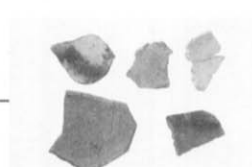
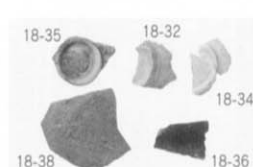
条135SD060出土遺物



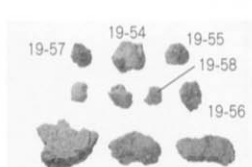
条135SD050・055・060出土遺物



条135SD060出土遺物



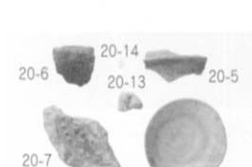
条135SD065出土遺物



条148SK005出土遺物



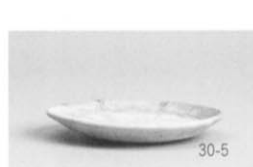
条135SX004暗灰色土出土遺物



条135SD065出土遺物



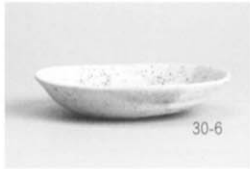
条148SK005出土遺物



条135SX004暗灰色土出土遺物



30-8



30-6

条148SK005出土遺物



38-2 38-4 越坏I 越坏II
38-9
38-5 39-6



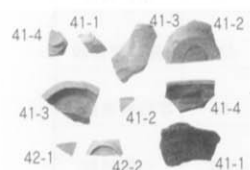
条171SE007黒灰色土出土遺物



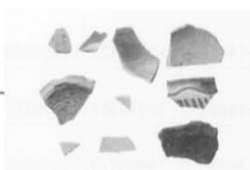
40-16 40-15
40-14 40-12 40-13



条171SE008出土遺物



41-1 41-3 41-2
41-4 41-3 41-2
41-3 41-2 41-4
42-1 42-2 41-1



条171SX003・009・011、茶褐色土出土遺物



46-15



46-17

条191SD007出土遺物



48-5



48-7

条191SX001黒灰色土出土遺物



48-26



48-28

条191SX001黒灰色土出土遺物



56-26



56-27

条202SE010淡灰色砂出土遺物



58-4



58-8

条202SX001出土遺物



60-2

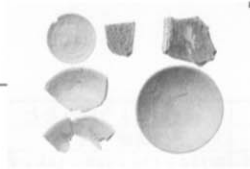


60-3

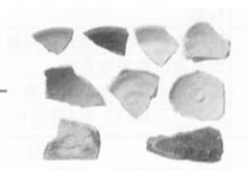
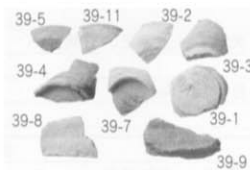
条205SX003出土遺物



38-4 38-7 38-6
38-1 38-2 38-2
39-5 39-11 39-2
39-4 39-3 39-1
39-8 39-7 39-9



条171SE004・004黒色土出土遺物



条171SE008出土遺物



40-17



171SX009出土遺物



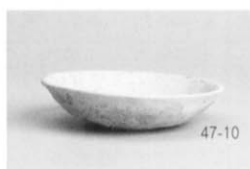
41-5



171SX009出土遺物



47-4



47-10

条191SX001黒色土出土遺物



48-11



48-12

条191SX001黒色土出土遺物



48-27



49-43

条191SX001黒色土出土遺物



49-50



49-50

条202SX001出土遺物



58-3



58-3

条202次茶黒色土出土遺物



60-6



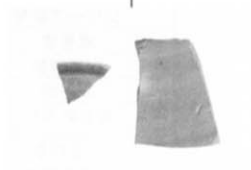
60-6

条205SX010出土遺物



39-2

39-1



条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



47-16

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



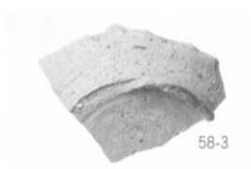
48-29

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



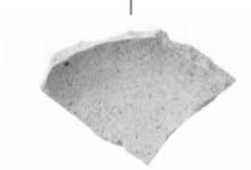
49-50

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



58-3

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



60-6

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物



60-6

条171SE007黒灰色土+黄色土ブロック出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ださいふじょうぼうあと									
書名	大宰府条坊跡 24									
副書名	第124・135・146・148・171・191・202・205次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	71集									
編著者	城戸康利、山村信榮、中島恒次郎、井上信正、宮崎亮一									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2004（平成16）年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第124次	左郭8条4坊	太宰府市 朱雀4丁目	402214	210050-124	56250.0	-44447.0	19920421	19920422	200	盛土造成
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第135次	左郭8条2坊	太宰府市 朱雀4丁目	402214	210050-135	56255.0	-44700.0	19930303	19930310	170	擁護壁建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第146次	左郭8条2坊	太宰府市 朱雀4丁目	402214	210050-146	56253.0	-44675.0	19931130	19931207	35	専用住宅建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第148次	左郭8条3坊	太宰府市 朱雀5丁目	402214	210050-148	56225.0	-44543.0	19940127	19940208	50	道路建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第171次	左郭8条4坊	太宰府市 朱雀5丁目	402214	210050-171	56290.0	-44475.0	19950822	19950908	336	擁護壁建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第191次	左郭8条2坊	太宰府市 朱雀5丁目	402214	210050-191	56330.0	-44666.0	19970407	19970417	43	学校校舎建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第202次	左郭7条3坊	太宰府市 朱雀5丁目	402214	210050-202	56334.0	-44550.0	19980713	19980811	275	公園建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第205次	左郭8条3坊	太宰府市 朱雀5丁目	402214	210050-205	56312.0	-44540.0	19990316	19990317	36	専用住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
大宰府条坊跡 第124次	都城跡	平安～室町	河川、土坑		土師器 陶磁器 緑釉陶器					
大宰府条坊跡 第135次	都城跡	古代、中世 近世	井戸、土坑、溝		土師器 陶磁器 瓦 金属滓 土壁			古代末から鎌倉時代の道路側溝か		
大宰府条坊跡 第146次	都城跡	平安	溝		土師器 陶磁器 須恵質土器 瓦器					
大宰府条坊跡 第148次	都城跡	平安	掘立柱建物、土坑、溝		土師器 須恵器 灰釉陶器 瓦					
大宰府条坊跡 第171次	都城跡	古代、中世	井戸、土坑、溝		土師器 陶磁器 瓦 金属製品			へう描きのある越州窯青磁壺		
大宰府条坊跡 第191次	都城跡	平安、奈良	溝		土師器 須恵器 黒色土器 越州窯系青磁 文字瓦					
大宰府条坊跡 第202次	都城跡	平安	井戸、溝		土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器					
大宰府条坊跡 第205次	都城跡	古代	土坑、小穴		土師器 都城系土師器 須恵器					

太宰府市の文化財 第71集

大宰府条坊跡24

－ 第124・135・146・148・171・191・202・205次調査－

平成16年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4